

# ユーラシア乾燥地域の 農耕民と牧畜民

大沼克彦 編



# ユーラシア乾燥地域の 農耕民と牧畜民

大沼克彦 編



# はじめに

大沼 克彦

西アジア地方では、コムギ栽培（農耕）とヤギ・ヒツジの飼育（家畜飼育）が開始されたのち、この二つの食糧生産に同時に依拠する定住集落が出現しました。それ以後同地では、急激な乾燥化や湿潤化などの気候変動、あるいは巨大王朝の崩壊による社会的混乱が継起し、集落規模の縮小化・分散化、集落内種々專業集団の分離と再統合というような適応戦略が選択されたと考えられます。

この考えは、2005年度から2009年度にかけて推進した科学研究費補助金（特定領域研究）「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」がもたらした仮説です（大沼 編 2010）。

この仮説の実証に向け、2010年度以来、日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金と国士舘大学の助成により、「ユーフラテス河中流域における遊牧社会の発生と展開：シリア国ラッカ市周辺の考古学的調査」を推進しています。

ひとくちに農耕といっても、天水農耕、灌漑農耕などの諸形態があり、家畜飼育に関しても、移牧、遊牧、牧畜、酪農など様々な形態が存在します。これらの生業形態は、様々な状況のもとで、様々な相互依存関係を有したと考えられます。

従来の研究では、定住・農耕社会と遊牧社会は二項的にとらえられ、対峙・対立を前提とする議論がなされてきました。

しかしながら、上記特定領域研究と現在推進中の研究の構成メンバーは、農耕社会と遊牧社会が相互に転換可能な、柔軟性のある関係を有したものであったと考えています。

そこで、2012年の3月3日と4日の両日に、公開シンポジウム「ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民：考古学、民族学、文献史学の視点から」を開催し、ユーラシア乾燥地域における定住・農耕社会と遊牧社会の統合、分離など様々な関係を考察する機会を設けました。

西アジア地方、あるいは広くユーラシア地方の乾燥地域で考古学、民族学、文献史学の調査・研究を推進されている研究者諸氏・諸先生の発表と討議をとおして、このシンポジウムが研究の深化に大きく貢献したと確信しています。

本出版は日本私立学校振興・共済事業団平成24年度学術研究振興資金により実現したもので、上記公開シンポジウム「ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民：考古学、民族学、文献史学の視点から」（プログラム：下記）における発表を深化させた内容で構成されています。当該研究の一助となれば幸いです。

(2012年11月)

参考文献

大沼克彦 編 2010 『セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究』，文部科学省平成 17 年度～平成 21 年度科学研究費補助金特定領域研究（領域代表者：大沼克彦）研究成果報告書，全 3 冊

シンポジウム

ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民：考古学、民族学、文献史学の視点から

会場 国士舘大学世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎 34号館 B棟 2階 B205教室

日時 平成24年3月3日（土）15：00～18：20、4日（日）9：15～18：00

主催 日本私立学校振興・共済事業団平成23年度学術研究振興資金／国士舘大学助成研究事業「ユーラテス河中流域における遊牧社会の発生と展開」（研究代表者：大沼克彦，研究分担者／協力者：小野 勇，久米正吾，長谷川敦章，赤司千恵）

〈プログラム〉

3月3日（土）

15：00 開場

15：30～15：40 開会の挨拶 大沼克彦（国士舘大学イラク古代文化研究所 教授）

〈ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民〉

15：40～16：10（質疑応答若干を含む：以下同様）

「モンゴル高原における自然環境と遊牧生活：遊牧民の経験から」思 沁夫（大阪大学グローバル・コラボレーション・センター 准教授）

16：10～16：40

「モンゴル史上の遊牧民と農耕民の相互関係」宮脇淳子（東京外国語大学モンゴル語科／国士舘大学21世紀アジア学部 非常勤講師（東洋史家・学術博士））

休憩 16：40～16：50

16：50～17：20

「牧畜の本質と特徴：生業構造の民族学的視点から」平田昌弘（帯広畜産大学畜産科学科 准教授）

〈メソポタミア地域の農耕民と牧畜民〉

17：20～17：50

「Excavations at the Sumerian City of Um Al-Aqarib, Umma Region, South Iraq」ハイダール オレイビ（国士舘大学大学院グローバル・アジア研究科博士課程）

17：50～18：20

「マルトゥ敵視の背景：Tid (a) numとYahmaduの対立」堀岡晴美（国士舘大学イラク古代文化研究所 共同研究員）

懇親会 19：00～21：00（自由参加）

3月4日（日）

9：15 開場

9：30～10：00

「アッカド人とアムル人：古バビロニア時代のアイデンティティーの変遷」川崎康司（早稲田大学文学学術院／人間科学部 非常勤講師）

〈西アジア地域の農耕民と牧畜民〉

10：00～10：30

「シリア中部ビシュリ山系の遊牧化過程：ヨルダン南部ジャフル盆地との照合」藤井純夫（金沢大学歴史言語文化学系 教授）

10：30～11：00

「西アジア型農耕と家畜の乳利用」三宅 裕（筑波大学大学院人文社会科学研究科 准教授）

休憩 11：00～11：10

11：10～11：40

「植物遺存体からみた土地利用」赤司千恵（早稲田大学大学院文学研究科博士課程）

11：40～12：10

「動物考古学からみた定住村落，移牧，遊牧」本郷一美（総合研究大学院大学先導科学研究科 准教授）

昼食 12：10～13：00

13：00～13：30

「イランにおける移牧民の考古学」山内和也（東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 地域環境研究室長／国士舘大学イラク古代文化研究所 共同研究員）

〈ユーフラテス河中流域の農耕民と牧畜民〉

13：30～14：00

「ユーフラテス川中流域青銅器時代のステップ開発」西秋良宏（東京大学総合研究博物館 教授）

14：00～14：30

「乾燥地における先史居住民の通時的検討：ユーフラテス川中流域の考古学調査から」門脇誠二（名古屋大学博物館 助教）

休憩 14：30～14：40

14：40～15：10

「テル型遺跡における居住民の定住・非定住性の検討に向けて：ユーフラテス河中流域テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の成果を中心に」長谷川敦章（日本学術振興会 特別研究員（PD））

15：10～15：40

「シリア前期青銅器時代墓地遺跡の被葬者像解明に向けて：ユーフラテス河中流域における農耕民と遊牧民の関係」久米正吾（国士舘大学イラク古代文化研究所 共同研究員）

休憩 15：40～15：50

15：50～16：20

「シリア中部，ビシュリ山麓ケルン墓群の出土遺物から見た牧畜民と遊牧民」足立拓朗（金沢大学歴史言語文化学系 准教授）

16：20～16：50

「テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡周辺の測量調査」小野 勇（国士舘大学理工学部都市ランドスケープ学系）

休憩 16：50～17：00

〈すべての発表に関する質疑応答〉

17：00～18：00 進行 大沼克彦

## 目次

はじめに	大沼克彦	i
<b>I 部 民族学からみたユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民</b>		
モンゴル高原における自然環境と遊牧生活：遊牧民の経験から	思 沁夫	3
西アジア型農耕と家畜の乳利用—遊牧の成立をめぐる	三宅 裕	19
牧畜の本質と特徴—生業構造の民族学的視点から	平田昌弘	31
<b>II 部 歴史学，文献史学からみたユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民</b>		
モンゴル史上の遊牧民と農耕民の相互関係	宮脇淳子	51
MAR.TU 敵視の背景	堀岡晴美	65
<b>III 部 考古学からみたユーフラテス河中流域の農耕民と牧畜民</b>		
ステップ，部族，遊牧—シリア，ユーフラテス河中流域の青銅器時代	西秋良宏	101
集落外墓地の時空分布が示す青銅器時代の社会		
—ユーフラテス川中流域の考古学踏査から	門脇誠二	115
テル型遺跡における居住民の定住性・非定住性の検討に向けて		
—ユーフラテス河中流域テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の成果を中心に	長谷川敦章	126
シリア前期青銅器時代墓地遺跡の被葬者像解明に向けて		
—ユーフラテス河中流域における定住民と遊牧民の関係	久米正吾	137
植物遺存体からみた土地利用—テル・ガーネム・アル＝アリの場合	赤司千恵	148
シリア中部・ビシュリ山麓ケルン墓群の出土遺物からみた牧畜民と遊牧民	足立拓朗	159
シリア中部ビシュリ山系の遊牧化過程		
—ヨルダン南部ジャフル盆地との照合	藤井純夫	170
おわりに		189
編者略歴・執筆者一覧		





# I 部

---

民族学からみた  
ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民



# モンゴル高原における自然環境と遊牧生活：遊牧民の経験から

思 沁夫

## 背景

私は1967年～1976年まで、内モンゴル自治区・シリントグ盟・ショロンチャガンホシヨ（正鑲白旗）のイヘノール公社で（図1を参照）、祖父母と共に遊牧生活を送った。本稿の記述は当時の経験に基づいている<sup>1)</sup>。

モンゴル高原は標高の平均が800m以上あり、ユーラシア大陸の東端に位置する。モンゴル高

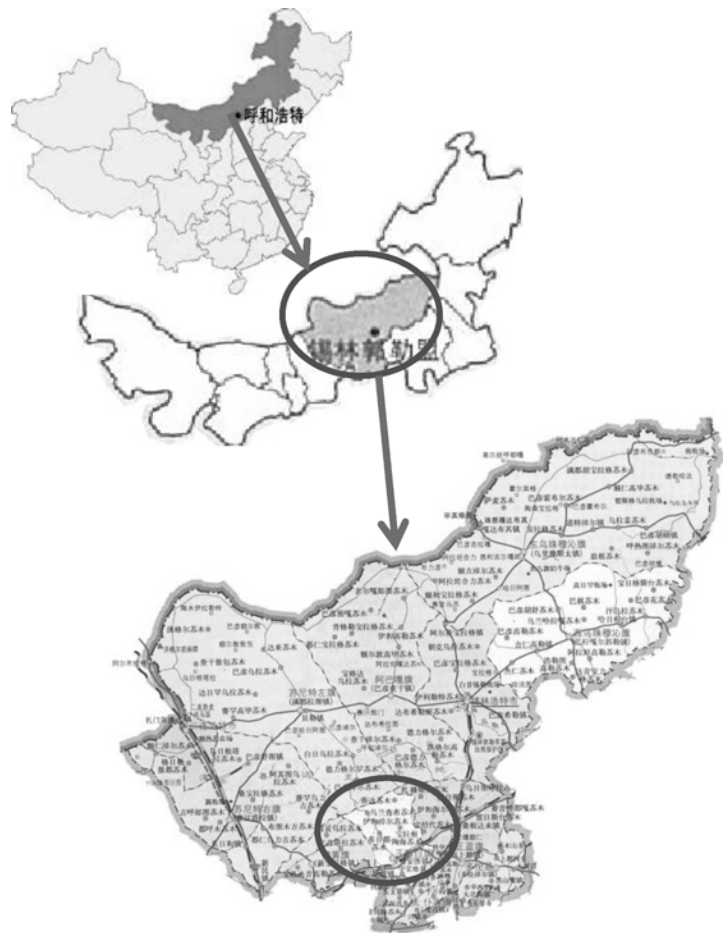


図1 内モンゴル自治区シリントグ盟・現地図

#### 4 I部 民族学からみたユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民

原における気候の主な特徴は乾燥（年間降雨量は200～500ミリ）と厳寒（ほとんどの地域では冬はマイナス20度以上）である。だが、季節は巡り、森林から砂漠まで様々な自然環境がモンゴル高原に存在する。また、モンゴル人はユーラシア遊牧文化の一部を構成しつつ、地域の自然環境に適した生活形態を求めてきた。モンゴル人の遊牧は「五畜」<sup>2)</sup>を理想的な遊牧生活と考える、群れを単位とする自然放牧である。自然放牧とは、家畜が自然条件を直接的に利用することを意味するが、人間の生活上、断続的移動は不可能なため、家畜と人間の両選択の充足が基本条件となる<sup>3)</sup>。言い換えれば、モンゴル人の遊牧は大まかに移動生活と群れの管理から成り立っている。

移動（あるいは移動生活）には、おおよそ2つのタイプがある。季節（四季）の変化に応じた季節移動と自然災害（旱魃や厳寒など）に対応した一時的移動である。季節移動は居住地域により異なる。移動回数も地域により変化する。地域による移動形態の相違は、植物の種類や数、質及び季節の変化と大きく関係すると思われる。一般的に、植物の種類や数の少ない内モンゴルの砂漠地域、モンゴルのゴビ地域では移動回数が多く、森林草原や東部地域など降雨量がやや多い、あるいは生態環境の良好な地域では、移動回数が少ないと考えられる。しかし、移動は地域の習慣や社会制度とも深く関係しているため、自然条件のみを判断材料に移動形態を語ることは出来ない。

モンゴル語の文献及びモンゴル人の一般的考えに基づくと、季節移動（あるいは理想的な移動生活）とは、四季の変化に応じたハブルジャ（春キャンプ）、ジョソルン（夏キャンプ）、ナムルジャ（秋キャンプ）とオブルジャ（冬キャンプ）を指す。モンゴル高原の多くの地域では、家畜の健康回復と頭数の増加、自然条件の再利用を両立させるため、季節移動は必要であり、また重要であると信じられている。

キャンプ地の選択は、家畜の健康回復（肥えさせること）や子どもの家畜の成育、また地域の習慣などの要素により決まる。一般的にモンゴル人は、春キャンプは決まった土地を選択することが多い。また、暖かく、草の種類が多く、水源付近に春キャンプ地を選択すべきと考えられている。春は、遊牧民にとって家畜頭数を増加させる重要な季節である。厳冬により体力を消耗した親家畜が出産シーズンを迎えるのが春である。しかし、モンゴルの早春は依然厳しい寒さが残る。まず、水源付近の暖かい大地の草々が発芽するが、その土地を遊牧民は経験的に把握している。冬キャンプ地では、しばしば家畜の凍死、衰弱死などが発生する。また自力で起き上げられない家畜や、体力の衰弱した家畜は常にキャンプ地にいることから、モンゴル人は冬キャンプ地に長期間滞在すると家畜に病気が罹りやすいと考え、早春の寒さにも関わらず、キャンプ地を変えるべきだと一般的に主張される。

夏キャンプ地は、しばしば風通しの良い（涼しい）、水が豊富な土地が良い。夏は遊牧民にとって、最も幸福に満ちた季節である。家畜が増え、新鮮な乳製品が食卓を彩り、遊牧民も新鮮な肉を食べ、体力が回復できるからである。秋キャンプ地は、夏キャンプの延長とも考えられる。遊牧民は夏から秋にかけ、家畜を太らせる。モンゴル語の諺にあるように、夏は水源を求め移動し、秋は草の種類を選び移動する。つまり、夏は水分を多く含む草を家畜に食べさせ、体力回復（モ

ンゴル語でウソントラガ（水肥り）と搾乳を考慮する。秋は草の種類を選びながら放牧し、家畜をさらに太らせ（モンゴル語でトソントラガ（脂肪をつける））、越冬の準備をする。一般的に、夏キャンプ地の選択には水源が要点となるが、秋キャンプ地の選択は多種の草が豊富で栄養に満たされた涼しい土地を理想としている。

一般的に、モンゴル人の冬キャンプ地は定まっている。また、モンゴル高原の冬は非常に寒いため、土地の暖かさや防風性などを重視し、冬キャンプ地を選択する。周知の通り、遊牧民は移動生活を送るため、人間の生活を簡素化する必要があった。しかし、冬キャンプ地は厳冬を乗り越える土地であるため、燃料、草はもちろん、様々な設備が欠かせない。移動に伴い身体的に多大なエネルギーが必要とされるため、定まった土地での生活が一般的になったと考えられる。

一時的移動をモンゴル語でオトルと言う。一時的移動は、移動要因と距離から2つに分類される。つまり、早魃あるいは厳寒大雪で地域全体が家畜放牧に適さない場合に行う移動と家畜の健康回復や越冬準備のために行う移動である。前者は、しばしば地域を横断し、移動するが多い。つまり長距離移動である。後者は、生活環境内の移動が多い。季節移動は、家畜と共に人間の生活（アイラ＝村）も移動することを意味するが、一時的移動は、非常事態を除き（例えば、災害や伝染病などの理由から政府や行政の実施するオトルで、地域の一部のアイラを別の地域に移動させることがある）、アイラ全体の移動は珍しく、一部分の家畜（あるいはある種類の家畜）と放牧者によって行うことが多い。別の表現をすると、季節移動は自分の生活形態そのものであり、オトルは放牧の手段とモンゴル人は一般的に理解している。

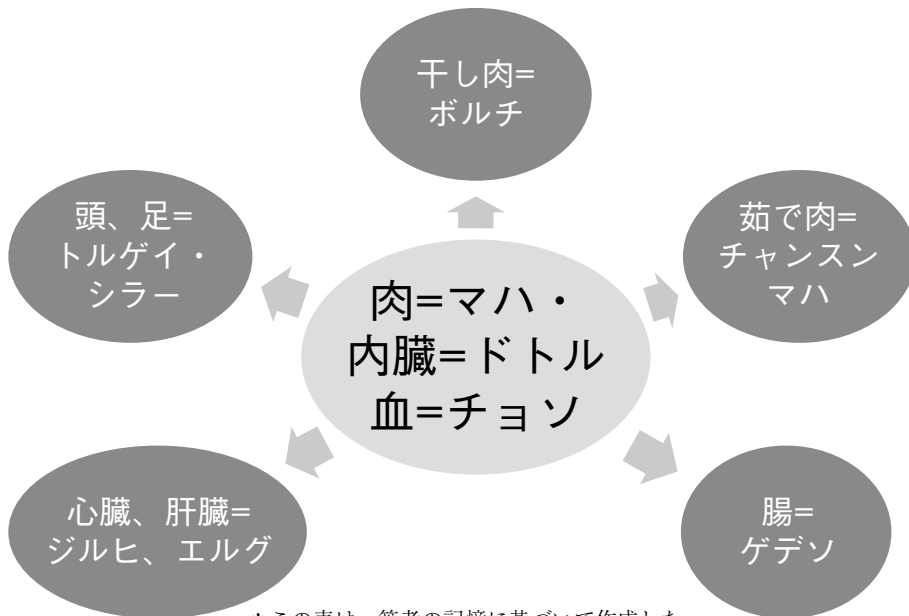
もし、移動が動物の特徴を尊重する行為と捉えるならば、家畜管理は人間の生活維持のため動物をコントロールし、合致させることと言えるかもしれない。別の言い方をすれば、移動は人間が動物に合わせることであり、家畜管理は動物を人間の生活に合わせることである。

群れの管理は、日常的な管理及び季節の変化に対応した管理から構成される。モンゴル人は、乳や肉の利用を目的に、ウシ、ヒツジ、ヤギは日帰りの放牧を行うことが多く、主に交通手段や運搬目的で利用するウマとラクダは、毎日キャンプ地の周辺に集める必要がなく、安全確認ができれば、去勢や毛刈りなどの目的に応じ、家畜の移動を制限し、群れの管理（干渉）を行う<sup>4)</sup>。

また、モンゴル人は食糧の一部（茶や小麦粉など）、衣服を作る毛皮以外の材料や自分たちでは生産不可能な日常用品を獲得するため、周辺民族（農耕民）と交換・交易関係の構築に努めるが、モンゴル人の遊牧生活は高いレベルの自給自足的な生活を維持してきたとも考えられる。モンゴル人の自給自足的な生活は、家畜の多目的利用によって支えられている。本稿でそのすべてを詳述することは不可能だが、食糧を例に具体的に考えてみたい。

モンゴル人の食は、赤食（肉類）と白食（乳製品類）から主に構成されている。赤食は、ヒツジ、ウシ、ヤギ（地域によってはウマやラクダも加わる）の肉、内臓、脂肪、血、つまり屠殺後の家畜から得られるすべてのものを利用する（表1を参照）。また、これらは、加工や乾燥によりさらに利用方法が拡大する。乳の利用は、大きく分け、直接利用と発酵利用の2種類が考えられる<sup>5)</sup>。直接利用とは、ウシ、ヒツジ、ヤギの乳を直接飲む、または茶や粥などに注ぐ、沸騰させクリーム

表1 肉・内臓の食事



\*この表は、筆者の記憶に基づいて作成した。

(ウルム)を生産することなどを意味する。発酵利用とは、ウシやヒツジ、ヤギの乳を自然発酵させ、チーズ、ヨーグルト、さらに発酵乳を原料に蒸留酒、馬乳酒などを生産することを言う(表2を参照)。

日常的管理は、家畜の健康回復や成長及び家畜の利用(乳、肉や毛皮など)に関連し、季節的管理は、家畜の群れを人間の目的に合わせて調整する、あるいは管理の簡潔化にある。日常的管理の基礎が放牧であるなら、季節的管理は、群れの構成や特徴の管理者側の文化や習慣への接近が主な特徴である。地域の習慣や文化、また家畜の種類により異なるが、内モンゴル・シリングル地域を例に考えると、季節的管理は、出産、去勢、馴化から成る。出産は、出産期の管理と種家畜の選別が挙げられる。出産期の管理は、ヒツジやヤギ(モンゴル語でブグマラ(小型家畜))と、ウシ、ウマやラクダ(モンゴル語でボドマラ(大型家畜))では少し異なる。ヒツジ及びヤギは放牧中に生まれることが多い。これとは異なり、ウシは放牧中に出産ではなく産場が柵になる。さらにウマとラクダは基本的に放牧中に出産するが、オオカミに食べられないよう注意する必要がある。種畜の選別は、去勢を行うことで実現する。また、他の地域から品種の良い種家畜を借りることもある。馴化は主に、交通・運搬手段として用いる家畜(ウマやラクダなど)に対して行う。

ここで強調したいのは、日常的管理と季節的管理は説明上の便利さ故に用いた概念であり、実際は日常的管理も季節的管理も放牧の作業の過程で行われている。遊牧民からするとどちらも放牧なのである。同様に、移動と家畜の管理ともに、別問題ではなく、従来の習慣や経験に基づきごく自然に行われていることであり、それが遊牧である。さらに、本稿の叙述は、歴史的過程で、ある時期の現象を捉えるというよりむしろ、ある程度の幅があり、遊牧民の内面性も意識して考

察されている。近代以降、モンゴル人は近代国家に統合され、自由意志で行う放牧はほとんど不可能となった。しかし、外部の制限により、たとえ放牧回数が減少したとしても、モンゴル人が季節移動の理想と習慣を完全に失ったというのではない。

### 豊かな砂漠（コンシャンドック砂地）

私たちが生活する地域<sup>6)</sup>は、コンシャンドック砂地の北西部であり、シリングル草原との境界に近い（図2を参照）。コンシャンドック砂地とは、内モンゴル自治区の中央部に広がる、東西450キロメートル、南北30～100キロメートルの砂漠地域である。

砂漠と言えば、植物が皆無の、砂丘が風により移動する風景が連想されるだろう。だが、コンシャンドック砂地はほとんどの砂丘が植物により固定された状態にある。コンシャンドック砂地の固定砂丘は全体の67%を占めている。移動砂丘は全体の13%に過ぎない（その他は半固定砂丘）。豊富な地下水もコンシャンドック砂地の特徴である。コンシャンドック砂地の中には、湖、水溜りなどが多く、砂漠の中で河川（例えばジャンデン河）が流れるという奇妙な現象も見られる。コンシャンドック砂地の植物の特徴は、草原植物、低木（灌木）と疎林という3つのタイプに分類することができる。なぜ、植生の豊かな砂漠があるのか。紙幅の関係上、詳細な説明は困難だが、砂地は吸水性に優れるため、モンゴル高原の草原に比べ、水分蒸発量が少なく、地下水は、乾季においても植物に水分供給が可能のため、サイクルの短い雑草類はもちろん、多年生植物も生き

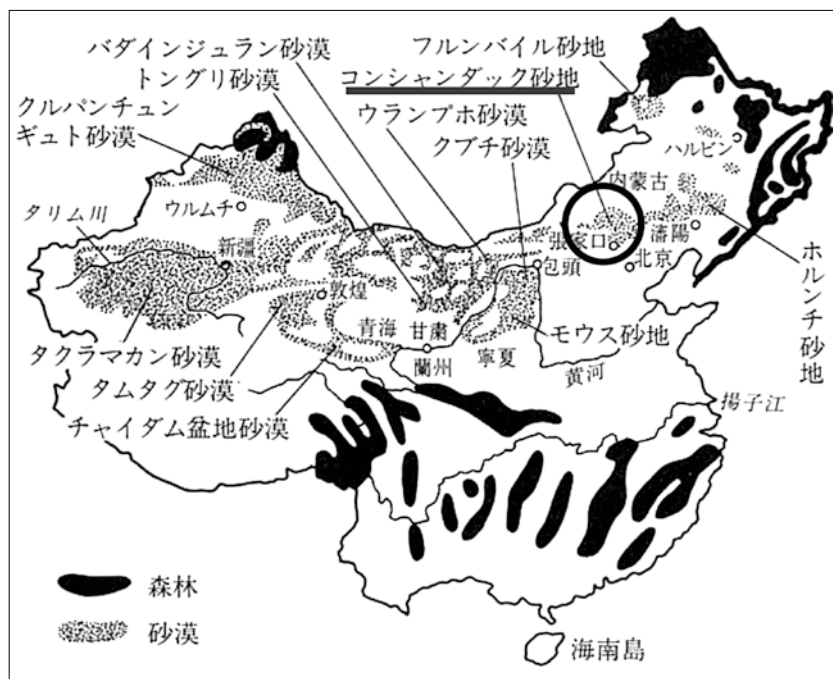


図2 コンシャンドック砂漠地図

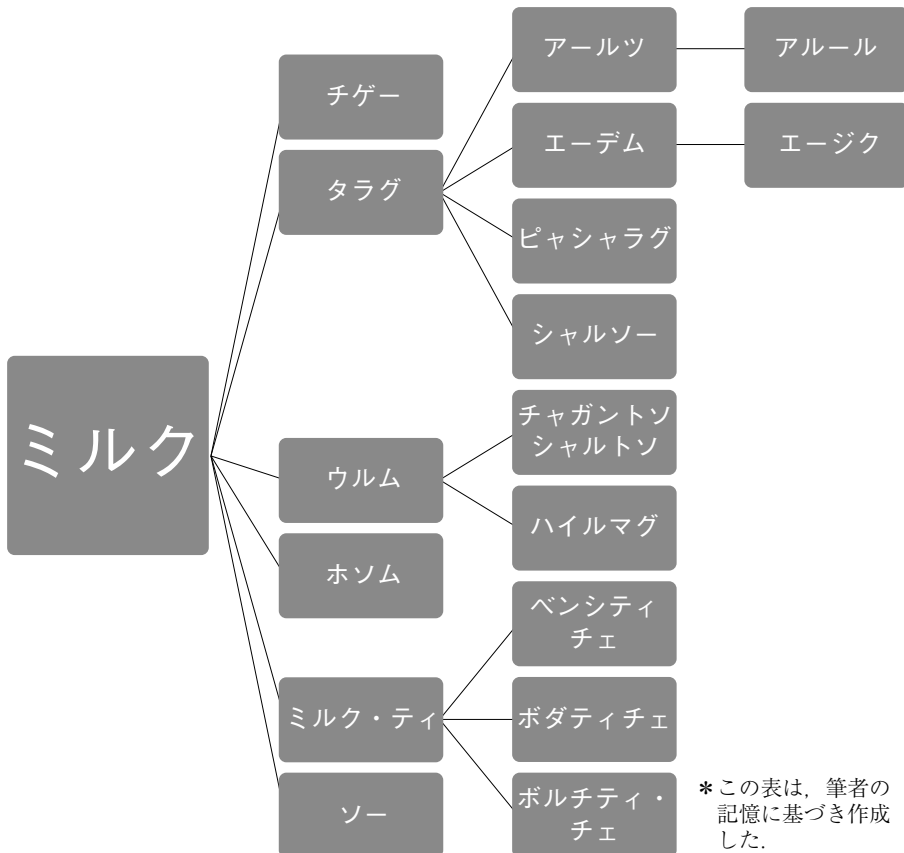


延びることができたと考えられる。コンシャンドック砂地では、砂丘の斜面、砂丘間や水溜り周辺に多く生息する柳、榆、白樺、松などの様々な灌木が見られるだけでなく、多くの草花、さらに砂漠特有の植物も多く見られる。歴史的文献において「砂漠の植物園（あるいは花園）」と表現されるように、砂漠と草原の植物が共存する独自の生態系が形成された地域である。

砂漠と草原の植物は、5畜の放牧を可能（必要）にすると同時に、遊牧民の食、生活や家畜の管理に様々な条件、恵みを与える。例えば、シリングル盟は他の地域と比べ、私たちが食用として利用する植物は3、4倍も多いと言われている（ジャムソ 1990）。表3では、私たちのアイラの誰もが知る、よく食べる植物の一部を紹介している（表3を参照）。

ここで特に強調したいのは、ボルガソ（柳）と遊牧生活との関係である。表4が示すように、ボルガソは、ゲルを組み立てる材料（オンヌとハン）から子どもの遊び道具まで、様々な形態で利用されると同時に、ホンゴル（沼地）は家畜の重要な放牧地を提供している。ホンゴルは主に地下水を利用し、形成されるため、草原に比べ非常に安定した放牧環境が提供される。コンシャンドック砂地で、旱魃などによるゾド（自然災害）の発生は非常に珍しい。そこでホンゴルが果たした役割は大きいと考えられる。ホンゴルは、直径何十メートルから、何キロメートルまで、

表2 ミルクとモンゴルの乳製品



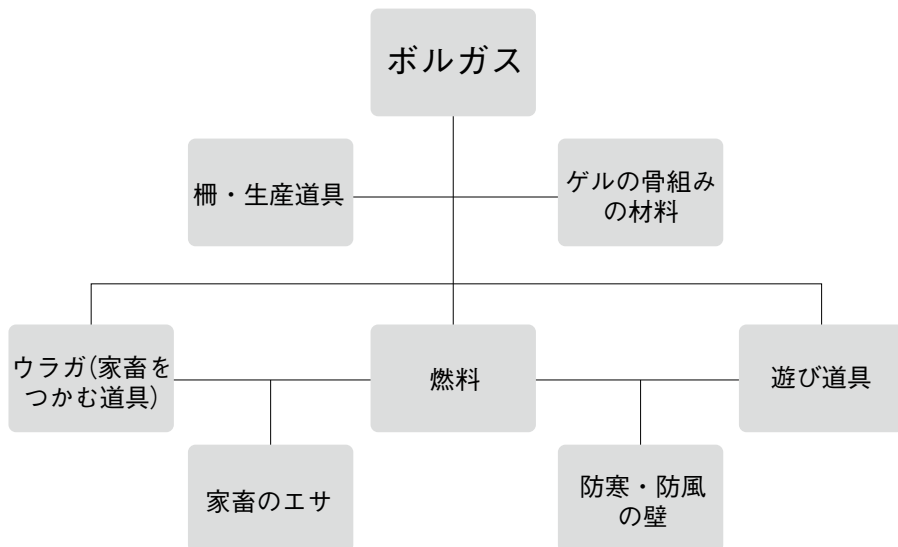
\*この表は、筆者の記憶に基づき作成した。

表3 私たちのところで主に利用する植物

名前	モンゴル語	季節	利用方法
野生のネギ	ヘリンソングン	夏, 秋	ブーズなどに
野生のニラ	ゴグド	夏	色々な料理に
沙葱	ホムル	初夏	漬物やブーズなど
キノコ	モーグ	秋	焼いて食べる
ブドウ	メール	晩夏	そのまま食べる
沙刺	シェルゲン	晩夏	そのまま食べる
砂大根	マンキンローブン	夏	漬物
野生葱	メンガル	秋	スープに
ラクダの乳 (植物)	テマンガフ	初夏	子どもの大好物

\*この表は、筆者の記憶に基づき作成した。

表4 ボルガス (柳) の利用



\*この表は、筆者の記憶に基づいて作成している。

長短は様々であり、ホンゴル同士が繋がり合い、巨大な柳の森が形成されることもある。ホンゴルは、家畜の放牧地だけではなく、様々な動植物の生息地ともなっている。

私たちの地域では、年間を通してホンゴルを利用する。特に冬、植物が非常に乏しい時期にはホンゴルは最も重要な放牧地となる。ホンゴル以外に、放牧地として利用するのは、マンク(植物に覆われている砂丘)の斜面と草原である。マンクの斜面には、砂漠の植物(柳も含む)や木があり、特にシャブグ(マメ科の群生植物)は、栄養が豊富な常緑植物であり、冬枯れしないため、遊牧民は家畜の栄養剤と呼ぶ。また、木の枝(モンゴル語でムチョル)を冬と春に利用することも多い。木の枝は、最も細い部分を人間が採り、放牧しながら家畜に与えたり、冬キャンプ地に持ち込み、家畜に与えたりする。さらに、草原のターナ、メングル、エグなど(ネギ

科とキク科の植物が多い)は、夏から秋にかけてよく利用する(これらの植物名は表3を参照)。

## アイラ(村)

冒頭でも述べたように、私がコンシャンダック砂地で遊牧生活を経験したとき、地域社会は中国国家の統合下に置かれ、アイラは人民公社と生産隊という地方行政組織に組み込まれていた。家畜は公有化され、遊牧民は人民公社の社員となり、人民公社の家畜の群れを放牧、管理する立場になった<sup>7)</sup>。

当時、生産隊は遊牧民を管理する行政の末端組織であった。基本的に、党政府は遊牧民から幹部を選抜し、幹部を通じ、政策、規定や政治思想を遊牧民に伝え、遊牧民を管理していた。また、遊牧民の生産活動は社会主義の計画経済システム下に置かれ、国や政府により定められた数量の家畜、毛皮、羊毛、ラクダの毛などを提供する義務が課せられていた。さらに、「労働公分制」<sup>8)</sup>という分配制度が導入され、日常の放牧、羊毛の採集、民兵活動の参加や家畜(主にヒツジとヤギ)の伝染病防止のための「洗羊(薬の一種。殺虫剤を入れた水槽に家畜を入れ、家畜の寄生虫などを殺す効果がある)」など労働形態に応じ「公分」の基準を定め、遊牧民に「公分」が与えられる。年度末で決算、「公分」を現金変換する(中国語で「分紅」という)<sup>9)</sup>。

放牧において従来の形態を維持していたが、群れの調整が行われていた。ヒツジ、ヤギ、ウシの群れは、かつて各アイラが所有する家畜(群れ)の所有形態を私有から公有に変え、同じアイラが放牧していた<sup>10)</sup>。各アイラのウマとラクダは生産隊規模で集められ、生産隊が任命したアイラ(遊牧民)が放牧するようになった。ラクダは1つの群れ(約200頭)に集められ、担当者は私たちのアイラ(アイラの名前をトグルグと変更したが)の遊牧民(名前は覚えていないが、私は彼をラクダお爺ちゃんと呼んでいた)と隣のアイラの遊牧民が担当していた。各遊牧民から集められたウマ(約500頭と記憶している)は、2つの群れに分かれ、それぞれ4人の遊牧民が担当していた。そして、各アイラは、放牧や移動用にウマやラクダを必要とする際、各担当者に依頼する。当時、私たちの地域では、冬はラクダに乗り、それ以外の季節はウマを利用していた(ラクダが足りない場合は、ウマを利用する)。キャンプ地の移動や重い荷物を運ぶ場合、牛車を利用するのがほとんどであった。

私たちのアイラは、4世帯から構成されている。私たちを除き、ラクダお爺ちゃんの家(彼の妻と5人の子ども)、アイラのヒツジ、ヤギの群れを放牧する青年の家(彼の妻、息子と彼の養父)と年配の女性の家(彼女は一人暮らし)である。私たちのアイラは、冬キャンプと夏キャンプだけを行い、春キャンプと秋キャンプはしなくなった。また、冬キャンプと夏キャンプは土地が定まっていた<sup>11)</sup>。

私たちのアイラの家畜と放牧は、以下のようになっていた。ウシは各家庭が放牧、管理する。ヒツジ、ヤギ(約500頭)は、羊飼(青年)が放牧する。しかし、出産、羊毛刈り、フェルト作り(ゲル用)、「洗羊」や子羊(ヤギ)の世話などは、アイラの各家庭が共同で行うことになって

いた。また、キャンプ地の移動、柵の作製（あるいは修理）、家畜庭の冬用の草刈りやオトル（災害などに対応した臨時移動）などは、アイラの各家庭が相談して決めていた。

冬キャンプ地のラクダお爺ちゃんのバイシン（非移動住まい）を除き、夏キャンプも冬キャンプもゲルに住んでいた。冬キャンプ地には、各家庭に物品を収納する、保存するウオン（柳で編んだ四角形、あるいは丸い形のもので、外側は粘土の中に牛糞を混ぜた材料で覆われている）が1、2個ある。夏キャンプ地にもウオンがあるが、倉庫としてではなく、調理場や、乳製品作りのために利用する。冬キャンプ地では、ゲルの中で調理するが、夏キャンプ地では、人間が涼しく過ごし、また乳を発酵させるための良好な環境を維持するため、ゲルの中で火は熾さない<sup>12)</sup>。

冬キャンプ地のゲル、ウオンと夏キャンプとのゲル、ウオンの利用が異なるだけでなく、柵などの設備も大きく異なっていた。夏キャンプ地では、各家庭にゲル、ウオン、乳製品を乾燥させる柵とウマをつなぐ棒（モンゴル語でオヤ）がある。また、子ウシを入れる柵（柵の前で乳搾りをするため、子牛をつなぐ棒が何本かある。柵と棒を合わせてジルという）がある。共有物として井戸（人間と家畜が共有する）とヒツジ、ヤギを飼う柵と、子ひつじ、子ヤギを飼う柵がある。

冬キャンプ地と夏キャンプ地との違いは柵の数、それから燃料用の家畜（ウシとヒツジ、ヤギ）糞の量である。夏は乳搾りのため、家畜の親と子を隔離させる必要がある（夜は柵で隔離させ、昼は別々に放牧する）が、家畜の寝場所などを用意する必要はない。しかし、冬は家畜を隔離させる必要はない（冬は乳搾りをしない）が、家畜の寝場所（家畜の糞を乾燥させ、細分化したものを使っている）と、刈り草用の貯蔵所を準備せねばならない。また、衰弱した家畜を群れから隔離し、刈り草を与える場所（隔離せねば、健康な家畜がエサを奪ってしまう）など、様々な目的に応じた設備（柵、あるいはウオン）が必要となる。

また、夏は食事と乳製品を作るための燃料さえあれば十分だが、冬はゲルを暖めるための多くの燃料が必要となる。基本的に、夏は乾燥したボルガソ（乾燥した）と必要に応じてジルのアラガルを利用する。冬は、前年に集められたアラガルやフルジンを利用する（詳しく後述）。

## 四季と放牧

既述したように、モンゴル高原には四季があるため、植物は春から夏にかけて生長し、秋になると枯れる。このような自然条件下で生き抜くモンゴルの家畜は、夏から秋にかけ、水分と栄養が豊富な植物を多く摂取し、栄養分を脂肪に換え、食糧の乏しい厳冬に備える。モンゴルの家畜は、モンゴル高原の自然状況に適応可能なように「進化」したとはいえ、冬から春にかけて家畜の死命は、（死亡数は異なるものの）毎年必ずと言っていいほど見られる。私たちの地域では、家畜の損失を最小限に抑えるため、以下の3つの対策を講じる。11月になると、「イドシ（本来はメシを意味する言葉だが、少なくとも近世以降は、家畜を集中的に屠殺し、冬用の食糧準備することを指すようになった）」と言われ、体力のない、年老いた家畜を屠殺し、人間用の食糧にする。また、衰弱した家畜は放牧（昼）と刈草-餌（朝と晩）で対応する。春には、草の芽が早期に発芽する大地

を探し求め、放牧する。

モンゴル高原全体にも言えることだが、私たちの地域では春の訪れとともに、しばしば強い北西風、急激な天候の変化に見舞われるが、寒さも依然厳しい。故郷では「春の天気は娘の顔、一日3回変わる」という諺がある。家畜は冬の寒さで体力をひどく消耗し、また出産期を迎えるため、春は遊牧民にとって、大変厳しい季節となる。一方、植物の「新緑-発芽」により命を繋ぐこともできるので、春は希望の季節でもある。故郷では、雪の下、あるいは土の中から草の芽が地表に現われることをノガントヤ（緑の光）、あるいはノガントヤ・ドラナ（緑の光が輝く）と表現する。冬の寒さで弱った家畜、新たに誕生した家畜は、新しい草を食べ、体力を取り戻し、元気になる。モンゴル語では、家畜が体力をつけ、元気なることをタラガラナ（肥る）という。

夏は、遊牧民にとって多忙な時期だが、喜びに満ちた季節でもある。夏は短い、暑い季節である。気候は大陸性のため、昼夜の温度差が激しい。また、降雨も夏に集中するため、植物の生長にとって絶好の環境が形成されることになる（モンゴル高原の植物には、高温の夏に雨が降ると急生長し、子孫を残す特性があるとされる）。草原が緑に染められ、ネギ科、キク科やマメ科の100種類以上の草を食べ、家畜は体力を回復させ、肥えてゆく。

遊牧民にとって、夏は乳製品を作る季節である。モンゴルの伝統食文化には、冬は赤食（動物の肉が中心）、夏は白食（乳製が中心）を食べる習慣があると紹介したが、私たちの地域は、清朝時代より北京の貴族らに乳製品を貢いでいたため、乳製品（特にチーズ類）の種類や品質は、ほかの地域に比べて特に多いだけでなく、衛生面や品質面でも、非常に良いと言われている（ダシジャブ1997年）。

私たちのアイラでは、乗馬用以外のウマが存在せず、またラクダも夏キャンプ地付近にいないため、牛乳とヒツジ、ヤギの乳だけを利用する。新鮮な牛乳はミルクティとうどんに注ぐが、そのほとんどは発酵させ、上部のクリームを取り、ときにはバターを作り、クリーム除去後にチーズ（祖母は15種類以上のチーズを作った）、残りの乳清をさらに発酵させ、蒸留酒を作る。蒸留酒を作ると、布袋に注ぎ、水分を搾り、手で団子を作り、乾燥させる。これをアルチャン・ホロードという。酸っぱいチーズという意味である。アルチャン・ホロードは保存食として最適であるため、冬や春の食糧としてよく利用する。ヒツジ、ヤギの乳は、クリームを取らず、2、3種類のチーズを作る。ヒツジ、ヤギのチーズは脂分が多く、凝固しないため、保存食として利用する。

表3が示すように、夏草は家畜だけではなく、遊牧民も利用する。沙葱（ネギ科の植物で、水分が多い砂地に生息する）、野生のネギ、ニラなどは、野菜の代わりに肉まんの具材として利用したり、腸詰（ヒツジの血の中に小麦粉、ニラの花やネギなどを入れ、ヒツジの小腸に詰める）の味つけや漬物としても利用する。

遊牧民の秋は、越冬準備のためにあると言っても過言ではない。まず、家畜に脂肪をつけさせるため、様々な牧草を探し、食べさせる。遊牧民は家畜の脂肪分には2種類あると考えている。ウソントルガ（水分脂肪）とトソントルガ（油脂肪）である。ウソントルガは、早くつくと考えられ、冬から春にかけて衰弱した家畜に水分量の多い植物を食べさせ、脂肪をつけさせる。夏のキャンプ

地を水源付近に設定するのはこのためである。

一方、トソントルガは、脂肪がつきにくいと考えられている。トソントルガは水分量の少ない様々な草を食べさせる。私たちの地域で秋キャンプの習慣は失われたが、秋の放牧は、夏と異なる。ウシに関しては、搾乳用のウシ（しかし病弱な親や子のウシは残さない）を除き、1つの群れを形成する。アイラの男たちはオトルに出かける。日帰りもあれば、何日も戻らない場合もある。その場合、ネヒデル（毛皮製のモンゴル服）やダヒ（毛皮寝袋）を持参してゆく。越冬のため、様々な草を選び、食べさせることは大切だが、体力強化のための運動も必要である。ヒツジ、ヤギの場合は搾乳を中断し、共に放牧する。また、放牧の時間、移動距離ともに遠くなる。

秋のもう1つの重要な作業は、草刈りである（家畜の越冬用の草はすべての家畜に与えるものではない。家畜の2割もしくは3割である）。草刈りは、冬キャンプ地の周辺、ホンゴルやマンクの斜面（シャブグを採るため）で、草の高さや種類を判断して行われる。草刈りは手作業である。また、刈り草を冬キャンプ地に運搬しなければならない。草刈りと運搬作業は重労働である。1ヶ月～1ヶ月半を要する。一般的に、草刈りの作業の終了時期と冬の到来は重なる。

私たちの冬キャンプ地では、西北、南東はホンゴルの繋がる柳林が広がる土地にある。柳林は数キロメートルにも及ぶ。ウシや乗馬用の家畜はこの柳林で放牧する。家畜は、ホンゴルの草や柳の枝を食す。ヒツジ、ヤギは、柳林の中に入れば、行方が分からなくなるため、砂丘の斜面や小規模なホンゴルなどを利用し、放牧する。

## 遊牧民の日課と「工夫」

前節では、自然条件と放牧の関係を中心に遊牧生活を概観してきた。ここでは、遊牧民の生活、作業を日常的活動と季節的活動に分類し、要点をまとめた。なお、其々の活動を担う主な人物を祖父、祖母など（ ）内に示している。

①春（2月末～5月末）<sup>13)</sup>：朝5時頃に起床し、活動を始める

### i. 日常的活動

- ・食事（塩味のミルクティ、肉うどん、茹で肉、揚げパンなど）（祖母）
- ・ゲルの絨毯の掃除、オン、ハナ、家具の埃取りなど（筆者）
- ・家畜の寝場所の掃除、新しい寝場所の用意、家畜に水を与えるなど（祖父母）
- ・ウシの放牧場所などを探す（この時期は草が乏しいため、ホンゴル（柳林）、シャブグ（豆科植物）が主）（祖父）

### ii. 季節的活動

- ・ブーレ・マラ<sup>14)</sup>（弱った家畜）の世話（干し草を与える。起き上がらなくなった家畜を立たせる）、寝場所の掃除など（祖父母）
- ・子ヒツジ、子ヤギ、子ウシの世話（ミルクを与えたり、干し草を与えたりする）（祖父母、筆者）

14 I部 民族学からみたユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民

- ・アラガル = 牛糞, フルジン = 羊糞 (硬くなったもの) を集める (祖父母)
- ・羊毛を切る・ヤギの絨毛を櫛で梳き, 集める (アイラの全員)
- ・当年のヒツジ・ヤギの去勢 (アイラ全員)

②夏 (6月初め~8月末): 朝4時頃に起床し, 活動始める

i. 日常的活動

- ・食事の準備 (祖母)
- ・ゲルやウオンの掃除 (筆者)
- ・家畜の放牧や世話 (祖父母)
- ・子ヒツジ・子ヤギの放牧 (各家の子ども)
- ・ウシの乳しぼり (早晚: 1日2回) (20頭~30頭)  
ヒツジ, ヤギの乳しぼり (昼朝: 1日2回) (50匹~60匹) (祖母が搾り, 筆者が手伝う)

ii. 季節的活動

- ・乳製品を作る (チーズ, 牛乳酒, ヨーグルトなど) (祖母)
- ・ボルガソ (柳) で生産道具, 柵, 日常用具などを作る (祖父)
- ・ウシ (2歳) の去勢 (アイラ全員)

③秋 (9月~10月末): 4時前に起床し, 活動始める

i. 日常的活動

- ・食事の準備 (祖母)
- ・ゲルとウオンの掃除 (筆者)
- ・家畜の放牧や世話 (祖父母)
- ・牛乳で「ウルンム = クリーム」を作る (祖母)

ii. 季節的活動

- ・越冬地の柵, 住居の修理 (祖父と筆者)
- ・草刈り (アイラ全員)

④冬 (11月~翌年の2月) 朝7時頃に起床し, 活動始める

i. 日常的活動

- ・食事の準備 (祖母)
- ・ゲルの掃除 (筆者)
- ・家畜の放牧や世話 (祖父母, 筆者)
- ・牛糞の片づけ, ウシの寝場所の用意 (祖父母)

ii. 季節的活動

- ・毛皮で衣服作り (祖母)

- ・ウシ、ウマなどの革で紐革作り（祖父）
- ・ラクダの毛、ウマの尾やたてがみなどで紐作り（祖母）

## 「アラガル」<sup>15)</sup>

モンゴル人は、人間を含む動物の排泄物を普通、バスと言うが、ウシの排泄物はバスと言わずアラガルという。牛糞は遊牧民の燃料である。私たちの地域では、牛糞と羊糞は異なる方法で乾燥させ、利用する。牛糞は冬と春のものを利用する。夕方、放牧地から帰ってきたウシは、翌日の午前中まで、人間が用意したヘブトル（寝所）、あるいはヌムル（防風所）で過ごす。この期間、大量の糞が落とされる。マイナス20度～30度の温度下では、牛糞は瞬時に凍結し、石のように硬くなる。この凍った牛糞を毎朝サブル（クマの手）で拾い、アラガ（柳の木で作った半球型の笊状の入れ物）に入れ、ゲルから少し離れた場所に集める。冬と春に収集された牛糞は、夏の太陽と風により乾燥させる。牛糞はダランとして保存される。

ダランとは、四角形（長さ4～5m、幅2～2.5m、高さ2～2.5m）のもので、下部は柳の木で作成した柵で囲み、牛糞を中に入れて作る。上部は、切妻形になっており、牛糞に泥を混ぜ、水で薄くしたもので、上部の屋根を被せるように塗る。これは夏の雨水を防ぐためである。

フルジンとは、固まった羊糞、ヤギ糞のことをいう。フルジンの作り方は、アラガルと異なる。牛糞は毎日片付けるが、羊糞、ヤギ糞はそうではない。冬から春にかけてヒツジとヤギは同じ柵で夜過ごすため、ヒツジとヤギの糞は、毛が多く混じり、尿や雪水で層になり、固まってゆく。これらの塊を夏の終わり頃、特別な鋤を用い、長四角形（長さ30～35cm、幅20～25cm、厚さ15～20cm）に切り取り、牛糞と共にダランとして冬用に備える。牛糞は早く燃焼するため、食事の準備によく利用され、フルジンは長時間燃焼するため、ゲルを暖めるためによく用いられる。

## ゲル

モンゴルの移動式住まいをゲルと言う。ゲルは、木製の骨組みとそれを覆うフェルトだけでできている。骨組みは、下から、ハナ（壁）、オン（屋根）とトーノ（天窓）とウーデ（ドア）である。ハナは、伸縮するので、ハナでゲルの高さ調整を行う。また、ハナの数でゲルの広さが決まる。ゲルの骨組みを覆うフェルト（材料は羊毛だけ）を、プレス（ハナを覆う）、テーブル（オンを覆う）とオルフ（天窓を覆う）と言う<sup>16)</sup>。ゲルを組み立てる順番を説明すると、まず、ウーデを立てる（南の方向）。次にハナを組み合わせ、両端をウーデとつなぐ。ハナの間を結ぶ。そして、一人がトーノを持ち上げ、他の人が、ノンの細い方をトーノの穴にさし、太い側をハンと結ぶ。骨組みの組み立てが終われば、縄でハンを固定する。フェルトはハンから覆い始める。フェルトの上部からも縄で固定する。

私たちは、冬は様々な家具をゲルに収納するため、5つのハンにする。夏は、家具は少ない上、



ゲルで食事をしないので4つのハンにする。冬はゲルを暖かくするため、フェルトを3枚にし、さらに地面との接触部分、アラガルの中に粘土を入れ、厚さ2cm、固さ20cmぐらいに固める。夏場はゲルを涼しくするため、フェルトを開放し、ゲルの風通しをよくする。

ゲルは、遊牧民にとって単なる住まいではない。例えば、ゲルには時計の役割がある。私たちは、ゲルのトーンから射し込む光の位置により、時間を把握している。トーンから差し込む光の位置とその位置の移動先を追うのである。冬の場合は、ウーデのカラス（窓）に表出する氷の模様から天候を判断する。例えば、氷が厚く、全体を覆っていれば寒い、氷が少ないと晴れるといった具合である。

夏のゲルの中に、乳を発酵させるため多くのワールンサブ（陶器）が置かれている。ワールンサブの内部と外部の温度の差で、ワールンサブの表面に水滴ができ、ワールンサブの地面は濡れる。カエルや虫たちがここを棲家として利用する。また、夏はゲルの中で火を起こさないため、トーンの内側にツバメがよく巣を作る。蜂もしばしばゲルの中で巣を作る。蜂の巣に被害を加えない限り、蜂が私たちが襲うことはない。

## ボルガソ

ボルガソはホンゴルとその周辺に最も多く生息するが、マンクなどの斜面にもある。私たちの地域ではボルガソ（あるいはボルガソの林）は最も多く見られる植物であり、遊牧民の生活と密接なかかわりを持つ。ここまでボルガソが放牧や遊牧民の生活においてどのような役割を果たすのか見てきたが、子どもたちにとってもボルガソは有難い存在である。それはボルガソが子どもたちに様々な遊び道具を提供するからである。例えば、初夏<sup>17)</sup>に私たちはよくボルガソで水鉄砲を作り、遊ぶ。これをモンゴル語でオスンポーと言う。オスンポーの作り方は以下の通りである。まず、表面が滑らかなボルガソを探す（太さ2~3cmくらい）。ボルガソを長さ40cmくらいになるよう切断し、下の10~15cmの皮を剥ぎ落とす。上部は上手く芯を採る。上部の穴を塞ぎ、その中央に穴を空けると完成である。ボルガソを乗馬にたとえて遊ぶこともあり、地域の子もたちはボルガソを用いて様々な遊び道具を作った。

## おわりに

コンシャンダック砂地は放牧に適した環境であり、草原に比べはるかに安定した放牧環境である。しかし、この環境はもろく、壊れやすい。自然環境の限界を超えず、長期に渡り利用することは容易ではない。放牧について祖父はいつも「四季の中で春と秋は人間が家畜のために生きる。夏になると家畜は恩を返してくれる。冬は家畜と人間が一つにならないと生きて行けない」と話していた。

これまでは、移動と放牧が別々に検討されることが多かったが、私たちにとって移動と放牧と

は同じである。つまり、人間が家畜と呼吸を合わせ、さらに自然環境と呼吸を合わせるのである。自然環境への適応という表現も成立する。だが、適応は目的のある行動といったイメージが強いが、私たちはある目的あるいは計画に従い行動するというよりはむしろ、家畜と自然環境（季節変化）に呼吸を合わせているだけであると言える。

#### 註

- 1) 1947年内モンゴルでは共産党政権が成立し、その後は中国共産党の統治下に置かれ、社会主義制度が導入された。一方、国民化の過程は遊牧民の生活、社会を大きく変化させつつあった。1950年代からは、土地、家畜の公有化が進められ、また、1960年代から1970年代にかけては、従来の生活、文化や信仰は政治批判の対象となり、人間の安全保障問題が大きく問われた。
- 2) 五畜とは、ウマ、ウシ、ラクダ、ヒツジとヤギを意味する。モンゴル人は五畜の保有を理想と考えるが、実際は自然環境の制限を受け、3畜（例えば、ウシ、ウマ、ヒツジ）、あるいは4畜（例えば、ウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ）の場合が一般的である。
- 3) 人間の選択が政治、社会制度の影響を受けることは言うまでもない。実際遊牧民社会は清王朝、社会主義によって大きく変化されていた。
- 4) しかし、地域により異なる。ウマの乳、あるいはラクダの乳を利用する地域では、搾乳時期には、毎日、村周辺に家畜を集める必要がある。
- 5) アラシャなどの砂漠地域では、ラクダの乳を直接利用することもあるが、モンゴル高原全体を考えた場合、ウマとラクダの乳は発酵利用するのが一般的である。
- 6) 私が遊牧生活した時期は、まさに中国の文化大革命（1966年～1976年まで）の時期と重なっていた。当時、共産党の政治思想（中国語ではマルクス主義、レーニン主義や毛沢東主義と言う）や毛沢東の語録の学習が日常化していた。また、伝統的文化、宗教（チベット仏教）は批判や闘争の対象となり、寺院や文化財に対する破壊、ラマたちに対する弾圧が行われていた。
- 7) 少数であれば家畜の私有は認められていた。また、乳の利用、食糧としての屠殺や生活上の必要から毛皮や毛などの利用も認められていた。
- 8) 「労働公分制」は、中国が農村、遊牧地域で社会主義思想を普及させるために導入した労働奨励制度である。
- 9) 当時、食糧などは記帳制で、公分の中から食糧購買のための使用分を引いて、残りを現金として遊牧民に渡す。現金は、主に衣服（夏服や内服）の材料、日常用品などの購買に用いる。
- 10) 私たちの地域は言語的にチャハルという部族に属していた。社会主義制度成立前、地域社会は清朝の「八旗制」によって統治されていた。当時は、家畜が非常に多い家庭（モンゴル語でバヤン（農耕民社会の地主のような存在）、自給できる家と家畜をほとんど持たない家庭（モンゴル語でヤドウ（貧民））に分かれていた。  
社会主義制度導入後（「土地改革」運動）、バヤンの家畜は、強制的にヤドウ遊牧民に分配された。また、アイラという従来の呼び名はドゲイルン（組、あるいは班という意味）に変えられた。しかし、遊牧民の間では、ドゲルンと共にアイラも使われていた。
- 11) しかし、夏キャンプ地が砂により浸食されたため、場所を変更したことがあった。また、夏から秋にかけて、夏キャンプ地に滞在するが、ごくわずかな家畜をキャンプ地に残し、家畜に様々な草を食

- べさせるため、アイラの中から1人、もしくは2人が家畜と共に移動することがよくある。つまり、オトルを行う。
- 12) モンゴル人は、温度を利用し、乳を発酵させる。そのため適温が重要である。基本的に20～25度前後が理想である。
  - 13) 既に述べたが、私たちの季節移動は、夏キャンプと冬キャンプだけとなった。冬と春は冬キャンプ地に、夏と秋は夏キャンプ地に滞在する。
  - 14) モンゴルの放牧は自然条件を直接利用した放牧である。冬になると、家畜の餌が乏しくなり、さらにマイナス20～30度の寒さに耐えなければならない。そのため、寒さの程度や家畜が蓄えた脂肪量などに左右されるが、毎年ウシの2～3割、ヒツジ、ヤギの1～2割は、自力で餌を探すことが困難になる。このような家畜は、家畜の群れから離し、人間が世話する。これをモンゴル語でブーレ・マラ（弱った家畜）と言う。
  - 15) アラガルは建築材料にもある。アラガルを粘土に混ぜ、ウオンやダランの壁や屋根に塗ることは既に触れたが、冬のゲルのフェルトが地面と接触する部分（ドアを除く）を密封するときにも用いられる（詳細はゲルに関する節で説明する）。
  - 16) ウルフはトーノとトーノを覆うものの両方を含めた概念である。
  - 17) 初夏のボルガソは水分が多く、丈夫なため、長持ちする。

#### 参考文献

- ジャムソ『シリンゴル地域の食文化と習慣』1990年 シリンゴル盟政協文史資料（5）非公開出版（原文モンゴル語）
- ダシジャブ『チャハルの食文化』シリンゴル盟政協文史資料室出版 1997年（原文モンゴル語）

# 西アジア型農耕と家畜の乳利用

## —遊牧の成立をめぐる—

三宅 裕

### はじめに

一般に「遊牧民」と「農耕民」というと、まったく異質で対照的な存在とみなされることが多い。確かに、農耕を営むことができないような荒野を家畜の群れとともに移動する遊牧民と沃野において定着的な生活を営む農耕民は、大きく異なった存在であるように見える。こうした見方を象徴的に示したのものとして「the desert and the sown (沙漠と耕地)」という表現がある(安倍 2011)。これは 20 世紀初頭に西アジアを旅して優れた紀行文を残したベル(G. L. Bell)の著書のタイトルであるが(Bell 1907)、彼女は自らが旅した地域を沙漠で活動する遊牧民と耕地を拠り所とする農耕民からなる世界と捉えていたことになる。

今日でこそ、各国政府による定住化政策の推進や社会状況の変化により、西アジアにおける遊牧民の数は大きく減少してしまったが、かつては大規模な家畜の群とともに移動する遊牧民の姿はそこかしこに認められた(Cribb 1991 など)。また、歴史的にも遊牧民が大きな役割を演じてきたことは、多くの文献史料が示すところでもある。古代西アジアではアムル人やアラム人などをその典型として挙げるができると思われるが(山田 2010 など)、そうした史料において遊牧民が都市民に敵対する存在として描かれてきたことも、遊牧と農耕を「水と油」のように捉える見方を助長してきたように思われる。

もちろん、長い歴史の中において時に遊牧民と農耕民の間にそうした敵対的関係があったことは否定することはできないが、それはあくまでも一面的な捉え方にしかすぎない。まず確認しておく必要があるのは、西アジアにおいては家畜飼育と農耕はお互いに相容れない存在ではないということである。それは、西アジアにおいて長期にわたって営まれてきた農耕のあり方をみてみるだけで、すぐに理解することができる。西アジアに起源した農耕はムギやマメ類を中心とする植物の栽培とヒツジ、ヤギ、ウシ、ブタを中心とする家畜飼育が巧みに組み合わせられたものであり、典型的な「混合農業」であると言える。そこに「牧畜(家畜飼育)」対「農耕(植物栽培)」という構図はそもそも成り立つものではない。現代でも定住農耕村落において多数の家畜が飼育されており、主に日帰り放牧という形で牧畜が営まれている(第1図)。また、遊牧民と農耕民の関係にしても、両者の間にはお互いが生産した物資のやり取りに代表されるような共生的関係が存在することもよく指摘されることである(松井 2001)。両者は敵対的な関係にあるというよりも、むしろ相互に依存し合う関係にあると理解した方がより実状に近くなるものと思われる。



第1図 現代の日帰り放牧（トルコ南東部）



第2図 現代のチーズ作り（シリア北西部）

西アジアの地に起源した農耕の形を私たちは「西アジア型農耕」と呼んでいるが、その特徴のひとつとして家畜の乳を盛んに利用することがある（第2図）。現代でも搾乳の主な対象となっているウシ、ヒツジ、ヤギはいずれも西アジアの新石器時代に家畜化された動物であり、後述するように家畜の乳利用は西アジアに起源したとみることができる。実際、伝統的に乳利用が盛んにおこなわれてきた地域は、西アジア型農耕が拡散したとみられる地域とほぼ重なっており、両者の間にはたいへん緊密な関係があることを物語っている。また、遊牧民はそのほとんどが家畜の乳を積極的に利用しているという事実があり、遊牧と乳利用の間にもきわめて深い関係が存在すると言することができる。そこで、本稿では家畜の乳利用をひとつの軸として、遊牧の起源や遊牧と農耕の関係について検討してみることにしたい。

## 1. 家畜飼育・遊牧の起源

第二次世界大戦前から戦中にかけてモンゴルの草原地帯を調査した今西錦司と梅棹忠夫は、家畜化および遊牧の起源について興味深い説を展開した<sup>1)</sup>（今西 1948, 梅棹 1965）。それは「群れのままの家畜化説」と呼ばれるもので（谷 1995）、野生動物の群を追って移動していた狩猟民が、やがて群全体を捕獲するような形で家畜化し、群れの移動性を維持しながらそのまま遊牧生活へと移行していったとするものである。この説は、遊牧が狩猟から直接派生したと考えるものであると同時に、家畜飼育自体もはじめから遊牧という形で始まったと主張するものでもある。もっとも、今西自身はすべての家畜化をこのような形で一元的に説明できると考えていたわけではなく、あくまでもステップ環境におけるヒツジやウマの家畜化を対象とした考えであると述べている。

この説は独創的でたいへん魅力的なものではあるが、あくまでも現代の遊牧民を観察する中から導き出されたひとつの仮説にすぎない。また、その当時はまだ古代の家畜飼育に関する考古学的資料が十分に蓄積されておらず、議論の前提とされていたものの中には今では修正せざるを得ないものも少なからず認められる<sup>2)</sup>。

中でも問題なのは、「ステップ環境に群棲するヒツジとウマ」と「森林環境に群れをつくらず生息するウシとブタ」の家畜化を対比的に捉えようとした点であると思われる。今では西アジアの遺跡から出土した動物骨の分析によって、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ブタはともに新石器時代から家畜として飼育されていたことが明らかになっている。今西らによって対比的に捉えられていた家畜が、実際にはセットのようにしてひとつの集落で飼育されていたことになる。また、ウマはこれらの家畜とくらべると後の時代に家畜化されたものであり、そもそもヒツジの家畜化と同様に論じることはできないものである。

また、西アジアでは後氷期に定住集落が出現し、それまでの遊動的な生活から定住的な狩猟採集生活へと移行していったことが明らかになっている。そして、定住的な狩猟採集社会において植物の栽培や牧畜が営まれるようになったことも、具体的な資料を基に明らかにされている。家畜化の過程をたどることのできる資料は、今のところ定住農耕村落の遺跡からしか得られていな

いからである。したがって、初期の家畜飼育は、現代の農耕村落にみられるように、基本的には家畜を自らの居住地に係留し、必要に応じて周辺に放牧に出す形がとられていたものと思われる。

しかし、これについては遊牧民の遺跡自体が見つかっていないためではないかとの反論も可能である。確かに遊牧民が残した遺跡を考古学的に同定するのはかなりの困難をとまなう作業であることは間違いなく、それは彼らが物質的な痕跡をあまり残さないためである<sup>3)</sup>。しかし、少し視点を変えて家畜の乳利用に注目してみると、遊牧の起源の問題についてもある程度の考察が可能になるとと思われる。

## 2. 遊牧と乳利用

民族誌を見てみると、家畜の乳を利用しない遊牧民はほとんど存在しないことが分かる。旧大陸に認められる遊牧民としては、モンゴルのウマ遊牧民、中央アジアのウシ遊牧民、パミール高原のヤク遊牧民、パキスタンからイランのヒツジ・ヤギ遊牧民、アラビア半島のベドウィン・ラクダ遊牧民、東アフリカのウシ遊牧民、そして極北の森林からツンドラ境界域のトナカイ遊牧民などが挙げられている（松井 2001: 19-22）。この捉え方については多少異論もあるかもしれないが、ここで確認しておきたいのはこれらの遊牧民のほとんどが乳利用をおこなっていることである。西アジア、アフリカ、中央アジア、南アジア、またヒツジ、ヤギ、ラクダ、ウシと、地域や対象となる動物は様々であっても、いずれも盛んに乳利用をおこなっている。遊牧にとって搾乳が大変重要な意味を持っていることは、今西錦司や梅棹忠夫らもすでに指摘していたことである（今西 1948, 梅棹 1965）。乳利用が認められないのは一部のトナカイ遊牧民に限られ（佐々木 1992）、これはトナカイの飼育がもともとかなり粗放なものであり、他の遊牧とはやや性格を異にしていることとも関係があると思われる。

このように、乳を利用しない遊牧民がほとんど存在しないということは、裏を返せば乳を利用せずに遊牧生活を営むのは非常に困難であるか、ほぼ不可能であると言うことができそうである。おそらくそれは牧畜という生業がもつ構造そのものに起因していると考えられ、家畜への依存度が高くなる遊牧にそうした傾向がより顕著に表れているとみることができる。牧畜は飼育している家畜群を元手にして日々営々と続けられていく営みである。個体を食糧として消費しながらも、「妊娠－出産－生育」という家畜の再生産のサイクルは維持していかなくてはならない。こうした生業のあり方は、手許にある家畜を元金に、毎年生まれてくる子を利子に例えることができる。と指摘されてきた（梅棹 1965, 石毛 1992）。毎年同じ規模で家畜飼育を続けていこうとしたならば、食糧（肉）として消費することのできる個体数は、毎年生まれてくる子の数、すなわち利子の範囲内に抑える必要がある。西アジアの新石器時代に家畜化された動物はブタを除くと多産とは言えず（第1表）、ヒツジ、ヤギ、ウシは、いずれも年1回の出産で1頭か双子を生む程度である<sup>4)</sup>。しかも、すべての雌が毎年確実に妊娠するとは限らず、栄養状態など生育環境に問題があると受胎率は低下してしまう。さらに、手許に保有している家畜群についても、老齢・病気・事故など

表1 各家畜の繁殖に関する特性

	ヤギ	ヒツジ	ウシ	ブタ (現代)	イノシシ
繁殖時期	秋～初冬	秋～初冬	夏	周年	冬～早春
妊娠期間	150 日前後	150 日前後	280 日前後	平均 114 日	115 日前後
出産時期	晩冬～春	晩冬～春	晩春～初夏	周年	晩春～初夏
分娩回数 (/ 年)	1 回	1 回	1 回	平均 2.2 回	1 回
分娩頭数 (/ 年)	1 頭	1 頭	1 頭	20 頭	5 頭前後
乳頭数	1-2 対	1-2 対	2 対	通常 7 対	5-6 対
性的成熟	2 年目	2 年目	2 年目?	半年	2 年目

によって損失が出るリスクもある。したがって、たとえ多くの家畜を保有していたとしても、実際に消費できる数には限りがあることになる。食べようと思えば食べられるのに、実際にはなかなか食べられないのであるから、これを「牧人のジレンマ」と呼んでみたことがある (三宅 1999)。

ヒツジ・ヤギ・ウシというあまり多産でない動物を飼育する西アジアの牧畜は、肉の生産性という面で構造的な制約を抱えていたことになる。もっとも、これは西アジアだけに限った話ではなく、牧畜の対象となった多くの動物は基本的にそうである。しかし、その乳を利用することができれば家畜の生産性は飛躍的に高まることになる。遊牧のように家畜により大きく依存する生活は、植物栽培もともに営む場合に比べて、「牧人のジレンマ」によりダイレクトに直面すると考えられる。その場合、家畜の生産性の問題は、生活そのものを左右するまさに死活問題となってくるはずである。

また、牧畜という生業は環境的な要因からも大きな影響を受けることが指摘されている (Cribb 1991: 31-32)。それは家畜の餌となる牧草の生産量に大きく影響を及ぼす干ばつや家畜の生存そのものを脅かす冬季の降霜・降雪などである。統計資料によると、西アジアでは 10 年に 1 回程度深刻な干ばつに見舞われる年があることが知られており、特に農耕に向いていない辺境地帯ほどより大きな影響を被ることになる。十分な餌を供給できないと家畜のロスが深刻な問題となることは容易に想像することができる。

このように、牧畜という生業が構造的に抱えている問題に焦点を当ててみると、なぜほとんどの遊牧民が乳利用をおこなっているのか理解できるようになる。天候による不安定要素がある中、生産性の面で大きな制約を抱えたまま家畜とともに荒野に出ていくのは大きな賭けであり、そうした形の牧畜はおそらくうまく機能しないと思われる。したがって、遊牧のように植物栽培を欠落させ、家畜の群れにより大きく依存する生活を維持していくためには、家畜の乳利用の技術を獲得していることが前提となると考えられるのである。

もしこうした考えが誤りではないならば、遊牧は基本的に定住農耕社会に起源をもつとみることができるようになる。仮に「群れのままの家畜化説」が主張するように狩猟民が野生動物の群全体を捕獲することができたとしても、いきなり搾乳や乳利用の技術まで獲得できたとは考えに

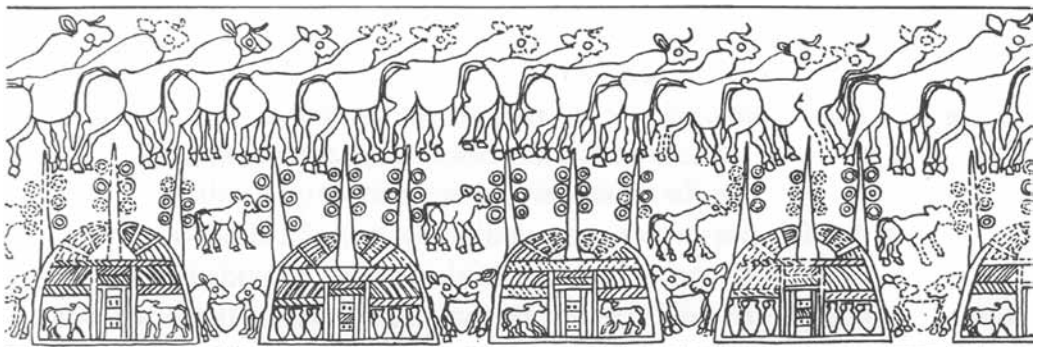


くいからである。やはり、家畜を飼育していく中で、乳という資源に注目し、乳の利用を可能にする様々な技術を獲得する段階の存在をどうしても想定せざるを得ない。そして、それは定住農耕村落において家畜を飼育する中で獲得されたと考えるのが妥当であると思われ、実際に動物骨の資料はそうした考えを裏付けるものとなっている。

### 3. 乳利用の起源

もし乳利用の開始、あるいは乳製品加工も含む技術体系の獲得が遊牧化の前提となったと考えることができるのであれば、次に確認しておきたいのは、家畜の乳利用がいつ頃始まったのかという問題である。かつて有力だったのは、西アジアで都市化が進行する紀元前4千年紀後半に始まったというものであった (Sherratt 1981, 1983)。毛や使役用としての利用を含め、肉以外の用途に家畜が用いられるようになった意義が強調され、そうした新たな家畜の利用法が都市化という大きな社会変化の背景にあるのではないかと論じられた。その中で乳利用の証拠として挙げられたのは、円筒印章の図像にみられる「母子分離」の場面 (第3図) やウルク古拙文書の中における乳製品を示す文字の存在などであった。しかし、土器などの考古学的資料を検討してみると、パレスチナのガッスール期を中心にバター製造に関係すると思われる「チャーン」やチーズ製造に関係すると思われる多孔土器などを確認することができ、乳利用の起源はかつて考えられていたよりも古くなり、少なくとも新石器時代に相当する前6千年紀半ば頃まで遡るとみることができる (三宅 1995, 1999)。

最近では、土器の胎土の中に残存している有機物における炭素の安定同位体比を分析することで、それが何に由来するものであるのか検討できるようになった。特に、反芻動物の乳脂質と体脂質、それらと非反芻動物の体脂質を峻別する方法が確立され (Dudd and Evershed 1998)、古代の乳利用の様相を探る新たな武器が得られたのである。この分析手法が遺跡から出土した土器に応用されたのは、まずイギリスにおいてであった。ブリテン島南部の遺跡を中心に、新石器時代から鉄器時代までの資料が分析され (Copley et al. 2003, 2005a, 2005b)、新石器時代の土器から



第3図 母子分離を示す円筒印章の図像

もかなりの割合で乳脂質が検出された。これによりブリテン島において新石器時代から家畜の乳が利用されていたことが明らかになり、島に家畜が導入された当初から乳利用がおこなわれていた可能性が高いことが判明した。新石器時代の技術複合の中に、家畜の乳利用はすでに確固たる地位を築いていたものと考えられることができる。

その後、西アジアの新石器時代を中心とする土器も同様の手法によって分析がおこなわれ、8遺跡の資料から乳由来の脂質が検出された (Evershed et al. 2008)。中でも興味深い点は、前7千年紀にまで遡る新石器時代の遺跡の資料から乳脂質が検出されたことと特に北西トルコの遺跡においてそれが顕著に認められたことである。この結果だけを見ると、北西トルコは乳利用がかなり盛んにおこなわれていたやや特殊な地域であったと解釈することも可能である。実際、北西トルコは動物骨の中に占めるウシの割合が高いことで知られていることもあり、ウシの飼育と乳利用の関係が指摘されている。その是非はともかくとしても、西アジアにおける乳利用の起源が少なくとも前7千年紀にまで遡ることが直接的証拠によって明らかにされたことの意義は大きいと言える。

動物考古学的手法によると、これまで乳利用の開始はかなり遅く始まったとするのが一般的な見解であったが、近年動物骨の分析からも乳利用の開始が従来の見解よりもかなり遡る可能性のあることが指摘されるようになってきた (Vigne 2005, Vigne and Helmer 2007, Helmer et al. 2007)。家畜が何の目的で飼育されていたのか推定するには、その年齢構成の検討が鍵となる。近年、遊離歯も分析対象とできる基盤が整えられたことで、より詳細に年齢構成を復元することが可能になり、新たな見解が提出されることになったのである。

その手法は、主として歯の萌出状態や摩耗状態を基に家畜の年齢階梯を A から I までの9段階設定し、どの階梯の個体が多いかによって家畜利用のあり方を想定するというものである (Vigne and Helmer 2007)。それによると、乳利用を示すパターンには2つあることが指摘されている。まず、「乳利用 A 型」とされたのは、人間と乳をめぐって競合する雄の個体を生後間もない段階で間引いてしまうというものである。動物骨によって復元される年齢構成としては、生後2か月までの年齢階梯 A の割合が突出して高くなるパターンである。もう一方の「乳利用 B 型」の方は、現代の牧畜民の群れ管理のあり方を参考にして設定されたもので、24歳に相当する年齢階梯 E と F が比較的高い割合で認められるパターンである。その年齢の個体が多いのは、乳の出がよくなった雌の個体が消費されたことによると解釈されている。

実際に遺跡から出土した動物骨を検討してみたところ (Vigne and Helmer 2007: 28)、西アジア新石器時代のヒツジとヤギに関しては、肉利用だけをおこなっていたと考えられるパターンはほとんど見出すことができなかった。肉と乳がともに利用されていたと思われるパターンが最も多く認められ、17の資料がそれに当てはまった。その内訳は、ジャフェール・ホユック (Cafer Höyük)、テル・ハルラ (Tell Halula) 遺跡など前8千年紀前半のものが3例、テル・アスワド (Tell Aswad)、テル・マグザリーヤ (Tell magzalia) 遺跡などその後半のものが9例、エル・コウム (El Kowm) 2遺跡など前7千年紀のものが5例である。このほか乳利用 B 型であるが乳利用に特化

していたと評価できるものも前8千年紀前半と前7千年紀にそれぞれ1例ずつ認められた。

この結果によると西アジアでは前8千年紀前半の先土器新石器時代B期(PPNB)中期にはすでに乳利用がおこなわれていたことになり、それが開始されたのはヤギやヒツジの家畜化とも年代的にそれほど大きな開きはなかったということになる。これは、乳利用が家畜を飼育するようになってあまり間をおかず始まった可能性を示すものとして重要であると言えるが、何を目的に家畜が飼育されていたのか認定する方法についてはまだ検討の余地が残されており、乳脂質の同位体比分析の結果とは同列には扱うことはできないと思われる。とはいえ、土器の有機物残渣分析と動物骨の分析という異なった方法によって乳利用が新石器時代にまで遡る可能性が示されたことの意義は大きく、少なくとも前7千年紀の土器新石器時代には家畜の乳を利用する技術体系が確立されていたと考えることができるようになった。

#### 4. 遊牧という生業

ここまで、ごく当たり前のように「遊牧民」という用語を用いてきたが、その実像を理解しようと民族誌などを参照してみると、遊牧民という存在を正確に定義することがいかに困難であるか認識させられることになる。私たちが一般にイメージする遊牧民像は、かなり単純化されたものであると言える。筆者の理解不足という点もあるにしろ、遊牧民に対する一般的な理解はまったく農耕を営まず、大きな家畜の群れを連れて常に移動し、テントなどの簡便な住居に住まう人々といったところではないだろうか。ところが、問題なのはそのような遊牧民は民族誌の中では実際にほとんど見出すことができないということである。

まず、ステレオタイプな遊牧民像によれば、彼らは村という拠点は持たないとみられている。ところが、実際には立派な村を構えている遊牧民の例が知られている。例えば、アフガニスタン北東部のパシュトゥーン人の中には、冬営地に日干しレンガの住居から構成される村をもっている集団が存在する(松井 2011)。冬はクンドゥーズ平原に構えた村落に居住し、夏は家畜とともに高原部に移動してそこでテント生活を送る。この場合、集落の成員全員が移動するため、夏期には集落は無となる。彼らの冬営地にあたる村落が後に遺跡となって発掘調査された場合、それを遊牧民の残したものと理解できるかどうかはなはだ心もとないところである。

遊牧あるいは牧畜のあり方を類型化したものとしてはハザノフによるものがよく知られているが(Khazanov 1984)、主に農耕をどの程度営むかを基準にして「純粋な遊牧民(pure nomads)」、「半遊牧的牧畜民(semi-nomadic pastoralists)」、「半定住的牧畜民(semi-sedentary pastoralists)」、「定住的牧畜(household husbandry)」に分類されている。また、それとよく似たものとして福井勝義による牧畜の分類も知られている(福井 1987: 14)。そこでは、農耕と結びついているかどうかを基準に「遊牧」と「農牧」に区分され、さらに前者の「遊牧」のうち非規則的に移動するものは狭義の「遊牧」に、規則的に移動するものは「季節的遊牧」とされる。そして、後者の「農牧」は農耕集落も移動していく「遊牧遊農」とそうでない「遊牧定農」、定着性の高い「定牧定農」に

類型化されている。確かに、こうした一定の基準に基づいて牧畜のあり方を類型化することは可能である。しかし、問題はそうした類型化が実態にどれだけ即したものとなっているかという点である。実際、このように類型化をおこなうこと自体に対して疑問が投げかけられてもいる (Cribb 1991: 16)。

その批判の要点は、かなり柔軟性をもち本来連続性のあるシステムを無理矢理類型化しようとしているというものである。遊牧と農耕の関係にしても、生計の単位や帰属集団という視点からみると、こうした類型化があまり有効なものでないことが理解できるようになる。民族誌の中には、同じ集団に帰属する成員を農耕担当と牧畜（遊牧）担当に分けているケース、すなわち分業がおこなわれている事例が数多く報告されているからである。しかも、それを担当する集団の成員は必ずしも固定化されているわけではなく、かなり流動的であることが知られている。

農耕と牧畜（遊牧）の分業は、世帯、集落、部族など、規模の異なるいくつかのレベルが認められる。まず、最も基本的なものは世帯（家族）レベルでの分業である。アフガニスタン、バダフシャー州のウズベク系の集団は、冬営地にあたる定着村落周辺に畑を所有しているが、兄弟のいる家畜所有者の場合、兄弟の内の1人が1年ごとに兄弟全員のヒツジ群をまとめて夏営地にでかけ、他の兄弟たちは冬営地でもある村落に残って農耕に従事することが報告されている（松井 2011:97）。したがって、ある年に遊牧を営んでいた者が、翌年には農耕に従事することになり、次の順番が来ると今度は農耕民が遊牧民に様変わりすることになる。

集落レベルでの分業では、2つのあり方があることが知られている (Cribb 1991: 25)。ひとつは集落の成員を2つに分け、それぞれが農耕と遊牧を担当するという方法である。その一例としてアフガニスタンのパシュトゥーン族の例を挙げることができ、農耕を担当するグループは年間を通じて村落にとどまり、牧畜を担当するグループは遠く離れた夏営地に家畜の群れとともに移動して冬になると村に戻ってくるという形がとられる。上記の世帯内での分業が、集落レベルに拡大されたものと言えるかもしれない。同じような事例は、モロッコのアトラス山脈やイランのカシュガイ族においても報告されている。この場合も、農耕と遊牧の役割分担は必ずしも固定化されているわけではないことが指摘されている。もうひとつは、集落の成員が年間のサイクルにおいて途中で農耕と遊牧の担当を交代するというものである。こうした事例は西アジアの山岳地帯では広く認められるとのことである。この場合には、1年の途中で農耕民が遊牧民に、遊牧民が農耕民に変身することになる。

さらに上の部族レベルでの分業というのは、部族に帰属する集団のうち、ある集団は定住的な農耕・牧畜生活を営み、別の集団は遊牧を営むというものである。個々の集団だけを見た場合には、それぞれ農耕民と遊牧民として捉えることが可能であるが、集団への帰属意識や社会的関係を第一義的なものとする、それぞれが同一の部族内での分業体制を担っているということになる。この場合はその役割分担がある程度の期間継続されることも多く、遊牧を担う集団の方は一般に考えられている遊牧民像に最も近いと言えるかもしれない。

こうして民族誌に基づいて実際の「遊牧民」のあり方をみると、まず「遊牧民」対「農耕

民」というように二項対立的な図式で捉えることは、ほとんど意味をなさないものであることが理解できるようになる。そもそも、遊牧民として固定的に捉えることのできる存在でさえなかなか見出すことができないからである。確かに、ある一定の時点だけを切り取ってみれば、遊牧を専門的に営む集団が存在することは間違いない。しかし、その担い手は必ずしも同一ではなく、時とともに変化している。遊牧民と農耕民の間でさえ厳然とした境界は存在せず、その間の垣根は私たちが想像する以上に低いものであるようである。そこには「遊牧民」という固有の集団が存在するのではなく、ある時点で遊牧という生業を営む人々が存在するだけということになる。あくまでも遊牧は、ひとつの生業として捉えるべきものなのである。

言うまでもないことであるが、いくつかの異なった集団レベルにおいて農耕と遊牧の分業が認められるということは、両者の間には非常に密接な関係があることを意味している。一般に遊牧を営む集団は、定住農耕民から見るとかなり厳しい環境下で生活を送っているが、外部との関係を一切持たずに隔絶した世界で生きているわけではない。実際、農耕社会や都市との関係は、常に緊密に保たれている。家畜そのものや乳製品、毛や皮などを交換財としてコムギをはじめとする農産物や必要な物資を入手しており、むしろそれらとの関係を抜きにしては成立し得ないものと言ったほうがよい。したがって、遊牧はある集団内や地域圏の中において経済的分業体制の一翼を担っているものと評価した方が、実態により近くなるものと思われる。むしろ、定住農耕社会の存在を前提にして成り立つ生業であると考えることができる。

これを歴史的に理解しようとする、遊牧という生業は定住的な農耕牧畜社会に起源をもち、ある時期に農耕と牧畜をともに営む生活の中から農耕を欠落させ、家畜群への依存を強めていったものと考えることができる。こうした考えは、1世紀以上も前にハーン (E. Hahn) がすでに主張していたことでもある (Hahn 1896)<sup>5)</sup>。農耕を営めず、人間には直接食糧とできないような植物しか生育しない土地であっても、セルロースの分解能力に長けた家畜を介在させれば、そこで人間も生活していくことが可能となる。遊牧は農耕社会とまったく無関係に成立したというよりは、もともと農耕・牧畜社会に出自を持つ集団が家畜飼育に特化することで自らの生活圏を拡大させるひとつの戦略であったとみるべきである。こうした生活様式を採用することにより、乾燥地や荒地などの農耕を営めないような生態学的ニッチにも人間は進出することが可能となった。これは、地域全体の生産力を高めていこうとする戦略でもあり、一定の範囲内における人口収容力の向上にもつながったと考えることができる。

ただし、それは無条件で可能であったわけではない。生産性という面で構造的な制約を抱えていた牧畜に大きく依存して生活していくためには、その構造そのものを大きく転換させる乳利用の技術の獲得がどうしても必要であったと考えられるからである。考古学的資料の多方面からの分析により、家畜の乳利用の始まりは西アジアの新石器時代にまで遡ることがほぼ確実になりつつある。また、その証拠が得られているのはその当時の定住農耕村落においてである。西アジア型農耕が先史時代の早い段階で拡散した地域と伝統的に乳利用がおこなわれてきた地域が大きく重なることは、乳利用の開始が西アジア型農耕の拡散の大きな原動力となった可能性を示してい

る。また、遊牧と乳利用の間にみられる深い関係も、遊牧という生業が西アジアの農耕社会の中から成立したことを示すひとつの根拠になるものと思われる。

#### 註

- 1) 一般に今西の説として認識されているが、この考え自体を着想したのは梅棹であり、それを今西が遊牧の起源論としてまとめたのだという（梅棹 1990: 50）。
- 2) この説に対する考古学の立場からの反論は、藤井純夫によってもなされている（藤井 1999）。
- 3) まだ少ないながらも遊牧民の遺跡であると指摘されている例は知られており、乾燥地帯における調査も盛んにおこなわれるようになってきた（藤井 2000）。そうした資料を含めてみても、今のところ家畜化は定住農耕村落で始まったと考えざるを得ず、狩猟から遊牧という過程を想定するのは困難な状況にある。
- 4) モンゴルにおけるヒツジの場合、双子が生まれる割合は12.6%であるとのデータがある（小長谷 1993: 224）。
- 5) ハーンの学説については、今西錦司が詳しく検討しているほか（今西 1948）、加茂儀一もその著書の中で詳しく紹介している（加茂 1973）。

#### 参考文献

- 安倍雅史 2011「The Desert and the Sown - 遊牧・農耕社会の共生関係の成立過程 -」小高敬寛・山藤正敏編『文明の形成にみる環境と文化 - レヴァント考古学の視点から -』早稲田大学高等研究所, 20-24 頁.
- 石毛直道 1992「乳利用の文化史」雪印乳業健康生活研究所編『乳利用の民族誌』中央法規, 9-21 頁.
- 今西錦司 1948『遊牧論そのほか』秋田屋（『増補版今西錦司全集 第二巻』講談社, 1993年に再録）.
- 梅棹忠夫 1951「乳をめぐるモンゴルの生態 II」『自然と文化』2号: 119-172 頁.（『梅棹忠夫著作集第2巻モンゴル研究』中央公論社, 1990年に再録）.
- 梅棹忠夫 1965「狩猟と遊牧の世界（上）（下）」『思想』2月号: 10-29 頁, 4月号: 66-88 頁.（『狩猟と遊牧の世界 - 自然社会の進化 -』講談社学術文庫, 1976年に再録）.
- 梅棹忠夫 1990「回想のモンゴル」『梅棹忠夫著作集第2巻 モンゴル研究』中央公論社, 1-86 頁.
- 加茂儀一 1973『家畜文化史』法政大学出版局.
- 小長谷有紀 1993「母子関係介入をめぐるモンゴルの生態 - 遊牧起源論の再考」佐々木高明編『農耕の技術と文化』集英社, 217-238 頁.
- 佐々木史郎 1992「シベリア・ラップランドのトナカイ乳製品」雪印乳業健康生活研究所編『乳利用の民族誌』中央法規, 252-266 頁.
- 谷 泰 1995「解説—その後の今西遊牧論—今西錦司『遊牧論そのほか』平凡社ライブラリー, 平凡社, 259-270 頁.
- 福井勝義 1987「牧畜社会へのアプローチと課題」福井勝義・谷泰編『牧畜文化の原像: 生態・社会・歴史』日本放送出版協会, 3-60 頁.
- 藤井純夫 1999「「群れ単位の家畜化」説 - 西アジア考古学との照合 -」『民族学研究』64/1: 28-57 頁.
- 藤井純夫 2000「乾燥地考古学の問題: 1. 遊牧民の考古学的可視性」『沙漠研究』104: 259-268 頁.
- 松井 健 2001『遊牧という文化 移動の生活戦略』歴史文化ライブラリー109, 吉川弘文館.

- 松井 健 2011『西南アジアの砂漠文化：生業のエートスから争乱の現在へ』人文書院。
- 三宅 裕 1995「西アジア先史時代における乳利用の開始について－考古学的にどのようなアプローチが可能か－」『オリエント』39-2：83-101頁。
- 三宅 裕 1999「The Walking Account：歩く預金口座－西アジアにおける家畜と乳製品の開発－」常木晃編『現代の考古学3 食糧生産社会の考古学』朝倉書店，50-71頁。
- 山田重郎 2010「前2千年紀におけるアムル人，アラム人とアッシリア」大沼克彦・西秋良宏編『紀元前3千年紀の西アジア－ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る』六一書房，129-137頁。
- Bell, G. L. 1907 *The Desert and the Sown*. Heinemann. (田隅恒生訳『シリア縦断紀行1, 2』東洋文庫，平凡社。)
- Copley, M. S., Berstan, R., Dudd, S. N., Docherty, G., Mukherjee, A. J., Straker, V., Payne, S. and R. P. Evershed 2003 Direct chemical evidence for widespread dairying in prehistoric Britain. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 100-4: 1524-1529.
- Copley, M. S., Berstan, R., Dudd, S. N., Aillaud, S., Mukherjee, A. J., Straker, V., Payne, S. and R. P. Evershed 2005a Processing Milk Products in Pottery Vessels through British Prehistory. *Antiquity* 79: 895-908.
- Copley, M., Berstan, R., Mukherjee, A., Dudd, S., Straker, V., Payne, S. and R. Evershed 2005b Dairying in Antiquity. III. Evidence from Absorbed Lipid Residues dating to the British Neolithic. *Journal of Archaeological Science* 32: 523-546.
- Cribb, R. 1991 *Nomads in Archaeology*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Dudd, S. and R. Evershed 1998 Direct Demonstration of Milk as an Element of Archaeological Economies. *Science* 282: 1478-81.
- Evershed, R., Payne, S., Sherratt, A. et al. 2008 Earliest Date for Milk Use in the Near East and Southeastern Europe linked to Cattle Herding. *Nature* 455: 528-531.
- Hahn, E. 1896 *Die Haustiere und ihre Beziehungen zur Wirtschaft des Menschen: Eine Geographische Studie*. Verlag von Duncker & Humblot, Leipzig.
- Helmer, D., Gourichon, L. and E. Vila 2007 The Development of the Exploitation of Products from Capra and Ovis (meat, milk and fleece) from the PPNB to the Early Bronze in the northern Near East. *Anthropozoologica* 42: 41-69.
- Khazanov, A. M. 1984 *Nomads and the Outside World*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Sherratt, A. 1981 Plough and Pastoralism: Aspects of the Secondary Products Revolution. In Hodder, I., Issac, G. and N. Hammond (eds.) *Pattern of the Past: Studies in Honour of David Clarke*, 261-305. Cambridge.
- Sherratt, A. 1983 The Secondary Exploitation of Animals in the Old World. *World Archaeology* 15-1: 90-104.
- Vigne, J.-D. 2005 Maitrise et usages de l'élevage et des animaux domestiques au Néolithique: quelques illustrations au Proche-Orient et en Europe. In Guilaine, J. (ed.) *Populations Néolithiques et environnements*: 87-115. Editions Errance, Paris.
- Vigne, J.-D. and D. Helmer 2007 Was Milk a 'Secondary Product' in the Old World Neolithization Process? Its Role in the Domestication of Cattle, Sheep and Goats. *Anthropozoologica* 42: 9-40.

# 牧畜の本質と特徴—生業構造の民族学的視点から

平田 昌弘

## 1. 牧畜という生業

### 1-1. 食料資源としての搾乳・乳利用と牧畜

旧大陸の牧畜民と生活を共にしていると気がつかされることがある。牧畜民は、肉を食うよりも、むしろ乳を食って生活している（写真1）。シリア内陸部のアラブ系牧畜民バグガーラ Baqqāra やチベット系移牧民ラダキー Ladakhe と生活を共にしている際も、普段の日常の食は穀物と野菜、そして、乳製品で成り立っており、肉は客人を迎えた際や祭事に家畜を屠って供する程度である。家畜を屠る際も、牧畜の主力となるヒツジやヤギにはなるべく手をつけず、宿営地で平飼いにしているニワトリや七面鳥を利用していたりする（写真2）。三宅（1999）は、こ



写真1 アラブ系牧畜民バグガーラの食事。

酸乳，バター，バターオイル，砂糖を平焼き小麦パンですくって食べる。牧畜民は肉よりも乳を食って食事を成り立たせており、彼らの食生活の中心に乳製品がある。



の牧畜民の生存戦略を「歩く預金口座」と名付けた。牧畜民は、元本である家畜にはなるべく手をつけず、その利子である乳を横取りして、乾燥地で生き抜いているのだ。ただし、ユーラシア大陸北方域のモンゴル遊牧民の場合は状況が異なり、肉を1日当りのエネルギー摂取量として29%~60%をも摂取しており、肉を日常生活のなかでよく食べていたりする(平田2012a)。

実際、ケニア北西部の遊牧民トゥルカナ Turkana の事例(Coughenour *et al.* 1985; Galvin 1992)では、年間を通じて、食料の76%~80%を乳・肉・血に、特に乳には61%~62%をも、遊牧民マサイ Maasai の事例(Galvin 1992)では乳に31%~64%を依存していると報告されている。搾乳期においてのみではあるが、ヒマラヤ山脈西部のチベット系牧畜民カルナクパ Karnak-pa の事例では、食料の33%~46%を乳に(平田2012b)、モンゴル中央部のモンゴル遊牧民の事例では、食料の24%~48%を乳に依存している(石井1998;平田2012a)。確かに、多くの牧畜民の事例では、牧畜民は食料の多くを乳に依存して生活を成り立たせている。

石毛(1992)は、「乳を利用することで、人は家畜に生活の多くを依存できるようになった。乳は栄養学的に見れば、完全食にちかい食品なので、乳と乳製品に依存して生活することが可能である」と述べる。更に、梅棹(1976)は、内モンゴルにおける遊牧民の現地調査を通じて、「搾乳の発明と乳利用の開始により、ヒトは家畜に生活の多くを依存するようになり、牧畜という新しい生業が始まった」とまで言及する仮説を提起しており、乳は単なる食料に留まらず、牧畜という生業を成り立たせるにおいても極めて重要な文化項目であったとしているのである(写真3)。福井(1987)は牧畜についての定義を、「牧畜社会が牧畜を生業として成立させたもっとも大きな要因は、トナカイ牧畜民をのぞけば、搾乳であったといえる。乳が全哺乳動物の子どもを育てる完全栄養であることを牧畜民が見逃すはずはなかった。家畜化の過程で、乳量の多い家畜を人為淘汰し、その結果牧畜民は、農耕民と地理的に離れ、農耕に適さないより乾燥した土地に適応していったものと思われる」とまとめている。旧大陸では、乳の利用をきっかけに、牧畜という一つの生業が始まったのだ。

ただし、新大陸のリヤマ牧畜民には、乳利用が欠落している。新大陸では、リヤマの乳利用へと発展していったのではなく、リヤマの機動力の利用へと牧畜形態が発展していった。リヤマ牧畜の民族誌については稲村(1995)に譲ることとして、搾乳・乳利用の重要性は旧大陸の牧畜においてのみの現象となる。更に、北方のツンドラやタイガの冷涼な地域では、トナカイが飼養され、一部のトナカイ牧畜民ではトナカイから搾乳をおこなっていない(佐々木1992)。従って、本稿の議論は、北方域のトナカイ牧畜民を除いた旧大陸の牧畜集団についてのみの論考となる。しかし、本書はユーラシア乾燥地域を対象としており、広大なユーラシア乾燥地域では搾乳・乳利用が不可欠な生業項目となっているため、本書の論考に差し支えることはない。

それでは次に、乳の利用は、単なる食料資源としてだけでなく、家畜を飼う人たちにとって一つの生業を誕生させるほど重要な技法であったとことについて言及していきたい。

## 1-2. 牧畜という生業の多くに関わる搾乳の技術

牧畜民と共に生活していて、乳について教えてくれることが他にもたくさんある。牧畜民は、乳を主に食って生活しているのだが、乳を家畜から得るのに、その乳を家畜から如何により多く搾り取るかに意識を集中させているということだ。家畜群当りの繁殖効率と乳生産効率を最大限に上げるための戦略として、小頭数の牡畜のみを残し、群の大部分を牝畜で構成させている。牝畜の妊娠・出産・泌乳には選ばれし少数の牡畜のみで要を成すことから、多くの牡畜は生後間もなく間引かれることとなる。30頭の牝畜に1頭の牡畜を交尾のために留める程度である。牝畜は、乳の出が悪くなると、物々交換などに出されたりして、随時更新されていく。ここに、より多くの乳を搾るために、牧畜民による家畜の育種・選択がおこなわれていることが理解される。

また、家畜から乳を搾るためには、母仔を分離し、別々の群にして放牧し、母畜の乳が減らないように仔畜への哺乳を制御する必要がある(写真4)。仔畜に口かせを付けたり、母畜に胸当てを付けたりする

こともある。また、本来は自らの仔のみに許容するはずの哺乳を他種動物(ヒト)が搾乳できるようになるためには、仔畜を利用した催乳など、乳を横取りするだけの技術が必要となる。

更に、搾乳は群を身近に留めるためのコントロールにも利用されている。搾乳のためには、母仔分離をする。母仔は、匂いと鳴声で互いを認識し合っている(写真5)。この契られた母仔関係により、母仔を別々の群に分離しても、母畜は仔畜のことが気になり、遠くに行こうとはしない。つまり、搾乳のために母仔を分離し、仔畜群を宿営地の近くに留めておけば、母畜群の集団も結果的に宿営地の近くに留まることになる。この群の管理技術を梅棹(1976)は、「仔畜のひとじち」と呼んだ。筆者もモンゴル中央部で調査したところ、遊牧民は家畜群を宿営地近くに留めさせるために、家畜の習性を上手に利用しながら、母仔分離(仔畜のひとじち)や井戸からの給水、冬期における木製家畜小屋による防寒、補助飼養給与という技法を用いて家畜群を確かに近くに留めさせていた(平田2011a)。

つまり、搾乳という行為は、単なる食料生産に留まらず、育種・選抜、哺乳の抑制、搾乳するための諸技術、群の構造や管理にまで及び、牧畜という生業の根幹に関ってくる技法なのである。梅棹が、搾乳と去勢の発明により生業としての牧畜が成立したとする学説を提起したのは、これらの視点によっている。去勢の重要性については、本稿では乳に焦点を当てているので、言及を



写真2 客人用の料理マンサフ。  
アラブ系牧畜民も客を迎えると肉を供する。たいていはマンサフと呼ばれる肉料理でもてなす。写真は七面鳥のマンサフ。  
アラブ系牧畜民バグーラにて。



写真3 ヒツジ・ヤギからの搾乳。

1人がヒツジ・ヤギを静止させ、1人が後脚の間から両手で搾乳する。搾乳技術の発明こそ牧畜という生業を成立させた重要な技術である。

アラブ系牧畜民バグーラにて。



写真4 ヒツジ・ヤギの母仔分離。

仔畜を左側、母畜を右側の群に分別しているところ。母畜から乳を搾り取るために、母仔を分離しておく必要がある。搾乳するためには重要な管理技術である。

アラブ系牧畜民バグーラにて。

差し控える。

### 1-3. 家畜飼養と牧畜

梅棹仮説から演繹されることは、搾乳・乳利用が成されて初めて生業としての牧畜が成立するのであるから、搾乳・乳利用が発明する以前は生業としての牧畜が成り立っていない、つまり、家畜飼養は単なる農耕に付随した個体管理レベルにあり、生業としては農耕の段階に留まっていたということになる。

本郷（2002）は、西アジアにおける家畜飼養と牧畜の発展段階を、動物考古学などの成果により、次のように説明している。西アジアにおける生業は、1) 狩猟採集から狩猟採集と農耕とを組み合わせた生業に移行する、2) 動物の家畜化が定住的な生活をおくり植物栽培を営む農耕民の間で開始され、農耕と家畜飼養とを伴った生業へと変化する、3) 農畜複合の生業形態から植物栽培を欠落させ、家畜飼養に特化した一派が生じ、牧畜民としてステップに移り住んでいく、という段階で発展していくとしている。搾乳・乳利用の視座から鑑みると、2の段階は、農耕民が家畜を個体レベルで数頭飼養している状況であり、搾乳・乳利用は発明されておらず、類型としては農耕に留まっている生業であり、3の段階は、搾乳・乳利用を発明し、家畜を群として管理するようになり、家畜に生活の多くを依存した生業として牧畜が成立した段階となる。2と3の段階の違いは歴然としている。数頭の家畜飼養か群としての家畜飼養か、農耕に主に依存しながら家畜を飼うか家畜に主に依存しながら家畜を飼うか、搾乳・乳利用があるか搾乳・乳利用がないか。この構造の違いは、農耕に付随した家畜飼養論か家畜群に全面的に依存した生業論かの違いである。

家畜化の起原論と牧畜の起原論とは違う。家畜化の起原は、野生動物がいつ人間に飼われ始めたかを問う。牧畜の起原は、人間がいつ家畜から搾乳を開始し、乳製品を利用し、家畜群に全面的に依存して生業として生活し始めたかを問う。つまり、搾乳と乳利用の起原の研究は、牧畜の起原を問うことと等しい。乳文化研究の面白さと学術的深みがここにある。

## 2. 仮説「乳文化の一元二極化論」

土器に残存した有機物から脂肪酸を抽出し、安定同位体分析を実施した結果、BC7000年紀には乳利用が西アジアで開始されていたと報告されている（Evershed *et al.* 2008）。この時代設定は、現在のところ世界で最も古い。この報告に基づくと、乳利用が西アジアで開始されて約9000年が経過していることになる。この長い年月の間、人類は、どのような乳加工技術を蓄積してきたのであろうか。ここでは、乳加工の必要性を述べてから、乳文化（搾乳技術と乳加工技術、および、



写真5 ヒツジの母仔間認識。  
ヒツジの母仔は、鳴声と匂いで互いを認識し合い、母畜は実仔畜のみに哺乳を許容する。この母仔間認識は、家畜を宿営地の身近に留める技法としても利用されることとなる。  
アラブ系牧畜民バグガーラにて。

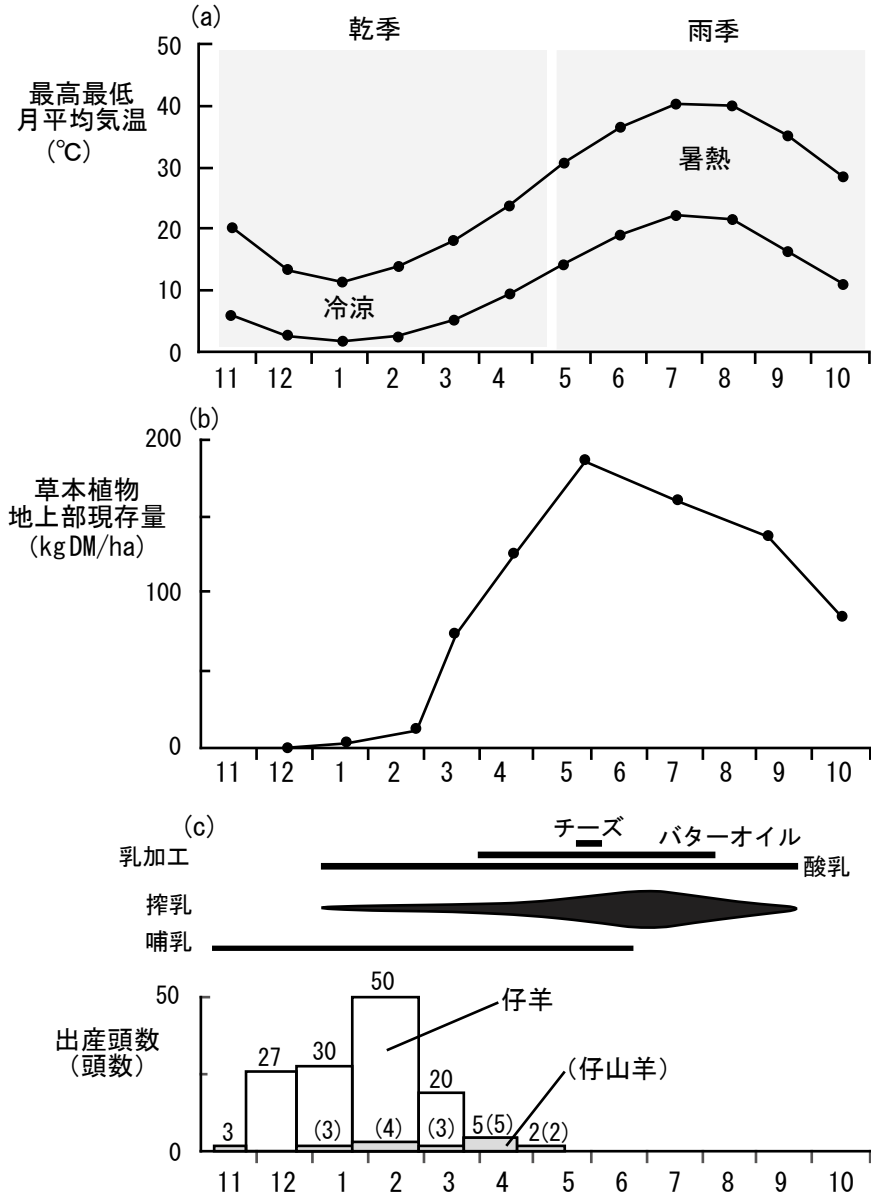


図1 シリア北東部における気温 (a), 草本植物のバイオマス (b), 出産頭数, 哺乳, 搾乳, 乳加工の推移 (c)

注) アブダルアジズ山麓S村, A 牧畜世帯における事例

出典) 平田 1999

乳製品利用)の発達史について論じてみたい。乳文化は西アジアに起原し、ユーラシア大陸で広く二極化していった。この発達史論の仮説は、著者自らがユーラシア大陸を広域に踏査し、約20年かけたフィールドワークによって積み上げた現地データに基づき、考古学、動物行動学、乳科学の成果を動員して推論したものである。そして、この乳文化の一元二極化論から推論でき

ることを述べてみたい。

### 2-1. 乳加工の必要性：乳製品としての保存

牧畜にとって、乳を保存するための加工は生業を成り立たせるために必須である。その理由は、牧畜民の主要な家畜であるヒツジ・ヤギは季節繁殖動物であり、搾乳には端境期があるためである。交尾と出産に時期があり、出産に伴う搾乳にも季節的な偏りが存在する。ヒツジ・ヤギの泌乳期間は5ヶ月間のみで、個体により出産時期・泌乳時期が前後するため、群としては春から秋にかけての9ヶ月間ほどこしか搾乳できない(図1)(平田1999)。乳に一年を通して依存するならば、乳が不足しがちとなる冬をのりきらなければならない。だからこそ、乳が豊富にとれる夏に乳を搾れるだけ搾り取り、乳を冬まで加工・保存する必要があるのである。乳加工の本質は保存にある。中尾(1972)は、「乳加工の体系は全て貯蔵のためという目的に収斂し、貯蔵を抜きにしては食品の加工体系の中心にある原動力がなくなる」と鋭く指摘する。本来、保存食である乳製品とは、嗜好風味をこらした食料ではあるが、季節的に大量生産される食糧を腐らせることなく、非生産時期にまでいかに備えておくことができるか、その試行錯誤の繰り返しの過程で生まれてきたものである。搾乳技術の発明、そして、生乳を加工・保存できたからこそ、乳に一年を通じて依存することができる牧畜が成立し得たのである。そんな乳加工技術が、牧畜の生業を支えているのである。

### 2-2. 搾乳の西アジア一元起原論

搾乳は西アジアで一元的に発明され、周辺地域に伝播していった可能性は高い。元来、「搾乳」という技術は、難度の高い技術である(谷1995)。母畜は自らの仔畜のみに授乳を許容する。同じ家畜種であっても、実仔以外の個体には授乳を許さない。母仔関係を観察していると、母畜は仔畜の鳴き声と匂いを確かめ、自らの仔畜であることを確認してから、哺乳している(写真5)。まして、家畜が異種動物である人間に乳を与えるはずがない。人間が家畜から乳を横取りするためには、仔畜を最初に授乳させ、直ぐに仔畜を母畜から引き離し、母畜の顔辺りに仔畜を繋ぎ止め、人間が母畜から乳を素早く搾り取るという催乳の技法が適用されている。特にウシに認められる。仔畜の哺乳は、乳房への吸乳刺激を通じて母畜の泌乳を促進させ、搾乳し易くしているのである。搾乳の間、仔畜を母畜の顔辺りに繋ぎ止めておくのも、仔畜の匂いと存在を通じて母畜を安心させ、泌乳を維持する効果があるものと考えられる。

ただし、ヒツジ・ヤギでは仔畜による催乳をせずに、牧畜民は搾乳している。北海道十勝の地で、友人が肉用ヒツジ品種のサフォークを飼養している。この友人は、仔ヒツジへの哺乳のために、母畜から搾乳して乳を得ている。母ヒツジの首を紐で縛り付けて固定させるだけで、搾乳を実現させており、仔ヒツジを取って母ヒツジの顔辺りに留めさせることもない。このように、ヒツジ・ヤギはウシよりも他者に搾乳され易い、もしくは、家畜化の過程で他者に搾乳されるよう改良し易かった動物なのかもしれない。だからこそ、家畜化と搾乳・乳利用とがヒツジ・ヤギで

先行して起ったのかもしれない。ウシの家畜化は紀元前 6400 年頃とされ（田中・万年 2009）、ヒツジ・ヤギよりも 2000 年ほど遅い。ヒツジの野生種は、ヨーロッパ南部から西アジア地域、南地域北部や中央アジア南部・北アジア西部にかけて分布している（角田 2009）。ヤギの野生種も、ヒツジとほぼ同様に分布している（万年 2009）。従って、ヒツジ・ヤギからの搾乳は、これらの野生種が生息する何処かで生じたことになる。もともと搾乳の起原は、アフリカ大陸やヨーロッパ北部、中央アジア・北アジア地域の北部では生じえなかったのである。いずれにしろ、比較的搾乳しやすいヒツジ・ヤギでも、牧畜民は音声的な介入をおこなって、搾乳の技法が認められるという（谷 2010）。

牧畜民の多くはなんらかの搾乳の技法を用いて、ヒツジ・ヤギ・ウシ・ウマ・ラクダなどの家畜から搾乳をしている。このように搾乳は、母仔関係の生理と習性に根ざした高度な技術であり、どこでも容易に開発される技術ではないのである。事実、現在のグローバリゼーションが始まる前、搾乳・乳利用していた地域はアフリカとアジアの主に乾燥地帯、および、ヨーロッパのみである（石毛ら 1973；中尾 1992；稲村 1995）（図 2）。アフリカの赤道地域、東南アジア、東アジア、オセアニアの大部分、中南米の新大陸ではリャマやアルパカからは現在も搾乳がおこなわれていない。搾乳・乳利用は、もともとは世界の人びとに共有されていた技術ではなかったのである。この搾乳技術の欠落地域の存在は、搾乳技術はどこでも発明されるほど簡単な技術ではないということを指し示しているのである。この搾乳という技術の開発の難しさこそが、搾乳が多元的に発明されたとするよりも、西アジアでまず発明され、周辺域に伝播していったとする仮説を支えている。

### 2-3. 乳加工技術の発達：乳文化の一元二極化論

事実として、現在の乳加工技術を大観すれば、ユーラシア大陸には北方乳文化圏と南方乳文化圏が存在し、両者の技術が相互に影響しあつた北方・南方乳文化重層圏が存在している（図 3-b）。北方乳文化圏では、クリーム分離（クリーム分離とクリーム加熱によるバターオイル加工）を積極的におこない、乳酒をもつくり出している。南方乳文化圏では、酸乳の攪拌／振盪による乳脂肪の分画（バター加工とバターの加熱によるバターオイル加工）を積極的におこない、反芻家畜の第四胃で生成される凝乳酵素レンネットを利用してチーズを加工している（平田 2013）。それでは、どのように現在のこの乳文化圏へと発達していったかについて紹介してみたい。

乳加工における最初の技術は、乳酸発酵による酸乳化であつたろうことは間違いない（足立 2002）。乳酸菌はあらゆる処に常在しているため、西アジアのような暑い気候環境下では生乳を静置しておくだけで、自然に乳酸発酵が進展してしまう。生乳の酸乳化は、搾乳した時点で運命づけられているのである。人類にとっての最初の乳製品は、ヨーグルトのような酸乳なのであつた。一方、ユーラシア大陸の各地域で様々な乳加工技術が発達してきたが、唯一共通している技術は発酵乳系列群の乳加工のみである。発酵乳系列群とは、中尾（1972）によって提起された乳加工技術の類型分類法であり、生乳を最初に発酵乳にしてから、チーズやバターなどに乳加工が

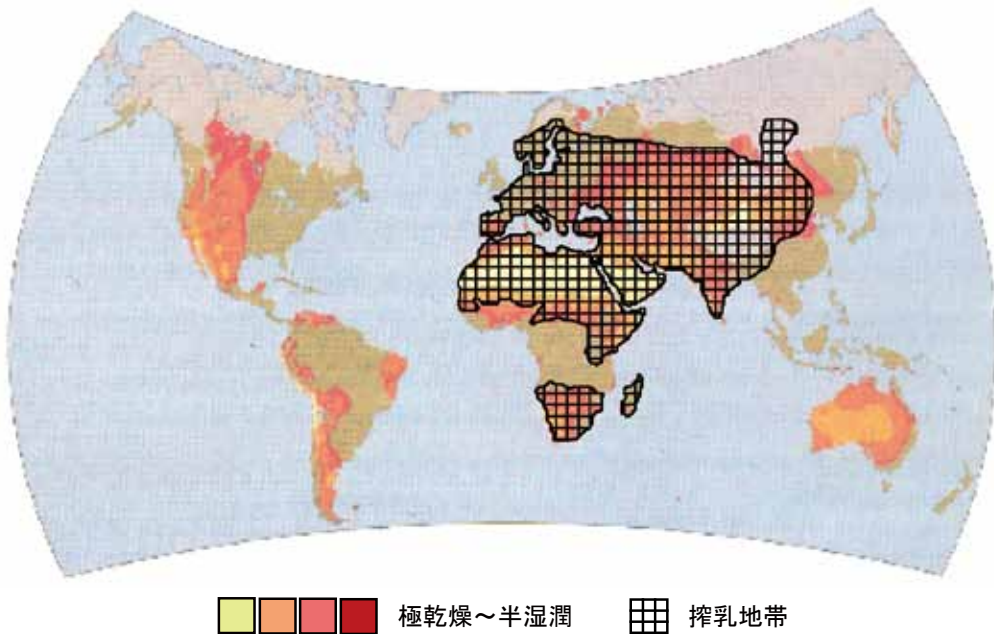


図2 世界の乾燥地帯と伝統的搾乳地帯

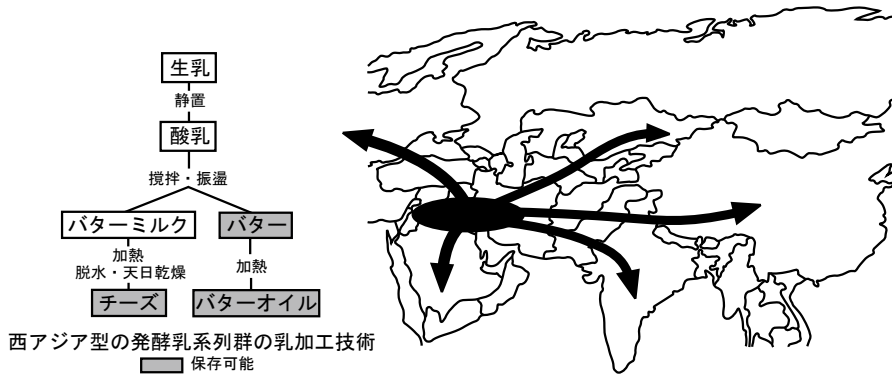
出典) 石毛ら (1973) より改変

展開していく系列群のことを指している。中尾のモデルには、発酵乳系列群の他、生乳からまずクリームを分離してから加工が展開するクリーム分離系列群、生乳に何らかの凝固剤を添加してチーズを得る凝固剤使用系列群、生乳を加熱し濃縮することを基本とする加熱濃縮系列群の合計4つの類型が設定されている。一番分布の広いものが最も古い起原である中尾(1972)とするならば、発酵乳系列群の酸乳にするという乳加工形態が最も古い起原ということになる。これらのことから、乳酸発酵による発酵乳系列群の乳加工技術が西アジアで先ず始まり、その乳加工技術が北アジアや南アジアに伝播していったと考えられるのである。

乳酸発酵が西アジアで開始されたとしても、酸乳を更にどこまで加工した段階で、周辺へと伝播していったのであろうか。ここが問題である。先ほど指摘した通り、食料生産の本質は“保存”にこそある。生乳が酸乳化段階のままでは、乳加工の本質が欠落したまま、生業としての牧畜が十分に成熟する前に周辺に伝播したことになる。筆者は、今日の西アジアでみられる発酵乳系列群の乳加工技術まで発達した段階で、西アジアから周辺地域へと伝播していったと類推している(図3-a)。搾乳して得た生乳を先ず加熱殺菌する。その生乳に、前回の酸乳の一部を添加し、暖かいところに静置して乳酸発酵を進めさせ、酸乳化させる。酸乳は、ヒツジの皮袋などに入れて左右に振盪するか桶と攪拌棒を用いて上下に攪拌してバターを生成させる(写真6)。バターは加熱精製してバターオイルとする。バターオイルは水分やタンパク質などが排除され、脂質の純度が99%ともなり、長期保存に耐え得る乳製品となっている。バターを取り除いた後のバター



a) 西アジアからの搾乳・乳加工技術の伝播



b) ユーラシア大陸での南方乳文化圏と北方乳文化圏の二重構造



図3 ユーラシア大陸における乳文化の一元二極化仮説

搾乳・乳加工は西アジアに一元的に起原し、西アジアで発酵乳系列群の乳加工技術まで発達した段階で周辺に伝播し、暑熱性と冷涼性の生態環境の相違により、南方乳文化圏と北方乳文化圏へと二極化していった。

出典) 平田 (2013) より改変

ミルクは、加熱して凝固させ、脱水・天日乾燥させてチーズへと加工する(写真7)。水分を極端に排出させているため、このタンパク質の塊であるチーズも長期保存に耐え得る乳製品となっている。この一連の乳加工技術を、著者は西アジア型の発酵乳系列群の乳加工技術と呼んでいる。クリームの分離を乳加工の中心に据える北方乳文化圏の乳加工技術と西アジア型発酵系列群を土台とした南方乳文化圏とは体系があまりに異なり過ぎているが、北方域の冷涼性という生態環境要因を考慮に入れ、乳加工技術の伝播・変遷という視点から分析すると、両乳文化圏の乳加工技術には実は強い関連性が確認される。その変遷過程についての詳細な議論は平田(2013)を参照されたい。西アジア型の発酵乳系列群の段階で周辺地域に乳文化が伝播していったとすると、西アジアで今日見られる発酵乳系列群は、人類にとって根源的な乳加工技術ということになる。この西アジア型の発酵乳系列群は、乳酸発酵、チャーニング、加熱、脱水、天日乾燥の技術のみ

を適応した技術であるが、生乳から乳脂肪と乳タンパク質の分画・保存を成し遂げている。

ユーラシア大陸における多地点のフィールドワークによる成果を基に、考古学、生態環境、酪農科学の知見を鑑みると、南方域の西アジアでバターオイルやチーズを加工する発酵乳系列群の保存技術が発達した段階で、西アジアから北方域に伝播し、北方域では西アジア型の発酵乳系列群の乳加工技術を基にして冷涼性ゆえにクリーム分離や乳酒づくりの乳加工技術へと変遷・発達したとする乳文化の一元二極化論が提起できるのである。



写真6 バター加工のための酸乳のチャーニング。ヒツジの皮袋の中に酸乳を入れ、左右に振盪してバター粒を生成させる。左右に振盪させる技術は西アジアの乳加工の特徴を示す。アラブ系牧畜民バグガラーにて。

#### 2-4. 仮説の検証

仮説「乳文化の一元二極化論」を検証するには、乳製品・乳加工技術に触れた歴史的文獻を検討するより他ない。しかし、歴史的文獻は乳製品・乳加工技術を断片的に記載しているものが多く、乳加工技術の全体像を把握・再現することが極めて難しく、古代の乳製品・乳加工技術の再現実験・検討があまり進んでいないのが現状である。

東アジア地域では、歴史的文獻が比較的多く残されている地域である。東アジア地域においては、有賀秀子氏が『本草綱目』をテキストとして優れた再現実験をおこなっている（有賀ら1988）。本草綱目は、AD1596に李時珍により編纂された医薬書である。有賀によると、生酥は加熱・静置法により得られたクリーム、醍醐は加熱濃縮クリームの静置露出法により得られたバターオイルとしている。つまり、本草綱目は、酸乳を攪拌してバターを得るという西アジア型発酵乳系列群の特徴ではなく、生乳から積極的にクリームを分離する北アジア型の乳加工技術の特徴を示している。著者らも東アジアの古代乳製品の再現実験をおこなっており、AD530年～AD550年に賈思勰によって編纂された『齊民要術』をテキストとして再現実験をおこなった（平田ら2010）。齊民要術が記述する乳加工技術の内容は、生乳の酸乳化、酸乳のチャーニングによるバター加工、バターの加熱によるバターオイルであり、まさに西アジア型発酵乳系列群の特徴を示していた。齊民要術は、西アジア型発酵乳系列群が東アジアまで伝播したことを指し示しており、乳加工技術は西アジア型発酵乳系列群にまで発達した段階で西アジアから周辺地域へと伝播したとする仮説を強力に支持している。

乳加工技術の発達史を検証するには、東アジア地域の事例だけでなく、ユーラシア大陸を広く対象にして実施していかなければならない。南アジアには、BC1200～BC600年頃に編纂されたVeda文獻、BC300年頃に編纂されたPali聖典がある。西アジアには紀元前2000年頃にまとめ

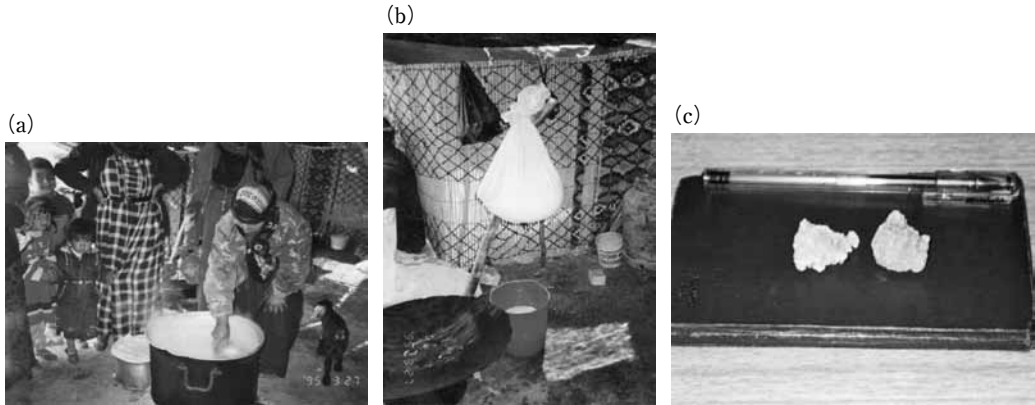


写真7 加熱凝固・脱水・天日乾燥によるチーズの加工。

バターを取り除いた後のバターミルクは、酸度の上昇により乳タンパク質の構造が変化しているため、加熱することにより容易に凝固してくる (a)。凝乳を掬いとり、布などに入れて脱水し (b)、天日に曝してカチカチに乾燥させる (c)。ここに乳タンパク質を長期保存できる乳製品が完成する。アラブ系牧畜民バグーラにて。

られたシュメールの粘土版がある。これらのテキストは、古代乳製品・乳加工技術を再現するには極めて重要であるが、古代サンスクリット語や楔形文字によるシュメール語によって記載されているため、テキストの精読や正しい解釈を阻んでいる。今後は、これらの専門家と協力し、南アジアや西アジアで古代乳製品・乳加工技術の再現実験を実施し、仮説検証していく必要がある。

## 2-5. 民族学的視座からの提起：乳文化研究からの推論

搾乳と乳加工技術は西アジアで生まれ、西アジア型発酵乳系列群の乳加工技術にまで発達した段階で、つまり、生乳を酸乳にしてからバター・オイルとして乳脂肪を、チーズとして乳脂肪を分画・保存できる技術にまで発達した段階で、西アジアから周辺地域へと伝播したと推論した。北アジアの乳加工技術も西アジアに由来しているのである。

ここで推測できることがある。搾乳の開始、つまり、牧畜の開始は、BC7000年紀に始まることは既に指摘した。牧畜は、西アジアからBC7000年紀以降に周辺地域へと伝播したことになる。従って、西アジア以外の地域で遺跡を発掘しても、BC7000年以前の遺跡からは乳利用の形跡が確認されないであろうこと、つまり、牧畜という生業が成立していなかったということが、乳文化の一元二極化論から言及できるのである。

西アジア周辺地域での考古学的研究は、牧畜の起原を研究するだけに留まらず、乳文化および牧畜の一元二極化についても多くを論証してくれることになる。今後、周辺地域の中央アジアや北アジアでの遺跡の新たな発掘の進展が待たれるところである。

### 3. 牧畜の生存戦略と牧畜の柔軟性

本書『ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民』の意図の一つには、牧畜という生業の特徴を考察すると共に、牧畜民と農耕民との関係性を問い直すということがある。そこで、牧畜の生業戦略、農耕民との交易を不可欠とする生業構造、臨機応変に生業を変化させることのできる牧畜民の柔軟性などを検討し、牧畜という生業の特徴について言及しておきたい。

#### 3-1. 牧畜の生業戦略

牧畜民は、ただ乳を家畜から横取りし、乳製品を加工することだけに意識をむけているわけではない。当然のことながら、家畜個体を増やそうと、より良き草地に季節に応じて群を導くことに苦心している。乾燥地の特徴は、降雨量の年格差が大きいことが特徴である（大手2004）。小雨により草地の状態が悪くなった場合には、遠く離れていてもより良き草地へと移動するなど、その対処する戦略を備えている（Lewis 1987; Findlay 2011; Watkins and Fleisher 2002; Sneath 1999）。この移動性こそ、牧畜という生業の特徴の一つである。また、牧畜民は毛・皮革を生活の材として多様に活用している。西アジアのベート・シャル *bēt·sha'r* と呼ばれる天幕はヤギの毛を編んで造られ、北アジアのゲル *ger* と呼ばれる移動式住居はヒツジの毛がフェルトとして利用されている（写真8）。バター加工の振盪器具はヤギやヒツジの皮革が（写真6）、気化熱を利用した天然の冷蔵庫も仔畜の皮革（写真9）が利用されている。このように、衣・住に関した多くのものが家畜の毛・皮革からの恩恵を受けてできている。家畜の糞も、耕地の堆肥として極めて有用な材となる。農耕民は、雑草や穀物の落穂などの飼料資源が残る作物収穫跡地を牧畜民に無償で放牧に提供し、家畜の糞尿を耕地に還元させようとする。牧畜民にとって、所有する家畜個体を増

(a)



(b)



写真8 アラブ系牧畜民とモンゴル遊牧民の宿営テント

アラブ系牧畜民の宿営テントはベート・シャルと呼ばれ、天幕状となっており、ヤギの毛を編んで創られている (a)。モンゴル遊牧民の宿営テントはゲルと呼ばれ、ヒツジの毛をフェルトにして創られている (b)。



写真9 気化熱を利用した簡易冷蔵庫。

入れ物にはヒツジの皮袋が利用されており、外側に水を振りかけて、気化を常に促す。中にはバターが保存されている。アラブ系牧畜民バグーラにて。

やし、乳、肉、毛・皮革、糞をより多く得ることが重要な家畜からの生産活動になっているといえよう。

また、半農半牧民は定住村に耕地を、移牧民は山麓にある本村に耕地を持つ(写真10)。農耕に携わる牧畜民にとっては、農作物を栽培することも重要な生産活動の一部となる。更に、牧畜民は狩猟や採集などもおこなっている。モンゴル遊牧民は、タラバガンと呼ばれる野生ネズミの肉が好物であるし、西アジアやアフリカの牧畜民もカゼルなどの野生動物を狩猟している(Coughenour *et al.* 1985; Holter 1988; Galvin and Little 2007)。牧畜民は野生植物を積極的に採集し、肉料理に用いるネギ科の野生植物、風邪を引いた時などに煎じるキク科の薬草などを利用しており、牧畜民は野生植物に対しても壮大な知識を有している。

牧畜民は、“小作農的”な仕事に就くことも多い。モンゴルでは清朝時代まで、実は大多数の遊牧民は、僧侶や貴族が所有する多頭数の家畜を世話する小作民であった(Sneath 1999)。綿花の綿摘みや野菜の収穫

などに、日給、もしくは、収穫量に応じた報酬で働いたりもする。農耕民の生産物を運搬することもおこない、賃金、もしくは、農産物の一部を受けている。また、牧畜民世帯では、牧夫はたいていは20歳までの牧童であることが多く、主人は近郊の町に出稼ぎに出たりもする。

このように牧畜民は、自然環境・季節変化に応じてより良き草地に家畜を導きながら、家畜個体を増やし、その乳、肉、毛・皮革、糞をより多く得るように努めながら、農耕活動、狩猟・採集、外部社会への報酬労働にも携わっている。牧畜民は、その置かされた自然環境や社会環境に応じて、牧畜民は臨機応変に生業構造を変え、より良く生活していくための生存戦略をとっている。決して硬直した生業構造とはなっていない。

### 3-2. 牧畜という生業の不可避性：外部社会に開かれた構造

牧畜民は、家畜を飼養しながらも、農耕をもおこない、生活に必要な多くの物資を得ている。しかし、生活に必要なすべてを自給できるはずもなく、自ら生産できないものは外部社会から調達することになる。茶葉、砂糖、塩、衣服など、近郊の農民や商人と物々交換、もしくは、購入して、必要物資を調達している。

シリア北東部のアブララアジズ山地域で牧畜をおこなうバグーラ集団は、ヒツジ・ヤギを飼養し、家畜飼料用にオオムギ栽培もおこなう半農半牧の民である。冬から春に生まれた仔畜(図1)

は、半年太らせた段階で、牡畜の大部分を近郊のハッサケ市で売却するか、食料などの生活物資と物々交換する。既に説明した通り、多くの牡は家畜生産の向上のためには不要で、選ばれし少数の牡のみ群にいれば要をなす。家畜の一年を通じた飼養管理において、草地の飼料資源の乏しくなる冬期をいかに乗り切るかが大きな問題となる。そこで、牧畜民は、冬から春に生まれた牡仔畜を半年飼養し、秋の終り頃に市場に出すのである。市場には、仔畜の他、乳製品や毛・皮革なども出される。家畜個体と家畜生産物とを近郊都市に出荷できるからこそ、ヒツジ・ヤギを飼養し、オオムギを栽培するだけの牧畜民も生活が可能となるのである。近郊の都市や市場との交易活動は、西アジアの事例だけでなく、北アジアやチベットなどでも確認されている (Sneath 1999; 月原 2000; 平田 2011b)。むしろ、交易なくして牧畜の生活は成り立たないともいえよう。

このように、牧畜民の社会は、家畜を飼養することを土台としながらも、近郊の外部社会との交易によって生業が成り立っている。牧畜という生業は、自己完結した閉じた構造ではなく、外部社会に依存した開いた構造となっているのである。

### 3-3. 牧畜という生業の柔軟性

バッガーラは、かつてはシリアを横断する遊牧民であった。夏の乾期には、農作物収穫跡地残渣や水資源を求めて、降水量のより多い東方・北方域で放牧し、冬の雨期には、草地の飼料資源を狙って、内陸に戻って季節移動していた (宮崎 1995)。移動にはラクダが用いられていた。1950年代、シリアにもモータリゼーションが起り、自動車が普及し始めた。バッガーラはラクダを売却し、トラクターなどの農耕機械を購入した結果、シリア内陸部のアブダルアジズ山地域でオオムギの作付けを始め、定住化していった。モータリゼーションの影響を受け、遊牧から半農半牧へと変化していったのである。定住化することによって、放牧は日帰り放牧を基本とし、草地

(a)



(b)



写真 10 半農半牧民の農耕地。

アラブ系牧畜民バッガーラの定住村の周辺には、自給飼料を生産するためのオオムギ耕作地が広がる (a)。奥手の斜面が家畜の放牧地となっている。

インド北部ラダーク地域の移牧民は、本村周辺で食料用のオオムギ、ジャガイモ、マメなどを生産する。奥手上方の山中に夏の放牧草地がある (b)。

と農作物収穫跡地とを放牧利用し、飼料資源の不足する冬期間には自ら栽培したオオムギを給与するように変化していった (Hirata *et al.* 1998)。技術革新により、牧畜民の生業は容易に変貌していくことが理解される。

著者がバグーラを調査していたのは1990年代であった。10年後の2005年にバグーラを再び訪ねた。ところが、多くの世帯はアブダルアジズ山地域を去り、北方の農耕地帯に移住していた。シリア政府が、かつて緑で覆われていた山を復元する必要があるとして、中央政府の強制的な指示で植林政策を進めたのである。アブダルアジズ山に在来種のマツなどを植林し、放牧を一方的に禁止した。牧畜民、農耕民、都市民の統治力の優劣関係は、たいていは牧畜民は都市民・農耕民よりも相当に低く、虐げられる場合が多い。バグーラは、アブダルアジズ山地域で生業を続けていくことができなくなり、北方の農耕地帯に出て行ったのである。そこで、農耕民の土地に居候し、自らのヒツジ・ヤギを住居の傍らで小頭数飼養しながらも、小作農家として農耕に従事するようになった。つまり、中央政府の揺るぎない強引な政策により、バグーラの生業が牧畜から農耕へと変化したことになる。このように、外部圧力により牧畜の形態は容易に変貌することも理解される。

一方、モンゴルなどで著者が経験した事実は、都市生活者から遊牧民に転職する事例である。旧ソ連邦圏でのペレストロイカの流れを受け、モンゴルでは1992年に社会主義から民主主義へと移行した。それまでは、政府の集団組織で働き、政府からの配給により生活が保障されていた。それが、自らで仕事を探し、自らで収入を得なければならない状況へと突如移行したのである。このような混乱にも近い状況において、都市生活する人々の中に、遊牧という生業を選択する人が出てきたのである。つまり、このモンゴルの事例は、社会状況の変化で、牧畜以外の生業から牧畜に移行することもあり得ることを示している。

牧畜という生業は、硬直した構造にあるのではなく、技術革新、外部圧力、社会状況などに応じて、都市生活・農耕・牧畜という生業の間を自由に行き来できる柔軟性を持っている。この生業構造の柔軟性こそまた、牧畜民の生業にとっての特徴なのである。牧畜民は、その置かれた自然環境や社会環境に応じて、臨機応変に生業構造を変え、より良く生活していくための生存戦略をとっているのである。

#### 引用文献

- 足立達 2002 『乳製品の世界外史—世界とくにアジアにおける乳業技術の史的展開—』東北大学出版会。  
 有賀秀子、高橋セツ子、倉持泰子、浦島匡、筒井静子 1988 「日本における古代乳製品の“酥”および“醍醐”の本草綱目(李著)にもとづく再現実験」『日本畜産学会報』59(3):253-260。  
 稲村哲也 1995 『リヤマとアルパカー—アンデスの先住民社会と牧畜文化』花伝社。  
 梅棹忠夫 1976 『狩猟と遊牧の世界』講談社。  
 石井智美 1998 「モンゴル遊牧民の食生活に関する栄養学的検討」『平成8年度食文化研究助成成果報告書』味の素食の文化センター。  
 石毛直道 1992 「乳利用の文化史」雪印乳業株式会社健康生活研究所編『乳利用の民族誌』9-21頁、中

- 中央法規出版株式会社.
- 石毛直道, 吉田集而, 赤坂賢, 佐々木高明 1973 「伝統的食事文化の世界的分布」石毛直道(編)『世界の食事文化』148-177頁, ドメス出版.
- 大手信人 2004 「乾燥地の自然環境」吉川賢・山中典和・大手信人編集『乾燥地の自然と緑化—砂漠化地域の生態系修復に向けて』1-42頁, 共立出版.
- 角田健司 2009 「ヒツジ—アジア在来羊の系統—」在来家畜研究会編『アジアの在来家畜』253-279頁, 名古屋大学出版会.
- 佐々木史郎 1992 「シベリア・ラップランドのトナカイ乳製品」雪印乳業健康生活研究所編『乳利用の民族誌』252-266頁, 中央法規.
- 田中和明, 万年英之 2009 「ウシ—多源的家畜化—」在来家畜研究会編『アジアの在来家畜』117-159頁, 名古屋大学出版会.
- 谷泰 1995 「乳利用のための搾乳はいかにして開始されたか—その背景と経緯—」『西南アジア研究』43: 21-38.
- 谷泰 2010 『牧夫の誕生』岩波書店.
- 月原敏博 2000 「移動牧畜の種類と遷移に関する考察」『人文研究』52: 47-71.
- 中尾佐助 1972 『料理の起源』日本放送出版協会.
- 中尾佐助 1992 「乳食文化の系譜」雪印乳業株式会社健康生活研究所編『乳利用の民族誌』267-293頁, 中央法規出版株式会社.
- 三宅裕 1999 「The Walking Account: 歩く預金口座—西アジアにおける家畜と乳製品の開発—」常木晃編著『食料生産社会の考古学』50-71頁, 朝倉書店.
- 平田昌弘 1999 「西南アジアにおける乳加工体系」『エコソフィア』3: 118-135.
- 平田昌弘 2004 「青蔵高原西部におけるチベット牧畜民の乳加工体系」『言語文化学会論集』22: 159-176.
- 平田昌弘 2011a 「モンゴル高原中央部における家畜群のコントロール—家畜群を近くに留める技法—」『文化人類学』76(2): 182-195.
- 平田昌弘 2011b 「ヒマラヤ・ラダークの移牧の特質—農耕・牧畜・交易複合システム—」『ヒマラヤ学誌』12: 40-59.
- 平田昌弘 2012a 「モンゴル遊牧民の食料摂取における乳・乳製品と肉・内臓の相互補完性—ドンドゴビ県のモンゴル遊牧民世帯Tの事例を通じて—」『文化人類学』77(1): 128-143.
- 平田昌弘 2012b 「インド北部ヒマラヤ山脈西部北斜面チャンタン地域における遊牧民の生業構造についての予備調査—遊牧民カルナクバにおける食料摂取の視座から—」『ヒマラヤ学誌』12: 128-141.
- 平田昌弘 2013 『ユーラシア乳文化論』岩波書店.
- 平田昌弘, 米田佑子, 有賀秀子, 花田正明, 河合正人, 内田健治, 元島英雅 2010 「『斉民要術』に基づいた日本古代の乳製品の再現と同定」『Milk Science』59(1): 9-22.
- 福井勝義 1987 「牧畜社会へのアプローチと仮題」福井勝義・谷泰編『牧畜文化の原像—生態・社会・歴史』3-60頁, 日本放送出版協会.
- 本郷一美 2002 「狩猟採集から食料生産への緩やかな移行—南東アナトリアにおける家畜化—」佐々木史郎編『国立民族学博物館調査報告33—先史狩猟採集文化研究の新しい視野』109-158頁, 国立民族学博物館.
- 万年英之 2009 「ヤギ—東アジアの在来ヤギ—」在来家畜研究会編『アジアの在来家畜』281-299頁, 名



古屋大学出版会.

- 宮崎昭 1995 「シリアにおける遊牧畜産とその問題点 (2)」『畜産コンサルタント』361: 70-74.
- Coughenour, M.B., Ellis, J.E., Swift, D.M., Coppock, D.L., Galvin, K., McCabe, J.T. and Harrr, T.C. 1985 Energy extraction and use in a nomadic pastoral ecosystem. *Science* 230: 619-625.
- Findlay, A.M. 2011 Migrant destinations in an era of environmental change. *Global Environmental Change* 215, 550-558.
- Galvin, K.A. 1992 Nutritional ecology of pastoralists in dry tropical Africa. *American Journal of Human Biology* 4, 209-221.
- Galvin, K.A. and Little, M.A. 2007 Dietary intake and nutritioanal status. In: Little, M.A. and Leslie, P.W. (eds), *Turkana Herders of the Dry Sabanna*. Oxford University Press, New York.
- Holter, U. 1988 Food consumption of camel nomads in the north west Sudan. *Ecology of food and Nutrition* 21, 95-115.
- Lewis, N.N. 1987 *Nomads and settlers in Syria and Jordan, 1800-1980*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Hirata, M., Fujita, H. and Miyazaki, A. 1998 Changes in grazing areas and feed resources in a dry area of north-eastern Syria. *Journal of Arid Environments* 40, 319-329.
- Sneath, D. 1999 Spatial mobility and inner Asian pastoralism. In: Humphrey, C. and Sneath, D. (eds), *The end of nomadism? Society, state and the environment in inner Asia*, Duke University Press, Durham, 218-277.
- Watkins, B. and Fleisher, M.L. 2002 Tracking pastoralist migration: lessons from the Ethiopian Somali national regional state. *Human Organization* 61(4), 328-338.

# II 部

---

歴史学，文献史学からみた  
ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民



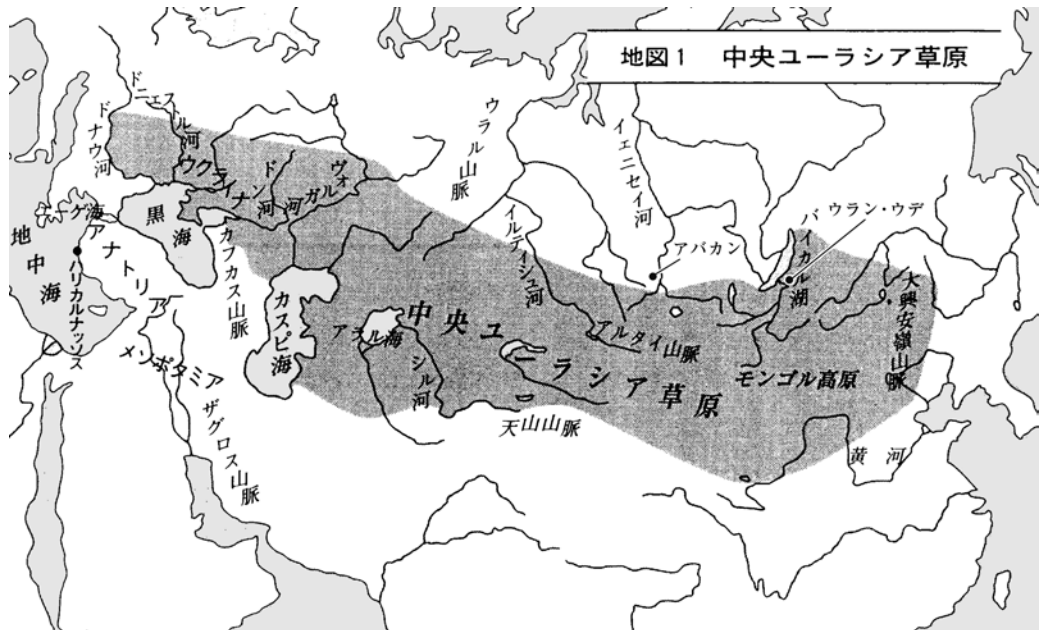
# モンゴル史上の遊牧民と農耕民の相互関係

宮脇 淳子

## はじめに

モンゴルという部族名が歴史に登場するのは7世紀であり、チンギス・ハーン率いるモンゴル帝国がユーラシア大陸の大部分を支配下に入れるのは13世紀のことである。しかし、モンゴルの登場以前の遊牧騎馬民の文化や血統がモンゴルにつながり、史上最大の帝国を形成するに至ったのであるから、遊牧騎馬民の誕生から語ることにする。

遊牧騎馬民は紀元前1000年前後に誕生し、18世紀にいたるまで、中央ユーラシア草原と呼ばれる、東は大興安嶺山脈のふもとから西はハンガリー草原まで続く降雨量の少ないユーラシア内陸地帯の主人公だった。



(出典：宮脇淳子『モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで』刀水書房 2002年)

草原は決して豊かなところではない。モンゴル高原は年平均降水量 200mm 程度で、冬には零下 30℃ から 50℃ にまでなる。草もまばらにしか生えないので、一箇所に留まっていたのでは家畜がすぐに草を食い尽くしてしまう。だから遊牧民は昔からフェルトでできた帳幕に住み、水草を求めて移動する遊牧生活を送ってきたのである。

遊牧民は一応自給自足の生活を送っている。夏は家畜の乳を主な食料とし、冬になる前に一定量の家畜を殺して肉の保存食料を作る。衣服も毛皮やフェルトで作る。しかし、腹一杯になるためには穀物が必要だし、絹の肌着もなじめばずっと欲しい。それで、乳製品や家畜を穀物や絹と交換しようとして農耕地帯に南下したのである。

交換がうまくいかないと、遊牧騎馬民は略奪に転じる。これが中国史で恐れられる北方の遊牧騎馬民の襲撃の理由だった。後述するように、匈奴が史上はじめて遊牧帝国を造ったのは、秦の始皇帝が中国を統一したため、それまでのように遊牧部族が個別に中国の農村を略奪することが難しくなったからだとは私は考えている。

以下、4章を除いて、拙著（宮脇 2002）と拙論（宮脇 2008）からの抜粋である。

## 1 遊牧騎馬民の誕生

紀元前 8000 年頃、人類最初の農耕が西アジアのザグロス山脈で始まったとき、おとなしい動物である羊と山羊と牛が、定住を始めた人間によって家畜化された。そのずいぶん後の紀元前 4000 年頃になって、今のウクライナ草原で野生種の馬がはじめて家畜化された。しかし馬車の発明はさらに後である。紀元前 3500 年頃、メソポタミアで車両が発明されるが、はじめは去勢牛が引いていたらしい。最初の車両は薄い木の板を何枚か併せて止めただけのもので、軸木と一緒に回転したので、速く走らせるとすぐに壊れたからである。BC2000 年過ぎ、草原地帯で輻式（スポーク式）車輪が発明されると馬がこれを引くようになり、瞬く間に中央ユーラシア草原一帯に広まった。古代戦車は、ギリシアからローマ帝国、ペルシア帝国、北インド、古代中国でも使用されたことはよく知られている。しかし、人が馬に乗り広い草原で家畜を追って住居ごと移動して暮らす、中央ユーラシア草原の遊牧騎馬民が誕生したのは、ようやく紀元前 1000 年前後になってからであった。

だから、戦後一世を風靡したマルクス主義の「発展段階説」（人類は狩猟採集生活から、家畜を連れて移動する牧畜をへて、一箇所に定住する農耕へと進化した）は誤りであることが明らかである。定住農耕と牧畜がほぼ同時に始まり、そのあとで遊牧騎馬民が誕生したのである。

紀元前 1000 年頃に誕生した草原の遊牧騎馬民は、手綱だけをういあぶみ鐙も蹄鉄もなしで裸馬に乗っていた。鐙は 4 世紀頃の北中国で、乗馬が苦手な農耕民が馬にまたがるときの踏み台として発明されたので、最初は片側だけである。ちなみに日本の古墳から出土する馬具も、片側だけの鐙と金銀で装飾された贅沢品なので、当時の日本列島に入ったのは騎馬民族ではなく、今で言うなら外車と同じ、一部の人間が見せびらかすための貿易品としての馬と馬具だったことがわかる。日

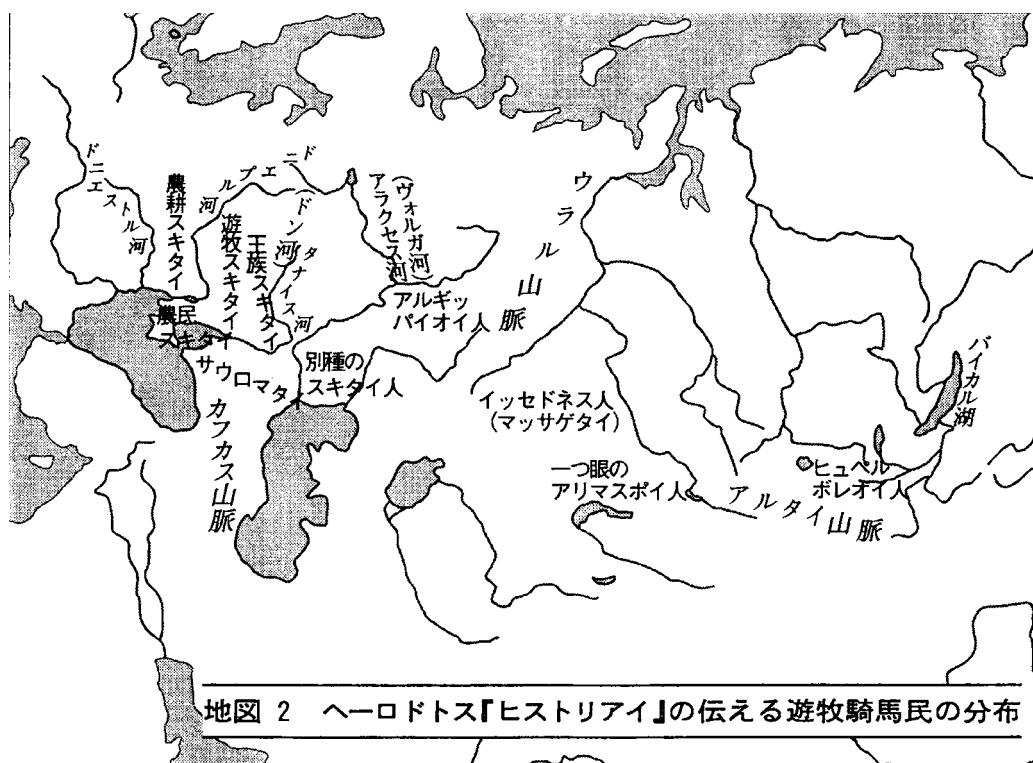
本の天皇家が騎馬民族の子孫だという江上波夫氏の「騎馬民族征服王朝説」はまったくのファンタジーである。

蹄鉄は8世紀末、ビザンティン帝国で登場し、西欧では10世紀になって普及した。たくさんの換え馬を引き連れ、やわらかい草地を疾駆する遊牧騎馬民の間には、蹄鉄は普及しなかった。

## 2 黒海北岸の遊牧騎馬民「スキタイ」 (ヘーロドトス著『ヒストリアイ』BC5世紀)

世界史上はじめて名前の知られる遊牧騎馬民は、紀元前1000年紀頃、黒海北岸の今のウクライナの草原にいたキンメリア人である。キンメリア人は紀元前8世紀末、東から来たスキタイ人におわれてカフカス山脈を越えて小アジアに移住し、アッシリア帝国を脅かしたのち消滅した。

これに代わって黒海北岸を占拠した遊牧騎馬民スキタイについては、歴史の父ヘーロドトスが詳しい記録を残している。人類史上始まったばかりの遊牧騎馬民の社会について、われわれはかなりよく知ることができる。ヘーロドトスによると、スキタイと呼ばれる人々は西はドニエストル河から東はドン河まで住んでおり、西から農耕スキタイ、農民スキタイ、遊牧スキタイ、王族スキタイに分かれていた。遊牧スキタイは種も蒔かねば耕す術も知らない。王族スキタイは最も勇敢で数も多く、他のスキタイ人を自分の隷属民とみなしている。本来のスキタイ人は町も



地図 2 ヘーロドトス『ヒストリアイ』の伝える遊牧騎馬民の分布

(出典：宮脇淳子『モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで』刀水書房 2002年)

城塞も築いておらず，その一人残らずが家を運んでは移動していく騎馬の弓使いで，生活は農耕によらず家畜に頼り，住む家は獸に曳かせる車である，とヘーロドトスは説明する．スキタイの支配者たちは遊牧騎馬民だったが，被支配者の中には農耕民なども含まれていたことがわかる．

### 3 モンゴル高原の遊牧騎馬民「匈奴」<sup>きょうど</sup>（司馬遷著『史記』BC1世紀）

中国王朝の歴史は，紀元前221年，秦の始皇帝が天下を統一したときに始まる．「秦」がChinaと「支那」の語源であるから，これが事実上の中国の誕生であり，「中国二千二百年」である．

紀元前210年に始皇帝が死ぬと，中国の統一が破れ各地で反乱が起きた．項羽<sup>こうう</sup>と劉邦<sup>りゅうほう</sup>（漢の高祖）が中国の天下を二分して争っていた時期，北方の陰山山脈の匈奴部族の冒頓<sup>ぼくとん</sup>単于<sup>ぜんう</sup>がモンゴル高原をはじめて統一した．「単于」というのは中国の「皇帝」に相当する最高指導者の称号である．冒頓単于は戦士30余万人を率いたという．

匈奴について記録を残したのは漢の武帝に仕えた司馬遷<sup>しばせん</sup>で，彼の著書『史記』が中国文明最初の歴史書である．このころモンゴル高原の匈奴帝国は強大で，武帝は54年間の治世の間しばしば大軍をモンゴル高原に送って匈奴に攻撃を加えたが，戦争で国力を消耗したのは漢のほうだった．そういうわけで，司馬遷の『史記』では匈奴についてとくに1章を設けている．ここで紹介する『史記』「匈奴列伝」は，北方の遊牧騎馬民について記した中国文献の中でもっとも有名なもので，のちの史書はみなこれをまねて書いた．

「匈奴は北の蛮地に居住し，畜類を牧するために移り住む．その家畜のうちで多いものは馬・牛・羊で，水と草を求めて移動して暮らし，城郭や固定家屋や耕作地はないが，それぞれ割当ての土地はある．文字はなく口頭で約束をする．子供は上手に羊に乗り，弓を引いて鳥や鼠を射る．大人の男で弓を引き絞る力のある者は，みな甲冑を付けて騎兵となる．その風俗は，平和時には家畜の世話をしたかわら，鳥や獸を射て生活を立てる．一旦急変ある時は，一人一人が戦士になって戦争にでかける．これが天性である．遠くに達する武器には弓と矢があり，接戦用の武器には刀と槍がある．勝つと見れば進み，不利と見れば退き，遁走を恥としない．利益ありと知れば礼儀もかえりみない．君主をはじめとして，みな家畜の肉を食い，その皮を着，フェルトや毛皮を被る．壮年の者は脂ののったうまいところを食い，老人はその余りを食う．壮年で力強い者を尊敬し，老いて弱い者を軽蔑する．父が死ねば，息子は継母と結婚する．兄弟が死ねばみなその寡婦と結婚する．その習俗として諱<sup>いみな</sup>の習慣（人の本名を口にしたり書いたりすることを避ける）はなく，姓も字もない」

### 4 匈奴時代の農耕遺跡

匈奴時代に実際に北方で農耕が行なわれていたことは，考古学の発掘調査によって確認される．

匈奴時代に属すると思われる集落址は、現在まで約 20 カ所発見されているが、ほとんどがモンゴル高原北部である（以下本章の引用はすべて、林 2007 による）。

ロシア領ブリヤート共和国内、バイカル湖東方のウラン・ウデ西南で発見されたイヴォルガ遺跡は、セレンゲ河の氾濫原の左岸にあり、北・西・南の三方は四重の土塁で囲まれている。集落址の南半分が発掘され、54 戸の住居址が確認されたが、ほとんどは地下式か半地下式で、東北隅にかまどがあり、壁には暖房用の煙道が走っていた。ここからは、漢代の灰陶に似た土器、鋤・鎌、漢字の刻まれた砥石、戦国時代の鏡が発見された。出土した動物の骨はほとんどが家畜のもので、犬 27%、羊 21.6%、牛 17.5%、豚 14.8%、馬 13.5%であり、モンゴル高原では珍しい豚が比較的多いことが注目される。

この集落の住民は、主として南から連れてこられた漢人農民で、農耕・牧畜・手工業に従事していたと思われるが、旧ソ連の考古学界では、住民を貧困のために定住化した匈奴とみなした。なぜなら、1960 年代に入ってからの中ソ関係の悪化のもと、たとえ古代のこととはいえ、ソ連の領内に防御施設を持つ中国人の集落があったということは認められなかったからだろう。

ソ連が崩壊したあと 1995 年に出版された報告書では、南方から連れてこられた漢人農民の匈奴社会における役割を重視しているが、それでもまだイヴォルガ城塞集落の住民が、零落して定住化した匈奴と原住民と逃亡中国人の三つのグループからなっていたという考えは棄てていない。

城塞集落の隣にある墓地は、被葬者の頭の向きが、北向き 152 例に対して、東向きが 47 例である。この向きの違いが民族の差であるとするなら、生産人口（漢人）3 に対して、兵士（匈奴）1 という割合だったのではないか。漢人は北方の地で農耕と手工業生産に従事し、匈奴人兵士は漢人の護衛と監視、さらに別の遊牧民である丁零にらみをきかせていたのだろう。つまり、この集落は自然発生的に生まれたものではなく、単于政権が明確な意図を持って造営したものと考えられるのである。

このように定住民を集団で強制移住させることは、中国史では徙民と呼ばれ、その後の鮮卑、柔然、突厥などの遊牧国家や、五胡十六国時代の北族系王朝やこれにつらなる北魏、さらには遼など、遊牧民出身の王朝によく見られる。漢代から見られる屯田（敵対勢力との最前線に兵士を駐屯させ、農耕も行わせる）は、匈奴の方が古いのかもしれない。

さらに別の例として、南シベリアのアバカンで発見された中国風館址がある。モンゴル国の西北に位置するトゥバ共和国のさらに北方、クラスノヤルスクの南で大きな建物の廃墟が見つかった。長方形の建物の中央に 132 平方メートルの大広間、その周りに 20 の小部屋があり、床下を縦横に巡る暖房用の溝が発見された。軒丸瓦には「天子千秋萬歳常樂未央」「天子が千年も万年も（長生きし）、永遠の楽しみがまだ尽きない」と、漢字が逆さ文字で浮き上がって表現されている。皇帝の不老長寿を願う吉祥の文句である。

この中国風の館址の主はまだ特定されていないが、南方の中国文化が、遠く離れた南シベリアの一面まで浸透していたこと、大量の瓦は重く、運搬すると壊れやすいので現地で生産するのが常識であるから、瓦を作る職人がいたことは間違いない。



モンゴル高原における農耕集落が北方に偏っているのは、北部の方が降水量が多くて農耕に適している他、捕虜として連れてきた漢人が南方に逃亡するのを防ぐ目的があったと思われる。

## 5 中国史上の遊牧民と農耕民

「天高く馬肥ゆる秋」は、現在の日本では「空気の澄んだ秋は空も高く、馬も肥える収穫の季節である」と、もっぱら食欲の秋を形容する言い方に使うが、もともとの意味は「秋になって穀物が収穫されるとすぐ、北方の遊牧騎馬民が肥えた馬に乗って襲撃して来る」という、匈奴の襲撃を恐れる漢代の警句だった。

万里の長城は北方の遊牧民の侵入を防ぐために秦の始皇帝が造ったことで有名であるが、じつは今我々が見る万里の長城は、モンゴル人が建てた元朝が草原に退却したあと、明代に新たに造ったり修復したりしたものである。北京から日帰りで行くことができる長城はすべて明代のもので、始皇帝の長城は遙かに北方、今の内モンゴルにあった。草原に崩れた土塁が残っている。つまり、明よりも秦の方が北方の遊牧騎馬民に対して軍事的に強かったわけである。

中国史を語るとき北方の遊牧民の役割はたいへん大きく、わかっているだけで四分の三の王朝と皇帝は北方の出身である。隋と唐の帝室は北魏の將軍出身であるが、北魏はもともと大興安嶺山脈を故郷とする遊牧民の鮮卑族だった。唐代の755年安祿山と史思明の乱が起こったとき、今のモンゴル高原にあったウイグル帝国と、チベットの吐蕃帝国が唐を助けた結果、長安にウイグル人が常時1000人滞在することになった。この頃、今のウランバートル西南方のモンゴル高原にバイバリク（富の町）やオールドバリク（宮殿の町）という都市が建設された。

ちなみに、現在の新疆ウイグル自治区のウイグル人は、清朝時代には固有の民族名を持たず、単にイスラム教徒と呼ばれた人々で、ロシア革命のあと1921年に自分たちの民族名称として古代のウイグルという名前を復活させた。モンゴル高原のウイグル帝国が840年に瓦解し、一部が今の新疆に南下して天山ウイグル王国になったから、という理由である。しかし、かつてモンゴル高原にいたウイグル人は遊牧民で、最初はマニ教徒やがて仏教徒になったのだから、今のイスラム教徒のウイグル人と直接の関係はない。

遊牧騎馬民でも、帝国を建設したあとは、これを運営するために商業センターとしての都市が必要になる。都市には君主に奉仕する商人や職人が住み、食料品などを貯えておく倉庫が置かれ、使節を謁見するための大広間もあった。しかし支配者である遊牧騎馬民の君主自身は都市にはほとんど住まず、広い草原に大テント（帳殿）をはり、鷹狩りや巻き狩りをしながら移動して暮らした。

ウイグル帝国がオールドバリクという都市を建設したオルホン河畔は、かつての突厥帝国の聖地ウチュケンの地であり、モンゴル高原ではめずらしく農耕もできる水の豊富な肥沃な土地である。この地に、金を減ばした翌年の1235年、モンゴル帝国第二代君主オゴデイ・ハーンがカラコルムという都市を建設した。カラは「黒い」、コルムは「小石原」の意味である。

モンゴル帝国の先行国家で、人的資源としても文化の上からもモンゴル帝国に大きな影響を与えたキタイ（契丹）は、大興安嶺山脈の東方出身の遊牧民で、今の北京を含む<sup>まんとく</sup>燕雲十六州を領土にした上、モンゴル高原の中央部まで支配下に入れた。故郷の遼河にちなんで遼という王朝名も持つキタイは、北面官が統治下の遊牧民を、南面官が農耕民を管轄したが、キタイ人自身はオールド（天幕、帳殿）で暮らした。キタイは、1004年にモンゴル高原の遊牧民を統治するため、ウイグルの故城カトンバリク（妃の町）<sup>ちんしゅうけんあんぐん</sup>に鎮州建安軍という軍事基地を置いた。基地に派遣された兵士は農耕も行なったことが知られる。

## 6 モンゴル帝国のしくみ

1206年、モンゴル部族出身のテムジンが、モンゴル高原の遊牧部族長たちの大会議で最高指導者に選挙され、チンギス・ハーンとして即位した。これがモンゴル帝国の建国である。

チンギス・ハーンは、すべての遊牧民を「千人隊」に組織し直し、万人隊長、千人隊長、百人隊長を任命した。さらに遊牧部族長の子弟のうち技能、体格ともに優秀な者を選抜してケシクテン（番士たち）とし、戦時には<sup>このえ</sup>近衛軍団、平時には四班に分けてハーンの宿営の侍衛とした。

十進法による組織は上下関係がはっきりするため、ローマ帝国時代からある軍隊にはうってつけの制度で、モンゴル高原の遊牧民にも匈奴時代から知られている。チンギス・ハーンは配下の遊牧部族長を、それぞれの属下の遊牧民の数によって、百人隊長や千人隊長に任命したのであって、部族を解体して百人隊や千人隊を再編成したわけではない。例えばジャライル族のムハリは、自分自身の領民であるジャライル三千人隊長の長であったが、左翼万人隊長も兼ねた。百人隊長が10集まって千人隊長ができるが、百人隊長の内の一人が千人隊長を兼ねる。千人隊長が10集まって万人隊長ができるが、一人の千人隊長が万人隊長を兼ねるのである。

モンゴル帝国では、遠征の際には自己の領民を持つ皇族や部族長たちが大集会に集まり、作戦計画を合議した。例えば今回の遠征にはすべての千人隊から200人ずつ徴兵する、と決まると、各百人隊長は20人の兵士を供出する義務がある。徴兵された遊牧民は遠征に手弁当で参加する代わりに、略奪品の分配を受ける権利を有した。総司令官であるハーンがまず指揮権として1割を取り、残りを各千人隊長に分配すると、千人隊長がそこから1割取って残りを各百人隊長に分配する、というしくみである。十進法の組織であるから計算は極めて簡単である。

遊牧民は平時にはハーンの御前で軍事演習の大巻狩を行ない、遠征の前には情報を集め、地理を調べて綿密な作戦計画をたてる。兵士は全員騎馬で、何頭もの替え馬を連れて行軍した。

モンゴル軍は、本軍、先鋒軍、<sup>しちよう</sup>輜重軍（食糧などの補給部隊、家畜と家族）から成り、<sup>せつごう</sup>斥候を派遣し、攻撃時には左翼軍、右翼軍、中軍などに分かれて展開した。モンゴルの弓は、張合せ弓で矢の速力が大きく、<sup>どほう</sup>弩砲、火薬、地雷など最先端の戦争道具を使用した。

また、チンギス・ハーンの厳格な法令、勅令、訓言が施行されたので、モンゴル軍は当時の世界最強の軍隊であり、向かうところ敵無しであった。

1227年、チンギス・ハーンは西夏遠征の最中、今の中国寧夏回族自治区の南端にある六盤山<sup>りくばんざん</sup>で亡くなった。チンギス・ハーンの遺骸は秘密裏にモンゴル本土へ運ばれ、ケルレン河畔に近い大オルドに到着してはじめて喪が公表された。葬式が終わったあと、遺骸は、オノン河、ケルレン河、トーラ河が源を発するケンテイ山脈中の一峰に埋葬された。墓には盛り土も標識もなく、埋葬が終わると、多数の馬に踏ませて土を平らにした。やがて樹木が生い茂って、ハーンの遺骸がどの樹木の下に埋葬されているかはわからなくなった。この墓所には何人も近づくことを許さず、今日に至るまでチンギス・ハーンの墓は発見されていない。

チンギス・ハーンには本来の墓所の他に、墓所のある山を遠くに望む草原に詣り墓<sup>まい</sup>とも呼べるものが存在した。ハーンの生前、四人の後妃が住んでいた大オルドがそのままハーンの霊に奉仕する祭殿となったのである。四大オルドを守る遊牧民たちはオルドの複数形オルドスという部族名で呼ばれ、移動する祭殿は長い間北のケルレン河畔にあったが、15世紀に黄河の湾曲部、今の中国内モンゴル自治区オルドス地方に南下した。チンギス・ハーンの祭殿はその後も移動し続けていたが、1956年中国共産党の政策で固定建築のチンギス・ハーン陵が完成した。ここには遺骸はないのであるが、チンギス・ハーンが六盤山で他界したあと、秘密裏に北方に運ぶ途中、今の御陵の場所で牛車が一步も動かなくなったので、仕方なく遺骸をここに埋めた、などという物語が現地ではまことしやかに語られている。

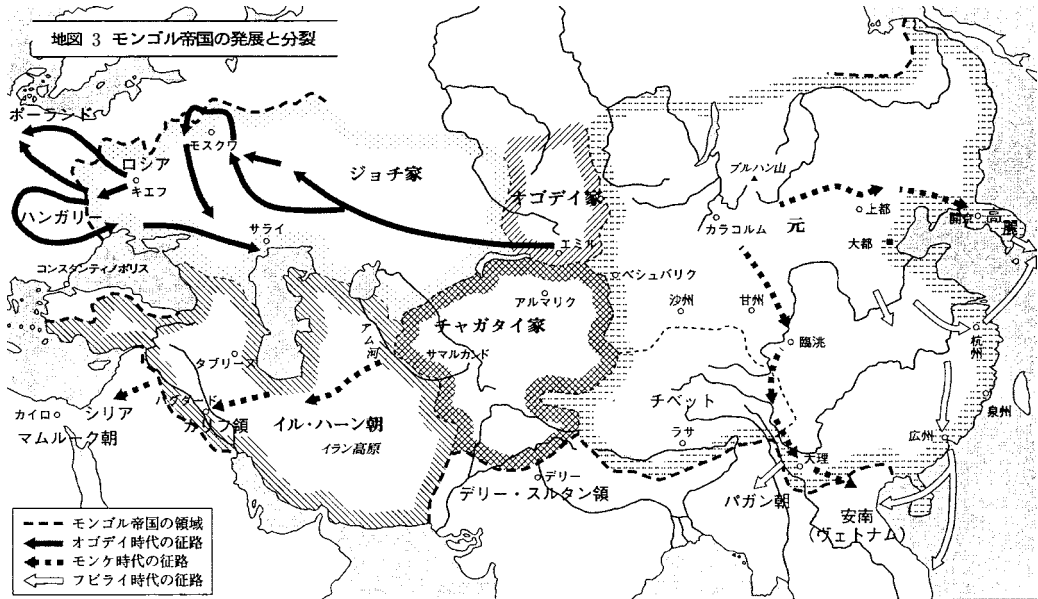
## 7 モンゴル帝国の遊牧民と農耕民の相互関係

話を戻すと、1227年にチンギス・ハーンが他界したとき、四人の息子のうち、長男ジョチはすでに亡くなっていた。遊牧民は財産である家畜や領民は均分相続を行なうが、成人になった息子から家を離れて独立し、最後に残った末子が親の面倒を見て、残った親の家を相続するので、「末子相続」とも言われる。君主位の継承権は兄弟に平等に存する。チンギス・ハーンが亡くなったとき側にいた末子トлуйが摂政になり、1229年にモンゴル草原で開かれた遊牧部族長たちの大集会で、三男のオゴデイが帝国の第二代ハーンに選挙された。

オゴデイは、チンギス・ハーンの法令を成文化して公布し、訴訟審理の手続きを定めた。また広域に広がったモンゴル帝国を統治するため、幹線道路に沿って一日程の距離ごとに替え馬の用意のある宿泊施設(駅)を置き、ハーンが出した身分保障<sup>バイザ</sup>の牌子を持つ急使や公用の旅行者に、乗換用の家畜と食物と宿舎を提供する「駅伝の制」を整備した。

占領下の農耕民に対しては、中国北部を十路に分け、各路に徴税課税使を置き、戸(家族)ごとに課税した。中央アジアでは、すべての成人男子に人頭税を課し、モンゴル遊牧民は所有の馬・牛・羊百頭につき一頭を納めることを定めた。遊牧帝国はもともと部族連合だったので、異なる言語や宗教や文化を持つ領民の内政には一切干渉せず、税金さえ徴集できればよかったのである。

前述のようにオゴデイが1235年にオルホン河畔に建設したカラコルムには、ハーンが宴会を



(出典：宮脇淳子『モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで』刀水書房 2002年)

するための宮殿、各種の寺院、外国使節や宮廷の書記の邸宅、職人と商人の街区と市場があったが、オゴデイ・ハーンはカラコルムには住まず、一年の大部分は、カラコルムから半日あるいは数日行程の、四季それぞれ定まった草原のオールド（帳殿）に住んだ。だから、カラコルムは確かにモンゴル帝国の一番目の都市ではあるが、政治の中心はあくまでもハーンのオールドにある。都市は、商人や職人がそこからハーンの移動宮殿に出張してハーンに奉仕する補給基地である。商業センターと言ってもいい。遊牧民と都市の関係は、つねにそういうものだった。

オゴデイが金の領土から連れてきた職人たちに建てさせた中国式の宮殿は万安宮と呼ばれるが、ハーンの住居というより、ハーンが外国の使者を謁見したり、臣下を集めて宴会をするための施設である。カラコルムから中国までの間には37の特別の駅伝が設けられ、守備隊を置き、毎日帝国の各地から食糧と酒を満載した500両の車がカラコルムに到着した。これを倉庫に保管して宮廷の消費にあて、また臣民に分配したという。オルホン河畔では農耕も行なわれたが、草原に建てられた人口の都市であるカラコルムの住民の需要をまかなうには、まったく足りなかったのである。

## 8 なぜ「モンゴル帝国から世界史が始まった」と言うのか？

私の夫であり師でもある岡田英弘（東京外国語大学名誉教授）が1992年に刊行した『世界史の誕生』（筑摩書房）では「世界史はモンゴル帝国とともに始まった」と言っている。

内容を簡単に紹介すると、そもそも歴史というのは文化であって、単なる過去の記録ではない。歴史という文化は、地中海文明では紀元前5世紀に、中国文明では紀元前1世紀初めに、それぞれ

れ独立に誕生した。それ以外の文明には歴史という文化がもともとないか、あってもこの二つの文明の歴史文化から派生した借り物の歴史である。歴史という文化を創り出したのは、地中海世界では、ギリシア語で『ヒストリアイ』を書いたヘーロドトスであり、中国文明では漢文で『史記』を書いた司馬遷という、二人の天才だった。この二人が最初の歴史を書くまでは、ギリシア語の「ヒストリア」（英語のヒストリーの語源）にも、漢字の「史」にも、今のわれわれが考える「歴史」という意味はなかった。

しかし、同じ歴史とはいっても、ヘーロドトスが創り出した地中海型の歴史では、大きな国が弱小になり、小さな国が強大になる、定めなき運命の変転を記述するのが歴史だ、ということになっている。一方、司馬遷の『史記』では、皇帝が「天下」（世界）を統治する権限は「天命」によって与えられたものであって、この天命の伝わる「正統」を記述するのが歴史である、ということになっているから、中国型の歴史では変化は記述しない。だから、日本の西洋史と東洋史は、「世界史」と名前を変えても水と油のままなのである。

ところが、中央ユーラシア世界を中心にしてみると、世界史の叙述が可能になる。すでにヘーロドトスと司馬遷に遊牧騎馬民の活躍が記されているが、実は、中央ユーラシア草原の遊牧騎馬民の活動が、東は中国世界、西は地中海世界そしてヨーロッパ世界の歴史を動かす力になった。そして、13世紀にモンゴル帝国が草原の道に秩序をうち立てて、ユーラシア大陸の東西の交流を活発にしたので、ここに一つの世界史が始まったのである。

13世紀のモンゴル帝国の建国が世界史の始まりだというのには、四つの意味がある。

第一に、モンゴル帝国は東の中国世界と西の地中海世界を結ぶ「草原の道」を支配することによって、ユーラシア大陸に住むすべての人々を一つに結びつけ、世界史の舞台を準備したことがある。

第二に、モンゴル帝国がユーラシアの大部分を統一したことによって、それまでに存在したあらゆる政権が一度ご破産になり、あらためてモンゴル帝国から新しい国々が分かれた。それがもとになって、中国やロシアをはじめ、現代のアジアと東ヨーロッパの国々が生まれてきたことである。

第三に、北シナで誕生していた資本主義経済が草原の道を通して地中海世界へ伝わり、さらに西ヨーロッパへと広がって、現代の幕を開けたことである。モンゴル帝国時代に広域商業を担ったのはイスラム教徒で、彼らと交流があったイタリア半島からルネッサンスが始まった。

第四に、モンゴル帝国がユーラシア大陸の陸上貿易の利権を独占してしまった。このため、その外側に取り残された日本人と西ヨーロッパ人が、活路を求めて海上貿易に進出し、歴史の主役がそれまでの大陸帝国から海洋帝国へと変わっていったことである。13世紀のモンゴル帝国の広域商業活動によってアジアの製品に親しむようになったヨーロッパ人が、イスラム教徒を経ずに商品を手に入れようと海に乗り出したことで、15世紀の大航海時代が始まる。

1206年のチンギス・ハーンの即位に始まったモンゴル帝国は、このようにして、現代の世界にさまざまな大きな遺産を残した。世界史はモンゴル帝国から始まったのである。

## 9 草原に退却したモンゴル遊牧民と農耕民の関係

元朝時代、モンゴル人にとって大都（今の北京）は冬の3ヶ月間だけ過ごす避寒地だった。夏の3ヶ月間は涼しいモンゴル草原の中にある上都という綺麗な都を中心に草原で暮らし、春と秋は、その間を鷹狩りを楽しみながら移動していた。遊牧民の君主は、中国を支配しても自分たちの生活を変えなかったのである。大都の付近にも人が立ち入らないように囲った禁地を作り、そこで狩猟を楽しんだ。今でいうサファリパークのようなものだが、もっと自然のままである。

元の大都は城壁の内側の北半分には建物がなかった。モンゴル皇帝と家来たちは冬が近づいて大都に戻ると、皇帝は宮殿に入るが、遊牧民の家来たちは決められた区画にテントを張って暮らしたのである。それで、明が北京を首都としたとき北方三分の一が放棄されて、城壁は南に移動した。ただし遊牧民以外の家来は大都に住んでいた。

1368年、紅巾軍の残党である朱元璋が大明皇帝の位について元の大都を攻撃すると、元の最後の皇帝、恵宗は上都に逃れ、さらに内モンゴルの応昌府に逃れた。中国史では元朝はここで滅びたことになるが、1370年応昌府で恵宗（明は順帝と諡する）が病死した後、皇太子アユシュリダラが帝位を継いで昭宗となり、カラコルムを根拠地として明朝に対する防衛に当たった。このころ元朝の残存勢力は依然として強大で、1372年三道に分かれて漠北のモンゴル高原に侵入した明の15万の大軍は、トウラ河方面で元軍の迎撃を受けて、数万人の戦死者を出して退却した。

中国王朝の明は、元から天命を受け継いだ正統の王朝を自任していたので、元の支配領土すべてを回復するために、太宗（成祖）永楽帝は5回もモンゴル高原に遠征した。しかし、ついにモンゴル人を屈服させることができず、明はやがて15世紀初めから16世紀末まで万里の長城を修築し続けて、その内側に閉じこもり、草原の遊牧民を「蒙古」と呼ばず「韃靼」と呼び替えて、彼らが元の後裔であることを言葉の上だけ否認した。



地図4 明代に新築・修復された万里の長城

(出典：岡田英弘『読む年表 中国の歴史』ワック出版 2012年)

1487年、フビライの子孫が即位してダヤン・ハーン（大元皇帝）と称すると、草原のモンゴル遊牧民は再び大連合をする。ダヤン・ハーンの子孫たちが各地の遊牧部族に婿入りしてそれぞれ部族長となり、モンゴル草原にチンギス・ハーンの子孫の血統が再び増えていった。しかし部族間の主導権争いも避けて通れず、ダヤン・ハーンの子孫たちはやがて分裂していく。

ダヤン・ハーンの子孫の中で、トメト部族長アルタン・ハーンは、宗主ではないのに実力でモンゴル高原の実権を握った。彼は35年間の治世の間に、現代につながるモンゴル民族の生活や文化の方向を決定づける大改革をいくつも行った。

アルタン・ハーンは、現在モンゴル民族が住む地域のほとんど、すなわちモンゴル国の領土の大部分から青海地方までを回復し、たびかさなる明への侵入ごとに多数の漢人を捕らえて連れ帰り、その他、明の逃亡兵、生活難の白蓮教徒の農民などがモンゴルの遊牧地に入植して、アルタンの庇護を受け、草原で穀物が生産されるようになった。今の中国内モンゴル自治区の政府所在地フフホト（青い城）は、これら亡命中国人たちがアルタン・ハーンのために1565年に築いた中国式の城「大板升」を起源とする。板升（バイシン）とは、現代モンゴル語でも帳幕（ゲル）ではない固定家屋のことをこう言うが、実はこの言葉の来源は「百姓」で、漢人農民を指す言葉が、彼らの家屋をも呼ぶ言葉になったのである。

アルタン・ハーンは1571年、明の隆慶帝と講和を結んだ。明はアルタンに順義王の称号を与え、毎年国境沿いに定期市を開いて、モンゴル側は家畜や皮製品・乳製品を、明人は織物や日用雑貨をもって貿易を行なうことと、モンゴルの領主たちに明が手当を支給することが決まった。フフホトには中国からの物資が集まり、この後モンゴル各地から人が集まる交易の中心となって繁栄したが、アルタン・ハーン自身は城内に住まず、付近の草原のオールドで暮らしたのは、かつてのハーンたちと同様であった。明は1575年にこの町を「帰化城」と名づけた。

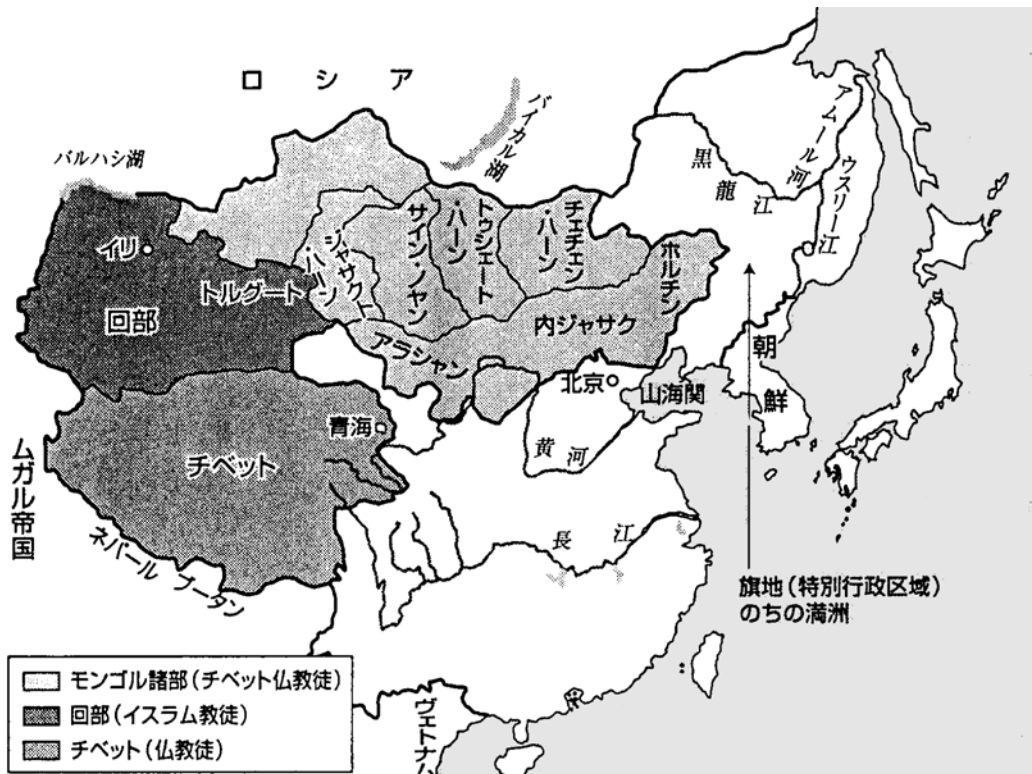
アルタン・ハーンは、中国文化が流入してモンゴルが独自性を失うことを警戒し、明と講和を結ぶと同時に、チベットとの関係を強化した。1571年、カム（東チベット、いまの四川省西半分）から来たアセン・ラマの勧めで仏教に帰依したアルタン・ハーンは、ゲルク派の高僧でデブン寺の貫主ソェナム・ギャツォと1578年に青海のチャブチャルで会見し、彼に「ダライ・ラマ」の称号を贈った。ダライはモンゴル語で「大海」を意味し、智慧が海のように広いという意味であると同時に、チベット語のギャツォの訳でもある。ソェナム・ギャツォは、すでに二人の前世を持つ転生生活仏であったので、ダライ・ラマ三世と呼ばれる。

ダライ・ラマ三世が1588年にモンゴルで没すると、ゲルク派の一部急進勢力は、ラサのガンデン大僧院の座主たちの反対をしりぞけて、アルタン・ハーンの子孫スメル・タイジの子を、ダライ・ラマ三世の転生者に認定した。これがダライ・ラマ四世ユンテン・ギャツォである。こうしてモンゴルとチベットとの関係は、ますます密接なものになっていった。

## 10 初め遊牧地を保護していた清朝 (1636 - 1912) が、20 世紀初頭に草原を開放

1636年に万里の長城の外側の瀋陽で建国した清朝は、建国当初からモンゴル遊牧民を同盟者として扱い、満洲皇族とモンゴル貴族の間には結婚関係も多くあった。1644年に明が減んだので、清が万里の長城を越えて中国支配を始めた後も、満洲の国軍である八旗兵とともにモンゴル騎兵の重要性は高かったため、清末までモンゴル遊牧民は清朝の保護を大いに受けていた。モンゴル人を家来とした縁で清の支配下に入ったチベットや回部は、モンゴルと併せて藩部と呼ばれ、清朝皇帝の家来ではあるが自治を許され、宗教も言葉も法律も異なり、満洲語が共通語だった。藩部への漢人の移住は禁止され、モンゴル草原にやってくる漢人商人は、1年を越して滞在してはいけない、モンゴルで家を買ってはいけない、モンゴル女性と結婚してはいけない、と決められていた。

ところが1900年の義和団の乱が北清事変になり、11カ国に莫大な賠償金を支払わなければならなくなった清朝は、これまでのモンゴル草原の保護政策を一変して漢人農民の草原への入植を



地図5 清朝の最大版図と藩部

(出典：岡田英弘監修『清朝とは何か』別冊環⑩ 藤原書店 2009年)



奨励し、モンゴル人の反発を買った。1904~1905年の日露戦争に勝利して日本がロシアから得た満鉄の、東は満洲平野、西はかつてのモンゴル草原だった。漢人農民が入植を始めたばかりで、牧地を失った遊牧民が馬賊や匪賊となり、農地を保護する保険隊が誕生した頃である。

1911年辛亥革命が起きた後、今のモンゴル国はロシア次いでソ連の支援で独立を達成することができたが、内モンゴルは中華民国と満洲国の領土になり、中華民国では漢人の入植も進んだ。しかし、内モンゴル草原のほとんどが農耕地になったのは、1949年中華人民共和国が成立したあとの文化大革命のときで、100頭の羊も養えない微々たる草原でも漢人農民の目には広大な耕作地に見えたので、草原を持っているモンゴル人はすべて搾取階級だと決めつけられて処刑され、草原は貧しい漢人農民たちに分け与えられた。北のモンゴル国に土地所有法ができたのは民主化後の2002年のことで、投資をするためには担保が必要であるというIMFの圧力による。

#### 参考文献

宮脇淳子 2002『モンゴルの歴史遊牧民の誕生からモンゴル国まで』刀水書房。

宮脇淳子 2008「短期連載：誰も語らなかったモンゴルの凄さ：第1回 強かな独立精神と外交、第2回 なんと逞しき人よ、第3回 米中は大帝国をつくれぬ—モンゴルの教訓、第4回 資源外交の新戦場」『正論』8, 9, 10, 11月号, 産経新聞社。

林俊雄 2007『スキタイと匈奴遊牧の文明』（興亡の世界史 02）講談社。

# MAR.TU 敵視の背景

堀岡 晴美

## はじめに

MAR.TU はこれまで都市文明とは対極にある 'barbarians' と見なされてきた。それは文学作品において「家を知らず都市を知らない」「生肉を食し、死者を葬らず」など、都市民からかけ離れた特徴で表現され、ウル第3王朝を崩壊させた「元凶」として当時の人々に怖れられたからである。しかし行政経済文書で見ると限りでは 'barbarians' と忌み嫌われたはずの MAR.TU が都市に定住し重職に就く者までいる。

前2千年紀前半にはメソポタミア・シリアの地につきつぎと王朝を樹立した MAR.TU に対してミアロープ M. Van de Mieroop は次のような感想を述べた。「MAR.TU を祖先とするイシン、ラルサ、バビロンといった王朝のように MAR.TU は成功したが、MAR.TU のもとで働く「書記」(scholar) がコピーした文学資料の中でなぜそれほどまでに嫌われたのか、説明できないままでいる」と (Van de Mieroop 1992: 48)。ここで今日の我々の MAR.TU に対するネガティブなイメージの原因は文学作品の写本の中にあるのではないかと気づかされる。さらにミアロープの言葉には、MAR.TU の理解を誤った方向に導く誤解も見つかる。イシン王朝の支配者はアモリ語の名を持たず、最後の支配者以外は MAR.TU との関わりはない。また複数の部族から成る MAR.TU を一くくりにして扱ってはならない事にも注意すべきである。

以下では行政経済文書と文学作品で言及される MAR.TU の比較検討をおこなうが、言うなればそれは同時代史料と後代史料における MAR.TU のイメージの比較でもある。

なお本稿では、MAR.TU の語には MAR.DU/DU<sub>8</sub>, MAR.AR.TU, MAR.TI<sup>2</sup> のヴァリエントがあり正確な読みを定めることができないため、MAR.TU と大文字表記のままにする。

## 第1章 行政経済文書

### 第1節 諸都市の MAR.TU

#### 1. ウル第3王朝期以前

行政経済文書に言及される MAR.TU についての総合的な調査研究は、1966年に G. Buccellati の著書 *The Amorites of the Ur III Period* が出版されるまでなされてこなかった。ブッチェラティはここでウル第3王朝期(前22-21世紀、以下「ウルIII期」)の行政経済文書中、MAR.TUに

言及する箇所 300 点以上を収集して総合的に論じた。そこには彼らがバビロニアの諸都市と経済的協力関係にあったことが見て取れる。参考までに文末にブッチェラティが収集した言及箇所をすべて挙げた(表1-6)。

MAR.TU の肩書を持つ人物の初出は、前3千年紀半ばのファラ Tell Fara 文書である。エスアグ E<sub>2</sub>-SU<sub>13</sub>-aĝ<sub>2</sub> (≠ A<sub>5</sub>-SU<sub>13</sub>-aĝ<sub>2</sub>) と言い、都市行政府から他の役人と同等の大麦を支給された。また土地売買契約の証人としても記載される(堀岡 2010: 40-41)。ファラ文書の中には MAR.TU の耕地が売買された記録もあり<sup>1)</sup>、今日では MAR.TU は農耕を知らないと理解されるが、じっさいはバビロニアで耕作に従事する MAR.TU もいた事に注意しなくてはならない。シリアの都市マリ Mari ではナニ *Nani* という人物が MAR.TU としての仕事をしエンマー麦の報酬を受け取った。他の受け取り手として神官や神殿名が並ぶので、MAR.TU は身分のある者と同等の処遇を受けたことが分かる(堀岡 2010: 41)。このような状況からは 'barbarians' のイメージは微塵も感じられない。

## 2. ウル第3王朝期

(ウル王の治世年には以下の略号を用いる。2代 Šulgi = Š, 3代 Amar-SUEN = AS, 4代 Šū-Sin = ŠS, 5代 Ibbi-Sin = IS)。

ウル III 期になると以前に比べ出土文書自体の数が飛躍的に増加し、MAR.TU の肩書を持つ人名が増え情報が多彩になる。この時期の MAR.TU 言及文書は、ドゥレーヘム (Drehem) 113 点、ラガシュ (Lagaš/Girsu) 142 点、イシン (Isin) 57 点、ウンマ (Umma) 17 点、ウル (Ur) 10 点、ニップル (Nippur) とラルサ (Larsa) が各 1 点となる (Buccellati 1966: 274-321)。

ドゥレーヘム (古代名プズリシュダガン *Puzriš-dagan*) はニップルの南東 10km の地にあり、第2代シュルギ Šulgi (前 2094 頃-前 2047 頃) により王室直属の家畜集積所として施設が置かれた。ヒツジ・ヤギ・ウシといった家畜の出納記録に記されるのは周辺地域からやってくる外国人がほとんどで、MAR.TU も家畜搬入/発送文書にしばしば記録される。文書は家畜の種類・頭数・受け取り手・責任者を記載するだけで使途については書かれませんが、稀に「ある家の婚礼用」「王のため」と記載される場合がある (ibid. 290)。

イシン文書に記録される MAR.TU についてブッチェラティは、「MAR.TU たちは皮革製品を受け取る顧客として記録される場合が多い。皮革製品の原料となる動物の皮を MAR.TU が運搬または納入することはなく、また皮製品の製造に携わることもない」と述べるが (ibid. 307-308)、ブッチェラティが示したイシン文書のほとんどは、サンダルや皮製容器製作のための材料(皮)を MAR.TU が受け取る記録である (BIN IX 324, 325, 326, 363, 383, 388, 390, 392, 395, 400, 405-411, 414, 419, 423, 425, 430, 433, 461)<sup>2)</sup>。イシンで未加工の皮を入手した MAR.TU は、イシン以外の地(自身の居住地か?)の製造所へ運ぶか、または自身でサンダルや容器を製造したのだろう。「玉座」と「王の武器」用皮革を受け取ったイダナム *Idānum* と名乗る MAR.TU の存在は (BIN IX 186, 表2)、ウル王室と MAR.TU との良好な関係の証拠となる。また「王の使節」と職名で呼ばれる MAR.

TU が完成品を受け取っているが (BIN IX 324, 表 2), 行政側で働く使節には靴やサンダルが行政側から提供されたことが明らかとなる。

ラガシュ (ノギルス) では行政府から食糧の定期支給を受ける者, 耕地を割り当てられる者, 食物支給文書に記載される者が多い。ほかに書簡, 動物・物品・衣類の記録, 裁判・契約文書がある。食物支給で時折 5 シラを受け取る「女性マルトゥ達 (MARTU-munus)」が集団として扱われる。逆に名前が挙がる 4 人の女性グループもあり, 彼女たちも 5 シラずつ支給された。MARTU であっても各自の名前が行政側に把握されている事実が分かる (Buccellati 1966: 312-314)。

ラガシュでは MARTU の肩書を持つ大多数がシュメール語やアッカド語の名前であるから, 都市内の住民として認知されていただろうし, 契約に際して証人になる MARTU は確実に市民権を得ていたと思われる。また法律文書では都市民と同じ処遇であることが確かめられる (表 5 参照)。なおラガシュの MARTU の子供たちは MARTU とは呼ばれない。

ウル文書は 10 点と少なく, 内訳は定期支給 4 点のほかは, 労働者, 動物, 衣類, 物品の記録である。ウンマは MARTU 言及文書そのものが少ない。ラガシュと同様に食物支給と定期支給が主である。そのほかニップルとラルサは 1 例ずつアモリ語の名前を持つ MARTU が見られる<sup>3)</sup>。

以上見てきたように MARTU と都市との関わりはそれぞれの都市で異なる。ドゥレーヘム, イシン, ウルではシュメール語/アッカド語の名前に改名しておらず, 外国人のままであることは明らかで, このような MARTU の中には本国との間を家畜や物資の輸送や使節として往来する者もいたであろう。後に触れるが, ドゥレーヘム文書にしばしば現れる MARTU の首領ナプラーヌム *Naplānum* は, ユーフラテス河中流域と南部の間を行き来していた。

MARTU が都市行政の中で役人として働く例が散見される。たとえば MARTU のアッラ *Alla* が当時王子であったシュ・シン *Šu-Sin* のために輸送管理官として働いた例や, ウンマではクリ *Kuli* という名の MARTU が弁務官としての役職にあり同時に輸送管理官として働いた例がある<sup>4)</sup>。ラガシュでも「王の使節」の肩書を持つ MARTU がいる<sup>5)</sup>。

## 第 2 節 東方の MARTU・西方の MARTU

### 1. テイドウヌム<sup>6)</sup>

ウル III 期ウル王室と良好な関係を保ちつつバビロニア都市内で多数の MARTU が活動する一方で, ウル王室と敵対する MARTU への言及も同時代史料の中にはある。その証拠の 1 つが「戦利品リスト」に挙がる kur MARTU であり<sup>7)</sup>, もう 1 点は ŠS4 年の年名にある「MARTU の要塞」である。

ウル王はバビロニア本国の東方・北東方にあたるイラン・北メソポタミア方面へと遠征を繰り返したが, その成果としてシマシュキ (*Šimāški*)・シムルム (*Simurru*) 国などからの戦利品が本国へと運ばれた。戦利品記録の中にはしばしば「MARTU 国からの戦利品 (nam-ra-ak kur MARTU)」が見られる。戦利品がバビロニア本国へ送られてくるのであるから, この記録にある「MARTU 国」は間違いなく戦争相手である。しかし MARTU のすべてがウル王朝と敵対し

たのではない事を忘れてはならない。

ウル III 期直前のラガシュの都市支配者グデア(前 2144-2124<sup>7)</sup>)の建築碑文の中に「MAR.TU 国」に言及する箇所があり, 当時のバビロニアでは 2 か所の「MAR.TU 国」が知られていたことが分かる<sup>8)</sup>。

Gudea Statue B (Edzart 1997: 34)

Col. vi (台座背面) 3) u<sub>3</sub>-ma-num 4) hur-saġ me-nu-a-ta 5) ba<sub>11</sub>(PU<sub>3</sub>)-sal-la

6) hur-saġ-mar-tu-ta 7) na<sup>4</sup>na gal 8) im-ta-e<sub>11</sub> … 13) ti-da-num<sub>2</sub>

14) hur-saġ-mar-tu-ta (台座左側面) 15) nu<sub>11</sub>-gal lagab-bi-a 16) mi-ni-tum<sub>2</sub>

〔グデアはニンギルス神殿建設にあたり神殿を荘厳するための材料として) メヌア国のウマヌムとマルトゥ国のバサラ (=ビシュリ) から大きな NA 石を運んでこさせ, … マルトゥ国のティダヌムから大きなアラバスターを塊のまま彼にもたらした。

*Ba<sub>11</sub>-sal-la* とは, アッカド王シャルカリシャリ *Šar-kali-šarri* (前 22 世紀) が MAR.TU を倒した地 *Basar* 山 (=ビシュリ山) であり, ビシュリ山麓からユーフラテス河中流域・ハブル河流域にかけて半農半牧畜を営む部族がいた地域である。一方のティドゥヌムが住まう「MAR.TU 国」の位置をミカロウスキ P. Michalowski はハムリン山地であると示し, さらにマルケシ G. Marchesi がティドゥヌムに su-「bir」と振り仮名をつけるシュルギ王碑文をミカロウスキ説の傍証として挙げた<sup>9)</sup>。ウル王たちは専らイラン勢力と戦うのだが, ティドゥヌムが活動するハムリン山地はそのイランへの遠征路の入り口に当たった。

ティドゥヌムとウル王朝の対立は ŠS4 年年名にも反映されている。mu d<sub>3</sub>su-d<sub>3</sub>suen lugal uri<sub>5</sub><sup>ki</sup>-ma-ke<sub>4</sub> bad<sub>3</sub> mar-tu mu-ri-iq-ti-id-ni-im mu-du<sub>3</sub>-ta は『シュ・シン, ウルの王, が MAR.TU の要塞, (その名は)「*Muriq-Tidnim*」を建設した年』を意味する。この要塞は通常 MAR.TU の侵入を阻止するために築かれたと解釈されるが, *Muriq Tidnim* は「ティドゥヌムを遠ざけておく」事を目的とする要塞であって「MAR.TU を遠ざけておく」ものではない。ウル III 期には他にもシュルギの bad<sub>3</sub> ma-da 「国土の要塞」, イビ・シン *Ibbi-Sin* の bad<sub>3</sub>-gal Nibru<sup>ki</sup> Urim<sup>ki</sup> 「ニップルとウルの大なる要塞」が建設された。もし bad<sub>3</sub> MAR.TU が「MAR.TU を排斥する要塞」と解釈されるなら, bad<sub>3</sub> ma-da も「国土を排斥する」ために建設された要塞と理解しなくてはならない。しかしシュルギもイビ・シンも国土やニップル・ウルの排斥など望んでおらず, ひたすら国土や主要な都市の防衛を目指していたに違いない。にもかかわらずシュ・シン建設の「MAR.TU の要塞」に限り「MAR.TU を排斥するための要塞」と解釈する事に問題はないのであろうか。シュ・シンの要塞の目的はその名称 *Muriq Tidnim* 「ティドゥヌム (部族) を遠ざける」に表されており, 排斥する対象を MAR.TU の中の一部族にのみ限定する。したがって *Muriq Tidnim* とは通説のように MAR.TU の侵入を防ぐのではなく, むしろティドゥヌムを排斥する事により「MAR.TU にとって何らかの利益となる要塞」と理解すべきであろう。

## 2. 西方の MARTU

### —MARTU・マリ・ウル王室—

グデア碑文のもう一方の MARTU 国はビシュリ山付近に位置するが、ウル王はこちらの方面へ遠征することはなかった。ウル III 王朝初代ウルナンマ Ur<sup>d</sup>Namma(前 2094-2047 頃)が当時ユーフラテス河中流域一帯を支配したマリのシャッカナック (*šakkanakku*, 都市支配者称号) と同盟を結んだ事で、西方への不安が解消されたからである。

ウルナンマの義理の娘タラーム・ウルマ *Tarām-Ur (i) ma* とはマリ・シャッカナック第7代アピル・キン *Apil-kin* の娘であり、シュルギと結婚しアマルスエンの母となった。アマルスエンが王位を継いだことでウル王室の中では王母タラーム・ウルマとマリから付き従ってきた随員が一大勢力を形成したと考えられる。

### —ナプラーヌム—

ウル王室とマリの同盟に関わると推測される MARTU が前出のナプラーヌムである。彼の名はドゥレーヘム文書で Š44 年から IS2 年までのおよそ 20 年間に 80 回以上言及されており<sup>10)</sup>、言及回数の多さは MARTU の中でも突出している。しかも複数人の MARTU が記録される場合、彼はつねに筆頭の位置にあり MARTU のリーダー格であることは間違いない<sup>11)</sup>。ナプラーヌムはしばしばバビロニアとシリアのユーフラテス河中流域の間を行き来していたようだ (Steinkeller 2004: fn. 68)。ヤング G. Young が発表した粘土板 Wabash 1 には、ナプラーヌム MARTU を筆頭にエブラ *Ebla* の人イリ・ダガン *Ili<sup>d</sup>Dagan*, ウルシュ *Uršu* の人ブドウル *Budur*, マリの人イシュメ・ダガン *Isme<sup>d</sup>Dagan* (計 4 人) への家畜引き渡し記載される (Young 1992: 179)。ナプラーヌムにのみ配送先として「MARTU 国へ」と添え書きがある。ヤングは後者 3 名がすべてシリアのユーフラテス河中流域の都市出身者であることから MARTU 国も同じ方角にあるとした。ナプラーヌムにのみ配送先が明記されたのはキシグ *Kisig* (後述) にもナプラーヌムの住居があるからであろう。他にもユーフラテス河中流域へナプラーヌムが赴いた事実を示唆する文書がある (Buccellati 1966: PlI no.2 Appendix 2)。

ところでアビ・アムティ *Abi-amuti* (「ヤムートゥム部族の族長」) の名で登場する MARTU がいる。当人・彼の妻シャト・シュルギ *Šāt<sup>d</sup>Šulgi* MARTU, さらに 3 人の MARTU へそれぞれヒツジを発送した記録であるが (TRU 267, *ibid.* 79), 「ヤムートゥムの族長」という称号を人名替わりに用いる MARTU のその妻がウルの王妃と同一人である可能性をブッチェラティが指摘した (Buccellati 1966: 338-339 fn.98) もしこれが証明できるなら重要な出来事である。MARTU の族長がウル王室と姻戚関係を結ぶほどの地位に昇りつめたことになるからである。

*yamūtum* のヴァリエント *amuti* と同名の MARTU 国の王 (*lugal mar-tu/tum*<sup>K1</sup>) が前 3 千年紀半ばのエブラ文書 *MEE 7 Testo 46 (vii 9)* に見られ、同じ文書内で「ビナシュ (*bi<sub>2</sub>-na-aš<sub>2</sub>*<sup>K1</sup>) の王」としても言及される (*ibid.* i 35)。つまり「ビシュリの王」である (Archi-Biga 2003: 25, 堀岡 2010: 47)。シリアの MARTU 国の王アムティ *Amuti* がヤムートゥム部族の名祖となったのではない

だろうか。ナプラーヌムの随員の中にヤムートゥム部族の使者が加わる事実は<sup>12)</sup>, この国がナプラーヌムの故国である可能性を暗示し, その上ウル王室との関わりやマリ出身者と行動を共にするナプラーヌムの姿から, この時期「ウル王室+マリ+ナプラーヌム一族」の同盟が機能していたと考えられる。

ナプラーヌムは, ウルの西38kmのユーフラテス河沿いに古くから存在した都市キシグ(現 Tall al-Lahm)に居住し(RGTC 2: 36, RLA V 620-622), ここからしばしばウルへ出かけた(未出版 HSM 1911.6.37:1-6 日付なし)。ナプラーヌムがキシグに在住した事を示す文書で日付が確認できる例は AS8 年の文書1点のみだが, ŠS4 年以降にキシグからウルへやってきた MAR.TU たちの記録や IS2 年に息子のイリ・バブム *Ili-babum* がウルで活動した記録があるので(Steinkeler 2004: 39 fn.64) その後も引き続き居住したと思われる。

シュタインケラーは, ナプラーヌムの息子シュルギ・アビ *Šulgi-abi* が大量の穀粉・ビールを舟に積み込んだ記録から, 船荷はキシグに送られたと判断し, ナプラーヌムがキシグに広大な土地を保有していたと推測する(Steinkeller 2004: 39 fn. 64)。またナプラーヌムへ贈り物(大量の大麥)が送られており, 彼が高い身分にあった証拠であるとする(未出版文書, Steinkeller 2004: 39 fn. 64)。ナプラーヌムの兄弟・息子・義理の娘や随員数名それぞれへのヒツジ発送記録(*TCL II 5508*)やナプラーヌムと彼の妻それぞれへのヒツジ発送記録(Sauren, 1978 text 349:8- Rs. 1, Steinkeller 2004: 40 参照)がドゥレーヘムから出土しており, ナプラーヌムとその一族がバビロニア南部の都市内にすでに定住していた事が知られる。

ナプラーヌムがウルを時折訪問した理由について文献史料から知ることはできないが, ウルはディルムン *Dilmun* 交易の一大拠点であり, ナプラーヌムとディルムンとの関わりも確かめられる<sup>13)</sup>。ナプラーヌムはディルムン交易に携わり発展していったのだろう。

#### —ラルサ王朝—

ランズベルガー B. Landsberger は, ラルサ王朝初代のナプラーヌムと, ドゥレーヘム文書のシュルギ後半からシュ・シンの治世下までの間にしばしば言及されるナプラーヌム MAR.TU とを同一人物とする考えを示した(Landsberger 1924: 237 fn.6, Steinkeller 2004: 37 fn. 55)。ブツェラティは両者の繋がりには低いとしたが<sup>14)</sup>, すでに触れたようにナプラーヌムが MAR.TU の富裕なリーダーとなり成功者として意識され, その結果ナプラーヌムが王朝の名祖に取り入れられた可能性は十分考えられる。

ナプラーヌムがドゥレーヘムの行政経済文書に登場するのはシュルギがプズリシュダガンを設けて(Š44 年)から後のことである。シリアを故国とするナプラーヌムがユーフラテス河中流域とプズリシュダガンを結ぶ輸送路を活用し, ウルに近いキシグに居留地を建設してディルムン交易をはじめとする経済活動をおこない, ラルサ王朝の礎を築いたと仮定してもあながち間違いではない。

王朝は15代つづくが7代目まではアモリ語の名前を持つか, あるいは MAR.TU に関わる称

号を持つ (Fitzgerald 2002: 25-133). 2代 *Iemšium*, 3代 *Sāmium*, 5代 *Gungunum*, 7代 *Sāmū-El* がアモリ語の名前であり, 4代 *Zabāia* と 6代 *Abī-sarē* がそれぞれ「MAR.TU のチーフ (*ra-bi<sub>2</sub>-an* MARTU/ *ra-bi<sub>2</sub>-a-nu-um* MARTU)」の称号を用いる<sup>15)</sup>. 8代 *Nūr-Adad* 以降王朝が替わるが, 13代 *Warad-Sin* と 14代 *Rim-Sin* の父 *Kudur-mabuk* は「MAR.TU 国の父 (*ad-da-kur-MAR-TU*)」「Emutbala の父 (*ad-da-e-mu-ut-ba-la*)」と呼ばれた<sup>16)</sup>.

## 第2章 文学作品

### 第1節 形容句

前章で同時代史料を調査した結果, バビロニア本国内へ暴力的に侵入した MARTU は検証されなかった. ウル王朝と敵対した MARTU の一部族ティドゥヌムも遠征先で戦った相手である.

以下では文学作品で使われる MARTU の形容句について取り上げるが, 一口に文学作品といえども『哀歌』などの文学作品と『ウル王室書簡』(以下『書簡』)と称される 'literary letters' とでは, MARTU に対する表現に差異が認められる事が明らかとなるだろう.

#### ① 「家を知らず, 都市を知らず」

##### 1. 『イシュメ・ダガン讃歌』

(A praise poem of Išme-Dagan (Išme-Dagan A + V), ETCSL c.2.5.4.01)

266) mar-tu e<sub>2</sub> nu-zu iri<sup>ki</sup> nu-zu 267) lu<sub>2</sub> lil<sub>2</sub>-la<sub>2</sub> hur-saĝ-ĝa<sub>2</sub> tuš-a

「マルトゥ, 家を知らず都市を知らない者, 山麓に住む lil<sub>2</sub>-la<sub>2</sub> の人」

#### ② 「山に住む」「穀物を知らない (= 農耕を知らない)」

##### 1. 『アガデの呪い』 (The cursing of Agade, ETCSL c.2.1.5)

46) mar-tu kur-ra lu<sub>2</sub> še nu-zu

「山のマルトゥ, 穀物を知らない者」

##### 2. 『ルーガルバンダとアンズ一鳥』 (Lugalbanda and the Anzud bird, ETCSL c.1.8.2.2)

304), 370) mar-tu lu<sub>2</sub> še nu-zu hu-mu-zig<sub>3</sub>

「マルトゥ, 穀物を知らない者 (が), 招集された／蜂起した」

##### 3. 『シュルギ讃歌 B』 (A praise poem of Šulgi (Šulgi B) (ETCSL c.2.4.2.02)

213) 4-kam-ma-še<sub>3</sub> mar-tu lu<sub>2</sub> kur-ra A [x (x)]

「4 回目に (私は通訳者として) マルトゥ, 山の人, に (奉仕することができる)」

#### ③ 「牧草地に横たわる (／寝る) MARTU 国」

##### 1. 『エンメルカルとアラッタの君主』 (Enmerkar and the lord of Aratta, ETCSL c.1.8.2.3)

144) kur mar-tu u<sub>2</sub>-sal-la nu<sub>2</sub>-a

「マルトゥ国, 牧草地に寛ぐ (ところの)」

#### ④ 「耕地を荒らす」「敵意ある者」



## 1. 『マルトゥを山間に留めておく事についてシャルム・パニからシュ・シンへの書簡』

Letter from Šarrum-bani to Šu-Suen about keeping the Martu at bay (ETCSL c.3.1.15)

5) mar-tu ma-da-aš mu-un-šub-šub-bu-uš

6) bad<sub>3</sub> du<sub>3</sub>-du<sub>3</sub>-de<sub>3</sub> giri<sub>3</sub>-bi ku<sub>5</sub>-ru-de<sub>3</sub>

「マルトゥが国土の中へ繰り返し侵入した。(王は) 要塞を建設し進入路を断つよう私に仕事を課した」

## 2. 『イギフルサグ要塞についてアラドムからシュルギへの書簡』

Letter from Aradġu to Šulgi about the fortress Igi-hursaġa (ETCSL c.3.1.06)

A9) mar-tu gu<sub>2</sub>-erim<sub>2</sub> bi<sub>2</sub>-in-gi-gi

「反乱(者)マルトゥが戻ってきた」

## 3. 『穀物購入についてイシュビ・エラからイビ・シンへの書簡』

Letter from Išbi-Erra to Ibbi-Suen about the purchase of grain (ETCSL c.3.1.17, Michalowski 2011: 416-432)

7) inim mar-tu lu<sub>2</sub>-kur<sub>2</sub>-ra ša<sub>3</sub> ma-da kur<sub>9</sub>-ra ġeš bi<sub>2</sub>-tuku

「敵マルトゥが国土に入ったという報告を私は聞いた」

## ⑤極端な蔑視表現

## 1. 『マルトゥ神の結婚』

The marriage of Martu (ETCSL c.1.7.1)

136) uzu nu-šeġ<sub>6</sub>-ġa<sub>2</sub> al-gu<sub>7</sub>-e137) u<sub>4</sub> til<sub>3</sub>-la-na e<sub>2</sub> nu-tuku-a138) u<sub>4</sub> ba-ug<sub>7</sub>-a-na ki nu-tum<sub>2</sub>-mu-dam「生肉を食し, 生涯家を持たず, 死して葬らず<sup>?</sup>」

紙数に限りがあるため従来 of 訳との照合を省略するが, ①から③までは格別悪意のある表現のようには見えない. これまでの解釈には MARTU に対する先入観からネガティブに捉えようとする傾向が見られる. 故国を離れバビロニアへ移住する MARTU たちが本来どのような生活をしてきたかなどバビロニア都市民には知る術もなく, バビロニアに到着してから都市民として定着するまでの間, MARTU はまだ自身の家を所有しておらず家族を形成するには至らない. このような状況を「家を知らず」(①-1) と表現する事により都市民が外来者を差別化したと思われる. しかしはたして 'barbarians' とまで意識されていたのだろうか. ②-1 ではアッカド王朝がいに繁栄していたかを証す事象として諸外国がニップルのイナンナ神殿へ朝貢する様子が描かれており, MARTU もまた健康な牡ウシや牡ヤギを連れてイナンナ神殿に入ると 47 行目にはある. そこには「都市を侵略する者」の姿はない. さらにウルクでエンキ神が耕地整備をおこなうさいに MARTU が労働者として招集されるが, 従来はあたかも妨害するかのよう「MARTU が蜂起した」と訳した (②-2). ②-3 はウル王シュルギが MARTU に彼らの言葉であいさつする場面である. ④は漠然と出身地を想像して「草地に寛ぐ MARTU の国」と表現したものであろう.

決して 'barbarians' の意味を持たせているのではない。

ところが『マルトゥ（神）の結婚』と『書簡』では MARTU に対して敵意に満ちた表現となる。とくに前者に見られる表現は MARTU を都市住民とはまったく異質で野蛮な習慣を持つ者として描く。MARTU（神）との結婚を望むカザル Kazallu の王の娘に向かい、女友達が結婚を阻止する為に思いつく限りの MARTU（神）の悪口を告げる場面である。カザルは穀物が集積する輸送中継地であったのだろう (Michalowski 2011: 187)。王の娘が外来者 MARTU と結婚すれば次代を継ぐ MARTU が輸送路を支配することになる。そのためそれまで既得権益を恣にしてきたカザルの有力市民は力の限りに結婚の邪魔をしようとするのであるから、悪意に満ちた表現になるのは当然の事である。

④-1 のシャルム・パニはシュ・シンの家臣との設定である。建設すべき要塞の名称 *Muriq Tidnim* が王の指示の前に明記されている。

3) bad<sub>3</sub> gal mu-ri-iq tidnim-e di<sub>2</sub>-me-de<sub>3</sub> kiĝ<sub>2</sub>-gi<sub>4</sub>-a-aš mu-e-gi<sub>4</sub>

「大なる要塞 *Muriq Tidnim* の建設にとりかかるようにと貴方は指示しました。」

これを見れば ŠS4 年年名にある *Muriq Tidnim* が MARTU を遠ざけておくための要塞と今日解釈されるのも無理はない。また 7-8 行目にシュ・シンが指示した理由として、MARTU がティグリス河とユーフラテス河の間の防御施設の裂け目から入り耕地を荒らすとあるので、MARTU が「耕地を荒らす遊牧民」と意識されるようになった原因の一つがここにあるのだろう。

④-3 イビ・シンに仕えるイシュビ・エラは、穀物の買い付けにイシンからカザルまで行くよう王から命じられた。穀物 1 グル (約 300 l) が銀 1 ギン (約 8.3g) の相場のところ、銀 20 ゲン (約 600kg) が与えられた。ところがイシュビ・エラは買い付けた穀物 72,000 グル (約 21600kg) すべてを自身の都市イシンへ運ばせてしまった。MARTU が国内へ侵入し穀物貯蔵所を次々と占拠したため脱穀に出すことができなかった、というのがその理由であるが、つまりは横領の言い訳として MARTU を引き合いに出しているのである。このように『書簡』の中では MARTU はすべて敵として登場する。

## 第 2 節 イシン王朝期の文学作品

ウル王朝崩壊後、バビロニアの地にはイシン王朝とラルサ王朝が並び立ち覇を競いあった。まず優勢であったのはイシン王朝で、ウル第 3 王朝の正当な後継者と主張し、聖都ニップルと首都ウルを支配した。ウル王朝の王権継承は、ニップルとウルの記事センターをも引き継ぐ事であり、後継者の正統性を国の内外に広く知らしめるために数多くの文学作品が書記たちにより著された。『シュメールとウル滅亡哀歌』もこのイシン王朝のもとで作成されており、ウル敵はグティウム・アンシャン・ティドゥヌム (MARTU の一部族) となっている。

イシンの支配者にアモリ語の名を持つ者はおらず、MARTU との関わりは最後の王ダミク・イリシュ *Damiq-ilišu* になるまで見られない。イシン王朝は MARTU 系のラルサ王朝とはおのずから異なる出自である事を強調するために、MARTU に自分たちとは異なる特徴を表す形容

句を付す事で差別化を図った。しかし敵として扱っているのではない。ウル第3王朝を滅した忌むべき相手はあくまでもデイドゥヌムであった。

### 第3節 『ウル王室書簡』

ミカロウスキ P. Michalowski による学位論文『ウル王室書簡集』(1976年)はウル王と家臣たちとが交わしたとされる書簡類についての研究で、最近書物として出版された(Michalowski 2011)。書簡の内容がウル III 期の歴史的事件をテーマとするため、当時の歴史を再構成する上で活用されてきた。ただし 'literary letters' と添え書きされるように、じっさいに粘土板に記した手紙ではなく書記により作成されたもので、しかもウル第3王朝滅亡からおよそ250年後のバビロン第1王朝第6代ハンムラビ *Hammurabi* から後の時代にニップルとウルの書記学校で教材として使われたコピーしか残っていない。

ウル III 期に作成されたオリジナルが存在するのか否かについては賛否両論がある。2001年にユベール F. Huber が言語学の分野から再調査し、『書簡』の中で使われるウル III 期には見られない正書法やウル III 期行政経済文書に登場しない人名を取り上げ、すべての書簡が後代の創作であると結論づけた (Huber 2001)。これに対し『書簡』には同時代のオリジナルがあるとする立場でハローが反論しているが (Huber 2001: 188-192; 192-195, Hallo 2010: 397-398)、ウル III 期にはない名称 *bad<sub>3</sub> igi-hur-saĝ-ga<sub>2</sub>* が使われている書簡はやはり後代の創作と考えるべきだろう<sup>17)</sup>。何よりもオリジナルらしきものは一つも見つかっていないのであるから、ユベールが唱える『書簡』はすべて後代の創作」という指摘に筆者は賛同する。

『書簡』にはウル III 期行政経済文書に同名人が認められる者、また今日知られる歴史的事件が多数含まれるなど、ニップルやウルの書記たちが伝承を組織的に伝えてきた様子が窺われる。人名は伝承されるうちに変化する事もあるが、しかし同時代史料に無い MAR.TU に対するネガティブな表現がハンムラビの時代から生じてくるのはなぜか。

ハンムラビ以前のバビロンは小規模な地方都市に過ぎず、都市神マルドゥク *Marduk* もエンリル *Enlil* 神を頂点とするシュメール・パンテオンの中の低位の神であった。ところがハンムラビはライバル国を制覇してメソポタミア全土を掌中に収めてからは強力な中央集権政策を打ち出し、地方神マルドゥクを最高神エンリルの地位にまで引き上げたのである。古くからのシュメール文化を固持してきたニップル(エンリル神の聖都)の神官や書記は当然のごとくハンムラビの強硬な政策に反発し、MAR.TU を祖先に持つハンムラビを貶める手段として MAR.TU を悪者に仕立てた『書簡』を数多く作成したのである<sup>18)</sup>。今日の我々は MAR.TU に対して「MAR.TU すなわち 'barbarians'」というイメージを抱いているが、それはハンムラビに反抗したニップルの書記たちの目論見が少なからず成功した結果にほかならないと言えるだろう。

#### 註

1) *SR* p.31 *Rs. ii 5) aša<sub>7</sub>-mar-DU*.

- 2) *BIN IX* 所収文書は正式な発掘で得られたものではないが、イシン文書であることは確か。皮革製造工房のアーカイヴであることについては Edzart 1957: 59 fn. 273 を見よ。
- 3) エシュヌナ Ešnuna については Buccellati 1966 の出版当地出土文書が未出版だったため扱いが無い。
- 4) ġiri<sub>3</sub> *Al-la* MARTU maškim (*PDTI* 171, 表 1) Buccellati 1966: 340 no. 101. ġiri<sub>3</sub> Ur-am<sub>3</sub>-ma, Inim<sup>d</sup>Sara<sub>2</sub> u<sub>3</sub> *Ku-li* MARTU lu<sub>2</sub> maškim-me (*CCTE C 1 vi 9'-11'*, 表 4)。
- 5) Ur-dLama MARTU lu<sub>2</sub> kin-<gi<sub>4</sub>>-a lugal (*NSGU* 33: 9-11, 表 5)。
- 6) *Tidnum* は MARTU の一部族の名称。Buccellati 1966: 243 fn. 46-50, 244 fn. 52-54。
- 7) 「戦利品リスト」と呼ばれる文書があるわけではないが、遠征先から本国へ送られてきた家畜や物品のリストを本稿ではこのように呼ぶ。Michalowski 2011: 101-102 参照。「戦利品 (nam-ra-ak)」と添え書きされる場合もある。
- 8) グデア碑文では kur「高地」ではなく hur-saġ「山麓」を用いる。またこの時期 *Tidnum* は *Tidanum* と表記された。
- 9) Marchesi 2006: 13 fn. 40. Klein Šulgi, p.143 ad 117; p.159 ad 116-117. 前 3 千年紀の Subir はディヤラ地域北方のトランスティグリス地域を指す。
- 10) ナブラーヌム言及文書は合計 85 枚。ドゥレーヘム・ラガシュ・ウルク・ウルから出土 (Fitzgerald 2002: p.20)。シュルギ後半からイビ・シン初期まで間断なく見られる。Fitzgerald 2002: 165-167, Appendix 2: List of Naplānum.
- 11) たとえば 20 人の MARTU のグループの代表としてヒツジ 5 頭を支給される。Grégoire 1996: text Ashm. 924-547.
- 12) *Na-ap-sa-nu-um* lu<sub>2</sub> kiġ<sub>2</sub>-gi<sub>4</sub>-a *Ia<sub>3</sub>-a-ma-tum* *TCL* II 5508. Buccellati 1966: 245 fn. 58.
- 13) ドゥレーヘムのヒツジ発送記録の 1 枚にナブラーヌムにつづいてディルムンの人の記載がある。ibid 250.
- 14) Landsberger 1924: 237 fn. 6, Steinkeller 2004: 37 fn.55 および Buccellati 1966: 319-320 参照。
- 15) Frayne 1990: 112, E4.2.6.1.
- 16) Frayne 1990: E4.2.13a.2, E4.2.13.15, 17, 18, 19, 20, 23, 26, 29. *Emutbala* は MARTU の一部族名。*Yamūtum*, *Yahmudu* は *Emutbala* と同じ。Buccellati 1966: 242 fn. 38-41, 243 fn. 42-45, 244 fn. 55, 56, 245 58, 61.
- 17) 名称 bad<sub>3</sub> igi-hur-saġ-ġa<sub>2</sub> についてミカロウスキは 1976 年の段階では Š37 年に建設された bad<sub>3</sub> ma-da の別名としていたが (Michalowski 1976: 84), 2011 年にはハンムラビが建設した要塞と考えを替えた (Michalowski 2011: 231)。
- 18) ハンムラビの政策について：中田 1999：154-158, マルドゥク神について：Sommerfeld 1989: 63-364, Wiggermann 1995: 1869 参照。

略号

- BIN IX* : Crawford, V. E. 1954 *Sumerian economic texts from the first dynasty of Isin*. New Haven.  
ETCSL: The Electronic Text Corpus of Sumerian Literature.  
*MEE 7*: D'Agostino, F. 1996 Testi amministrativi di Ebla archivio L. 2769, Materiali per vocabolario sumerico; 3 [Materiali epigrafici de ebla; 7]  
*NSGU*: Falkenstein A. 1956-57 *Die neusumerischen Gerichtsurkunden*, vols. I-III. München.  
*RGTC 2* : Edzard D. O.-Farber G. 1974 *Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes* Band 2: *Die Orts- und Gewässernamen der Zeit der 3. Dynastie von Ur*. Dr. Ludwig Reichert. Wiesbaden.  
*RIA* : *Reallexicon der Assyriologie und Vorderasiatischen Archäologie*. Walter de Gruyter. Berlin-New York.  
*SR* : Edzard, D. O. 1968 *Sumerische Rechtsurkunden des III. Jahrtausends aus der Zeit vor der III. Dynastie von Ur*. Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, München.  
*ZA* : *Zeitschrift für Assyriologie und vorderasiatische Archäologie*.

引用・参考文献

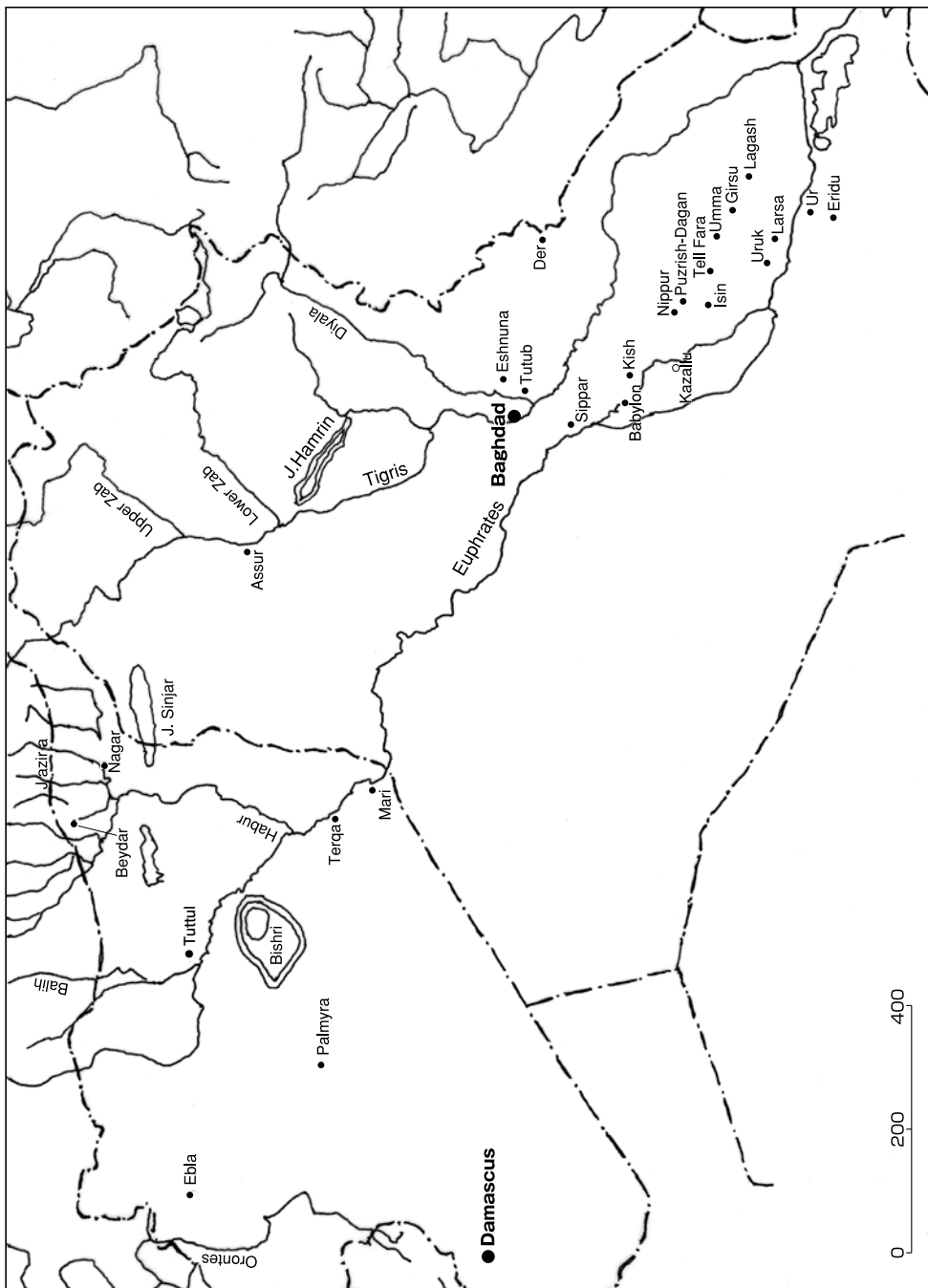
- Archi, A. – Biga, M. G. 2003, "A Victory over Mari aCuneiform and the Fall of Ebla," *Journal of Cuneiform Studies* 55, American Schools of Oriental Research. 1-44.  
Buccellati G.1966 *The Amorites of the Ur III period*, Istituto Orientale di Napoli, Pubblicazioni del Seminario di Semitistica a cura di Giovanni Garbini, Ricerche I. Naples.  
Edzard D. O. 1997 *Gudea and His Dynasty. The Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods* vol. 3/1. University of Toronto Press. Toronto Buffalo London.  
Frayne D. 1990 *Old Babylonian Period (2003-1595 BC). The Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods* 4. University of Toronto. Toronto.  
Frayne D. 1997 *Ur III Period (2112-2004 BC), The Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods* 3/2. University of Toronto Press. Toronto.  
Fitzgerald, M. A. 2002 *The Rulers of Larsa*, Dissertation of the Yale University.  
Hallo W.W. 1998 "IV.4. Two-Prayers to Amurru", in *The World's Oldest Literature: Studies in Sumerian Belles-Lettres. Culture & History of the Ancient Near East*. Brill, Leiden Boston. 2010. 319-330.  
Hallo W.W. 2006 "A Sumerian Apocryphon? The Royal Correspondence of Ur Reconsidered", *Approaches to Sumerian Literature: Studies in Honour of Stip (H.L.J. Vanstiphout)*, Michalowski P. and Veldhuis N. (eds.) Leiden: Brill. 397-410.  
Huber, F. 2001 "La Correspondance Royale d'Ur: un corpus apocryphe." *ZA* 91. 169-206.  
Landsberger B. 1924 "Über die Völker Vorderasiens im dritten Jahrtausend," *ZA* 35. 213-38.  
Marchesi, G. 2006 *LUMMA in the Onomasticon and Literature of Ancient Mesopotamia. History of the Ancient Near East Studies*. Sargon, Padova.  
Michalowski P. 1976 *The Royal Correspondence of Ur*. Ph.D. Dissertation, Yale University.  
Michalowski P. 2011 *The Correspondence of the Kings of Ur*. Eisenbrauns, Winona Lake.  
Röllig, W. 1976-1980 "Kisiga, Kissik", *RIA* 5 620-622.  
Sauren, H. 1978 *Les tablettes cuneiformes de l'époque d'Ur des collections de la New York Public Library*. Publications de l'Institut Orientaliste de Louvain-la-Neuve: Université catholique de Louvain.  
Steinkeller, P. 2004 "A History of Mashkan-shapir and Its Role in the Kingdom of Larsa", in Stone E.C. &

- Zimansky P. (eds.) *The Anatomy of a Mesopotamian City: Survey and Soundings at Mashkan-shapir*. Eisenbrauns, Winona Lake. 26-42.
- Sommerfeld, W. "Marduk. A. I.", *RIA* 7. 360-370.
- Van de Mieroop, M. 1992 *Society and Enterprise in Old Babylonian Ur*. *Berliner Beiträge zum Vorderen Orient*, Band 12. Dietrich Reimer Verlag, Berlin.
- Wiggermann F. A. M. 1995 "Theologies, Priests, and Worship in Ancient Mesopotamia", in J. M. Sasson et al. (eds.) *Civilizations of the Ancient Near East*. Hendrickson Publishers, Michigan. 1857-1881.
- Young, G. D. 1992 "Appendix: Wabash 1 and a Note on Ur III Syria", in *New Horizons in the Study of Ancient Syria*, ed. by M. Chavalas & John L. Hayes *Bibliotheca Mesopotamica* 25. Undena Publications, Malibu. 176. (= Wabash 1)
- 中田一郎 1999 『原典訳 ハムムラビ「法典」』古代オリエント資料集成1, リトン, 東京.
- 堀岡晴美 2010 「南メソポタミア文明に貢献したマルトゥ」『若手研究者成果論集』文部科学省「特定領域研究」「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」36-61 頁.

年表

	マリ (シリア)	メソポタミア
前 2900		<b>初期王朝</b>
前 2500		(ファラ文書)
前 2350	<b>シャッカナツク期</b>	<b>アッカド王朝</b> 1代サルゴン
		5代シャルカリシャリ
前 2150		<b>グティウム王朝</b> ラガシュグデア
		<b>ウル第3王朝</b>
前 2100	7代アビル・キン (タラーム・ウリマ→)	1代ウル・ナンマ
		2代シュルギ
前 2050		(ブズリシュ・ダガン建設) 3代アマル・スエン
		4代シュ・シン
		5代イビ・シン
前 2000		(ウル第3王朝滅亡)
	<b>アムル王朝</b>	<b>イシン王朝</b> <b>ラルサ王朝</b>
		1代イシュビ・エラ      1代ナブラーヌム
前 1780	2代ジムリ・リム (ハンムラビによる征服)	<b>バイロン第1王朝</b> 15代ダミク・イリシュ      14代ムリ・シン 6代ハンムラビ      (ハンムラビによる征服)

シリア・メソポタミア地図



基礎地図：Sallaberger, W. - Westenholz, A., 1999, *Mesopotamien: Akkade-Zeit und Ur-III-Zeit*. Orbis Biblicus et Orientalis 160/3, Freiburg & Göttingen 付録、筆者加工。



表1. 動物収入・発送

Š = Sulgi, AS = Amar-SUEN, ŠS = Šu-Sin, IS = Ibbi-Sin

粘土板番号	出土地	日付	MAR.TU言及箇所
A 2688 (App. 16)	Drehem	AS 5 IV 20	2) <i>I-na-ba-nu-um</i> MAR.TU
A 2905	Drehem	Š 46 VII 3	4) <i>Mar-da-ba-nu-um</i>
A 2947	Drehem	Š 44 VI 25	4) <i>A<sub>2</sub>-bi<sub>2</sub>-lum</i> dumu <i>Ik-šu-tum</i> MAR.TU
A 2996 (App. 7)	Drehem	Š 47 I 2	9) <i>Ma-ni-um</i> MAR.TU
A 4648 (App. 4)	Drehem	Š 44 VIII	16) <i>A-u<sub>3</sub>-da-il</i> MAR.TU
A 5158 (App. 17)	Drehem		19) <i>Ha-aš-ma-nu-um</i> MAR.TU 4) <i>Qa<sub>2</sub>-ad-ma-nu-um</i> 7) <i>A<sub>2</sub>-ni-a<sub>2</sub></i> 9) <i>Ah-bu-te-um</i>
A 5508 (App. 23)	Drehem	[ ] 7	12-3) 「Ša <sup>1</sup> -at- <sup>d</sup> EN.ZU dam <i>Ja<sub>3</sub>-li-e</i> MAR.TU-me 2) [x x]-um 4) <i>Mar-da-mu-um</i> 5) <i>I-wu-mu-ti</i> 7) <i>Ap-ki-da</i> 8-9) <i>Ma-li-kum</i> /MAR.TU-me 5) <i>U<sub>3</sub>-ga</i> MAR.TU
A 5546 (App. 8)	Drehem	Š 47 IV 18	5) <i>U<sub>3</sub>-ga</i> MAR.TU
AO 11733 (未出版 courtesy I.J. Gelb)	Drehem	Š 47 III	<i>La-a-</i> 「ba <sup>1</sup> 」 MAR.TU
CCTE 11 (まとめのみ)	Drehem	ŠS 3 I	“the MAR.TU <i>Ma-ni-il</i> ”.
CST 117 (訳のみ)	Drehem	Š 44 VI 10	5) <i>Ma-ti-na-ad</i> MAR.TU
CST 304 (訳のみ)	Drehem	AS 5 II 23	3) <i>Gul-ba<sup>1</sup>-nu-um</i> MAR.TU
HUCA 29 p.109 N.1	Drehem	Š 47 VI	iii 19) <i>La-a-a</i> iii 20) <i>Na-ha-nu-um</i> iii 23) <i>Ri-ma-nu-um</i> iii 26) <i>A-wi-la-nu-um</i> iii 28) <i>U<sub>3</sub>-ma-il</i> iv 1-2) <i>Qi<sub>2</sub>-id-ma-nu-um</i> /MAR.TU-me <i>A-bu-um</i> -DIĞIR <i>Ja<sub>8</sub>(WA)-gu-na-an</i> <i>Yi(WA)-ba-la-tum</i> SAL <i>Ku-da-da-nu-um</i> <i>Bu-na-a-nu-um</i> <i>La-da-bu-um</i> <i>Mu-e-um</i> <i>Da-ra-um</i> MAR.TU-me-še <sub>3</sub> mu-TUM <sub>2</sub> lugal vi 13) <i>Šu-mi-in-ni a-ba u<sub>3</sub></i> MAR.TU
MLC 80 (未出版 courtesy W.W.Hallo)	Drehem	ŠS 6 VI 1	
Nebr. 1558 (未出版 courtesy W.W.Hallo)	Drehem	AS 5 XII	
New. 1978 (未出版 courtesy W.W.Hallo)	Drehem	ŠS 1 VI 24	<i>Na-ab-la-num<sub>2</sub></i> <i>I<sub>3</sub>-li<sub>2</sub>-a-hu</i> <i>A-hi-a</i> <i>E-a-hu-um</i> <i>Ja<sub>3</sub>-a-ma-tu</i> <i>E-šu-nu-um</i> <i>La-hi-a-nu-um</i> <i>Mu-gi-ra-nu-um</i> MAR.TU-me ša <sub>3</sub> Uri <sub>5</sub> <sup>ki</sup> -ma 3-5) <i>Nu-da-tum</i> MAR.TU /niğ <sub>2</sub> -mi <sub>2</sub> -us <sub>2</sub> -sa <sub>2</sub> /e <sub>2</sub> <i>Ha-an-za-ab-tum-ma-še<sub>3</sub></i> in-na-ak-a 4) <i>A-aw-te-il</i> MAR.TU 7) NIĞ <sub>2</sub> <i>Šu-ba-ba</i> MAR.TU 20-21) ki <i>Šu</i> - <sup>d</sup> EN.ZU dumu lugal-[ta] ġiri <sub>3</sub> <i>Al-la</i> MAR.TU 1) <i>Ku-um-da-nu-um</i> 3) <i>Ṭa-ba-tum</i> dam-a-ni 5) <i>Mi-il-ga-nu-um</i> 6) <i>Ba-da-nu-um</i> 7) <i>Ša-ba-ar-kum</i> 9) <i>Na-ap-sa-nu-um</i> 10-11) <i>La-da-bu-um</i> /MAR.TU-me 9) <i>Mu-da-nu-um</i> MAR.TU 1) <i>Šu</i> -[x x x] 2) TI-[x]
Owen ( App. 15)	Drehem	Š 49 VI 15	
PDTI 28 (訳のみ)	Drehem	Š 47 V 17	
PDTI 41 (訳のみ)	Drehem	Š 48 V 4	
PDTI 171 (訳のみ)	Drehem	AS 2 III 30	
PDTI 335 (訳のみ)	Drehem	ŠS 1 XII 14	
PDTI 433 (訳のみ)	Drehem	Š 45 I 25	
PDTI 561 (訳のみ)	Drehem	AS 9 VI 6	

SET 66 (訳のみ)	Drehem	AS 9 II 26	3) <i>I-bi-la-i<sub>3</sub>-lum</i> 4-5) <i>I<sub>3</sub>-lum-a-bu-um</i> / MAR.TU-me 12-13) <i>mu Na-ab-la-num<sub>2</sub></i> MAR.TU-še <sub>3</sub> e <sub>2</sub> -muhaldim-še <sub>3</sub> 23) <i>Na-ab-la-num<sub>2</sub></i> MAR.TU
STD 22	Drehem	Š 48 V 14	4) <i>Lu<sub>2</sub>-kal<sup>1</sup>-la</i> MAR.TU
TAD 17	Drehem	AS 1 VIII 10+[x]	13) <i>「A<sup>1</sup>-ba-nu-um</i> MAR.TU
TAD 38	Drehem	Š 48 VIII 18	1) <i>Kir<sub>x</sub>(ĜIR<sub>3</sub>)-ba-num<sub>2</sub></i> MAR.TU
TCL II 5500	Drehem	AS 8 X 17	iii 14) <i>Na-ab-la-num<sub>2</sub></i> MAR.TU iii 15) MAR.TU-me
TCS 326	Drehem	AS 5 V 25	3) <i>E<sup>1</sup>-ri-hi-DĜIR</i> 5) <i>Iš-me-DĜIR</i> 7) <i>「A<sup>1</sup>-ku<sup>1</sup>-um</i> 8) MAR.TU-me 6) <i>A-bi<sub>2</sub>-WA-dar</i> MAR.TU
TCS 327 (collated. courtesy F. Luciani)	Drehem	Š 47 XII	
TD 25	Drehem	[...]	iii 5) <i>La-a-[x x x]</i> iii 8) <i>U<sub>3</sub>-sa-AN</i> [x?] iii 10) <i>La-a-nu-um</i> iii 11) MAR.TU-me 10) <i>En-gi-mu-um</i> MAR.TU
TRU 29	Drehem	Š 45 VIII	

<b>動物収入記録中の魚</b>			
TD 81	Drehem	Š 45 V 25	29) <i>12 sila<sub>3</sub> ku<sub>6</sub>-izi eme-bal</i> MAR.TU

<b>動物収入 (gu<sub>2</sub> ma-da)</b>			
Hulpin 7 (未出版 courtesy I.J.Gelb; P. Hulpinにより出版予定)	Drehem	[...]	22) <i>4 gukkal A-gi<sub>4</sub>-um</i> 23) <i>4 gukkal A-ga-nu-um</i> 24) <i>4 gukkal I-la-nu-um</i> 25) MAR.TU-me

<b>動物発送</b>			
A 2882 (App. 2 )	Drehem	Š 44 I	2) <i>ki Na-ab-la-num<sub>2</sub></i> MAR.TU-še <sub>3</sub> kur MAR.TU-še <sub>3</sub> ma <sub>2</sub> -a ba-a-ĝen
A 2964 (App. 14)	Drehem	Š 48 XI 21	12) <i>I-la-ša-ma-ar</i> 18) <sup>d</sup> <i>Šul-gi-na-piš-ti</i> MAR.TU u <sub>4</sub> nam-gala in-「ak <sup>1</sup> -a 2-3) e <sub>2</sub> -muhaldim mu <i>Na-ab-「Ia<sup>1</sup>-num<sub>2</sub></i> MAR.TU-še <sub>3</sub> 7-8) <i>Muš-da-nu-um</i> 「MAR.TU」 u <sub>4</sub> nam-gala in-ak 8) <i>dam<sup>d</sup>Šul-gi-i<sub>3</sub>-li<sub>2</sub></i> MAR.TU 11) u <sub>4</sub> dumu in-tu-eš-še <sub>3</sub> 6-7) e <sub>2</sub> -uzu <sub>3</sub> -ga/ mu-TUM <sub>2</sub> <i>Ku-na-ma-tum</i> MARTU 7) <i>[Na]-ab-la-nu-um</i> MAR.TU 8) <i>Mi-da-nu-um</i> MAR.TU 11) <i>[M]a-ah-ra-nu-um</i> MAR.TU <i>I-bi-iq-ri-e-u<sub>2</sub></i> MAR.TU <i>Ia<sub>3</sub>-a-ma-ti-u</i> /uru-ne-ne-še <sub>3</sub> ĝen-ne <sub>2</sub> /ma <sub>2</sub> -a ba-de <sub>2</sub> -DU 18) <sup>d</sup> <i>Da-gan-a-bu</i> lu <sub>2</sub> kin-gi <sub>4</sub> -a <i>Ia<sub>3</sub>-ši-li-im</i> ensi <sub>2</sub> <i>Tu-tu-la<sup>KI</sup></i> 19) <i>I-ba-ti</i> lu <sub>2</sub> kin-gi <sub>4</sub> -a Ib-da-ti ensi <sub>2</sub> <i>Ku-ub-la<sup>KI</sup></i> 7-8) <i>kišib<sup>d</sup>Utu-sag<sub>10</sub></i> /MAR.TU 10) <i>ki Na-ab-la-num<sub>2</sub></i> MAR.TU-še <sub>3</sub> 21-3) <sup>[d]</sup> <i>Da<sup>1</sup>-gan<sup>1</sup>-a<sup>1</sup>-bu</i> /lu <sub>2</sub> kin-gi <sub>4</sub> -a <i>Ia<sub>3</sub><sup>1</sup>-ši<sup>1</sup>-li<sup>1</sup>-im<sup>1</sup></i> ensi <sub>2</sub> <sup>1</sup> <i>Tu<sup>1</sup>-tu<sup>1</sup>-la<sup>KI</sup></i> 24-5) <i>I<sup>1</sup>-ba<sup>1</sup>-ti<sup>1</sup></i> lu <sub>2</sub> -kin-[gi <sub>4</sub> ]-/a <i>Ib<sup>1</sup>-da<sup>1</sup>-ti<sup>1</sup></i> ensi <sub>2</sub> <sup>1</sup> <i>Ku<sup>1</sup>-ub<sup>1</sup>-la<sup>KI</sup></i> 2) <i>la</i> 11udu-a-lum MAR.TU 2-3) <i>Na-ab-la-nu-um</i> MAR.TU/mu-TUM <sub>2</sub> <i>dam Šar-ru-um-i<sub>3</sub>-li<sub>2</sub></i> 1) <i>gud</i> MAR.TU DAR-a 2-3) e <sub>2</sub> -muhaldim-še <sub>3</sub> /mu MAR.TU-ne-še <sub>3</sub> 1-2) e <sub>2</sub> -muhaldim-še <sub>3</sub> mu MAR.TU <i>maš-maš</i> /Dilmun-ta-e-ra-ne 1) <i>ab<sub>2</sub></i> MAR.TU 4-5) <i>Ku-na-ma-tum</i> MARTU u <sub>4</sub> nam-gala-še <sub>3</sub> i-in-ku <sub>4</sub> -ra 1-3) <i>45 udu</i> /15 maš <sub>2</sub> / <i>Nu-uk-ra-nu-um</i> MAR.TU 8-9) <i>Du<sub>2</sub>-ul-ga-num<sub>2</sub></i> MAR.TU / <i>Ia<sub>3</sub>-a-ma-ti</i> <i>A-ri-za-nu-um</i> MAR.TU /u <sub>4</sub> nam-gala-še <sub>3</sub> i <sub>3</sub> -in-ku <sub>4</sub> -ra <i>Na-ab-la-nu-um</i> MAR.TU <i>Nu-uk-ra-nu-um</i> MAR.TU
A 3311 (App. 19)	Drehem	AS 8 VIII 29	
A 4218 (App. 20)	Drehem	ŠS 4 VIII 2	
A 5065 (App. 10)	Drehem	Š 48 IV 20	
A 5777 (App. 13)	Drehem	Š 48 VIII 11	
A 5994 (App. 6)	Drehem	Š 46 XII 6	
A 29365 (App.21)	Drehem	ŠS 6 VIII 14	
Afo 19 (1959-60)p.120	Drehem	AS 4 V 9	
AnOr VII 98	Drehem	AS 2 VIII	
AnOr VII 99	Drehem	AS 4 V 4	
CCTE O 7	Drehem	AS 5 X	
CST 88	Drehem	Š 43 VIII 1	
CST 153 (訳のみ)	Drehem	Š 44 XII 22	
CST 185 (訳のみ)	Drehem	Š 45 X 2	
CST 254 (表面のみ; 裏面は訳のみ)	Drehem	AS 2 VI 3	
CST 514 (訳のみ)	Drehem	[...]	
Dok. 450	Drehem	Š 48 VII 30	
III. 133 (未出版)	Drehem	AS 4 I 8	
JCS 7 p.105 (NCBT 1593)	Drehem	AS 2 VIII	
MCS 7 p.25 (AO 19603;まとのみ)	Drehem	AS 1 VIII	
MLC 100 (未出版 courtesy W.W.Hallo)	Drehem	Š 49 XI 21	

<i>Or.</i> 47, 15	Drehem	AS 2 VI 16	7-8)En- <sup>d</sup> Innin/ša <sub>3</sub> mu-TUM <sub>7</sub> MAR.TU-e-ne
<i>Or.</i> 47, 21	Drehem	AS 9 II 24	1-3) <sup>d</sup> Šul-gi- <i>i</i> <sub>3</sub> - <i>li</i> <sub>7</sub> /MAR.TU u <sub>4</sub> nam-gala-še <sub>3</sub> i <sub>3</sub> -in-ku <sub>4</sub> -ra
<i>PDTI</i> 32 (訳のみ)	Drehem	AS 4 I 3	5-6)ša <sub>3</sub> mu-TUM <sub>2</sub> nam-ra-ak kur/MAR.TU
<i>PDTI</i> 508 (訳のみ)	Drehem	Š 49 XII 14	16)Lugal-e <sub>2</sub> -[mah-e] MAR.TU lu <sub>2</sub> [x x]
<i>PDTI</i> 529 (訳のみ)	Drehem	[...]	viii 34)mu-TUM <sub>2</sub> ŠUL-a- <sup>d</sup> Šul-gi <sup>ki</sup> viii 36-37)mu-TUM <sub>2</sub> Lugal-u <sub>4</sub> -su <sub>3</sub> -še <sub>3</sub> / <i>En-gi-mu-um</i> MAR.TU
<i>PDTI</i> 548 (訳のみ)	Drehem	8 VII 2	6) <i>Na-ab-la-num</i> <sub>2</sub> MAR.TU 9) <i>At-ga-nu-um</i> MAR.TU 15)lu <sub>2</sub> kin-gi <sub>4</sub> -a A <sub>2</sub> -u <sub>2</sub> <sup>i</sup> -DIĞIR MAR.TU
<i>PDTI</i> 579 (訳のみ)	Drehem	AS 9 II 26	1) <i>Na-ab-la-num</i> <sub>2</sub> MAR.TU
<i>PDTI</i> 621 (訳のみ)	Drehem	IS 1 II 15	3) <i>Sa-mi-tum</i> MAR.TU
<i>RA</i> 9 p.56, SA 241 (まとめのみ)	Drehem	[...]	" <i>Na-ab-la-nu-um</i> l'amurrū MAR.TU"
<i>RA</i> 9 p.58, pl.2, SA 25	Drehem	Š 47 VII 15	1)mu-TUM <sub>7</sub> Šar-ru-um <sup>i</sup> - <i>i</i> <sub>3</sub> - <i>li</i> <sub>7</sub> sukkal 2)mu-TUM <sub>7</sub> Kur-bi-la-ak lu <sub>7</sub> Ba-šim-e <sup>ki</sup> 3) <i>Mi-da-nu-um</i> MAR.TU 2) <i>Na-ab-la-nu-um</i> MAR.TU 49) <i>Na-ab-la-nu-um</i> MAR.TU
<i>SET</i> 61 (訳のみ)	Drehem	AS 4 I 5	8-11) <sup>d</sup> E <sub>7</sub> - <i>il</i> MAR.TU/ <i>Hu-um-ra-nu-um</i> MAR.TU
<i>SET</i> 63 (訳のみ)	Drehem	AS 6 X 10	<i>I-la-ab-ti-il</i> MAR.TU/DIĞIR- <i>la-il</i> MAR.TU
<i>SO</i> 9/1 p.25 N.21	Drehem	Š 45 III 12	12)mu-TUM <sub>2</sub> <i>En-gi-mu-um</i> u <sub>3</sub> <i>Na-du-be-li</i> MAR.TU
<i>STA</i> 31	Drehem	AS 3 II 15	7) <i>Na-ab-la-num</i> <sub>2</sub> MAR.TU
<i>TCL</i> II 5508	Drehem	AS 4 I 6	I 5) <i>Na-ab-la-num</i> <sub>2</sub> I 7) <i>la</i> <sub>3</sub> - <i>an-bu-li</i> šeš-a-ni I 9) <i>A-bi</i> <sub>2</sub> - <i>iš-ki-in</i> dumu-ni I 11)dam <i>la</i> <sub>3</sub> - <i>an-bi</i> <sub>2</sub> - <i>i</i> <sub>3</sub> - <i>lum</i> I 12) <i>Na-ap-ša-nu-um</i> lu <sub>2</sub> kin-gi <sub>4</sub> -a <i>la</i> <sub>3</sub> - <i>a-mu-tum</i> I 14) <sup>d</sup> Šul-gi- <i>a-bi</i> I 15) <i>Hu-un</i> - <sup>d</sup> Šul-gi I 16)MAR.TU-me 14) <i>Na-ab-la-nu</i> [ <i>m</i> <sub>2</sub> ] MAR.TU
<i>TD</i> 27	Drehem	AS 5 I [x]	11) <i>La-e-ri-hu-um</i> MAR.TU
<i>TJA</i> pl. LXVI IES 121	Drehem	Š 44 IV 15	6) <i>Na-ab-la-nu-um</i> MAR.TU 10) <i>A-bi</i> <sub>2</sub> - <i>a-mu-ti</i> MAR.TU
<i>TRU</i> 266	Drehem	Š 47 VII 16	12) <sup>d</sup> Šul-gi dam <i>A-bi</i> <sub>7</sub> - <i>a-mu-ti</i> MAR.TU
<i>TRU</i> 267	Drehem	Š 47 VIII 5	15)Lu <sub>2</sub> -E <sub>2</sub> - <i>a</i> MAR.TU 17) <i>U</i> <sub>3</sub> - <i>ga</i> MAR.TU 20)e <sub>2</sub> -gi <sub>4</sub> -a <i>Mu-ra-nu-um</i> MAR.TU
<i>TRU</i> 295	Drehem	Š 48 XI 20	15-16) <i>E-la-nu-um</i> MAR.TU/ugula <i>Su-mi-id</i> -DIĞIR 18-19) <i>Ma-ga-nu-um</i> MAR.TU/ugula Lugal-ka-gi-na 20-21)e <sub>2</sub> ušbar(U <sub>2</sub> ,UR <sub>3</sub> )-a-ne-ne-še <sub>3</sub> /niğ <sub>2</sub> -mi <sub>2</sub> -us <sub>2</sub> -sa <sub>2</sub> -še <sub>3</sub> ak-de <sub>3</sub> 20-21)1 ANŠE.BAR.AN-nita <sub>2</sub> šu-gid <sub>2</sub> /ša <sub>3</sub> mu-TUM <sub>2</sub> zabar-dab <sub>5</sub> -ka 20-21)ANŠE.BAR.AN MAR.TU-ta /E <sub>2</sub> - <i>a-i</i> <sub>3</sub> - <i>li</i> <sub>2</sub> ki-ba bi <sub>2</sub> -ga <sub>2</sub> -ar 22-23)mu Ur-ra-še <sub>3</sub> / <i>Dan</i> - <sup>d</sup> Šul-gi šu ba-ti 2-3)e <sub>2</sub> -muhaldim-še <sub>3</sub> /mu MAR.TU maš-maš Dilmun e-ra-ne-še <sub>3</sub> 8-9)niğ <sub>2</sub> -dirig/ <i>Na-ab-la-nu-um</i> MAR.TU
<i>TRU</i> 300	Drehem	[x]	15)ša <sub>3</sub> Uri <sub>5</sub> <sup>ki</sup> -ma 9-10) r <sup>2</sup> udu <sup>2</sup> [x] r <sup>2</sup> ŠE <sup>2</sup> <i>Mu-du-lum</i> MAR.TU-še <sub>3</sub> /ša <sub>3</sub> Unu <sup>ki</sup> -ga 21) <i>Na-ab-la-num</i> <sub>2</sub> MAR.TU
<i>TRU</i> 305	Drehem	AS 2 VI 4	14) <i>Na-ab-la-num</i> <sub>2</sub> MAR.TU
<i>TRU</i> 320	Drehem	AS 3 X 5	19) <i>Na-ab-la-num</i> <sub>2</sub> MAR.TU 7-10)Lugal-ma <sub>2</sub> -gur <sub>8</sub> -re 1-3)3 udu 2 maš <sub>2</sub> -gal/ <i>La-šu-il</i> MAR.TU/ARAD <sub>2</sub> -ğ <sub>u</sub> <sub>10</sub> maškim 22)ki <i>Na-ša</i> <sub>6</sub> - <i>ta</i> ba-zi
<i>TRU</i> 325	Drehem	AS 3 I 15	Rs.29-30)8 udu-niga gud-e-[us <sub>2</sub> -sa] /2 maš <sub>2</sub> -gal-niga gud-e-us <sub>2</sub> -sa
<i>TRU</i> 370	Drehem	[...]	Rs.31-32)sa <sub>2</sub> -dug <sub>4</sub> <i>I</i> <sub>3</sub> - <i>li</i> <sub>2</sub> - <i>ba-bu-um</i> /dumu <i>Na-ab-la-num</i> <sub>2</sub> MAR.TU
<i>UDT</i> 92	Drehem	AS 8 XII 19	Rs.33)šu-a-gi-na u <sub>4</sub> 5-ta u <sub>4</sub> 14-še <sub>3</sub>
<i>UDT</i> 97	Drehem	AS 4 IX 19	Rs.38-39)sa <sub>2</sub> -dug <sub>4</sub> kas <sub>4</sub> -e-ne /u <sub>4</sub> 1-ta u <sub>4</sub> 20-še <sub>3</sub>
<i>UDT</i> 106	Drehem	AS 9 VI 17	Rs.40-42) ġiri <sub>3</sub> <sup>d</sup> Nanna-kam sukkal /ARAD <sub>2</sub> -ğ <sub>u</sub> <sub>10</sub> kas <sub>4</sub> /ki A-ba- <sup>d</sup> En-lil <sub>7</sub> -gin <sub>7</sub> -ta ba-zi
Unpublished A (粘土板所在不明)	Drehem	Š 48 IX 3	Rs.43)ša <sub>3</sub> Uri <sub>5</sub> <sup>ki</sup> -ma
Unpublished B (粘土板所在不明)	Drehem	IS 2 IX 1-20	Rs.44-45) ġiri <sub>3</sub> <i>Nu-ur</i> - <sup>d</sup> EN.ZU ša <sub>3</sub> -tam /u <sub>3</sub> Šeš- <i>Da-da</i> šar <sub>2</sub> -ra-ab- <i>du</i> <i>Da-na-bi</i> <sub>2</sub> - <i>it</i>
YBC 3635	Drehem	AS 2 XI	

(未出版 courtesy W.W.Hallo)		1-30	<i>Hu-un-hu-ub-še</i> <i>Lu<sub>2</sub>-E<sub>2</sub>-a</i> <i>Ma-li-a</i> <i>A-na-na</i> <i>Lu<sub>2</sub>-ri-e<sub>2</sub>-u<sub>2</sub></i> MAR.TU mu-TUM <sub>2</sub> lugal
--------------------------	--	------	---

<b>支所記録</b>			
A 4703 (App. 9)	Drehem	§ 47 X 17	2)1 amar-gud-ga MAR.TU

<b>家畜困い記録</b>			
<i>CST</i> 294 (訳のみ)	Drehem	AS 4 XI	3)6 gud MAR.TU
<i>PDTI</i> 328 (訳のみ)	Drehem	§ 47 II	1)7 gud mu MAR.TU-še <sub>3</sub>
<i>TCL</i> II 5503	Drehem	§ 37 VIII-XIII	ii 26)I-za-num <sub>2</sub> MAR.TU
<i>TRU</i> 252	Drehem	§§ 4 III 3	1)4 gud MAR.TU
<i>YOS</i> IV 254	Drehem	§§ 5 XII	20)Dan-DIGIR MAR.TU

<b>倉庫記録</b>			
<i>CST</i> 97 (訳のみ)	Drehem	§ 44 III 4	3)1 peš-am-ga MAR.TU
<i>CST</i> 161 (訳のみ)	Drehem	§ 45 I 18	1)1 amar gud mu 1 MAR.TU
<i>CST</i> 294	Drehem	AS 4 XI	3)6 gud MAR.TU
<i>Dok.</i> 481	Drehem	§ 36 XII	Rs. ii 40)mu geme <sub>2</sub> UN.IL <sub>2</sub> MAR.TU-ne-še <sub>3</sub>
<i>PDTI</i> 596 (訳のみ)	Drehem	§ 48 II 27	2)1 gud MAR.TU DAR-a
<i>PDTI</i> 670 (訳のみ)	Drehem	§ 48 II 5	4)2 gud MAR.TU DAR-a
<i>TCS</i> 86	Drehem	§ 48 XI 22	1)1 amar-peš-ga MAR.TU DAR-a
<i>TRU</i> 252	Drehem	§§ 4 III	1)4 gud MAR.TU

<b>動物(会計)記録</b>			
<i>ITT</i> II/1 952	Girsu	[...]	1-4)3 (gur) 2 (barig) še / gur ša <sub>3</sub> -gal amar-sa <sub>3</sub> <sup>mušen</sup> -še <sub>3</sub> /ki Nam-zi-tar-ra-t[a]/ [Ur]- <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> MAR.TU 『「ヒツジロ座」その中から数頭を使者(職)のMAR.TUへ』
<i>ITT</i> II/11030 (まとめのみ)	Girsu	I	
<i>UET</i> III 1206	Ur	IS 7 IV	6)mu MAR.TU-ne-še <sub>3</sub>

<b>家畜飼養</b>			
A 4971 (App. 24)	Drehem	[...]	3)1 amar-gud-ga MAR.TU 13)u <sub>3</sub> -tu-da

表2.皮革製品受け渡し

o = Išbi-Erra, Ši = Šu-ilišu

皮革製品受け渡し			
粘土板番号	出土地	日付	
<b>皮製サンダル・バッグ受け渡し</b>			
BIN IX 39	Isin	II 7 II 8	4) <i>A<sub>3</sub>-ha-am-ar-ši</i>
BIN IX 326	Isin	II 9 IV 21	5-6) <i>Mu-da-du-um</i> / <i>lu<sub>2</sub> kin-gi<sub>4</sub>-a</i> / <i>U<sub>2</sub>-si-um</i> MAR.TU-me
			5-6) <i>lu<sub>2</sub> kin-gi<sub>4</sub>-a</i> / <i>U<sub>2</sub>-si-i 2-a-bi</i>
			21) <i>dumu</i> 「Ša <sup>1</sup> -ma-[nu]-um u <sub>3</sub> <i>dumu</i> Ša-pi <sub>2</sub> -ru-um-ma
<b>サンダル・容器用皮革受け渡し</b>			
BIN IX 324	Isin	II 8 XI 12	6-7) <i>Še-ep-</i> 「ra <sup>1</sup> -nu-um / <i>lu<sub>2</sub> kin-gi<sub>4</sub>-a U<sub>2</sub>-si-i</i> MAR.TU
BIN IX 325	Isin	II 8 XII 1	5-8) <i>Ši-</i> 「ip-ra <sup>1</sup> -nu-um / <i>Šu-</i> 「ul <sup>1</sup> -ma-nu-u[m]
			/ 「Kir <sup>x</sup> (ĠIR <sub>3</sub> )-ma-nu-um / <i>lu<sub>2</sub> kin-gi<sub>4</sub>-a U<sub>2</sub>-s[i-i]</i> MAR.TU-me
BIN IX 388	Isin	ŠI 3 I 22	9-10) <i>niġ<sub>2</sub><sup>ku<sup>s</sup></sup>e-sir<sub>2</sub></i> MAR.TU / <i>niġ<sub>2</sub>-ba Zu-da-dum</i> MAR.[T]U
BIN IX 423	Isin	ŠI 3 IV 18	16) <i>niġ<sub>2</sub>-ba Hu-ne-</i> 「x <sup>1</sup> <i>dumu I-la-ar-šum</i> MAR.TU
BIN IX 425	Isin	II 19 III	8) <i>lu<sub>2</sub> kin-gi<sub>4</sub>-a Sa-ma-mu-um</i> MAR.TU
			16-17) <i>En-</i> 「um <sup>d1</sup> [EN.] <i>ZU lu<sub>2</sub> kin-[g]i<sub>4</sub>-a lugal</i> / <i>u<sub>3</sub> [lu<sub>2</sub> kin-g]i<sub>4</sub>-a Ša-[ma]-mu-um</i> MAR.TU
<b>容器・金環・サンダル用皮革受け渡し</b>			
BIN IX 226	Isin	II D XI 24.	3) <i>niġ<sub>2</sub>-šu-tag<sub>4</sub>-a</i> MAR.<TU>-e-ne-še <sub>3</sub>
<b>サンダル用皮革受け渡し</b>			
BIN IX 383	Isin	II 15 VII 22	2-3) <i>KI.KAL<sup>ku<sup>s</sup></sup>e-sir<sub>2</sub></i> MAR.TU / <i>niġ<sub>2</sub>-šu-tag<sub>4</sub>-a ki Sa-ma-mu-um</i> MAR.TU-še <sub>3</sub>
			5) <i>Ka<sub>3</sub>-mi-sum</i>
			7) <i>Bu-ga-&lt;nu&gt;-um</i>
			9) <i>MAR.TU ŠA U<sub>3</sub> TUM BI ġen-na 6-kam</i>
<b>木製品用皮革受け渡し</b>			
BIN IX 186	Isin	II 9 10	5) <i>I-da-nu-um</i> MAR.TU <sup>8e<sup>s</sup></sup> <i>gu-za</i>
BIN IX 199	Isin	II D I 24	6) <i>I-da-nu-um</i> <sup>8e<sup>s</sup></sup> <i>ma-</i> 「sa <sup>2</sup> -tum lugal
			8-10) <i>ki Bir<sub>5</sub>-bi<sub>2</sub>-ru-ma / ra-bi-a-nu-um-ma</i> / <i>u<sub>3</sub> I-di<sub>2</sub>-DIĠIR</i> MAR.TU
BIN IX 256	Isin	II 19	12) <i>ša<sub>3</sub> e<sub>2</sub>-gal</i>
BIN IX 266	Isin	II 19	2-3) <sup>8e<sup>s</sup></sup> 「šudun- <i>apin</i> <sup>1</sup> -še <sub>3</sub> / [Mi]- <i>el-ki-li-il</i>
			4-6) <i>Ri-i-bu-um</i> MAR.TU / <i>u<sub>4</sub> <sup>8e<sup>s</sup>1</sup> Š.BA 「RU<sup>2</sup> ba-na-dim<sub>2</sub>-ma</i> / <i>GAR.ŠA.NA<sup>K1</sup>-še<sub>3</sub></i>
<b>木製部品用皮革受け渡し</b>			
BIN IX 461	Isin	[...]	4) <sup>8e<sup>s</sup></sup> <i>ga-am-lum gu-la</i> MAR.TU
<b>戦車・装飾用皮革受け渡し</b>			
BIN IX 190	Isin	[...]	3) <sup>8e<sup>s</sup></sup> <i>ġiġir I-la-nu-um</i>
<b>戦車用皮革受け渡し</b>			
BIN IX 191	Isin	ŠI 1 IV 10	5) <sup>8e<sup>s</sup></sup> <i>ġiġir Ga-u<sub>2</sub>-šum</i> MAR.TU
<b>容器用皮革受け渡し</b>			
BIN IX 217	Isin	II 18 IV 2	3) <i>E-mi-zum</i>
BIN IX 224	Isin	II D XI 15	2) <i>Sa-ma-mu-um</i>
			3) <i>In-ti<sub>2</sub>-nu-um</i>
			4) <i>Šu-NE.BI-ra-ad</i>
			5) <i>Da-mi-ru-um</i>
			6) <i>Na-ra-mu-um</i>
			7) <i>la<sub>8</sub>-wa-at-ra-il</i>
			8) <i>Ad-ra-nu-um</i>
			9-10) <i>Bi[x x] a-bi u<sub>3</sub> šeš-a-ni / dumu Ma-na-um-me</i>
			12) <i>niġ<sub>2</sub>-šu-tag<sub>4</sub>-a &lt;ki MAR.TU-ne-še<sub>3</sub>&gt;</i>
BIN IX 225	Isin	II 11 III 21	6-7) <i>niġ<sub>2</sub>-šu-tag<sub>4</sub>-a / I-la-nu-um</i> MAR.TU
BIN IX 269	Isin	II 5 XII	5-6) <i>niġ<sub>2</sub>-šu-tag<sub>4</sub>-[a] / ki</i> MAR.TU-še <sub>3</sub>
BIN IX 271	Isin	II 20 X 17	4) <i>ki</i> MAR.TU-še <sub>3</sub>
BIN IX 276	Isin	II 8 VI 10	6) <i>Sa-ma-mu-um</i>
BIN IX 280	Isin	[...]	15) <i>[niġ<sub>2</sub>]-šu-tag<sub>4</sub>-a</i> MAR.TU-še <sub>3</sub>

<i>BIN</i> IX 282	Isin	II E XI 22	7) $\lceil ni\check{g}_2 \rceil -\check{s}u-tag_4-a$ ki MAR.TU
<i>BIN</i> IX 283	Isin	II 9 IV 24	5) $ni\check{g}_2-\check{s}u-tag_4-a$ ki MAR.TU- $\check{s}e_3$
<i>BIN</i> IX 286	Isin	ŠI 2 IX 30	8) $ni\check{g}_2-\check{s}u-tag_4$ ki MAR.TU-ne- $\check{s}e_3$
<i>BIN</i> IX 288	Isin	II 12 VI 26	3) <i>Ma-ah-da-nu-um</i>
<i>BIN</i> IX 289	Isin	ŠI 1 III 18	5) $ni\check{g}_2-\check{s}u-tag_4$ ki MAR.TU
<i>BIN</i> IX 292	Isin	II 12 VI 19	2) <i>Pi<sub>5</sub>(NE)-a-nu-um</i> 4) <i>Ma-ra-šum</i>
<i>BIN</i> IX 293	Isin	ŠI 3 I 30	7) $ni\check{g}_2-\check{s}u-tag_4-a$ ki MAR.TU-ne- $\check{s}e_3$
<i>BIN</i> IX 301	Isin	II 20/E XII 14	7) $ni\check{g}_2-\check{s}u-tag_4-a$ ki MAR.TU
<i>BIN</i> IX 310	Isin	ŠI 1 VI 16	9) $ni\check{g}_2-\check{s}u-tag_4$ MAR.TU-ne
<i>BIN</i> IX 314	Isin	II 16 XI	3-4) $ni\check{g}_2-\check{s}u-tag_4-a$ /ki MAR.TU-ne- $\check{s}e_3$
<i>BIN</i> IX 316	Isin	II 9 VII	2) <i>I-tur<sub>2</sub>- [pi<sub>5</sub>(NE)]-DIĜIR</i> 4) <i>Mi-[il-ki-li-ī]l</i> 7) <i>I-la-nu-um</i> 8) <i>La-mu-ma-nu-um</i> 9) <i>Me-pi-um</i> 11) <i>La-u<sub>2</sub>-šum</i> 12) <i>Nu-ur<sub>2</sub>-<sup>9</sup>EN.ZU</i> 13) <i>Ab-te-il</i> 14) <i>U<sub>2</sub>-ša-šum</i> dumu-ni 15) <i>Iq-ba-nu-um</i> 16) <i>Ma-si-id-a-nu-um</i> 18) <i>Ša-ma-mu-um</i> 20) <i>dam Ša-ma-mu-um</i> 22) <i>Ma-na-nu-um</i> 24) <i>I-da-pi<sub>5</sub>(NE)-DIĜIR</i> 25) <i>Du-si-mu-um</i> 26) <i>Ša-ab-ra-nu-um</i> 27) <i>Ib-la-nu-um</i> 28) <i>Hu-ni-na-nu-um</i> 29) <i>Da-dum-pi<sub>5</sub>(NE)-DIĜIR</i> 30) <i>A-hi-da-nu-um</i> 32) $Lu_7-\supset$ MAR.TU 34) <i>E-me-zum</i> 35) <i>Da-i-<math>\lceil x \rceil</math>-[x]</i> 36) <i>Da-ni-iš-me-<math>\lceil x \rceil</math></i> 37) <i>I-na-nu-um</i> 39) <i>I-la-bi<sub>2</sub>-ni</i> 40) <i>A-za-zum</i> 41) <i>Ma-ra-šum</i> 42) <i>Bu-ga-nu-um</i> 43) <i>Na-ap-<math>\lceil ša \rceil</math>-nu-um</i> 45) $[x]-ma-nu-um$ 46) $[Me^?]-ki-bu-um$ 47) $[B]u-u_2-lu-um$ 48) <i>E-ti-um</i> 49) <i>Lu-bu-e-el</i> 50) $A-\supset ga^{\supset 1}-ad-e-el$ 51) <i>A-da-tum</i> 54-55) $ni\check{g}_2-\check{s}u-tag_4-a$ /ki MAR.TU-e-ne
<i>BIN</i> IX 317	Isin	II 7 I	3) $ni\check{g}_2-\check{s}u-tag_4-a$ MAR.TU- $\check{s}e_3$
<i>BIN</i> IX 363	Isin	II 17 IV 6	5) <i>I-ku-mi-šar</i> MAR.TU
<i>BIN</i> IX 390	Isin	II 15 XII 20+[ x ]	12-14) $lu_2$ kin- $gi_4-a$ lugal/hur-saĝ ki <i>Ša-ma-nu-um</i> MAR.TU-ne- $\check{s}e_3$ /gen-na-me
<i>BIN</i> IX 392	Isin	II D XIII 30	3) <i>Bir<sub>5</sub>-bi<sub>2</sub>-ru-um</i> MAR.TU- $\check{s}e_3$
<i>BIN</i> IX 400	Isin	II E V 28	7-8) $ni\check{g}_2-\check{s}u-tag_4-a$ / $\lceil ki \rceil$ MAR.TU-ne- $\check{s}e_3$
<i>BIN</i> IX 405	Isin	ŠI 2 II 14	6-7) $ni\check{g}_2-\check{s}u-tag_4$ - Dilmun <sup>ki</sup> / $u_3$ MAR.TU-ne
<i>BIN</i> IX 406	Isin	II 14 II 18	2) <i>I-d<sub>2</sub>-DIĜIR</i> 4) <i>Ša-ma-mu-um</i> 6) <i>In-ti-nu-um</i> <i>dam Ša-ma-nu-um</i>
<i>BIN</i> IX 407	Isin	II 21 III	5) <i>Ka<sub>3</sub>-al-ba-il</i>
<i>BIN</i> IX 408	Isin	II 7	5) $[x x] U_2-si-i-\check{s}e_3$ 8) $[I-b]i_2-iš-i_3-il$ 11) <i>I-la-nu-um</i> 12) <i>Me-te-um</i> 13) <i>Ma-am-nu-um</i>

			14) <i>E-nu-zu-um</i> 15) <i>WA-ta-ar-&lt;a&gt;-hu-um</i> 16) <i>Lu-bu-DIĜIR</i> 17) <i>Lu-ra-bi<sub>2</sub></i> 18) <i>Me-[x x x]</i> 19) <i>Mu-[x x]</i> 22) <i>Na-ap-ša-nu-um</i> 23) <i>Ma-ra-šum</i> 28) <i>Bu-ga-nu-um</i> 30) <i>Pu-me-il</i> 31) <i>Mi-il-ki-li<sub>2</sub>-il</i> 32) <i>I<sub>3</sub>-li<sub>2</sub>-mi-ti</i> 34) <i>Nu-hi-DIĜIR</i> 37) <i>[niĝ<sub>2</sub>]-šu-tag<sub>4</sub>-a ki MAR-TU-še<sub>3</sub></i>
<i>BIN IX 409</i>	Isin	II 21 (?) II 9	3) <i>Ma-na-um MAR.TU</i> 7) <i>Ga-u<sub>2</sub>-šum MAR.TU</i>
<i>BIN IX 411</i>	Isin	II 21 IV	11) <i>niĝ<sub>2</sub>-šu-tag<sub>4</sub>-a ki MAR-TU-e-&lt;ne&gt;-še<sub>3</sub></i> 3) <i>la<sub>8</sub>(WA)-at-ra-il</i> 7) <i>Ša-pi<sub>2</sub>-ru-um</i>
<i>BIN IX 414</i>	Isin	II 21 III 23	5) <i>U<sub>2</sub>-da-ma MAR.TU</i>
<i>BIN IX 416</i>	Isin	ŠI 1 IV 3	7) <i>[x x x x] MAR.TU-ne</i>
<i>BIN IX 419</i>	Isin	ŠI 3 I 13	4) <i>niĝ<sub>2</sub>-šu-tag<sub>4</sub> ki MAR-TU-ne-še<sub>3</sub></i>
<b>容器・サンダル用皮革と葦受け渡し</b>			
<i>BIN IX 395</i>	Isin	II E VIII 15	27) <i>niĝ<sub>2</sub>-šu-tag<sub>4</sub>-a ki U<sub>2</sub>-si-i MAR.TU-še<sub>3</sub></i> 34) <i>lu<sub>2</sub> kin-gi<sub>4</sub>-a U<sub>2</sub>-si-i MAR.TU 3-a-bi</i>
<b>種々の物品用皮革受け渡し</b>			
<i>BIN IX 433</i>	Isin	II 19 III 25	22-23) <i>niĝ<sub>2</sub>-šu-tag<sub>4</sub>-a luga / ki Iq-ri-ba-nu-um MAR.TU</i>
<b>皮革受け渡し</b>			
<i>BIN IX 152</i>	Isin	II 9 II	4-8) <i>niĝ<sub>2</sub>-kešda ku<sub>3</sub>-babbar-<sup>1</sup>še<sub>3</sub> niĝ<sub>2</sub>-ba MAR.TU</i> /u <sub>4</sub> <sup>868</sup> lukul NIM-a / <sup>1</sup> ba-sig <sub>3</sub> -ga-a
<i>BIN IX 430</i>	Isin	II 13(?) [...]	29) <i>I-ri-ib MAR.TU</i>
<i>MCS 5 p.116 N.2</i>	Isin	II 9 III 4	2) <i>Ša-ma-mu-um</i>
<i>MCS 5 p.120 N.6</i>	Isin	II 20 X	4) <i>Pi-a-num<sub>2</sub> šeš-a-ni</i> 7) <i>ki MAR.TU-še<sub>3</sub></i>
<b>種々の物品リスト</b>			
<i>BIN IX 150</i>	Isin	---	14) 2 <sup>1</sup> kešda <sup>2</sup> MAR.TU

表3. 'messenger texts'

粘土板番号	出土地	日付	
AB7R 16	Girsu	XII 9	17)Ur-ba-ga <sub>2</sub> MARTU
BM 15486 (未出版, courtesy I.J. Gelb)	Girsu	VI	5-7)3 id-gur <sub>2</sub> i <sub>3</sub> u <sub>4</sub> 3-kam /Ur- <sup>d</sup> Nin-geš-zid-da MARTU /a-ša <sub>3</sub> -ga a-de <sub>2</sub> ġen-na 17-19)3 id-gur <sub>2</sub> i <sub>3</sub> u <sub>4</sub> 3-kam /Na-ba-sa <sub>6</sub> MARTU /mu lu <sub>2</sub> ma <sub>2</sub> -saġ-ga-ke <sub>4</sub> -ne-še <sub>3</sub> ġen-na
BM 17918 (未出版, courtesy I.J. Gelb)	Girsu	XI 15	4-7)3 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> zid <sub>2</sub> /1 i <sub>3</sub> id-gur <sub>2</sub> / <sup>d</sup> Utu-me-lam <sub>2</sub> MARTU/nig-saġ-še <sub>3</sub> ġen-na
BM 17964 (未出版, courtesy I.J. Gelb)	Girsu	III 10	Rs. 2-4)3 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> ninda /1 i <sub>3</sub> id-gur <sub>2</sub> /Gu <sub>3</sub> -de <sub>2</sub> -a MARTU
BM 17965 (未出版, courtesy I.J. Gelb)	Girsu	II 13	Rs. 2-4)3 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> ninda/2 gin <sub>2</sub> i <sub>3</sub> /Lu <sub>2</sub> -sa <sub>6</sub> -ga MARTU
BM 17988 (未出版, courtesy I.J. Gelb)	Girsu	V	Rs.1-2)3 sila <sub>3</sub> kaš Ur- <sup>d</sup> Nin-a-zu MARTU /INANA.ERIN <sup>ki</sup> -ta ġen-na
BM 17989 (未出版, courtesy I.J. Gelb)	Girsu	II 15	11-14)5 sila <sub>3</sub> kaš 3 sila <sub>3</sub> zid <sub>2</sub> /1 i <sub>3</sub> id-gur <sub>2</sub> /Sa <sub>6</sub> -du sukkal /še MARTU-še <sub>3</sub> ġen-na
BM 18000 (未出版, courtesy I.J. Gelb)	Girsu	II	Rs. 1-3)1 maš <sub>7</sub> NIM Du <sub>8</sub> -du <sub>8</sub> -li <sup>ki</sup> -me /ġiri <sub>3</sub> I-ti-zi MARTU /Du <sub>8</sub> -du <sub>8</sub> -li <sup>ki</sup> -še <sub>3</sub> ġen-na
BTBC 79	Girsu	IX	10-11)Ur-e <sub>2</sub> -bar <sub>11</sub> -bar <sub>11</sub> MARTU/NIĠ.SUR-še <sub>3</sub> ġen-na
CBT 12690 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	VIII 21	6-7)Ur- <sup>d</sup> Dumu-zi MARTU SAĠ-še <sub>3</sub> ġen-na
CBT 13510 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	III 28	7-9)5 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> zid <sub>2</sub> /1 i <sub>3</sub> id-gur <sub>2</sub> /Lu <sub>2</sub> -kiri <sub>3</sub> -zal MARTU
CBT 15177 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	V 21	9-11)2 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> ninda/2 gin <sub>2</sub> i <sub>3</sub> /Lu <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> MARTU 18)A-dam-dun <sup>ki</sup> -še <sub>3</sub> ġen-na-me 27)Lugal-me-lam <sub>2</sub> MARTU
CBT 15177 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	IV	5-8)1 (gur) kaš-zid <sub>2</sub> gur / 1 sila <sub>3</sub> i <sub>3</sub> -geš Nam-ha-ni MARTU / id <sub>3</sub> Edin-«ne»-na-še <sub>3</sub> ġen-na 9-11)1 (gur) kaš-zid <sub>2</sub> gur / 1 sila <sub>3</sub> i <sub>3</sub> -geš/Ur- <sup>d</sup> EN.ZU MARTU 12-14)1 (gur) kaš-zid <sub>2</sub> gur / 1 sila <sub>3</sub> i <sub>3</sub> -geš /ARAD <sub>2</sub> -ġu <sub>10</sub> MARTU 12)ARAD <sub>2</sub> -ġu <sub>10</sub> MARTU 15)Niġ <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> MARTU 18)erin <sub>2</sub> še-kin-kin zi-zi-de <sub>3</sub> ġen-na-me
HAV p.140, N.4	Girsu	XII 24	6)Ur- <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> MARTU 8)Niġ <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> MARTU 12)lu <sub>2</sub> -zah <sub>3</sub> (A-A)-še <sub>3</sub> ġen-na-me 4)Ur-DUN MARTU
HLC II 101 pl. 93 (= A 31769, collated)	Girsu	IX 7	21)Lugal-tuġ <sub>7</sub> <sup>i</sup> -mah <sup>i</sup> MARTU
HLC II 109 pl. 87 (= 31776, collated)	Girsu	X 24	2-3)Uš-gi-na MARTU/ mu Lu <sub>2</sub> - <sup>d</sup> ŠEŠ.KI-še <sub>3</sub> ġen-na
HLC III 163, pl. 103 (= A 31829, collated)	Girsu	VI 4	19-20)Lu <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> MARTU / Lu <sub>2</sub> -KU-dug <sub>4</sub> -ga-da ġen-na
HLC III 212, pl. 107(= A 31875, collated)	Girsu	IX	20)Lu <sub>2</sub> -ezen MARTU
HLC III 284 pl. 127(not available for collation)	Girsu	IV	
HLC III 315 pl. 130(= A 31974, collated)	Girsu	XII 30	
HSS IV 72	Girsu	XII 6	17)La-la <sup>2</sup> -a MARTU
HSS IV 82	Girsu	VI	14-15)Ur- <sup>beš</sup> ġigir MARTU /erin <sub>2</sub> e <sub>7</sub> <sup>d</sup> Šul-gi-ra e <sub>3</sub> -e <sub>3</sub> -de <sub>3</sub> ġen-na
ITT II/1 638 (collated)	Girsu	I 17	7-9)2 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> ninda /2 gin <sub>2</sub> i <sub>3</sub> / Lu <sub>2</sub> -sa <sub>6</sub> MARTU
ITT II/1 639 (collated)	Girsu	XI	5-6)2 (barig) kaš-zid <sub>2</sub> 1 sila <sub>3</sub> i <sub>3</sub> -geš Ur- <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> MARTU 11-12)2 (barig) kaš-zid <sub>2</sub> 1 sila <sub>3</sub> i <sub>3</sub> -geš /UN.IL <sub>2</sub> MARTU
ITT II/1 641 +RA 19 p.44 (collated, courtesy R.Biggs)	Girsu	V	6-9)5 sila <sub>3</sub> kaš 3 sila <sub>3</sub> zid <sub>2</sub> gu/ 1 id-gur <sub>2</sub> i <sub>3</sub> /Ur- <sup>d</sup> Nin-geš-zid-da MARTU /INANA.ERIN <sup>ki</sup> -ta
ITT II/1 644 (collated, courtesy R.Biggs)	Girsu	VII 27	Rs. 8-10)2 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> ninda /2 gin <sub>2</sub> i <sub>3</sub> /Ir <sub>3</sub> -ib MARTU Rs. 11)10 (sila <sub>3</sub> ) ninda aġa <sub>3</sub> -us <sub>2</sub> lugal ġiri <sub>3</sub> NIN sukkal-mah ġen-na
ITTII/1 778 (collated)	Girsu	II	1-3)2 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> ninda/2 gin <sub>2</sub> i <sub>3</sub> / Ib-ni-E <sub>2</sub> -a lu <sub>2</sub> ġeš-tukul 4-6)2 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> ninda/2 gin <sub>2</sub> i <sub>3</sub> /Ur-in-tah lu <sub>2</sub> ġeš-tukul 7-8)lu <sub>2</sub> ġeš-tukul MARTU-da ġen-na-me /Sa-bu-um <sup>ki</sup> -ta ġen-ne-「ne <sup>27</sup> 」
ITT II/1 812	Girsu	VI 3	1-2)2 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> ninda 2 gin <sub>2</sub> i <sub>3</sub> /Lu <sub>2</sub> -kiri <sub>3</sub> -zal MARTU



(collated)			3-4)2 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> ninda 2 gin <sub>2</sub> i <sub>3</sub> /Gu-za-ni MAR.TU
ITT IV 7277 (まとめのみ)	Girsu	I	7-8)2 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> ninda 2 gin <sub>2</sub> i <sub>3</sub> /Uru <sup>1</sup> -ki-bi MAR.TU Na-di MAR.TU
ITT IV 7366 (まとめのみ)	Girsu		(複数の人名の間) Lugal-ezen MAR.TU dumu Lu <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Šara <sub>2</sub>
ITT IV 7635 (collated)	Girsu	XII 3	1-4)6 sila <sub>3</sub> zid <sub>2</sub> -gu/sa <sub>2</sub> -dug <sub>4</sub> u <sub>4</sub> -3-kam/Kug-a-a MAR.TU /mu gu-še <sub>3</sub> ġen-na
ITT IV 7673 (collated)	Girsu	Š 29 IV	Rs.2)3 sila <sub>3</sub> Ur-ba-ġa <sub>2</sub> MAR.TU
ITT IV 7679 (collated, see App. 26)	Girsu	IX	1-4)3 sila <sub>3</sub> kaš babbar-ta/2 sila <sub>3</sub> zid <sub>2</sub> -ta /4 gin <sub>2</sub> i <sub>3</sub> -ġeš-ta/u <sub>4</sub> 1-kam u <sub>4</sub> 13 5-7)Ša <sub>3</sub> -da MAR.TU /lu <sub>2</sub> ġeš-tukul /kin ID <sub>2</sub> .KA.SUM ġen <sup>?</sup> -ne 8-10)kaš-bi 39 sila <sub>3</sub> / zid <sub>2</sub> -bi 26 sila <sub>3</sub> /i <sub>3</sub> -bi 2 sila <sub>3</sub> la <sub>2</sub> 8 gin <sub>2</sub>
ITT IV 7696 (collated, see App. 28)	Girsu	XII	1-2)1 dug 7 sila <sub>3</sub> kaš/sa <sub>2</sub> -dug <sub>4</sub> u <sub>4</sub> 9-kam 3-4)10 (sila <sub>3</sub> ) <sup>?</sup> Gu-u <sub>2</sub> -tar MAR.TU /udu bal-e-de <sub>3</sub> ġen-na 5-6)12 sila <sub>3</sub> kaš ġen/ sa <sub>2</sub> -dug <sub>4</sub> u <sub>4</sub> 4-kam 7-8)A-š-ah lu <sub>2</sub> kas <sub>4</sub> /Gu-tar-de <sub>3</sub> ġen-na
ITT IV 7761 (collated, see App.27)	Girsu	X	8-10)1 (gur 7 sila <sub>3</sub> ) kaš sila <sub>3</sub> kas <sup>?</sup> ġen/sa <sub>2</sub> -dug <sub>4</sub> u <sub>4</sub> 9-[x] kam /Ur <sub>3</sub> -ri-ba-du <sub>7</sub> MAR.TU 11-13)12 sila <sub>3</sub> kaš ġen /sa <sub>2</sub> -dug <sub>4</sub> u <sub>4</sub> 4-kam /Tar <sup>?</sup> -gu-da-a MAR.TU 14)udu ur <sub>4</sub> -de <sub>3</sub> ġen-na-me
ITT IV 7838	Girsu	Š 35 IX	1-3)20 sila <sub>3</sub> kaš /u <sub>4</sub> -kam /Ur <sup>-d</sup> Nun-ġal MAR.TU
ITT IV 7863	Girsu	X 3	1-4)9 sila <sub>3</sub> kaš ġen/ u <sub>4</sub> 3-kam/Pa <sub>2</sub> -ha-ru-um MAR.TU /A-dam-dum <sup>ki</sup> -ta ġen-na
MAH 15862 = MVN 2, 234	Girsu	XI 7	2 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> ninda 2 ġen i <sub>3</sub> /Lu <sub>2</sub> -nin-ġa <sub>2</sub> MAR.TU
MAH 16597 = MVN 2, 220	Girsu	VII 12	Rs.7-9)2 sila <sub>3</sub> kaš 2 sila <sub>3</sub> ninda /2 ġen i <sub>3</sub>
MCS 5 p.30 (まとめのみ)	Girsu	IX	kaš, zid <sub>2</sub> , i <sub>3</sub> id-gur <sub>2</sub> / Ur <sup>-d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> MAR.TU /... lu <sub>2</sub> zah-še <sub>3</sub> ġen-na -me
OBTR 110	Girsu	I 8	15)Ur <sup>-d</sup> Nanše MAR.TU
RA 19 p.39, N.II	Girsu	II	3)Šar-ru-um-i <sub>3</sub> -i <sub>2</sub> MAR.TU-da ġen-na
RA 19 p.111, SI	Girsu	VI 2	18)Ur <sup>-d</sup> Lama MAR.TU 20-21)mušen-du <sub>3</sub> <sup>?</sup> lugal/ ġiri <sub>3</sub> Ur <sup>-d</sup> Lama 3-4)Kur-ġiri <sub>3</sub> -ni-še <sub>3</sub> ġen-na -me
RTC 335	Girsu	IV 2	21)Lugal-me-lam <sub>2</sub> MAR.TU
RTC 388	Girsu	II 1	24)Ad-da-ġu <sub>10</sub> MAR.TU
RTC 395	Girsu	IX 25	18)Ur <sup>-d</sup> Nanše MAR.TU
SET 221 (まとめのみ)	Umma	ŠŠ 4	Lu <sub>2</sub> MAR.TU
TUT 201	Girsu	III 18	6)Šeš-kal-la MAR.TU

表4. 食物(・飲料)支給

粘土板番号	出土地	日付	
JCS 7pp.105-7 (= ŠA 85, pl.56; Kenrick Theological Seminary, N.72)	Drehem	ŠS 6	ii 14) Šu-ab-ba 「MAR」.[TU] iii 14-15) 「I」-bi-ri-ri-e-u, 「MAR」.TU Ia <sub>3</sub> -a-ma-t[j-um]
BM 15251 (未出版 courtesy I. J. Gelb)	Girsu	VIII 21	5)6 (sila <sub>3</sub> ) MAR.TU-munus
BM 15302 (未出版 courtesy I. J. Gelb)	Girsu	[...]	19)[x]+20 (sila <sub>3</sub> ) gur <sup>d</sup> Šul-gi-ri <sub>3</sub> -li <sub>2</sub> MAR.TU
BM 15340 (未出版 courtesy I. J. Gelb)	Girsu	XI	12-13)1 (gur) kaš-u <sub>3</sub> -sa 20 (sila <sub>3</sub> ) zid <sub>2</sub> -ta/8 MAR.TU 18)ša <sub>3</sub> -gal u <sub>4</sub> 10-kam
BM 15496 (未出版 courtesy I. J. Gelb)	Girsu	IV 19	4)5 (sila <sub>3</sub> ) MAR.TU-munus
BM 17978 (未出版 courtesy I. J. Gelb)	Girsu	[.] 19	6)5 sila <sub>3</sub> MAR.TU-munus
BTBC 78	Girsu	[.] 18	6)MAR.TU-munus
BTBC 88	Girsu	[.] 10+x	5)MAR.TU-munus
CBT 12693 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	X 3	5)5 sila <sub>3</sub> MAR.TU-munus
CBT 12718 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	VIII 14	6)5 sila <sub>3</sub> MAR.TU-munus
CBT 12730 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	II 29	1-2)5 sila <sub>3</sub> ninda/ MAR.TU-munus
CBT 12754 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	II 24	1-2)5 sila <sub>3</sub> ninda/ MAR.TU-munus
CBT 13644 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	XI 3	1-2)5 sila <sub>3</sub> ninda 「lugal」/MAR.TU-munus
CBT 14572 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	IV 18	4)5 sila <sub>3</sub> MAR.TU-munus
CBT 14796 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	VIII 9	6)5 sila <sub>3</sub> MAR.TU-munus
CBT 15170 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	III 2	4)5 sila <sub>3</sub> MAR.TU-munus-me
CBT 15185 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	VIII 13	5)5 sila <sub>3</sub> MAR.TU-munus
CHÉU 56	Umma	V 15	4)MAR.TU ša <sub>3</sub> e <sub>2</sub> 5)MAR.TU igi lugal-še <sub>3</sub> tuš-a 6)5 sila <sub>3</sub> MAR.TU-munus
HLC III 159 pl. 103 (= A 31826, collated)	Girsu	VIII 28	
HLC III 199 pl. 107 (= A 31863, collated)	Girsu	IX 17	6-10)1+½ sila <sub>3</sub> Ša-il-tum/ 1+½ sila <sub>3</sub> Da-ri <sub>2</sub> -ša /1+½ sila <sub>3</sub> Ad-mu <sup>1</sup> -a / 1 sila <sub>3</sub> Ša <sup>1</sup> -lim-MI /「MAR」.[TU]-「munus」-me
HSS IV 51	Girsu	XII 11	18-22)1+½ sila <sub>3</sub> Ša-il-tum/ 1+½ sila <sub>3</sub> Ad-mu-a /1+½ sila <sub>3</sub> Da-ri <sub>2</sub> -ša / 1 sila <sub>3</sub> Ša-lim-MI /MAR.TU-munus-me
HSS IV 53	Girsu	XI 23	25-29)1+½ sila <sub>3</sub> Ša-il-tum /1+½ sila <sub>3</sub> Ad-mu-a /1+½ sila <sub>3</sub> Da-ri <sub>2</sub> -ša / 1 sila <sub>3</sub> Ša-lim-MI /MAR.TU munus-me
HSS IV 92	Girsu	IX 13	5) 5 sila <sub>3</sub> MAR.TU-munus
ITT IV 7717	Girsu	II 21	9-10)3 sila <sub>3</sub> kaš babbar sa <sub>2</sub> -dug <sub>4</sub> -še <sub>3</sub> /6 sila <sub>3</sub> kaš babbar u <sub>4</sub> 2-kam 11-12)Gu <sub>7</sub> -ab-ba <sup>ki</sup> -še <sub>3</sub> /ma <sub>7</sub> -a ġar / MAR.TU Gu <sub>7</sub> -ab-ba <sup>ki</sup> -tuš-a
MAH 16223 (= MVN 2, 232)	Girsu	XI 5	6-10)/1+½ sila <sub>3</sub> Ša-il-tum / 1+½ sila <sub>3</sub> Ad-mu-a /1+½ sila <sub>3</sub> Da-ri <sub>2</sub> -ša / 1 sila <sub>3</sub> Ša-lim-mi /MAR.TU-me
MAH 16311 (= MVN 2, 205)	Girsu	V 2	3)5 sila <sub>3</sub> MAR.TU-[munus <sup>1</sup> (NI)]
New. 1558 (未出版courtesy W.W.Hallo)	Girsu	[...]	Ad-mu-a, Da-ri-ša, Ša-lim-MI, MAR.TU-munus-me
OBTR 59 (まとめのみ)	Girsu	IV	「シュルギ神、D.A.NI.K.TU神の神殿とエンシであるゲデアへ与えられた 最上級ビール定量」
Or. 18, 26	Umma	ŠS 2 III 10	49-51)20 (sila <sub>3</sub> ) kaš 1 (barig) kaš u <sub>2</sub> -sa ziz <sub>2</sub> /20(sila <sub>3</sub> ) ninda 40(sila <sub>3</sub> ) dabin 1 sila <sub>3</sub> i <sub>3</sub> 1 udu /MAR.TU šu ba-ti
Or. 18, 27	Umma	ŠS 2 III 8	55-58)1(barig) kaš u <sub>2</sub> -sa ziz <sub>2</sub> 30(sila <sub>3</sub> ) kaš 1(barig) dabin /1 udu 1 sila <sub>3</sub> i <sub>3</sub> / MA.AR.TU-ne šu ba-ti

<i>Or.</i> 47, 477	Umma	V 25	4)10(sila <sub>3</sub> ) kaš ġen MAR.TU ša <sub>3</sub> e <sub>2</sub> 5)20(sila <sub>3</sub> ) kaš saġ <sub>10</sub> MAR.TU igi lugal-še <sub>3</sub> tuš-a
<i>RA</i> 8(1911) p.156(AO 5649)	Umma	mu us <sub>2</sub> -sa mu us <sub>2</sub> -sa-bi	4)10(sila <sub>3</sub> ) kaš ġen MAR.TU ša <sub>3</sub> e <sub>2</sub> 5)20(sila <sub>3</sub> ) kaš saġ <sub>10</sub> MAR.TU igi lugal-še <sub>3</sub> tuš-a
<i>RA</i> 10(1913) p.65(Pl.III) N.24	Girsu	V 11 VI 11	5)5(sila <sub>3</sub> ) MAR.TU
<i>RA</i> 59(1965) p.111, S1	Girsu	IV 2	22)Ur- <sup>geš</sup> ġigir MAR.TU
<i>RA</i> 59(1965) p.112, S2	Girsu	[...]	11) <i>Da-da</i> MAR.TU
<i>SET</i> 297 (訳のみ)	Girsu	1-30	12)MAR.TU lu <sub>2</sub> ġeš x x-me 22)[K]AL-bi aga <sub>3</sub> -us <sub>2</sub> gur 28) <i>Na-ap-ta<sub>2</sub>-num</i> 83)ša <sub>3</sub> Ur <sub>15</sub> <sup>ki</sup> -ma
TA 1931-32, 334 =App.N.1	Ešnuna	Š 31	1-3)1(barig) ġig 1(barig) gu <sub>2</sub> tur-tur/ <i>Ma<sup>2</sup>-an-ma-u<sub>2</sub></i> MAR.TU /tuġ <sub>2</sub> -še <sub>3</sub> i <sub>3</sub> -še <sub>3</sub> -ri
<i>TUT</i> 206	Girsu	[x] 3	7)5 sila <sub>3</sub> MAR.TU-munus
<i>TUT</i> 207	Girsu	III 3-[5]	4)5 sila <sub>3</sub> MA[R].TU-munus 10)5 sila <sub>3</sub> MAR.TU-munus 21)[5 sila <sub>3</sub> ] MAR.TU
<i>TUT</i> 208	Girsu	IV 1	5)5 sila <sub>3</sub> MAR.TU-munus
<i>TUT</i> 234	Girsu	III 23	1-2)5 sila <sub>3</sub> ninda/ MAR.TU-munus
<i>TUT</i> 235	Girsu	VII 16	1-2)5 sila <sub>3</sub> ninda lugal/ MAR.TU-munus
<i>TUT</i> 236	Girsu	III 7	1-2)5 sila <sub>3</sub> ninda/ MAR.TU-munus
<i>UCP</i> IX/2 26 (p.236)	Umma	25	6)3 sila <sub>3</sub> MAR.TU 19)sa <sub>2</sub> -duġ <sub>4</sub> zi-ga-am <sub>3</sub>

## 食物分配

<i>CCTE C</i> 1	Umma	ASまたはその後	iii 23)2 lu <sub>2</sub> MAR.TU vi 9'-11')ġiri <sub>3</sub> Ur-am <sub>3</sub> -ma/ Inim- <sup>d</sup> šara <sub>2</sub> u <sub>3</sub> <i>Ku-li</i> /MAR.TU lu <sub>2</sub> maškim-me vii 4'-6')ġiri <sub>3</sub> Ur <sub>4</sub> -ša <sub>3</sub> -ta-lu <sub>2</sub> / A-da-lal <sub>3</sub> <sup>?</sup> u <sub>3</sub> Lu <sub>2</sub> -niġir-/ma-da MAR.TU-me
-----------------	------	----------	---

## 食物奉納

A 2790 =App.2	Drehem	ŠS 6 - 20	ii 8') <i>Šu-ab-ba</i> MAR.[TU] ii 31') <i>I-bi-iq-ri-e-u<sub>2</sub></i> MAR.TU <i>la<sub>3</sub>-a-ma-ti-[um]</i> ii 32')lu <sub>2</sub> us <sub>2</sub> -sa-ni-[me]
<i>ABTR</i> 2 <i>AT</i> 80 a	Girsu	VIII 30	4)Diġir-id-ni-iq MAR.TU
<i>AT</i> 80 b	Girsu	AS 5 I 80	4)MAR.TU-munus
BM 15504 (未出版 courtesy I. J. Gelb)	Girsu	AS 5 I 10 XII	4)MAR.TU-munus 1-2)1 (barig) kaš-u <sub>2</sub> -sa saġ <sub>10</sub> / <sup>d</sup> Šul-pa-e <sub>3</sub> -e <sub>2</sub> -gal 3-4)10 (sila <sub>3</sub> ) kaš saġ <sub>10</sub> / u <sub>4</sub> -sakar u <sub>4</sub> 15 Gu <sub>3</sub> -de <sub>2</sub> -a 5-6)10 (sila <sub>3</sub> ) kaš saġ <sub>10</sub> / eš <sub>3</sub> -eš <sub>3</sub> u <sub>4</sub> -sakar u <sub>4</sub> 15 lugal 7-8)6 (gur) kaš-u <sub>2</sub> -sa ġen /Diġir-id-ni-iq MAR.TU
BM 17940 (未出版 courtesy I. J. Gelb)	Girsu	I	1-2)1(barig) zid <sub>2</sub> -še lugal/ Diġir-id-ni-iq MAR.TU 3-5)6 sila <sub>3</sub> zid <sub>2</sub> DUB.DUB/ 4 sila <sub>3</sub> aš <sub>2</sub> -an / <sup>d</sup> Šul-pa-e <sub>3</sub> -e <sub>2</sub> -gal 6-7)10(sila <sub>3</sub> ) zid <sub>2</sub> -še <sub>3</sub> Gu <sub>3</sub> -de <sub>2</sub> -a ensi <sub>2</sub>
BM 17941 (未出版 courtesy I. J. Gelb)	Girsu	V	1-2)10 (sila <sub>3</sub> ) kaš saġ <sub>10</sub> / eš <sub>3</sub> -eš <sub>3</sub> u <sub>4</sub> -sakar u <sub>4</sub> 15 lugal 3-4)1(gur) kaš-u <sub>2</sub> -sa saġ <sub>10</sub> / <sup>d</sup> Šul-pa-e <sub>3</sub> -e <sub>2</sub> -gal 5-6)10(sila <sub>3</sub> ) kaš saġ <sub>10</sub> / Gu <sub>3</sub> -de <sub>2</sub> -a 7-8)2(barig) kaš ġen lugal/Diġir-id-ni-iq MAR.TU
<i>CBT</i> 13617 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	VI	9-10)1 sila <sub>3</sub> i <sub>3</sub> -geš/ Diġir-id-ni-iq MAR.TU
<i>CBT</i> 14498 (collated, courtesy I. J. Gelb)	Girsu	XIII	1-3)10 (sila <sub>3</sub> ) kaš saġ <sub>10</sub> lugal/ 1 ġin <sub>2</sub> i <sub>3</sub> -geš /eš <sub>3</sub> -eš <sub>3</sub> lugal u <sub>4</sub> -sakar u <sub>4</sub> 15 4-6)10 (sila <sub>3</sub> ) kaš saġ <sub>10</sub> / 10 (sila <sub>3</sub> ) zid <sub>2</sub> -ġar / ki-a-naġ Gu <sub>3</sub> -de <sub>2</sub> -a u <sub>4</sub> -sakar u <sub>4</sub> 15 7-10)10 (sila <sub>3</sub> ) kaš ġen/ 1 (ban <sub>2</sub> ) zid <sub>2</sub> -ġar /1 sila <sub>3</sub> i <sub>3</sub> -geš/ Diġir-id-ni-iq MAR.TU
<i>HLC</i> III, 333 Pl. 132 (= A	Girsu	XI 31991, collated)	1-2)10 (sila <sub>3</sub> ) (kaš) saġ <sub>10</sub> lugal/ u <sub>4</sub> -sar u <sub>4</sub> 15 3-5)35 sila <sub>3</sub> kaš saġ <sub>10</sub> / <sup>u<sub>2</sub></sup> šem u <sub>4</sub> 7-kam/ Gu <sub>3</sub> -de <sub>2</sub> -a 6-7)1 (gur) kaš u <sub>2</sub> -sa/ <sup>d</sup> Šul-pa-e <sub>3</sub> -e <sub>2</sub> -gal

MAH 16358 (MVN 2, 142) UDT39	Girsu	VIII 18	8-9)2 (ban <sub>2</sub> ) kaš ġen / Diġir-id-ni-iq MAR.TU 1 (barig) dabin lugal / Diġir-id-ni-iq MAR.TU
	Girsu	I	1-3)10(sila <sub>3</sub> ) kaš sag <sub>10</sub> lugal/eš <sub>3</sub> -eš <sub>3</sub> lugal u <sub>4</sub> -sar u <sub>4</sub> 15 4-5)10(sila <sub>3</sub> ) kaš sag <sub>10</sub> / ki-a-naġ <sup>d</sup> Gu <sub>3</sub> -de <sub>7</sub> -a u <sub>4</sub> -sar u <sub>4</sub> 15 6-7)1(gur) kaš u <sub>2</sub> -sag <sub>10</sub> / <sup>d</sup> Šul-pa-e <sub>3</sub> -e <sub>2</sub> -gal 8-10)2(barig) kaš ġen lugal/Diġir-id-ni-iq MAR.TU

(食物・飲料)定期支給			
BM 12935 (未出版 courtesy I. J. Gelb)	Girsu	AS 2	i 1'-2')34 še gur lugal / MAR.TU engar
BM 17815 (未出版 courtesy I. J. Gelb)	Girsu	Š 46 XI	1-3)10 še gur lugal/ še-ba aga-us <sub>2</sub> MAR.TU /[ša <sub>3</sub> Uri <sub>5</sub> <sup>ki</sup> -]ma
CCTE W 29 (まとめのみ)	Umma	Š 46 I	"ukuš MAR.TU/ ki Lu <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Nanna "
CST 263 (first published in BJRL 9, pp.241-47)	Drehem	AS 3 I-XIII	viii 2)20 (sila <sub>3</sub> ) Lu <sub>2</sub> -diġir MAR.TU (/Lu <sub>2</sub> - <sup>d</sup> MAR.TU) viii 4)amar-kud UN.I.L <sub>2</sub> -me xii 33-34)še-ba ġiri <sub>3</sub> -se <sub>3</sub> -ga/ ša <sub>3</sub> Ba-ba-az <sup>ki</sup>
CST 728	Umma	[...]	i 9)SIG <sub>7</sub> -a Ad-da-gaba MAR.TU ii 2-3)SIG <sub>7</sub> -a Ur-me-lum MAR.TU /SIG <sub>7</sub> -a Da-šu MAR.TU ii 21-22)SIG <sub>7</sub> [-a x x x] MAR.TU/SIG <sub>7</sub> -a Al-la-šu-hu MAR.TU ii 24)SIG <sub>7</sub> -a Ra-di <sub>3</sub> -tum <sup>?</sup> MAR.TU iii 4-5)SIG <sub>7</sub> -a Ar-s <sup>?</sup> - <sup>?</sup> a <sup>?</sup> -num <sub>2</sub> /SIG <sub>7</sub> -a It-lum MAR.TU iii 26)SI[G <sub>7</sub> -a] Ša-ma-num <sub>2</sub> MAR.TU ii 1-3)36 ma-na / sig <sub>2</sub> -ba geme <sub>2</sub> MAR.TU-še <sub>3</sub> /Ka <sub>5</sub> -ġu <sub>10</sub> šu ba-ti
CT IX 17 (BM 12915)	Girsu	AS 5	L.e.1-2)50 (sila <sub>3</sub> ) Ša-bi <sub>2</sub> / 50 (sila <sub>3</sub> ) Hu-la-li <sub>2</sub> L.e.4-5)50 (sila <sub>3</sub> ) Gu-u <sub>2</sub> -da/ 50(sila <sub>3</sub> ) U <sub>18</sub> -ba-la-tum L.e.8)geme <sub>2</sub> MAR.TU-me
CT X 16 (BM 12921)	Girsu	AS 4	ix 9-11)40 (sila <sub>3</sub> ) <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> -i <sub>3</sub> -sa <sub>6</sub> /a-ru-a Lu <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> / MAR.TU x 46-47)15 (sila <sub>3</sub> ) Nin-niġ <sub>7</sub> -šub-e-hul-ġiġ <sub>7</sub> 「x x」 /a-ru-a MAR.[TU <sup>?</sup> x x] xiii 10-14)HAR 30 (sila <sub>3</sub> ) <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> -i <sub>3</sub> -gi /HAR (sila <sub>3</sub> ) <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> -a-zu /dumu-ni a-ru-a Lugal-ša-tar <sub>3</sub> /MAR.TU
CTC 54	Girsu	AS 4 I	1-4)13 (gur) 2 (barig) 5 (ban <sub>2</sub> ) 5 sila <sub>3</sub> še gur lugal /še-ba aga <sub>3</sub> -us <sub>2</sub> MAR.TU/ša <sub>3</sub> Uri <sub>5</sub> <sup>ki</sup> -ma/ ugula zabar-dab <sub>5</sub>
HLC I 305, Pl.19(= A 31964, collated)	Girsu	Š 47 XII	1-4)2 guruš 50 (sila <sub>3</sub> ) zid <sub>2</sub> še lugal-ta/ 1 dumu 30 (sila <sub>3</sub> ) /zid <sub>2</sub> -bi 2 (barig) 10 (sila <sub>3</sub> ) /MAR.TU mušen-du <sub>3</sub> -me 7)MAR.TU a-ru-a ša <sub>3</sub> x x 8)2 sila <sub>3</sub> MAR.TU ša <sub>3</sub> [x x]
ITT IV 7955 (collated)	Girsu	II	iii 70-73)16 (gur) 1 (barig) še-ba gur/ aga <sub>3</sub> -us <sub>2</sub> MAR.TU / ki A-bu-ni/ A-ha-ni-šu i <sub>3</sub> -dab <sub>5</sub>
MAH 16393 (= MVN 2, 181) Or. 18, 24	Girsu	[...]	ii 43-44)1(gur) 4(barig) 45(sila <sub>3</sub> )/ kaš sag <sub>10</sub> gur ii 45-47)17(gur) 4(barig) kaš/ gin gur/ gur-da MAR.TU-me ii 48-50)121(gur) 4(barig) 15 sila <sub>3</sub> / kaš gin gur/ aga <sub>3</sub> -us <sub>2</sub> -me iii 30-31)dumu-dumu aga <sub>3</sub> -us <sub>2</sub> / MAR.TU lu <sub>2</sub> -didli-me
RIAA 86	Drehem	[...]	x+4)2 gur Geme <sub>2</sub> - <sup>d</sup> EN.ZU u <sub>3</sub> A-du-ra-mu dumu-munus-ni vi 22-24)Šu- <sup>d</sup> Gu <sub>2</sub> / a-ru-a Lu <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> / MAR.TU viii 22-24)Lu <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Nin-ġir <sub>2</sub> -su/ dumu A-mu-ru-um/ e <sub>2</sub> HE <sub>2</sub> .KU-ta iv 31)Ur-DUN iv 32)Lu <sub>2</sub> MAR.TU dumu-ni Rv. 4)še ġar-ġar MAR.TU
TMH NF I/II 132	Nippur	[...]	1)I <sub>3</sub> -za-num <sub>2</sub> lunga
TUT 159	Girsu	AS [x] V	1)[x x] I <sub>3</sub> -za <sup>?</sup> -num <sub>2</sub> A [x] ŠE
TUT 160	Girsu	[...]	2) <sup>d</sup> Nanna-i <sub>3</sub> -zi guda <sub>2</sub>
TUT 161	Girsu	[...]	3)Lu <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Nin-šubur lunga 4)ARAD <sub>7</sub> - <sup>d</sup> Nanna <sup>lu<sub>2</sub></sup> azlag <sub>2</sub> 6)Ma-da-am-en-nam ugula uš-bar 7)Lu <sub>2</sub> -bal-sa <sub>6</sub> -ga LU <sub>2</sub> .A <sub>2</sub> .「KAL」 <sup>?</sup> 8)še-ba lu <sub>2</sub> MAR.TU-ne-še <sub>3</sub>
UET III 262	Ur	IS I 5	1')15 MAR.TU [ ]
UET III 1005	Ur	IS 8 VI	2')2 MAR.TU [ ]
UET III 1019	Ur	Š 42 XII	
UET III 1052	Ur	IS 8 III	
UET III 1136	Ur	[x x] 17	

UET III 1391	Ur	[...]	9')MAR.TU Kisig <sub>2</sub> <sup>ki</sup> -ta ġen-na-me-še <sub>3</sub> iv 3)Na-bi <sub>2</sub> <sup>d</sup> EN.ZU iv 4)I-za-nu-um iv 5)nam-ra-aš-ak MAR.TU
--------------	----	-------	---

〔食物・羊毛〕定期支給			
RTC 399	Girsu	「IS 3」I 25	vii 35)1(barig) Ur-barā <sub>2</sub> -si-ga Bi <sub>2</sub> -bi <sub>2</sub> vii 36-38)15(sila <sub>3</sub> ) 1½(ma-na) sig <sub>2</sub> MAR.TU/ 5(sila <sub>3</sub> ) ½(ma-na) Ur <sup>d</sup> La-ma /dumu Ur-barā <sub>2</sub> -si-ga ba-uš-me ix 1)še-ba-e tah-ha xii 7-10)še-ba sig <sub>2</sub> -ba ġiri <sub>3</sub> -se <sub>3</sub> -ga/ e <sub>2</sub> diġir-re-ne/ [e <sub>2</sub> -g]al e <sub>2</sub> kas <sub>4</sub> [šā <sub>3</sub> Gu <sub>2</sub> -ab-]ba <sup>ki</sup>

〔羊毛・衣類〕定期支給			
ITT IV 7318 (collated)	Girsu	Š 34 X 23	3-4)X 30(sila <sub>3</sub> ) tug <sub>2</sub> Nin-ki-har-sa <sub>6</sub> /a-ru-a Ama-lugal-uru-da MAR.TU 9-10)geme <sub>2</sub> -gu-še <sub>3</sub> / Dug <sub>3</sub> -ga-zi-da i <sub>3</sub> -dab <sub>5</sub>
ITT IV 7523	Girsu	Š 34 XI	3-4)X 30 (sila <sub>3</sub> ) tug <sub>2</sub> Nin-ki-har-sa <sub>6</sub> a-ru-a Ama-lugal-uru-da MAR.TU 24)šu-niġin <sub>2</sub> 11 geme <sub>2</sub> -gu-me 27)Dug <sub>3</sub> -ga-zi-da i <sub>3</sub> -dab <sub>5</sub>
MAH 16124 (= MVN 2 285, courtesy E. Sollberger)	Girsu	[...]	ii' 9')SIG <sub>7</sub> -a uš <sub>2</sub> Bi-u <sub>3</sub> MAR.TU ii' 11')SIG <sub>7</sub> -a tug <sub>2</sub> Ib-u <sub>2</sub> -lum MAR.TU iv 19')SIG <sub>7</sub> -a tug <sub>2</sub> Za-da-ga MAR.TU v 13')[...] x MAR.TU

〔哀歌歌い手〕として演じる			
A 4218	Drehem	ŠS 4 VIII 2	Muš-da-nu-um 「MAR.TU」u <sub>4</sub> nam-gala in-ak

表5. Letter (書簡)・判決

粘土板番号	出土地	日付	
ITT III/2 6617	Girsu	[…]	1-4) <sup>d</sup> Šara <sub>2</sub> -kam/ u <sub>3</sub> -na-a-du <sub>11</sub> /3 ma <sub>2</sub> 60 gur /ma <sub>2</sub> še MAR.TU-ne du <sub>3</sub> -d[e <sub>3</sub> ] / […]
「シヤラーカムに言え、MAR.TUの穀物舟—60グル船—3艙を修繕するために、[ピトウメン(コーキング剤)を送れ。]			
MAH 16339 (= TCS 1, 224)	不明	[…]	Lu <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> MAR.TU
YOS IV 114	Umma	[…]	1-2)Ur- <sup>d</sup> Li <sub>9</sub> -si <sub>4</sub> -na-ra/ u <sub>3</sub> -na-du <sub>11</sub> 3-4)a-ša <sub>3</sub> ARAD <sub>2</sub> -ġu <sub>10</sub> MAR.TU-ka/ a he <sub>2</sub> -ma-de <sub>2</sub> -a 5)a-ba šeš-ġu <sub>10</sub> -gin <sub>7</sub>
「Ur-Lisina(k)に(次のように)言え、Aradġu MAR.TUの畑に彼は灌漑するだろう。誰が私の兄弟のようであろうか？」			

## 売買契約

粘土板番号	出土地	日付	
ITT II/2 3470 and 3470 a (case) Pl. 43 (照合済み, App. N. 25参照)	Girsu	ŠS 4	1-2)8 gin <sub>2</sub> ku <sub>3</sub> -babbar/ niġ <sub>2</sub> -šam <sub>2</sub> Uru-ki-bi u <sub>3</sub> dam dumu-na-še <sub>3</sub> 3-6)ki A-kal-la-ta/ Ba-ta-num <sub>2</sub> MAR.TU /u <sub>3</sub> <sup>d</sup> Šul-gi-da dumu-ni/ šu ba-ti case)mu Ba-ta-nu[m <sub>2</sub> MAR.TU] /kišib <sup>d</sup> Šul-gi-da dumu-na ib <sub>2</sub> -ra seal on case) <sup>d</sup> Šu[-gi-da]/ e <sub>2</sub> <sup>?</sup> [x x] /dumu Ba-ir-ra-num <sub>2</sub>
Batanum MAR.TUと彼の息子Šulgidaは、Urukibiおよび彼の妻と息子の代金として銀8シケル(約66.64g)を受け取った。」			

## 受け取り

粘土板番号	出土地	日付	
MAH 16460 (= MVN 2, 88)	Girsu	Š 33	「MAR.TUの口バ1頭と大妻をHulibarのエラム人からNinġešzidaが受け取った。」

## 判決

粘土板番号	出土地	日付	
NSGU 33	Girsu	AS 5	2-3) <sup>1</sup> A-hu-ma dumu Lu <sub>2</sub> -mar-za-ke <sub>4</sub> /[AR]AD <sub>2</sub> Kud-da MAR.TU [nu]-me-en <sub>3</sub> bi <sub>2</sub> -du <sub>11</sub> 4)ARAD <sub>2</sub> Kud-da i <sub>3</sub> -m[e-a] 5-6)u <sub>4</sub> e <sub>2</sub> Kud-da du[mu Kud-d]a-ke <sub>4</sub> -ne in-ba-[eš]-a /saġ-ba Ur-ba-ġar <sub>2</sub> ba-an-ku <sub>4</sub> -ra-a 9-11)[U]r- <sup>d</sup> Lama [MAR.TU] /l[u <sub>2</sub> ki]n <gi <sub>4</sub> -a> lugal /U[r-ba-ġar <sub>2</sub> dumu Kud-da M]AR.TU- <sup>1</sup> ke <sub>4</sub> 12)[nam-erim <sub>2</sub> -bi] i <sub>3</sub> -TAR
「Ahuma、Lumarzaの息子、は『私はKudda MAR.TUの奴隷ではない』と申し立てた。(しかし)王の使者Ulama MAR.TU とKudda MAR.TUの息子Urbagarは『(Ahumaはまさしく)Kuddaの奴隷である』と誓って(証言した。)]			
NSGU 34 (ITT II/2 3810)	Girsu	ŠS 5	2-4) <sup>1</sup> A-hu-ma ARAD <sub>2</sub> Kud-da MAR.TU-ke <sub>4</sub> /…/ ARAD <sub>2</sub> nu-me bi <sub>2</sub> - <sup>1</sup> in <sup>1</sup> -du <sub>11</sub> 5-7)mu 3-kam [e <sub>2</sub> Kud-]da-ka i <sub>3</sub> -[t]i-la/ lum Kud-da-ta mu-da-15-ta /Ur-ba-ġar <sub>2</sub> -ke <sub>4</sub> in-<na>-ba-a 8-10)Si-pa-KA-gi-na /[d]umu Kud-da /[nam-e]rim <sub>2</sub> -am <sub>3</sub> nam-erim <sub>2</sub> -am <sub>3</sub> 11-13)[ki u <sub>4</sub> e <sub>2</sub> K]ud-da ba-ba-a ARAD <sub>2</sub> nu-me-i <sub>3</sub> bi <sub>2</sub> -du <sub>11</sub> -ga /Ur- <sup>d</sup> Lama MAR.TU lu <sub>2</sub> -kin-<gi <sub>4</sub> >-a lugal /e <sub>2</sub> Kud-da in-ba-a nam-erim <sub>2</sub> -am <sub>3</sub> 14-15)A-hu-ma nam-ARAD <sub>2</sub> -še <sub>3</sub> /Ur-ba-ġar <sub>2</sub> dumu Kud-da-ra ba-na-gi-in
「Ahuma、Kudda MAR.TUの奴隷、…は申し立てた。『私は奴隷ではない』と。(しかし)SipaKagina、Kuddaの息子、は、『(Ahumaは)Kudda家に3年間住んでいた。そしてKuddaの死後15年後に(Ahumaは)Urbagarに分配された。』(また)Kudda家の財産を分けた王の使節Ulamaも、Kudda家(財産)が分配されたときAhumaは『私は奴隷ではない』と主張したと誓って(証言した)。Ahumaの奴隷の身分はKudda家の息子の支持で認められた。」			
NSGU 52 (ITT III/2 6538)	Girsu	AS 4	18')[u <sub>3</sub> U]r- <sup>d</sup> Šul-gi-ra [di] in-da-du <sub>11</sub> nu-mu-na-gub-gub-a 19-21')[U]r-dun dumu Diġir-ra /Da-gi MAR.TU lu <sub>2</sub> inim-ma-bi-me 23')[Ur- <sup>d</sup> Šul-gi-r]a [M]A.[R.T]U nam-erim <sub>2</sub> -am <sub>3</sub>
「Urdun、Diġiraの息子とMAR.TUであるDagiは、Ur-Šulgiraに対し請求権を申し立てたが法廷に現れなかったことについての証人である。…Ur-Šulgira MAR.TUは誓った。」			
NSGU 63 (ITT III/2 6560 +V 6731)	Girsu	AS 3 <sup>(2)</sup>	4) <sup>1</sup> Ba-la-la ARAD <sub>2</sub> Ur- <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> MAR.TU-ka 5-8)Ur- <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> -ra/ Lugal-KA-gi-na-…/[in]-ši-šam <sub>2</sub> 13) <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> -in-zu dam Ur- <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> -ka-ke <sub>4</sub> 15) <sup>1</sup> I-na-na geme <sub>2</sub> 17)tuku-bi-i[n <sub>6</sub> in]-na-d[u <sub>11</sub> -ga] 24-25)Lugal-KA-gi-na-ke <sub>4</sub> / nam-erim <sub>2</sub> -bi in-TAR
「LugalKaginaは、Ur-Baba MAR.TUの奴隷であるBalalaをUr-Babaから買った。LugalKaginaは、Baba <sup>1</sup> inzu、Ur-Babaの妻が			

…を彼に(彼女の夫が亡くなったあと?)言い…を誓った:Inana, (私の)女奴隷…」			
NSGU 89 (Bab. 3, Pl.VIII, 17)	Girsu	ŠS 4	2-4)Geme <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Ig-alim dumu Nam-mah-sig <sub>7</sub> -a-ra /MA[R].TU dumu Lu <sub>2</sub> -Nina <sup>ki</sup> -ke <sub>4</sub> / inim in-ni-gar-ra 13-14)geme <sub>7</sub> Lu <sub>7</sub> -gu <sub>7</sub> -gal dumu Lu <sub>7</sub> - <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> -ka/ [ba-na]-gi-in
「MAR.TU, Lu-Ninaの息子、が請求したGeme-Igalim, Nammahsigaの娘に…。(しかし)奴隷はLugugal, Lu-babaの息子、に分配された。」			
NSGU 129 (JTT III/2 6558)	Girsu	[…]	10')L[uga]-a-ma-aš ARAD <sub>2</sub> [Ur]- <sup>d</sup> [Ig-a]im MAR.TU-ke <sub>4</sub>
NSGU 195 (JTT III/2 6563)	Girsu	AS 3 XII	20'-21')3 ama-N[iğ]in <sub>3</sub> -ĜAR-ki-d[Lu <sub>10</sub> MA]R.TU/ ba-na-an-sum 22')ĜIRI <sub>3</sub> -ne <sub>2</sub> -i <sub>3</sub> -ša <sub>6</sub> Niğin <sub>3</sub> -ĜAR-ki-du <sub>10</sub> ba-an-tum <sub>2</sub> -mu
「MAR.TUであるAmaniğin-ĜARKiduは彼に3頭の妊娠牛を与え、(そして)Amaniğin-ĜARKiduはGirneiša(のところに連れてゆくだろう。)」			

表6. その他

Balanced account			
<i>BIN</i> V 119	Umma	AS 8	iii 82) <sup>d</sup> Šul-gi-i <sub>3</sub> -li <sub>2</sub> MAR.TU
<i>PDTI</i> 344	Drehem	AS 8 IV 4	2) <i>Na-ab-la-num</i> <sub>2</sub> MAR.TU šu im-mi-ni-us <sub>2</sub> 10)mu-TUM <sub>2</sub> lugal
<i>RTC</i> 305	Girsu	Š 45 XI-dirig. XI	i 11)1 (gur) 3 (barig) gur še-ba MAR.TU-ne i 16)[1 (gur)] 2 (barig) še-ba MAR.TU-ne iv 9-10)niġ <sub>2</sub> -šid ak/ bala Ur- <sup>d</sup> Lama ensi <sub>2</sub> Ġir <sub>2</sub> -su <sup>ki</sup>
<i>SET</i> 93 (訳のみ)	Drehem	[...]	26)3 ab <sub>2</sub> -didli MAR.TU mu-TUM <sub>2</sub>
<i>SET</i> 104 (訳のみ)	Drehem	AS 8 X	37)[saġ-niġ <sub>2</sub> ]-ġar-ra-kam ša <sub>3</sub> Uri <sub>5</sub> <sup>ki</sup> -ma 6-7)35 udu ba-us <sub>2</sub> sa <sub>2</sub> -dug <sub>4</sub> <i>Na-ab-la-num</i> <sub>2</sub> MAR.TU / Kisig <sub>2</sub> <sup>ki</sup> -ta 12)300 udu <i>Na-ab-la-num</i> <sub>2</sub> MAR.TU 16)ša <sub>3</sub> -bi-ta 20)300 udu <i>Na-ab-la-num</i> <sub>2</sub> MAR.TU 24)37 udu ša <sub>3</sub> udu <i>Na-ab-la-num</i> <sub>2</sub> MAR.TU
<i>TLB</i> III 53	Girsu	[...]	2)36 ma-na sig <sub>2</sub> -ba geme <sub>2</sub> MAR.TU-ne
労賃リスト			
<i>BIN</i> V 165	Umma	VI	6-10)a <sub>2</sub> aġ <sub>2</sub> -ga <sub>2</sub> <i>A-hu-a</i> / Lugal-di-ku <sub>5</sub> / MAR.TU/šu ba-ti
労働割り当て			
BM 15363	Girsu	AS [...] X 2	1-2)1 <sup>d</sup> Nin-ġir <sub>2</sub> -su-i <sub>3</sub> -sa <sub>6</sub> / MAR.TU i <sub>3</sub> -dab <sub>5</sub> end)šu-niġin <sub>2</sub> 12 UN.IL <sub>2</sub> ša <sub>3</sub> -gud še
<i>HLC</i> III 250 Pl. 119 (= A 31912, collated)	Girsu	Š 43, 46	ii 7-8)4 zi-ga MAR.TU/ ša <sub>3</sub> -gud-me iv 6)e <sub>2</sub> Šul-gi
銀製品記録			
BM 15500 (未出版 courtesy I. J. Gelb) <i>Or.</i> 47, 38	Girsu Drehem	[...] ŠS 3 IV	1-4)3 urudu-gur <sub>10</sub> / Lu <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> šuš <sub>3</sub> anše / 2 MAR.TU i <sub>3</sub> -du <sub>6</sub> /2 Ur-gu šu-ku <sub>6</sub> 1)1 har ku <sub>3</sub> -babbar 7 ġin <sub>2</sub> -ta 2-3)「Na <sup>?</sup> -za u <sub>3</sub> <i>Ama-ak-nu-um</i> / [MAR <sup>?</sup> ]-TU <i>Ti-ma-at</i> - <sup>d</sup> En-ilil <sub>2</sub> -la <sub>2</sub> <sup>ki</sup> 4-5)[u <sub>4</sub> ] kur MAR.TU-ta 「i <sub>3</sub> 」-im-ġen-na-a 6)1 za <sub>3</sub> -mi-ri <sub>2</sub> -tum zabar ġeš-bi ku <sub>3</sub> -babbar sub-ba 7-8) <i>Ab-ba-bu</i> MAR.TU/ lu <sub>2</sub> DUN-a <i>A-bu-ni-ra</i> 9) KI.KUŠ.LU.UB <sub>2</sub> .ĠAR.RA-še <sub>3</sub> 4) <i>E-bi-da-nu-um</i> MAR.TU-kam 7) <i>I-a-um</i> MAR.TU-kam
IM 46306 (未出版, A1 from a copy F. W. Geers; collated, courtesy R. D. Biggs)	Drehem	Š 46	
<i>UET</i> III 566	Ur	IS 11 VIII 17	
金属製品記録			
UM 55-21-91 2 N-t 601, (未出版)	Nippur	Š 33 XII	1)1 za <sub>3</sub> -mi-ri <sub>2</sub> -tum zabar ku <sub>3</sub> -babbar ġar-ra 5)MAR.TU ki Lu <sub>2</sub> -kal <sup>?</sup> -la
衣服・布に関する記録			
<i>ITT</i> V 6744 Pl. 11	Girsu	Š 10 VII	1-3)15 gada us <sub>2</sub> / 2 tug <sub>2</sub> uš-bar ba-kešda/Uri <sub>5</sub> <sup>ki</sup> -še <sub>3</sub> 4-6)ġiri <sub>3</sub> Lu <sub>2</sub> - <sup>d</sup> Ba-ba <sub>6</sub> /dub-sar Uri <sub>5</sub> <sup>ki</sup> -ma/ MAR.TU i <sub>3</sub> -TUM <sub>2</sub>
<i>UET</i> III 1678 (collated courtesy Á. Sjöberg)	Ur	IS 4 VIII	2) <i>Ia<sub>3</sub>-ma-am-u<sub>2</sub></i> 4) <i>Ia<sub>3</sub>-a-nu-zu-um</i> 6) <i>Lu<sub>2</sub>-a-nu-um</i> 8) <i>U<sub>2</sub>-za-DU</i> 10) <i>Ia<sub>3</sub>-a-um</i> 11-12)MAR.TU 「x」 / u <sub>4</sub> -ba lugal-še <sub>3</sub> [A]M.RI.IL <sub>2</sub> 「x」 3)niġ-šu-tag <sub>4</sub> -a ki MAR.TU Sak-kul-ma-da-ka-še <sub>3</sub>
<i>UET</i> III 1685	Ur	IS 4 VIII	
戦利品 (nam-ra-ak)			
A 5169	Drehem	Š 48 VII 19	18)nam-ra-ak kur MAR.TU
A 5254	Drehem	Š 48 V	5)nam-ra-ak kur MAR.TU
<i>PDTI</i> 32 (訳のみ)	Drehem	AS 4 I 3	5-6)ša <sub>3</sub> mu-TUM <sub>2</sub> nam-ra-ak kur /MAR.TU
<i>SRD</i> 9	Drehem	Š 47 XII	5)nam-ra-ak kur MAR.TU
<i>UET</i> III 1244	Ur	IS 14 XIII 25	17)nam-ra-aš-ak MAR.TU
<i>UET</i> III 1391	Ur	[...]	iv 3) <i>Na-bi<sub>2</sub></i> - <sup>d</sup> EN.ZU iv 4) <i>I-za-nu-um</i>



			iv 5)nam-ra-aš-ak MAR.TU
<b>耕地記録</b>			
BM 14616 CT I 2-3 (BM 94-10-15, 3)	Girsu Girsu	[...] Š 37 IV	v 12)Ur <sub>2</sub> -ri-ba-du <sub>7</sub> MAR.TU iv 7-8)3(geš) 2(u) 5(aš) 1(barig) 4 (ban <sub>2</sub> ) gur/MAR.TU engar iv 18-19)š <sub>u</sub> -ni <sub>gin</sub> 2(geš) 1(aš) 4(barig) 4(ban <sub>2</sub> ) 5 sila <sub>3</sub> gur / a-ša <sub>3</sub> La-za-wi dab <sub>5</sub> -ba
CT VII 43b (BM 17760)	Girsu	[...]	3)Di <sub>gir</sub> -ra 5)Lugal-uru-da 7)Ur-DUN dumu Sa <sub>6</sub> -da 11-12)A-tu/ ma <sub>2</sub> -lah <sub>5</sub> 14)Ši-GABA 16)La <sub>7</sub> -ni <sup>1</sup> -DI <sub>Ĝ</sub> IR 17-18)[M]AR.TU-me/ nu-u <sub>3</sub> -u <sub>8</sub>
MCS 8(1958) p.70, N.226(AO 8106)	Girsu	[...]	13)a-ša <sub>3</sub> Ur- <sup>d</sup> Ig-alim MAR.TU
<b>大麦関連記録</b>			
Or. 20, p.83, IB 151	Umma	mu 4-kam us <sub>2</sub> -sa-bi	Rs. ša <sub>3</sub> -gal anše MAR.TU
<b>人名リスト</b>			
BM 14352	Girsu	[...]	Rs. 22)1 MAR.TU dumu U <sub>2</sub> - <sup>1</sup> za-zi <sup>1</sup> Rs. 23-24)im gu-la tur lu <sub>2</sub> e <sub>2</sub> -ne-ka/mu- <sub>gal</sub> <sub>2</sub>
YBC 3641 (未出版 courtesy W.W.Hallo)	Girsu <sup>2</sup>	[...]	4)Lu <sub>2</sub> -kal-la dumu Ur-ni <sub>gin</sub> <sub>2</sub> - <sub>gar</sub>
<b>労働者記録</b>			
MAH 16253 (= MVN 2, 287)	Girsu	Š 46	5 gu-za ... 2 ki Na-ab-la-num <sub>2</sub> MAR.TU [ ]
<b>耕作用牡ウシと労働者</b>			
MAH 16404 (= MVN 2, 033)	Girsu	ŠS 4 V 7	Rs.iii 6)A-mu-ru-um
<b>藁マットに関する記録</b>			
UCP IX/2 121 (p.267)	Umma	ŠS 4	3)MAR.TU na <sub>2</sub> de <sub>3</sub>
<b>木材貨物に関する記録</b>			
UET III 787	Ur	AS 8 I	4)A-du-ni-la
<b>麩に関する記録</b>			
UET III 884	Ur	IS 5 III	6-8)ki I-za-num <sub>2</sub> -ta/ Nam-zi-tar-ra/ šu ba-an-ti

## 文書番号

- A : Museum numbers of the Oriental Institute. Chicago.
- ABTR : Arnold W. R. 1896 *Ancient Babylonian Records in the Columbia University Library*. New York.
- AO : Museum numbers of the Louvre. Paris.
- AT : Pinches, Th. G. 1908 *The Amherst Tablets*, London.
- BIN V : Hackman, G. G. 1937 *Temple documents of the third dynasty of Ur from Umma*. New Haven. Tablets, New Haven.
- BIN IX : Crawford, V. E. *Sumerian economic texts from the first dynasty of Isin*. New Haven.
- BJRL : *Bulletin of the John Rylands Library*.
- BM messenger : Sigrist, M. 1990 *Messenger Texts from The British Museum*. Capital Disions Limited. Potomac.
- BTBC : Pinches, Th. G. 1908 *The Babylonian Tablets of the Berens Collection*. London.
- CBT : Figulla, H. H. 1961 *Catalogue of the Babylonian Tablets in the British Museum*, vol. I. London.
- CCTE : Oppenheim, A. L. (ed.) 1948 *Catalogue of the Cuneiform Tablets in the British Museum*, vol. I. London.
- Charpin : Charpin D. 1987, "Tablettes présargoniques de Mari", *MARI* 5. 65-125.
- CHÉU : Contenau, G. *Contributions à l'histoire économique d'Umma*. Paris.
- CST : Fisch, T. 1932 *Catalogue of the Sumerian Tablets in the John Rylands Library*. Manchester.
- CT VII : King, L. W. 1899 *Ur III-Urkunden, Cuneiform texts from Babylonian tablets*, vol.VII. London.
- CT IX : King, L. W. 1900 *Ur III-Urkunden, Cuneiform texts from Babylonian tablets*, vol. IX. London.
- CTC : Jacobsen, Th. 1939 *Cuneiform Textes in the National Museum, Copenhagen*. Leiden.
- Dok : Nikolski, M. V. 1915 *Dokumenty khoziainstvennoi otchetnosti*, vol. II. Moskva.
- HAV : *Hilprecht Aniversary Volumes*. Leipzig. 1909.
- HLC : Barton, G. A. 1905-18 *Haverford Library Collection of Cuneiform Tablets*. New Haven.
- HSS IV : Hussey, M. I. 1915 *Sumerian tablets in the Harvard Semitic Museum, Part II: From the time of the dynasty of Ur*. Cambridge (U.S.A.).
- HUCA : *Hebrew Union College annual*.
- IM : Museum numbers of the Iraq Museum. Baghdad.
- ITT II : de Genouillac, H. 1911 *Inventaire des tablettes de Tello conservées au Musée Impérial Ottoman II: Textes de l' époque d'Agade et de l' époque d'Ur* (Fouilles d'Ernest de Sarzec en 1894). Première partie Paris 1910, deuxième partie Paris.
- MAD 5 : Gelb, I. 1970, *Sargonic Texts in the Ashmolean Museum, Oxford. Materials for the Assyrian Dictionary*. Chicago.
- MAH : Museum numbers of the Musée d'Art et d'Histoire. Genève.
- MCS 9 : Fisch T. and Donald, T. 1958 *Manchester Cuneiform Studies*. 9.
- MDP 14 : Seil V. 1913 *Textes élamites-semitiques, cinquième série.Mémoires de la Mission Archéologique de Susiane* 14. Paris.
- MVN : *Materiali per il vocabulario neosumerico*. Rom. 1974ff.
- Nebr. : Museum numbers of the State Museum of Nebraska. Lincoln (Nebr.)
- OBTR : R. J. Lau 1906 *Old Babylonian Temple Records*. New York.

- OIP* 104 : Gelb I. J. , Steinkeller P. and Whiting, Jr. R. M. 1991 *Earliest Land Tenure Systems in the Near East: Ancient Kudurrus*. The Oriental Institute of the University of Chicago, Chicago. pl.45(photo) and pl.46.
- Owen* : (see Buccellati 1966 Appendix, N.15).
- PBS* XIV : Legrain, L. 1925 The culture of the Babylonians from their seals in the collections of the Museum. Philadelphia .
- PDTI* : Cığ, M. Kızılyay, H. Salonen, A. 1954 *Die Puzriš-dagan-Texte der Istanbuler Archäologischen Museen*. Helsinki.
- RA* : *Revue d'Assyriologie*.
- RIAA* : Speelers, L. 1925 Re cueil des inscriptions de l'Asie antérieure des Musées royaux du Cinquenaire à Bruxelles.
- RTC* : Thureau-Dangin, F. 1903 *Recueil de tablettes chaldéennes*. Paris.
- STA* : Chiera, E. 1934 *Selected Temple Accounts from Telloh, Yokha and Drehem*. Princeton.
- SRD* : Nesbit, W. M. 1914 *Sumerian Records from Drehem*. New York.
- STD* : Margolis, E. 1936 *Sumerian Temple Documents*. New York.
- StrKT* : Frank, C. 1928 *Strassburger Keilschrifttexte in sumerischer und babylonischer Sprach*. Berlin und Leipzig.
- TA* : Excavation number of the tablets from Tell Asmar.
- TCS* : Boston, G. 1936 *Tavolette cuneiformi sumere degli archive di Drehem e di Djoha della ultima dinastia di Ur*. Milano.
- TD* : de Genouillac, H. 1936 *La trouvaille de Drehem*. Paris.
- TRU* : Legrain, L. 1912 *Le Temps des rois d'Ur*. Paris.
- TSS* : Jestin, R. 1937 *Tablettes sumériennes de Šuruppak conservées au Musée de Stamboul. Mémoires de l'Institut français d'archéologie de Stamboul III*. Paris.
- TUT* : Resiner, G. 1901 *Tempelurkunden aus Telloh*. Berlin.
- UCP* : University of California Publications.
- UDT* : Nies, J. B. 1919 *Ur Dynasty Tablets from Telloh and Drehem*. Leipzig.
- UET* III : Legrain, L. 1937 Business documents of the third dynasty of Ur, Plates. London.

# III 部

---

考古学からみた

ユーフラテス河中流域の農耕民と牧畜民



# ステップ、部族、遊牧

## —シリア、ユーフラテス河中流域の青銅器時代

西秋 良宏

### はじめに

西アジアの青銅器時代は遊牧民によるステップ開発が本格化した時期とされる。もちろん、牧畜技術が開花した新石器時代以来、あるいは、それ以前からヒトは西アジアのステップを利用してきた。だが、青銅器時代に始まったステップの集中的開発は、その後の社会体制、歴史をも形作った点で格別な事件であったと考える。では、どのような集団が、どのような経緯をへて青銅器時代にステップへ進出したのか。そのプロセスを調べるため、シリア領ユーフラテス河中流域において2008年以來5シーズン、遺跡分布調査を実施した。国士舘大学、大沼克彦をリーダーとする調査、すなわち「セム系部族社会の形成」研究プロジェクトの一部を担ったものである(Ohnuma et al. 2010)。

大沼が主宰したこの調査では、前3千年紀の青銅器時代集落であるガーネム・アル＝アリ遺跡の発掘(長谷川、本書)、その直近台地にある墓地群の発掘(久米、本書)、そして、内陸ステップにあるビシュリ山系における前2千年紀墓群の発掘(足立、藤井、本書)など、各種の考古学的発掘も実施された。筆者らが踏査をおこなったのはガーネム・アル＝アリから半径10キロ圏、かつユーフラテス河右岸である(図1, 2)。それは、河川低地と内陸ステップの双方を含む。調べた遺跡もテル型集落、墓地、さらには石片のみが散布する開地遺跡など多岐にわたっているし、年代も前3千年紀と2千年紀を優にふくむ。したがって、筆者等の調査は、発掘をともなっていないとはいえ、広域のかつ多様、そして年代幅の広い遺跡群を扱っている点に特色がある(Nishiaki 2010a)。その成果をもとに、ユーフラテス河中流域における青銅器時代ステップ開発のプロセスについて整理したい。

### 青銅器時代ステップ開発をめぐる論点

「セム系部族社会の形成」プロジェクトの目的については、既に述べられているので(Ohnuma et al. 2010; 大沼・西秋2010)、詳しくは繰り返さない。要は、青銅器時代のユーフラテス河中流域にいたセム系集団、つまりアムル人社会が形成された過程の研究である。彼らは、部族的紐帯で結ばれた遊牧集団であり、前3千年紀末にメソポタミアに侵入し、前2千年紀初めにはアッシリアやバビロンなどの王朝を打ち立てたとされる。一部がメソポタミアで都市化した後も、他は



図1 ガーネム・アル=アリ遺跡とビシュリ山系の位置 (Nishiaki 2010b)

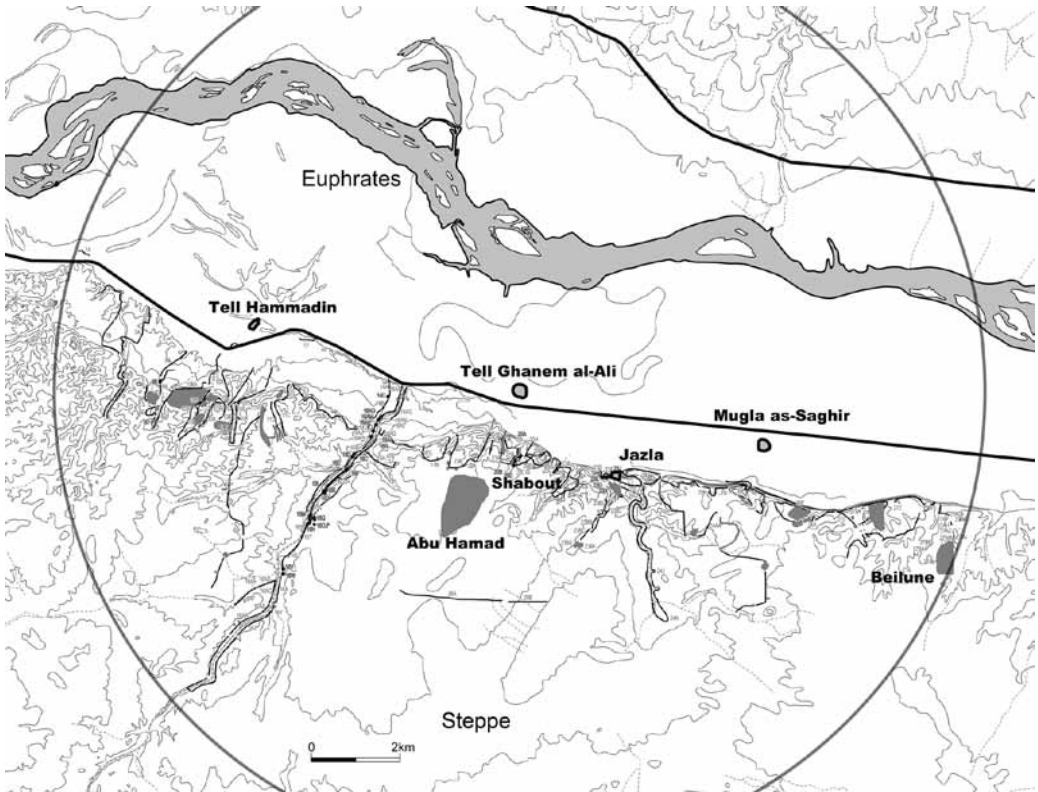


図2 調査地域. 円はガーネム・アル=アリ遺跡から半径10キロ (Nishiaki 2010b)

遊牧民としてビシュリ山系、すなわちユーフラテス河右岸の乾燥台地にとどまり、互いに併存、干渉しながら現代につづく中東的社会の原型を形作ったと目されている。目されている、と書くのは、証拠がもっぱら楔形文書にもとづく文献学的証拠にとどまっており、考古学的な証拠が必ずしも豊富ではないからである。

大沼のプロジェクトによって、前3千年紀にはガーネム・アル＝アリのように一定規模（16ha以上）をもつ集落が河川低地に存在していたこと、同時期の墓地が台地縁辺に密集していたことが明らかになっている。さらに、それらが前2千年紀になると消えてしまうことも判明している。逆に、前2千年紀になって内陸ステップ奥地、ビシュリ山系にケルン墓群が出現する。これらのことからすれば、前3千年紀から2千年紀にかけて、つまり前期青銅器時代から中期青銅器時代にかけて当地の社会や生業に本質的な変化がおきていたことが示唆される。そのプロセスを実証してみよう、というのが筆者等の踏査の目的である。

特に明らかにすべきは、次の二つであろう。第一は、前3千年紀社会の性質。前2千年紀の内陸ステップに展開していた集団は遊牧部族社会であったとされる（山田2010）。彼らが、前3千年紀に低地にいた集団を母体とすることはほぼ間違いない。では、彼らは前3千年紀から部族社会を成していたのか、それとも、前2千年紀になってから社会形態を部族社会に変容させたのか。もう一つは、タイミングである。前3千年紀から2千年紀にかけて内陸進出が本格化したことはおそらく確かだが、具体的にはいつなのか。進出の経緯を地球規模で生じたとされる前3千年紀末の気候変化に対応させたり、アッカド帝国の崩壊など歴史的事件と対応させたりして説明するには、年代を正確に確定させておく必要がある（Costanza et al. 2007）。

いずれも遺跡踏査のみで確定させるのは難しい課題ではあるが、これまでの成果を他の研究グループの成果とあわせて考察してみたい。それらをもとに、前3千年紀から2千年紀にかけてのユーフラテス川中流域ステップ開発のプロセスを素描する。

## 遺跡分布調査

踏査は2007年8月に実施した調査地の下見から始まる（Nishiaki 2008）。2008年3-4月に第一次踏査（Nishiaki et al. 2009）、2009年2-3月に第二次（Nishiaki et al. 2011a）、2009年5月に第三次（Nishiaki and Abe 2010）、2010年2-3月に第四次（Nishiaki et al. 2011b）、そして2011年3月に第五次踏査（Nishiaki et al. 2012）を実施した。それらの概要は別にまとめている（Nishiaki 2010a）。

踏査の範囲は先述したようにガーネム・アル＝アリ遺跡の周囲、半径10キロ圏内である（図2）。このなかにはいくつものワディが南北に走っている。もっぱら、これらのワディ沿いに歩き、遺跡の有無、内容について調べた。遺跡がある地点だけでなく、ない地点も綿密に記録している点に我々の踏査の特徴がある。5シーズンの踏査によって、総計200を超える遺跡ないし遺物散布地点が記録された。それらは、テル、開地遺跡、遺物散布地点、墓群などで構成されている。

以下、前3千年紀の社会や占地について、まず調査結果が示唆するその特徴を述べ、ついで、



それらが前2千年紀になってどう変化したかを述べる。

### 遺跡分布調査から見た前3千年紀の社会

ガーネム・アル＝アリの発掘によって、そこが前3千年紀のほぼ全期を通じて居住されていたことが判明している（長谷川、本書）。オオムギを主作物とする農耕が実施されていたこと（赤司、本書）、ヒツジ・ヤギの放牧がおこなわれていたこともわかっている（Hongo et al. 2010）。すなわち、河川低地には農耕牧畜を生業とする集団が確実にいた。一方、ステップ台地にはどんな生業を営む集団がいたのだろうか。前2千年紀にはメソポタミア低地の農耕牧畜集団とステップ台地の遊牧集団への分化が推進したと言われている。前3千年紀のステップ台地を利用していたのはどんな集団だったのか。

筆者らの踏査で見つかったステップ台地の遺跡のうち、前3千年紀に位置づけられるのは石器散布地、および墓群のみである。ガーネム・アル＝アリのようなテル型遺跡は、その末になるまで見当たらない（後述）。石器散布地で採集できるのは単純な剥片群のみであるが（図3）、ガーネム・アル＝アリ遺跡や、新石器時代～銅石器時代集落であるテル・コサク・シャマリ遺跡の出土石器群と比較解析した結果、散布地の石器の多くが前3千年紀の青銅器時代に位置づけられる

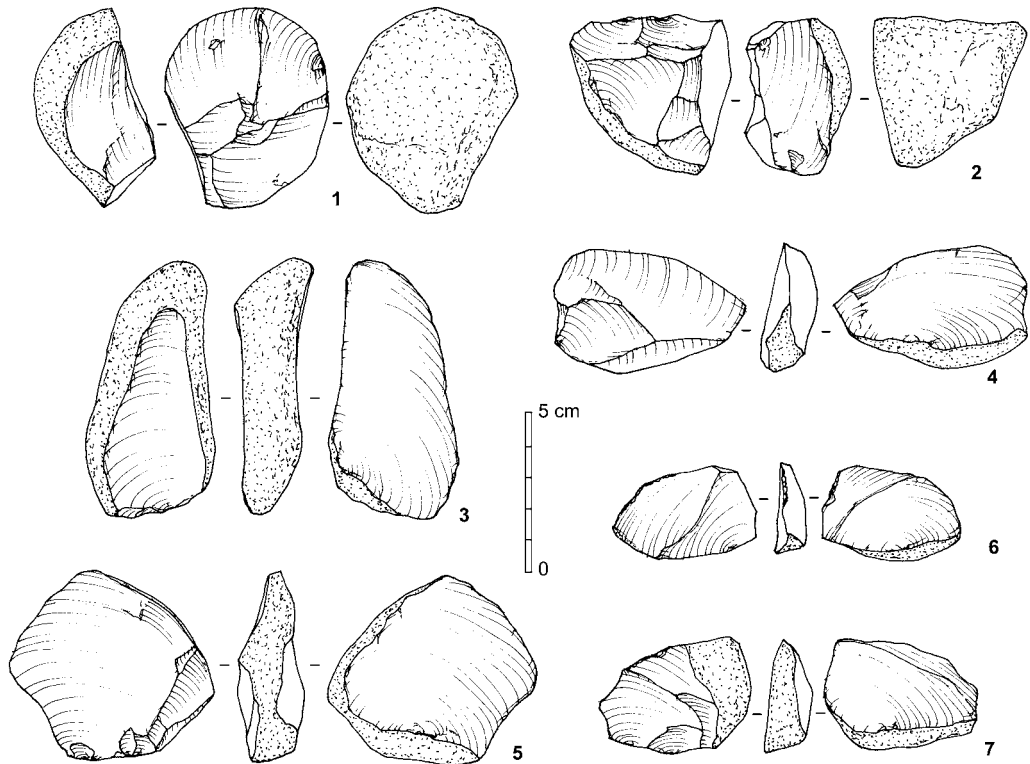


図3 ステップの石器散布地で採集できる石器群（Nishiaki 2010b）

ことがわかった (Nishiaki 2010b). 各地点における標本数の少なさは、小集団の極めて短期間の滞在を示唆する。鎌刃など農耕要素が皆無であること、また、狩猟具を欠くことからみて最も可能性が高いのは、それらの散布地が放牧民の短期逗留地であったという解釈である。南レヴァント地方における青銅器時代遺跡出土の単純剥片の多くは動物解体用石器であったことが推定されている (Greenfield 2006). 筆者らの採集石器については使用痕検査が実施されていないが、これに倣えば、石器使用の目的はやはり短期逗留地における動物解体であったと推察する。

この解釈が正しいとすると、問題となるのは、そうした遺跡を残したのがガーネム・アル＝アリのような低地テルから派遣された牧民 (牧童) たちであったのか、それとも、ステップ台地に展開していた遊牧民だったのかという点である。

この回答は墓群を残した人々が誰であったかという問題を解決することで得られるかもしれない。ステップ台地に膨大な数の前3千年紀の墓群が分布していることは、既にドイツの調査隊が報告している (Falb et al. 2005). また、大沼プロジェクトにおいても、そのいくつかが試掘の対象とされた (久米, 本書). それらが、ガーネム・アル＝アリのような低地遺跡集団の墓地であれば、当時は低地の農耕牧畜集団しかおらず、放牧のためにステップ台地を訪れた際に石器散布地を残したという解釈が有力になる。一方、墓を残したのが遊牧集団であったのだとすれば、前3千年紀においても前2千年紀と同様、低地とは違った集団が内陸に存在していたことになる。

墓の埋葬主については議論がある。かつてガーネム・アル＝アリ近郊の台地上墓群、アブ・ハマド遺跡を発掘したマイヤー (Meyer 2005, 2010) は、墓の構造がユーフラテス上流域の低地集落で見ついているものとは異なること、また、テルの規模から推測される低地集団の人口からみて墓の数が多すぎることを指摘し、台地の墓群は低地とは別の集団、すなわち遊牧民の所産であったと考える。さらに、ガーネム・アル＝アリのような低地住民の墓は低地のどこかに埋もれていて未発見なのではないか、台地墓群と低地集落が地理的に近接するのは、現代ベドウィンがそうであるように、遊牧民と農民が契約を結んでいたためではないかと説明する。

筆者は、違うと思う (Nishiaki 2010a). 第一に我々の綿密な踏査にもかかわらずガーネム・アル＝アリ周辺低地で墓は見つかっていない。第二に、沼本、久米らの発掘が示すように、台地の墓域は実際には、台地だけでなく低地の集落近くにまで連続して分布している (Numoto and Kume 2010). 低地集落と台地墓群とは空間的に明瞭な境界がないのである。筆者は、台地上の墓群には遊牧民の墓も低地民の墓も含まれているのではないかと考えている。クーパー (Cooper 2006) が可能性を示唆しているように、ユーフラテス河中流域においては同一部族に属する農耕民と遊牧民がゆるやかなフェデレーションを作っていたのではないか。台地集団も低地集団も事実上、同一の集団であったとみる。台地にひろがる墓域は確かに広大であり、かつ、墓群の中には集落から2キロを超えるところに位置するものもあるから、すべてが低地集団の墓ではあるまい。それらには、同一集団でありながら低地集落に居住していなかった人々、すなわち遊牧民が含まれているのだと解釈したい。前3千年紀の青銅器社会は半農半遊牧の集団であったのだろう。

## 遺跡分布調査から見た前3千年紀社会の部族性

以上に述べたのは、前3千年紀には農耕牧畜集団と遊牧集団は分化していなかったという考えである。では、社会構造はどうか。部族社会も前2千年紀になって初めて生まれたのかどうか。

部族社会とはどんな社会かと言えば、文化人類学の分野では次のように定義されている。特にアラブ系部族に焦点をあてて整理した赤堀(2010)は、居住地域が領域をなしていること(A)、集団の構造はどれも等質であること(B)、血統が父系のみで規定されていること(C)、さらに、出自が父祖との関係で規定されていること(D)、という四つの特徴をあげている。現代アラブ社会につながる、そのような社会が前2千年紀に既に存在していたことは、楔形文字の分野で論証されている(前川2010;山田2010)。

考古学の証拠は遺跡出土人骨の古DNAなどが検査されないかぎり、集団の父系性(C)、出自の特質(D)については語らない。しかし、残り二つの要件、領域的(A)、分節的(B)という点では、十分な証拠を提出しうる。たとえば、ビシュリ山系の調査で発掘された前2千年紀の墓地群は、いくつかのグループをなして集中分布しており、それらがさらにグループをなす(Fuji and Adachi 2010)。墓地の空間的構造が集団の構造を反映すると見る限り、このパターンが示すのは、分節的(B)という部族社会の特徴そのものである。踏査が明らかにした前3千年紀の墓群も同様である。図4はガーネム・アル＝アリ遺跡直近に位置するアブ・ハマド墓群の一部である。ドイツ隊がさらに詳しく記載しているように(Falb et al. 2005)、分布は入れ子のようにになっている。ビシュリの前2千年紀墓と同様、分節的な構造をなしていたことがわかる(B)。

さらに、低地のテルと台地の墓群が対応している点は、居住地域が領域をなすという特徴に合致する(A)。テルと台地墓群のペアは調査範囲内で三つ見つかっている(図5)。西から順にハマディーン、ガーネム・アル＝アリ、ムグラ・ザギールの集落に対応した墓群が台地上に分布している。さらに重要なのは、これら3つのペアの間に、墓の分布の希薄な地域があることである。かつ、そこには深いワディが認められる(図6)。すなわち、これらの集落と墓群を残した集団は、互いに地理的境界を認識し、自らの領域を維持していたと見られる。

踏査の結果から言えるのはここまでであるが、筆者は前3千年紀に部族社会が成立していたと考える。この見方は、河川低地遺跡の発掘調査によって前3千年紀社会の部族性を論じたこれまでの研究と矛盾するものではない。例えば、ユーフラテス河上流域のテル・バナートの発掘では、前3千年紀の壮大な儀礼遺構が見つかっている。発掘者は、遊牧部族が繰り返し利用した祖先崇拜の施設であるとみている(Porter 2002, 2008)。父系、父祖が示されているのかどうかは未解決であるが、その可能性も十分にある。同様に、さらに上流の遺跡群について考察したペルテンブルグ(Peltenberg 2008)、下流のマリ遺跡などの構成集団について再考したりヨネたちも(Lyonnet 2009)、集落の構造や遺構をもとに前3千年紀の部族社会の存在を論じている。今回の踏査成果は、こうした見方、すなわち前3千年紀には部族社会ができあがっていたとみる説を支持するものと

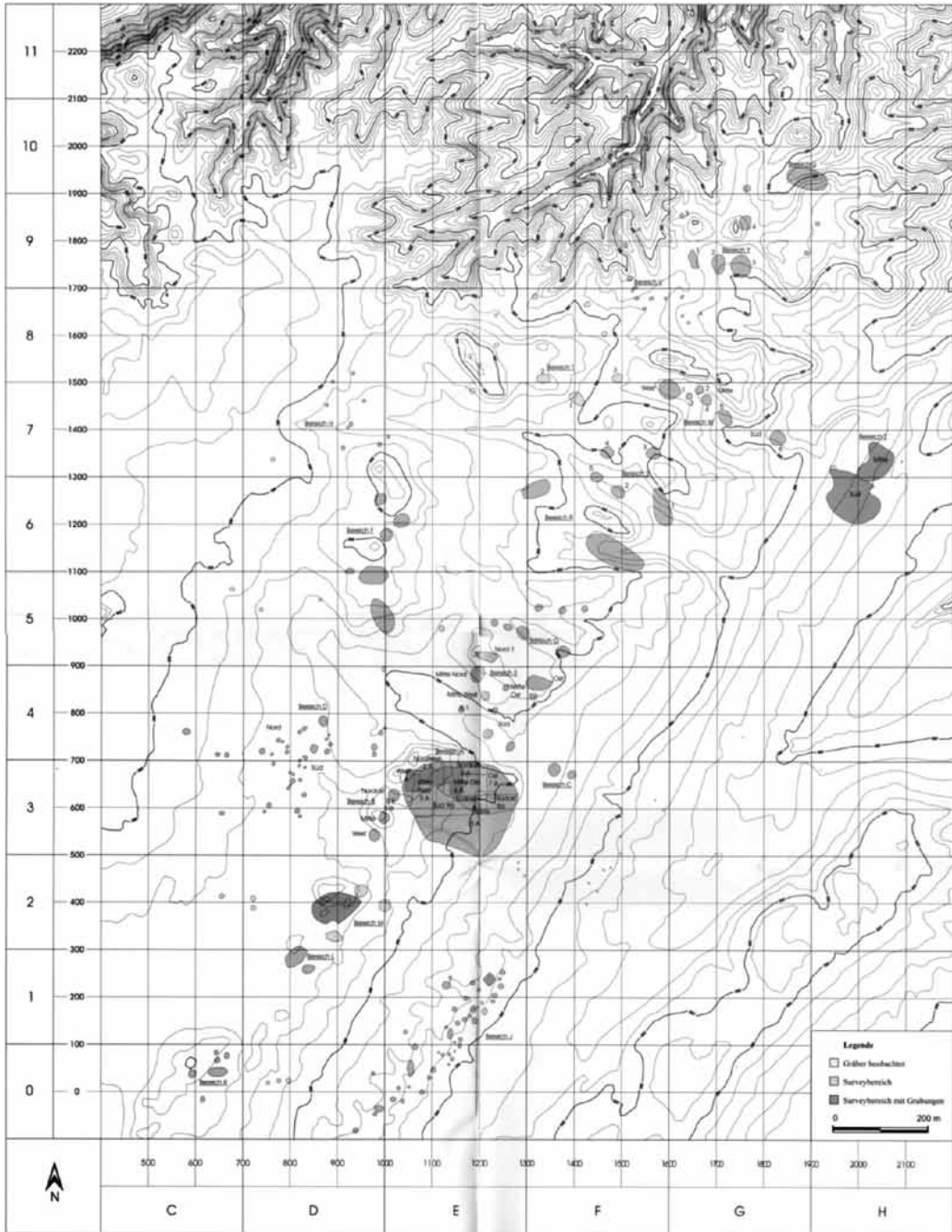


図4 アブ・ハマドの階層性 (Falb et al. 2005)

して位置づけたい。

さて、では入れ子のように分節化されていた諸集団はどのように紐帯を保っていたのか。前2千年紀になってビシュリ山岳部に突如あらわれる大量のケルン墓群は、分散していた同一部族の集団が集結する聖地のような機能を果たしていたと推測される (Fuji and Adachi 2010)。筆者は、

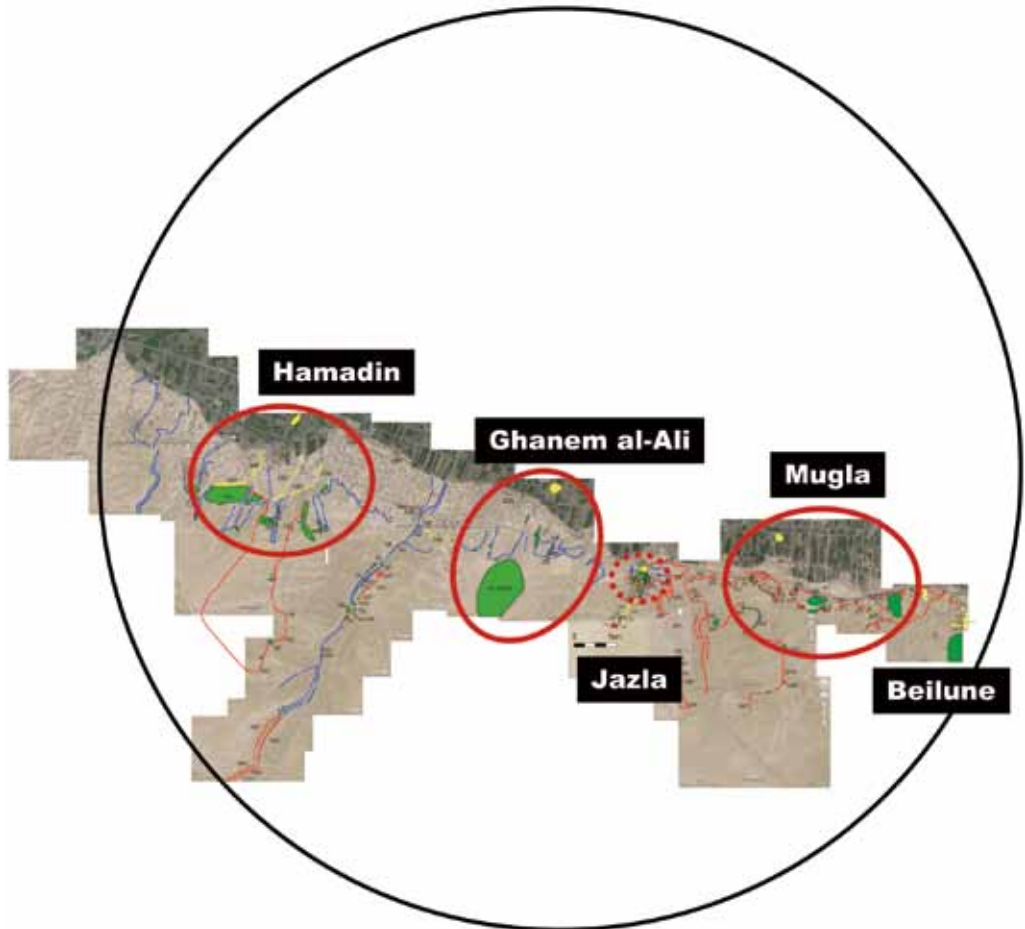


図5 三つの低地集落＝台地墓地ペア (Nishiaki 2010a)

前3千年紀の集団にもそのような土地があったように思う。その候補地は、ビシュリのような内陸山岳ではなく、テルが位置していた低地に近い台地の一角である。筆者らの踏査によって、バイルーンとよばれる谷で前3千年紀のケルン墓群が大量に見つかっている (Nishiaki et al. 2011a, b)。前3千年紀のケルン墓自体は台地縁辺に密集する他の墓域でも散発的に見つかっているが、ここでは、墓域がケルン墓のみで構成されている点で、他の墓域とは全く異なっている (図7)。さらに、台地直近の墓域は低地集落とペアをなして分布することを述べたが、このケルン墓域は対応する低地集落が見当たらないという点でも異質である (図5)。

筆者の推測は、ここが、前2千年紀集団にとってのビシュリ山系と同じように、前3千年紀集団にとっての聖地であったというものである。複数の集団 (何らかのレベルの部族) に共有されていたのではなかろうかと思う。バイルーンの谷は複数のワディの刻みで生じた小盆地、集水域をなしている。そのため、草地が発達している。加えて、周囲の台地縁辺に遮られているため、沙漠の嵐も比較的小よばない。その現場に初めて立った際、筆者は、そこが遊牧民にとって絶好の



図6 ハマディーンとガーネム・アル＝アリの間を隔てるワディ・ハラール



図7 ベイルーンの谷とケルン墓群



図8 ベイルーンの谷に設けられている遊牧民用モスク。現代においても聖地として機能しているのか。

土地であることを直ちに理解し、部族の共有地として、紐帯をになう聖地として機能していたのではないのかと感じたところである。もちろん、これは想像である。立証するには発掘調査が必要だが、それはこれまでのところ果たされていない(図8)。

### 遺跡分布調査から見た前3千年紀末以降のステップ進出

さて、部族社会は前3千年紀に成立していたという見方を述べた。ただし、彼らは、必ずしも前2千年紀のような本格的遊牧部族ではなく、半農半遊牧部族であったと考える。そして、ユーフラテス低地およびそこに近い台地縁辺部を領域としていた。ところが、ユーフラテス低地の集落は前2千年紀になるとほとんどが放棄され、今度はビシュリ山系にケルン墓群が出現する。そして前2千年紀の集落が見当たらなくなる。それは、遊牧化したせいであろうと推測される。

次に述べるのは、この変化のプロセスである。変化は突如としておこったように見える。しかし、筆者らの踏査は、変化が段階的に起こったことを示している。二つの重要なデータを提示する。

一つは、河川低地の前3千年紀社会と内陸ステップの前2千年紀社会をつなぐミッシングリンクともいべき遺跡が台地上で見つかった点である。ジャズラ遺跡群である(Nishiaki et al.

2009). ドイツのコールマイヤー (Kohlmeyer 1984) らの踏査の際, ローマ時代の城 (ジャズラ) の近くに中期青銅器時代の遺跡があったと報じられている. それと同一のものと思われる. ただし, 実際は, それは3つの遺跡で構成されていることがわかった. 第一は, 城が設けられた台地縁辺の高台の遺跡. 第二は, その高台からワディを挟んで西に見下ろす低い台地上のテル (図9). 径60mほどの小さなテルである. そして第三は, 両者の直近から台地奥部に拡がる墓群である. 採集標本から見てこれらは全て前3千年紀末から2千年初頭の遺跡であるとみられる (図10). 盗掘坑から得られた炭化物の年代もこれを裏付けている (Nishiaki 2012). それは, ガーネム・アル=アリなど低地集落の居住が一気に希薄になり, かつ, 内陸ステップに最古のケルン墓群が出現する時期と重なっている. 前期・中期青銅器時代移行期とよばれる時期の集落遺跡なのである. それまでなかった台地上に設けられた初めての集落遺跡である点, また, 程なくして放棄されている点でも, 極めて興味深い. 磨り石や鎌刃など農具も散布しているから, 生業は半農半遊牧であったのだろう.

ステップ開発のプロセスを伝えるもう一つの証拠は, 石器である. 前期青銅器時代にステップ台地で剥片散布地が急増したことは間違いない. 急増時期とはいつなのかを正確に突き止めるため, ガーネム・アル=アリ遺跡出土石器群の層位的変遷を再分析した (Nishiaki 2012). ガーネム・アル=アリ遺跡の居住層序は, 全部で4期に区分できる. 元来は3期に分けられていたが (長谷川, 本書), 筆者は放射性炭素年代 (Nakamura 2010) にしたがって, 4期に区分すべきであると考え, 第1期が3100-2900 cal. BC, 第2期が2900-2650 cal. BC, 第3期が2650-2350 cal. BC, 第4

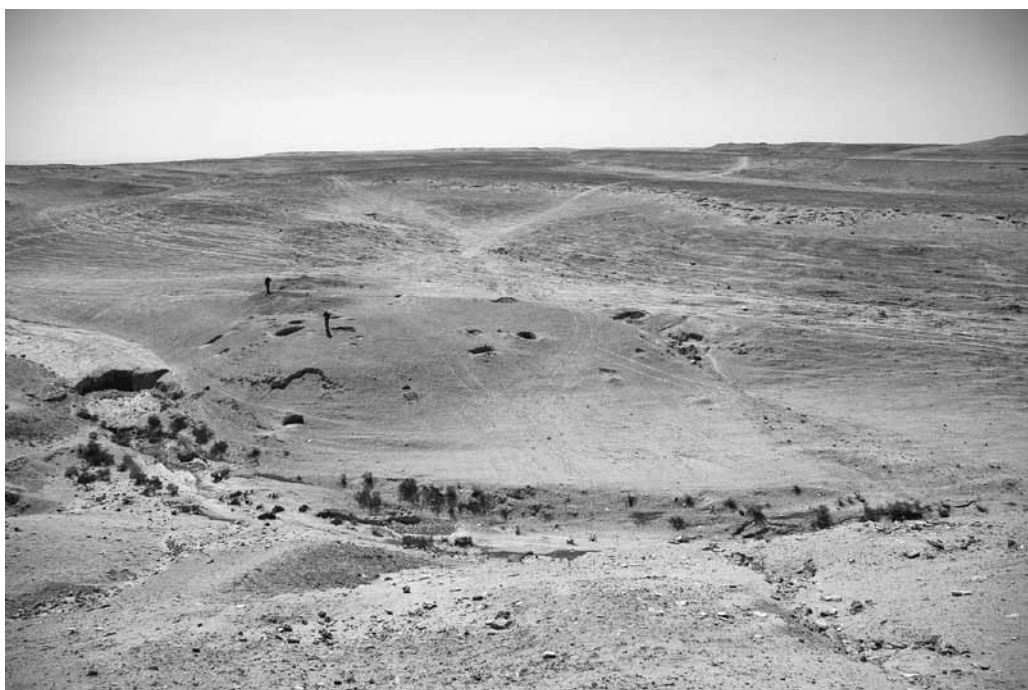


図9 ジャズラ東の小形テル (Nishiaki 2010a)





図10 ジャズラ東の小形テルで採集できる土器

期が2350-2050 cal. BCである。第4期は、このテルの居住が極めて希薄になる時期に相当する。これにしたがい石器群を比較分析してみたところ、ステップに分布する石器群ともっとも類似するのは第4期の出土品であることが確定した。すなわち、ステップで剥片散布地が急増するのは、前3千年紀の末、2350 cal. BC以降のことだと考えられる。これは、上述したジャズラに集落が出現するより少し前のことである。つまり、台地上に集落が設営される直前に、ガーネム・アル＝アリのような低地集落に拠点をおきながらステップ台地の集中的開発を実施していた段階があったのだと推定される。

## おわりに

本稿では、ユーフラテス河中流域の前3千年紀社会の生業、構造、および、彼らがステップ開発を本格化させた時期について考察した。筆者等の5シーズンにわたる踏査の成果にもとづいて述べたものである。その結果、推測されたプロセスは、次のとおりである。前3千年紀には既に部族社会的特徴をもつ半農半遊牧の集団がユーフラテス河中流域に展開していた。彼らは低地集落に拠点をおきつつ前3千年紀末にステップ開発にのりだした。ついで、前2千年紀初頭には低地集落を放棄して、一時期、台地上に集落を移動させた。さらにはそれをも放棄して内陸ビシュリ山系を拠点とする完全な遊牧集団へと移行した。

低地から台地への進出は、突如として起こったものではない。変化は前2350年頃には始まっ

ていた。前期青銅器時代が中期に移行し (Anatasio et al. 2004), ビシュリ山系にケルンが急増するのは前 2000 年頃以降とされている (Nakamura 2010) が、そのような時代の画期は、そのさらに前から継続していたプロセスの到達点であったのである。

ここでは、こうした変化が生じた理由については述べていない。前 3 千年紀末に地球規模で生じた 4.2k イベントと呼ばれる乾燥化が無関係であったとは思われない (Costanza et al. 2007)。しかし、その乾燥化に対処するための複数の選択肢の中から、なぜ、内陸展開が選択されたのかの説明には別の研究が必要となる。今般のサーベイで見つかった遺跡群は、メソポタミア史の一コマを彩る大事件のプロセスを直接、伝える物証である可能性が高い。さらなる説明については別稿を期したい。

### 引用文献

- 赤堀雅幸 (2010) 「イスラーム期以降のアラブ系部族の特徴」『紀元前 3 千年紀の西アジア－ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る』大沼克彦・西秋良宏 (編) : 121-127, 六一書房。
- 大沼克彦・西秋良宏 (編) (2010) 『紀元前 3 千年紀の西アジア－ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る』六一書房。
- 前川和也 (2010) 「紀元前 3 千年紀粘土版文書にみえる家族と血縁集団」『紀元前 3 千年紀の西アジア－ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る』大沼克彦・西秋良宏 (編) : 139-145, 六一書房。
- 山田重郎 (2010) 「前 2 千年紀におけるアムル人, アラム人とアッシリア」『紀元前 3 千年紀の西アジア－ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る』大沼克彦・西秋良宏 (編) : 129-137, 六一書房。
- Anatasio, S., M. Lebeau and M. Sauvage (2004) *Atlas of Preclassical Upper Mesopotamia*. Subartu XIII. Turnhout: Breplos.
- Cooper, L. (2006) *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*. London: Routledge.
- Costanza, R., L.J. Graumlich and W.L. Steffen (2007) *Sustainability or Collapse? An Integrated History and Future of People on Earth*. Cambridge: MIT Press.
- Falb, C., K. Krasnik, J.-W. Meyer and E. Vila (2005) *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im syrischen Euphrattal: 4. Der Friedhof von Abu Hamed*. Saarwellingen: Saarländische Druckerei & Verlag.
- Fujii, S. and T. Adachi (2010) Archaeological investigations of Bronze Age cairn fields on the northwestern flank of Mt. Bishri. *Al-Rafidan*, Special Issue: 61-77.
- Greenfield, H.J. (2006) Slicing cut marks on animal bones: Diagnostics for identifying stone tool type and raw material. *Journal of Field Archaeology* 31(2): 147-163.
- Hongo, H., C. Akashi, L. Omar, K. Tanno and H. Nasu (2010) Zooarchaeology and ethnoarchaeobotany at Tell Ghanem al-Ali. *Al-Rafidan*, Special Issue: 97-104.
- Kohlmeyer, K. (1984) Euphrat-Survey: Die mit Mitteln der Gerda Henkel Stiftung Durchgeführte Archäologische Geländebegehung im Syrischen Euphrattal. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 116: 95-118.
- Lyonnet, B. (2009) Who lived in the third millennium “round cities” of northern Syria? In: *Nomads, Tribes, and the State in the Ancient Near East*, edited by J. Szuchman, pp. 179-200. Chicago: The Oriental Institute of the University of Chicago.

- Meyer, J.-W. (2005) Auswertung und Zusammenfassung der Ergebnisse. In: *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im syrischen Euphrattal: 4. Der Friedhof von Abu Hamed*, edited by C. Falb, K. Krasnik, J.-W. Meyer and E. Vila, pp. 359-365. Saarwellingen: Saarländische Druckerei & Verlag.
- Meyer, J.-W. (2010) The cemetery of Abu Hamad: A burial place for pastoral groups? *Al-Rafidan*, Special Issue: 155-163.
- Nakamura, T. (2010) The Early Bronze Age chronology based on <sup>14</sup>C ages of charcoal remains from Tell Ghanem al-Ali. *Al-Rafidan*, Special Issue: 119-129.
- Nishiaki, Y. (2008) Prehistoric survey at the northern edge of Jebel Bishri, Raqqa. *Al-Rafidan* 29: 151-152.
- Nishiaki, Y. (2010a) Archaeological evidence of the Early Bronze Age communities in the Middle Euphrates steppe, North Syria. *Al-Rafidan*, Special Issue: 37-48.
- Nishiaki, Y. (2010b) Early Bronze Age flint technology and flake scatters in the North Syrian steppe along the Middle Euphrates. *Levant* 42(2): 170-184.
- Nishiaki, Y. (2012) Early-Middle Bronze Age steppe exploitation as seen from an archaeological survey of the Middle Euphrates, Syria. *The Eighth International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*, Warsaw University, April 30 - May 4, 2012.
- Nishiaki, Y., S. Kadowaki and S. Kume (2009) Archaeological survey around Tell Ghanem Al-'Ali. *Al-Rafidan* 30: 145-153, 160-163.
- Nishiaki, Y. and M. Abe (2010) Archaeological survey around Tell Ghanem Al-'Ali (III). *Al-Rafidan* 31: 125-128.
- Nishiaki, Y., M. Abe, S. Kadowaki, S. Kume and H. Nakata (2011a) Archaeological survey around Tell Ghanem Al-'Ali (II). *Al-Rafidan* 32: 189-215.
- Nishiaki, Y., S. Kadowaki, H. Nakata, K. Shimogama and Y. Hayakawa (2011b) Archaeological survey around Tell Ghanem Al-'Ali (IV). *Al-Rafidan* 32: 125-133
- Nishiaki, Y., S. Kadowaki, S. Kume, and K. Shimogama (2012) Archaeological survey around Tell Ghanem Al-'Ali (V). *Al-Rafidan* 33: 1-6.
- Numoto, H. and S. Kume (2010) Surveys and sondage at the cemeteries near the site of Tell Ghanem al-Ali. *Al-Rafidan*, Special Issue: 49-60.
- Ohnuma, K., S. Fujii, Y. Nishiaki, S. Miyashita, A. Tsuneki, and H. Sato (eds.) (2010) *Al-Rafidan Special Issue: Formation of Tribal Communities -Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria*. Tokyo: Kokushikan University.
- Peltenburg, E. J. (2008) Enclosing the ancestors and the growth of socio-political complexity in Early Bronze Age in Syria. *Scienze Dell'antichita, Storia Archeologia Antropologia* 14(1): 215-247.
- Porter, A. (2002) The dynamics of death: Ancestors, pastoralism, and the origins of a third-millennium city in Syria. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 325: 1-36.
- Porter, A. (2008) Evocative topography: Experience, time, and politics in a landscape of death. *Scienze Dell'antichita, Storia Archeologia Antropologia* 14(1): 195-214.

# 集落外墓地の時空分布が示す青銅器時代の社会

—ユーフラテス川中流域の考古学踏査から

門脇 誠二

## 1. 集落外墓地の被葬者は誰か？

定住・農耕社会と遊牧社会という概念は、古代西アジアにおける墓地の考古学的解釈にも影響をおよぼしている。例えば、前期青銅器時代（およそ前3千年紀に相当）のユーフラテス川中流域では、その前後の時期に類例のないほど多数の墓地が、都市や集落以外の場所に設けられた（Akkermans and Schwartz 2003: 246-253）。これらは「集落外墓地（extramural cemetery）」と呼ばれ、河岸段丘上あるいはその先の台地上に立地しており、分布には粗密があるが、多いところでは百～千単位の墓が集中する場所もある（図1）。



図1 ユーフラテス川中流域における青銅器時代の集落外墓地：テル・ムグラ・アッサギール南の台地上、窪地の縁に沿って盗掘墓が並ぶ（26E地点）。右奥がユーフラテス河川低地。

る（図1）。古代西アジアの埋葬といえば、南メソポタミアのウルの王墓などのように壮麗な副葬品を伴う大規模な埋葬の出現が一般にも広く知られているが、その発見よりも前にレオナルド・ウーリーによってユーフラテス川中流域の集落外墓地が調査されていた（Wooley 1914）。それ以来、シリアとトルコの国境付近からタブカ・ダム地域のユーフラテス川両岸において数多くの墓地が調査された。その結果、墓室構造の型式分類が行われ、その多様性の要因として年代や社会集団、社会的地位、埋葬行為の過程などが議論されてきた（Orthmann 1980; Carter and Parker 1996; Porter 2002; Falb et al. 2005; Cooper 2006 など）。しかしながら、より根本的な問題として、なぜ青銅器時代の時期に集落外の墓地が現れるのか、その要因が明らかにされていない。この問題を解くためには副葬者の実態が鍵になると考えられるが、その仮説として、集落外墓地の規模が近郊の集落に比べて大きすぎるので、遊牧民が埋葬されたという説明がある（Meyer 2010）。

## 2. ユーフラテス川中流域の考古学踏査 2008～2011

この問題に関わる考古学的記録が、筆者らがユーフラテス川中流域において行っている遺跡分

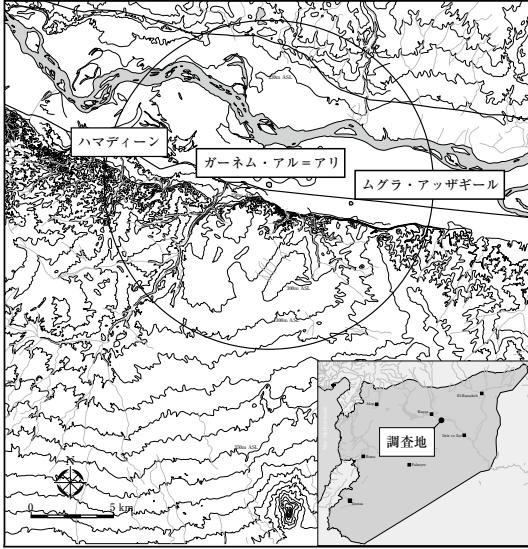


図2 調査地と遺跡踏査範囲

数10mの台地であり、新第三系石膏層を基盤としている。この台地と河川低地とのあいだに河岸段丘が形成されている。調査を行った南岸では、段丘と台地縁辺の傾斜が急で、台地は南方向へ緩やかに標高を上げビシュリ山へいたる。この一帯は、植生が乏しいステップであり、主に放牧地として利用されている。

踏査範囲はテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡から10km圏内のユーフラテス河南岸と設定された。この遺跡は河川低地の端に位置し、遺跡から数百m先は台地の崖面である。したがって、実際の踏査地のほとんどはステップ台地の北縁である。この台地北縁は、ユーフラテス川の支流となるたくさんのワディによって開析されている。ほとんどのワディは長さ数kmであるが、ガーネム・アル＝アリ村とゾル・シャンマル・フォカーニ村のあいだを流れるワディ・ハラールは例外で20km以上の長さを有し、その途中に湧水地がある。これらのワディが台地上の地形的特徴であるため、原則的にワディに沿って踏査を行った。

従来の集落外墓地の調査と比べると、この踏査は2つの新たな方法を採用している。1つは、墓地の空間分布の詳細な記録である。調査地の衛星画像を携帯しながら徒歩によって踏査を行い、踏査経路を記録すると共に、発見した集落外墓地の分布を細かく記録した(図3)。2つ目は、集落外墓地だけではなく、旧石器時代から青銅器時代までの遺跡や遺物散布地点も記録したことである。それらと集落外墓地の対応関係を調べることによって、集落外墓地の空間的・通時的分布パターンを明らかにすることが目的である。

こうした遺跡分布調査の成果に基づき、集落外墓地の空間的・通時的分布に関わるデータから、青銅器時代の社会集団に関する新たな解釈をこれまでに発表してきた(門脇ほか2012, Nishiaki 2010a, 西秋2010, 2011など)。その概要を次に紹介する。その後、本調査によって把握された集落外墓地の分布データが当時の実状を示すかどうかについて新たに検討を加える。そのために、青

布調査(代表:西秋良宏教授,東京大学)から得られている。この調査は、シリア東北部ビシュリ山系のセム系部族社会の形成をテーマにした総合調査(代表:大沼克彦教授,国士舘大学)の一環として2008年から開始された(門脇ほか2009, 2010, Nishiaki et al. 2009, 2011, 西秋ほか2011など)。調査地は、シリア国ラッカ市の東方約40kmのユーフラテス川南岸に位置するテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡の周辺である(図2)。この地域は、現在の年間降水量が200mm弱である。ユーフラテス川の両岸それぞれ3~4kmの幅は低地であり、灌漑による耕作が行われている。その先を縁どるのが比高

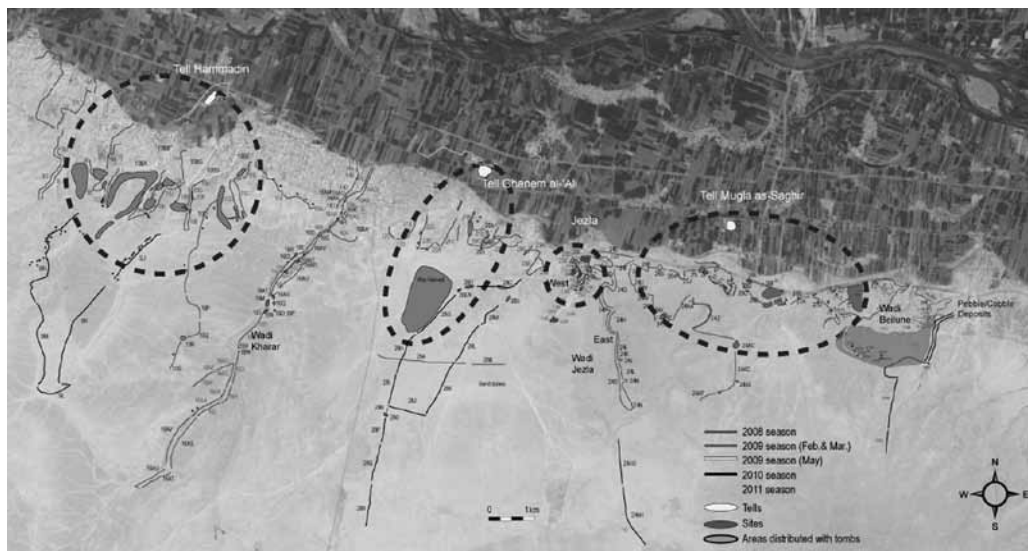


図3 遺跡踏査地の衛星画像と発見された遺跡分布（実線は調査年毎の踏査経路，破線の楕円はテルと周辺墓地のペアを示す）。

銅器時代以前の遺跡分布データを用い，遺跡の侵食や埋没の影響について考察する。

### 3. 集落外墓地の時空分布と青銅器時代社会の新たな解釈

踏査によって記録された集落外墓地の分布を見てみると，幾つかのパターンが認められる（図3）。1つは，河川低地に数 km の間隔で立地する前期青銅器時代のテル型遺跡（ガーネム・アル＝アリ，ハマディーーン，ムグラ・アッザギール）の南部にひろがるステップ台地上への集中である。テルのあいだには比較的大きなワディ（ワディ・ハラールとワディ・ジャズラ東）があり，その近くでは墓の分布が希薄である。つまり，テルと集落外墓地が近接した空間単位が3つ，墓地の空白地帯をばさんで認められる。テルと墓地の周辺から採集された土器片によると，共に前期青銅器時代後半（EB III-IVA，前3千年紀後半）に属する可能性が高い。この年代推定は，ガーネム・アル＝アリ遺跡とそれに近接する墓地の一部から得られたC14年代値とも符合する（中村ほか2010）。2つ目のパターンは，ジャズラ地域のステップ台地北端上に位置するテルとその付近に分布する墓地である。両者から表採された土器は共に中期青銅器時代に属し，それはテルから得られたC14年代値と整合する（前2千年紀初頭：門脇ほか2012）。この2つの分布パターンによると，長期居住地と考えられるテルの周辺に墓地が集中する傾向が認められる。この傾向は，前期から中期青銅器時代にかけてテルの立地が河川低地からステップ台地上へ移動しても継続するようである。

この記録は，集落外墓地に埋葬された集団が，テル住民と深いかわりがあったことを示唆する。テルに比べて墓地の規模が大きすぎるので，テルの住民以外（つまり遊牧民）も埋葬されたはずである，という見解を受け入れたとしても，その集団がテル近郊に埋葬される所以が存



図4 青銅器時代の石器散布地点（ワディ・アブ・ハマド近郊の28E/F地点、区画は2m四方の表面遺物採集用）



図5 ベイルーン地区のケルン墓

ン地区のケルン墓群とジャズラ地区の前期青銅器時代墓地が含まれる。特に前者は、ユーフラテス川沿いの他の墓地には希少なケルン（積石塚）の集中であり（図5）、河川低地からやや離れたステップ内部に立地している点が特徴的である。ジャズラ地区にも前期青銅器時代の墓地はあるが、同時期の長期居住地が近隣に発見されていない。もしこれが当時の実状ならば、ステップ台地上に居住し、おそらく遊牧を行っていた集団が埋葬された可能性がまず1つ考えられる。もう1つ、河川低地に立地するテル型集落（ガーネム・アル＝アリヤムグラ・アッザギールなど）を拠点とする複数の集団に共有されていた墓地という解釈も可能である。

以上のように、これまで集落外墓地の空間的・通時的分布を調べ、青銅器時代の長期居住地（テル型遺跡）や短期活動場（石器散布地）との対応関係を検討した。そして、その結果として把握される土地利用パターンという視点から、社会集団の性格や単位、あるいは集団間の社会関係について新たな解釈を提案してきた。この解釈の主要な根拠は集落外墓地の分布データであるが、それが当時の実状を示すかどうか、という点について新たな検討を次に加える。

在したであろう。その可能性として、テル居住民と社会関係を有しながら、テル近郊で遊牧を行っていた集団が指摘される。テル近郊のステップ地帯における活動痕跡として、遺構や土器が伴わず、打製石器のみが散布する地点が幾つも発見されており（図4）、遊牧や資源獲得などのためにステップ地帯が日常的に利用されていたと考えられる（Nishiaki 2010b）。つまり、墓地が立地するステップは、集落を拠点とした生活圏の内部に位置していた。その領域に遊牧民が存在したとすれば、彼らは特定の集落の周辺に墓地を設けたことになる。例えこうした遊牧民を想定したとしても、彼らはテル居住民と一帯の社会集団と見なすことも不合理ではないだろう。つまり、テルを拠点として農耕・遊牧を組み合わせた生業を行っていた集団と理解できる。

その一方で、特定のテル型集落との結びつきを特定できない墓地も存在する。これが3つ目の墓地分布パターンで、ベイルーン

#### 4. 集落外墓地の分布パターン再検討：3つの「墓地の空白域」の形成過程

踏査範囲内で発見された集落外墓地は、河川低地あるいはステップ台地上に位置するテル型遺跡の周辺に集中して分布する傾向がある。逆に、墓地の分布が希薄あるいは認められない場所は3つに区分できる。1つは河川低地のテル直近である。2つ目は、ステップ台地の南部である。そして3つ目は、河川低地の3つのテルの中間付近に位置するワディ沿いである。つまり、テル・ハマディーンとテル・ガーネム・アル＝アルのあいだに位置するワディ・ハラール、およびテル・ガーネム・アル＝アリとテル・ムグラ・アッザギールのあいだに位置するワディ・ジャズラ東がこれに相当する。これらの「墓地の空白域」は、現在の地表踏査の結果として把握された現象であるが、墓地が設営された当時の実状を示すのかどうか、という点に関して、以下に検討する。

##### 4.1. 河川低地

集落外墓地がテル型集落の周辺に集中する分布パターンが認められるならば、テル直近の河川低地にも墓地が設けられた可能性がある。それを確認するため、テル・ガーネム・アル＝アリとテル・ハマディーン遺跡直近の河川低地で踏査を行った。結果として、墓地は発見されなかったが、これが青銅器時代の状況を示すと断定することは難しい。それには幾つかの理由がある。

まず、河川低地は耕作地として今日利用されており、農作物が地表を覆うために遺構や遺物散布の確認を行うことが困難である(図6)。また、灌漑用の水路や貯水池、畑や住宅の造営によって墓が壊された可能性もある。さらにそれよりも大きな要因として、河川低地には青銅器時代以

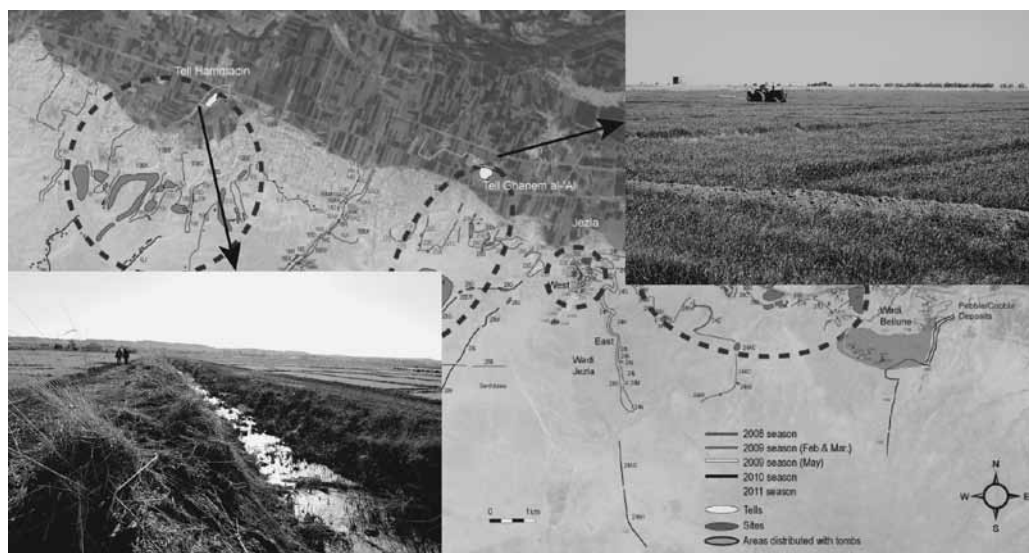


図6 河川低地の土地利用状況：(左)テル・ハマディーン近郊の灌漑用水路、(右)テル・ガーネム・アル＝アリ近郊の耕作地



後の沖積土が厚く堆積していることが、地質調査とテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡の発掘調査から分かっている。したがって、たとえ青銅器時代にテル型集落の周りの河川低地に墓地が作られたとしても、その後に沖積土に覆われ、発見することが難しいと考えられる。実際、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡の場合、テル上に幾つかの中期青銅器時代の墓が発見されている。周囲よりも高いテルの上に墓が設けられたため、沖積土による埋没をまぬがれたのである。

以上から、河川低地のテル直近の「墓地の空白域」は、青銅器時代の実状を示すとは断言できない。先述したように、ステップ台地を含めた調査範囲全体では、集落外墓地がテル型集落の周辺に集中する分布パターンが認められるため、テル直近の河川低地に墓地が存在したと仮定しても、これまでの墓地分布パターンを大きく変えることはない。

#### 4.2. 台地の南部（河川低地のテルから南方へ4km～10kmのあいだ）

河川低地のテルから南へ約10kmまでが踏査範囲である。その南半分の踏査は、これまで7本の経路に沿って数km間隔で行った（図3）。その結果として、ステップ台地上の集落外墓地は台地北縁に集中し、南に行くに従って分布が希薄になる傾向が認められた。台地の北端にくらべると、徒歩による踏査経路の密度は南部で少ない。しなしながら、墳丘墓ならば車からでも確認できるため、踏査経路として図3に示されている以外の場所も車で踏査した。それでも墓地の集中域は南部に発見されていない。

ステップ台地上は、南のビシュリ山から緩やかに傾斜し、浅いワディが南北方向に延びている。ワディによる開析は浅いため、墳丘墓やそれに伴う石室を破壊する規模の侵食が起こったとは考えがたい。また、ユーフラテスの河川低地と違って青銅器時代の墓地がその後の沖積土で埋没した可能性は低い。あるいは、墳丘墓を覆ってしまう規模の砂丘も認められない。土地開発としては、道路建設が調査範囲を横断して行われているが、その幅も限られている。それ以外の土地改変はほとんどない。以上の点から、台地南部における「墓地の空白域」は、墓地設営当時の状況を示す可能性が高いと考えられる。

#### 4.3. ワディ・ハラールとワディ・ジャズラ東沿いの一帯

テル型集落の周辺に墓地が集中するパターンがみられることを先述したが、その墓地集中域の境界となっているのがワディ・ハラールとワディ・ジャズラ東である（図3）。この2つのワディに沿って踏査を行った結果、この一帯では集落外墓地の分布が希薄であることが確認された。この「墓地空白域」の形成過程について、ワディの水流の影響を考慮しながら検討する。ワディ・ハラールは全長20km以上で、ワディ・ジャズラ東はステップ台地の北崖面から約4-5km南に入った所から開析が始まっている。両者とも調査範囲の中では比較的大きなワディだが、ユーフラテス川の場合とは異なり、河成堆積物はワディ底付近に限られているため、それによって墓地が覆われている可能性は考えがたい。

それよりも、ワディの水流による侵食が墓地を破壊した可能性が検討に値する。ステップ台地

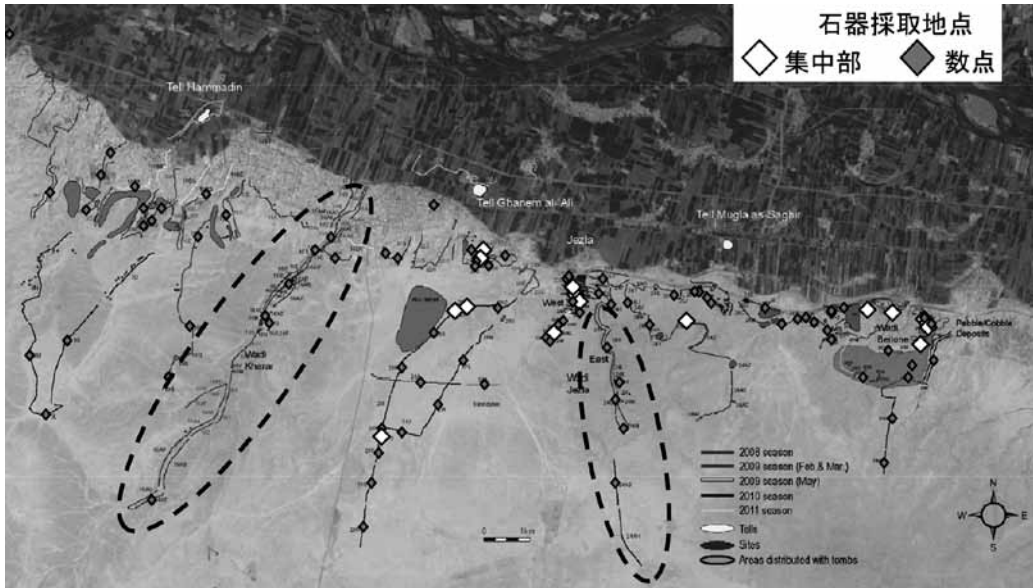


図7 前期青銅器時代の打製石器の採取地点（左の破線はワディ・ハラール、右はワディ・ジャズラ東の位置）

上における墓地の立地の特徴の1つとして、ワディや盆地沿いの斜面頂部に並ぶ傾向がある（図1）。もし、ワディによる台地の侵食が墓地形成後に進んだならば、斜面頂部の墓地が破壊された可能性が考えられる。墓地の侵食が実際に起こったならば、その痕跡として、崩壊途中の墓地があってもよい。また、その石室に利用されている石膏岩が露出していたり、副葬品の土器片が二次的に散布していたりする地点が残っているはずである。しかしながら、これらの痕跡はどれも発見されなかった。

それでは墓地の痕跡が全く消え去るほど大規模な侵食があったかという点、その可能性も低い。というのも、青銅器時代の打製石器ならば、ワディ・ハラールとワディ・ジャズラ東沿いの幾つかの地点で散布が確認されたからである（図7）。それに加え、青銅器時代以前の石器、特に旧石器時代（中期・後期・終末期）と新石器時代の打製石器の散布地点も発見された。これらの石器の数点の散布は二次堆積の可能性が高いが、少なくとも青銅器時代およびそれ以前の時代の遺物がある程度残されている状況の中で、墓地に関わる痕跡だけが欠如していることを示す。

さらにワディ・ハラールの場合、旧石器時代の遺物が数十～数百点単位で散布する集中部が10地点ほど確認された。これらの石器集中は水流の影響を多少は受けているものの、一次的な堆積地点に極めて近いと考えられる（図8）。これらの内、幾つかの地点を試掘した結果、16R-1地点と16R-2地点からは遺物包含層が確認された（図9と10）。また、16R-2地点の遺物包含層から採取された木炭から約3.3万年前という14C年代値（非較正）を得た（門脇ほか2012）。このように、旧石器時代の小規模な遺跡が残されている状況を考慮すると、ワディ沿いの遺跡が水流により侵食された規模はそれほど大きくなかったと推定される。したがって、もしワディ近郊に青銅器時代の墓地が設営されたとしたならば、それが残存していてもおかしくない。

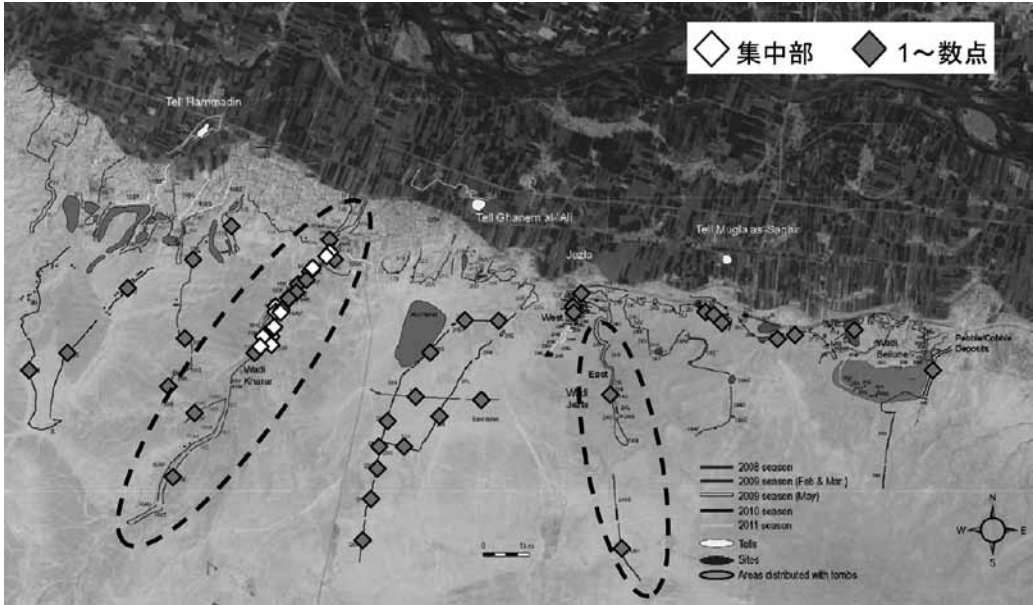


図8 後期・終末期旧石器時代の打製石器の採取地点（左の破線はワディ・ハラール、右はワディ・ジャズラ東の位置）



図9 ワディ・ハラール沿いの旧石器時代遺跡の試掘（16R-1と16R-2地点、手前がワディ）

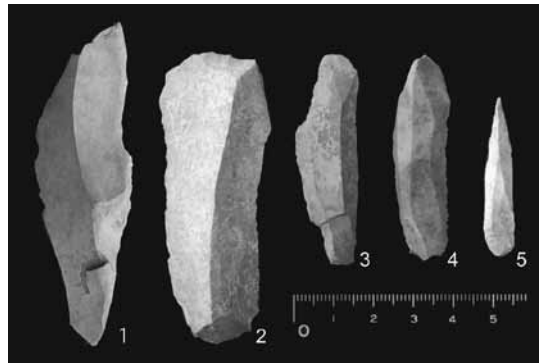


図10 ワディ・ハラール16R地点の後期旧石器時代遺物包含層出土の石器（1, 4:彫器, 2, 3:端削器, 5:エル・ワド尖頭器）

## 5. 考察とまとめ

本稿では、ユーフラテス河中流域における青銅器時代の社会集団に関する考古記録となる集落外墓地の分布パターンの検討を行った。ユーフラテス低地を見下ろす台地上に立地する集落外墓地の発見は100年ほど前に遡り、その研究蓄積も多いが、埋葬者の社会的背景の理解は未だ限られている。筆者らが2008年から行っている遺跡踏査の結果、青銅器時代のテル型集落の周辺に同時期の集落外墓地が集中するパターンが検出された。この考古記録の解釈として、テルを拠点

としてステップ台地も利用し、農耕・遊牧を組み合わせた生業を行う集団が複数存在したことをこれまで提案してきた。

この解釈をさらに検証するため、本稿では墓地集中域のあいだの「墓地空白域」の形成過程について新たに検討し、それが墓地設立当時の実状を示すかどうかについて議論した。結果として、河川低地においては墓地の埋没や破壊の影響が考えられるが、ステップ台地上における墓地の空間分布に対しては侵食や埋没の影響が少ないと思われる。特に、ワディ・ハラールには旧石器時代の遺跡と考えられる遺物集中が10地点以上発見されている。これらのキャンプサイトの遺跡ですら残存しているので、遺構を伴う墓地がもし設営されていたならば、何らかの痕跡が認められてもよい。

シリア国内を流れるユーフラテス川の中流域だけでも長さ400kmを超える。その中で、我々が遺跡踏査した範囲は東西約20km、南北約10kmと限られている。しかしながら、この範囲内に前期青銅器時代のテルが3つ、中期青銅器時代のテルが2つ確認されており（門脇ほか2012, Nishiaki et al. 2012）、集落外墓地とテル型集落の対応関係を調べるには好都合である。このように青銅器時代のテルが集中する場所は多くない。ドイツ隊がタブカ・ダムからゼノビア・ハラビアまでの遺跡分布調査を行った結果をみると、数km間隔で青銅器時代のテルが並ぶ場所は限られている（Kohlmeyer 1984）。この分布状況にはユーフラテス川による遺跡の侵食と埋没が大きく影響していると思われる。したがって、ステップ台地上の集落外墓地が保存される一方で、ユーフラテス河川低地の集落遺跡が侵食あるいは埋没したというケースも想定される。この場合、集落外墓地に対応する集落が発見できないために、「遊牧民の墓」として解釈されるかもしれない。

これまで、テル型集落と集落外墓地の時間的・空間的分布の対応関係を調べてきたが、この対応が全ての集落外墓地に当てはまるわけではない。例えば、バイルーン地区のケルン墓やジャズラ地区の前期青銅器時代の墓地には、それと同時代のテルが近隣に見当たらない。その解釈として想定できるのは、テル住民とは区別される社会集団（遊牧民?）の墓、あるいは複数のテル型集落の共有墓地である。上記のように、墓地に対応するはずのテル型集落が侵食・埋没し見つかっていないという可能性もある。

このように、ユーフラテス川流域の「集落外墓地」は一様なものではなく、多様性が認められることが分かってきた。少なくともその一部は、テル型集落の時空分布と対応するようである。この対応関係から示唆されるのは、河川低地の農耕地帯とステップ台地上の放牧地帯にそれぞれ居住する社会集団の分離ではなく、両地域をまたぐ土地利用パターンである。特に前期青銅器時代の場合、そうした活動を行った社会集団が複数存在した可能性が高い（テル・ハマディーン、テル・ガーネム・アル＝アリ、テル・ムグラ・アツザギール）。この所見は、農耕民と牧畜民を二分する概念自体が間違っていると主張するわけではない。この二分的社会構造をもつ場所や時代もあったかもしれない。しかしながら、それとは異なる社会像がユーフラテス川中流域における青銅器時代の考古記録に示唆されるのである。

## 参考文献

- Akkermans, P. M. M. G. and Schwartz, G. M. 2003 *The Archaeology of Syria: From Complex Hunter-gatherers to Early Urban Societies (ca. 16,000-300 BC)*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Carter, E. and Parker, A. 1996 Pots, people and the archeology of death in northern Syria and southern Anatolia in the latter half of the third millennium BC. In *The Archaeology of Death in the Ancient Near East*, edited by S. Campbell and A. Green. Oxbow Books, Oxford, pp. 96-116.
- Cooper, L. 2006 *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*. Routledge, New York and London.
- Falb, C., Krasnik, K., Meyer, J.-W., and Vila, E. 2005 *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im syrischen Euphrattal: 4. Der Friedhof von Abu Hamed*. Saarländische Druckerei & Verlag, Saarwellingen.
- Kohlmeyer, K. 1984 Euphrat-Survey: Die mit Mitteln der Gerda Henkel Stiftung durchgeführte archäologische Geländebegehung im syrischen Euphrattal. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 116: 95-118.
- Meyer, J.-W. 2010 The cemetery of Abu Hamad: a burial place of pastoral groups? *Al-Rafidan*, special issue 2010: 155-163.
- Nishiaki, Y. 2010a Archaeological evidence of the early Bronze Age communities in the middle Euphrates steppe, north Syria. *Al-Rafidan*, special issue 2010: 37-48.
- Nishiaki, Y. 2010b Early Bronze Age flint technology and flake scatters in the North Syrian steppe along the Middle Euphrates. *Levant* 42(2): 171-185.
- Nishiaki, Y., S. Kadowaki and Kume, S. 2009 Archaeological survey around Tell Ghanem Al-'Ali. *Al-Rāfidān* 30: 145-153, 160-163.
- Nishiaki, Y., Kadowaki, S., Nakata, H., Shimogama, K., and Hayakawa, Y. 2011 Archaeological survey around Tell Ghanem al-'Ali (IV). *Al-Rāfidān* 32: 125-133.
- Nishiaki, Y., Kadowaki, S., Kume, S., and Shimogama, K. 2012 Archaeological survey around Tell Ghanem Al-'Ali (V). *Al-Rafidan* 33: 1-6.
- Orthmann, W. 1980 Burial customs of the third millennium BC in the Euphrates Valley. J.-C. Margueron (ed.) *Le Moyen Euphrate*. E.J. Brill, Leiden, pp. 97-105.
- Porter, A. 2002 The dynamics of death: ancestors, pastoralism, and the origins of a third-millennium city in Syria. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 325: 1-36.
- Wooley, C. L. 1914 Hittite burial customs. *Annals of Archaeology and Anthropology, University of Liverpool* 6: 87-98.
- 門脇誠二・久米正吾・西秋良宏 2009 「ユーフラテス河中流域の先史時代—第1次調査(2008)」『第16回西アジア発掘調査報告会報告集』, 57-62頁. 日本西アジア考古学会.
- 門脇誠二・久米正吾・安倍雅史・仲田大人・西秋良宏 2010 「ユーフラテス河中流域の先史時代—第2次, 第3次調査(2009)」『第17回西アジア発掘調査報告会報告集』, 55-61頁. 日本西アジア考古学会.
- 門脇誠二・久米正吾・下釜和也・西秋良宏 2012 「ユーフラテス河中流域の先史時代—第5次調査(2011)」『第19回西アジア発掘調査報告会報告集』, 16-21頁. 日本西アジア考古学会.
- 中村俊夫・星野光雄・田中 剛・吉田英一・齊藤 毅・東田和弘・桂田祐介・長谷川敦章・太田友子 2010 「シリアのユーフラテス河中流域にある Tell Ghanem al-Ali 遺跡の AMS 14C 年代による編年」『名古屋大学博物館報告』 26 : 33-42.

- 西秋良宏 2010「ユーフラテス河中流域の古代集落」大沼克彦・西秋良宏（編）『紀元前3千年紀の西アジア—ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る—』11-20頁，六一書房。
- 西秋良宏 2011「遺跡分布調査から見たユーフラテス河中流域青銅器時代の社会」『日本西アジア考古学会第16回総会・大会要旨集』，50-53頁。
- 西秋良宏・門脇誠二・仲田大人・下釜和也 2011「ユーフラテス河中流域の青銅器時代—シリア，ビシユリ山系第4次調査（2010）」『第18回西アジア発掘調査報告会報告集』，75-80頁，日本西アジア考古学会。

# テル型遺跡における居住民の定住性・非定住性の検討に向けて —ユーフラテス河中流域テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の成果を中心に

長谷川敦章

古代オリエントにおいて、「遊牧民」の重要性は繰り返し指摘されてきているが、考古学的には十分に認識できているとは言えない状況である (Wilkinson 2003)。これまでの考古学的な研究では、遊牧民と定住民の関係を二項対立な存在としてとらえがちである (Hole 1980, Alizadeh 2003 など)。一方で、民族誌研究では遊牧民の生存戦略の柔軟性や、定住民との相互関係の多様性が明にされている。また文献資料からは、「遊牧民」は移動性が高く、定住と遊牧の生活スタイルの間を往来する人々として描かれている。テル型遺跡の居住民がどの程度の定住性を有していたのかを検討することは、生業における遊牧的な要素の度合いに密接に関係してくると思われる。本稿では、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘調査の成果から、どこまで居住民の実態に迫ることができるのかを検討したい。

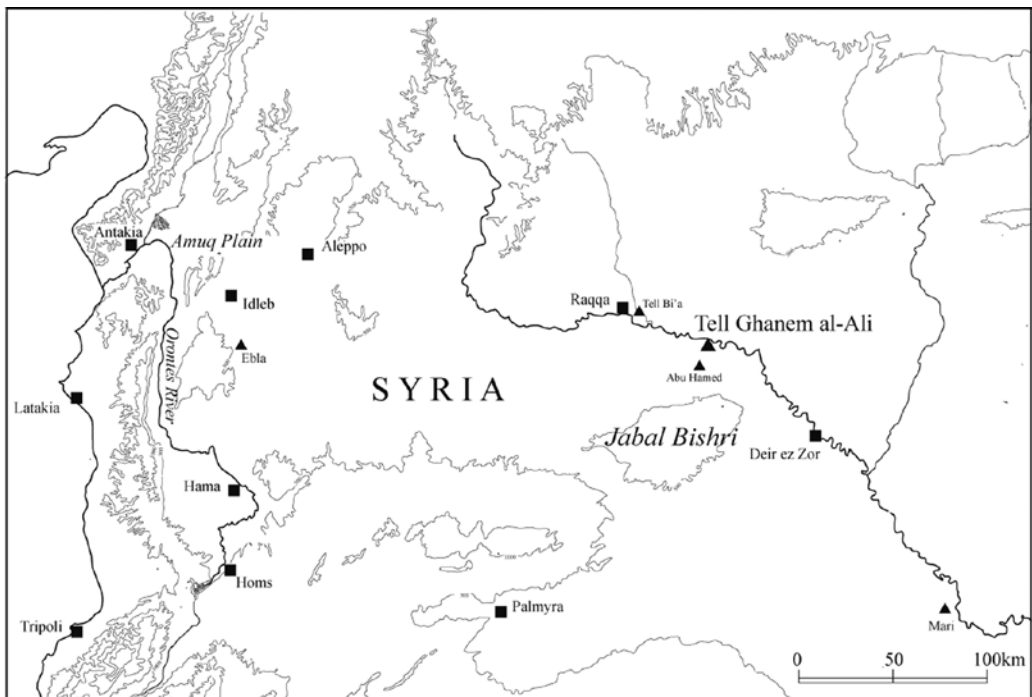


図1 テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の位置

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡調査の概要

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は、ラッカ市近郊を流れるバリーフ川がユーフラテス河に合流する地点から約50km東のユーフラテス河の氾濫原に位置する(図1)。2009年度まで5年間に及びビシュリ山地周辺において、「セム形部族社会の形成」をテーマにした総合的研究プロジェクトが実施され、当該遺跡では考古学分野の現地調査の一環として発掘調査が行われた。2010年度は、日本私立学校振興・共済事業団補助金と国士舘大学の助成を受けて発掘調査を継続して行った。

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の規模は、南北約250m、東西約290m、形状は東西に長軸を持つびつな卵形である(図2)。テル頂上部は現在周辺集落の墓域として利用され、さらにテルの縁辺部分は地形改変を受けており、特に遺跡の南方部分は大規模に削平されている<sup>1)</sup>。削平された部分を考慮に入ると、テル・ガーネム・アル・アリの面積は約12haとなる。ユーフラテス河中流域では、テル・ビーア(Tell Bi'a)、テル・ハディディ(Tell Hadidi)、テル・エツ・スエイハト(Tell es-Sweyhat)のように、40haを超える規模の遺跡が存在する。その一方で、セレンカヒエ(Selenkahiye)やハラワA(Halawa A)のように10-15ha規模の遺跡もある。テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は後者の規模に属し、小地域における拠点集落であると考えられる。

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘調査は、遺跡の北部を中心に8つの発掘区を設け<sup>2)</sup>、2010年度までに合計7回行われた。基本層序の確認のため遺跡の北斜面に設けられた第2発掘

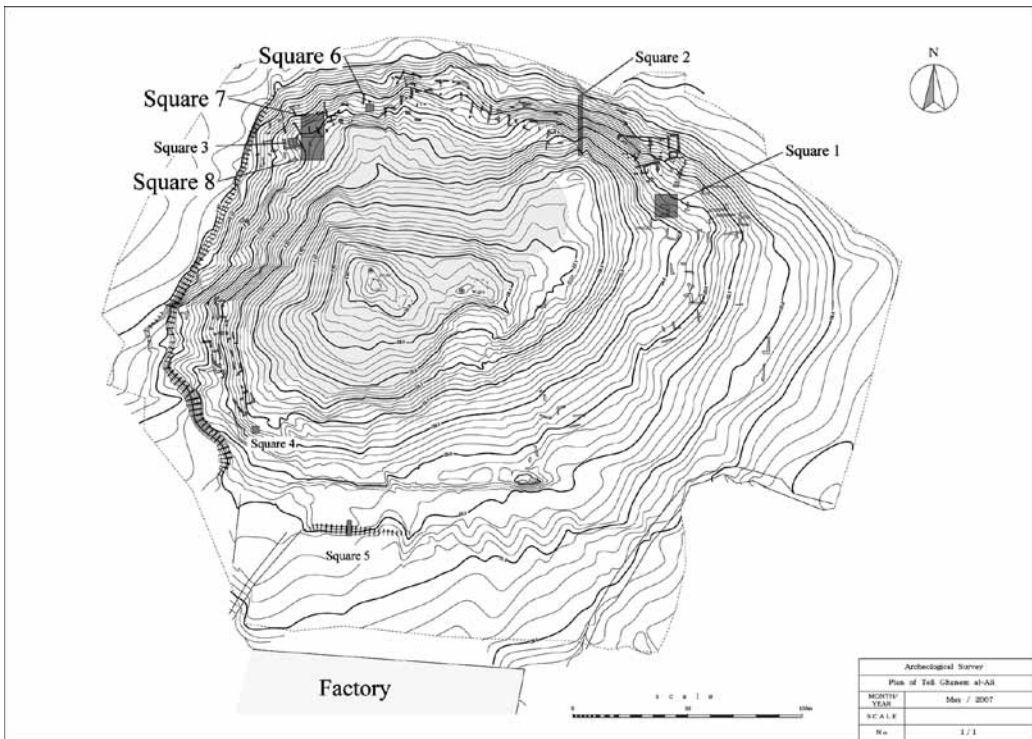


図2 テル・ガーネム・アル・アリ遺跡



区では、前期青銅器時代を中心とする8つの建築層を検出した<sup>3)</sup>。それぞれの建築層の遺構の構築材やプランなどの特徴や層位的な関係から3つの時期区分を想定した。さらに、遺跡地表面の広範囲にわたって観察できる露出した住居址を測量し、それぞれのプランと位置関係を調査した。また第6発掘では、ほぼ表土直下に中期青銅器時代の土壙墓が確認されている (Hasegawa 2010)。

ユーフラテス河の氾濫原には、当該遺跡と同様のテル型遺跡が複数確認されている (Kohlmeyer 1984)。特に当該遺跡周辺では、青銅器時代の包含層を有するテル型遺跡として、西へ約6kmにテル・ハマディーン (Tell Hamadin)、東へ約5kmにテル・ムグラ・サギール (Tell Mugla as-Sagir) が位置している (Kohlmeyer 1984)。ユーフラテス河氾濫原の南方には、ビシュリ山から続く台地が広がっている。ドイツ隊により発掘が行われたアブ・ハマド (Abu Hamad) は、埋葬施設からなりこの台地の縁辺部に立地している (Falb et al. 2005)。テル・ガーネム・アル・アリ遺跡周辺地域では、遺跡踏査も進められており、台地縁辺部にいくつかの遺跡を確認している。台地縁辺部に流れるワディ・ダバ (Wadi Daba) とワディ・シャブブト (Wadi Shabbout) 周辺には、青銅器時代の墓域が確認され (Numoto and Kume 2010)、ワディの段丘面を利用した長期居住地や小規模な短期逗留地と考えられる遺跡もいくつか報告されている (Nishiaki 2010)。

また、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡やハマディーン遺跡、テル・ムグラ・サギール遺跡などの氾濫原に立地するテル型遺跡南方の台地縁辺部には、テルと対をなすように墓域や短期等留地が存在しており、それぞれが空間的単位を形成している可能性が指摘されている (Nishiaki 2010)。アブ・ハマドの埋葬施設から出土した特徴的な人物形土製品が、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡でも検出されていることは、上記の可能性を指示する傍証といえる (長谷川 2009)。

これまでの調査の成果を踏まえると、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は紀元前3千年紀を中心に栄えた中規模集落であると考えられる。その南方の台地縁辺部にひろがる、同時期の墓域は、集落との強い関係性がうかがえる。この集落は紀元前3千年紀末期に廃絶し、その後は土壙墓造営などの小規模な利用のみにとどまり、再び集落が営まれることはなかった。

本稿では、本論集のテーマである「農耕民」と「牧畜民」について、上述したテル・ガーネム・アル・アリ遺跡を事例とし、どこまで検討することが可能なのか模索したい。具体的には、最も直近の2010年度の発掘調査成果を踏まえ、いくつかの特徴的な遺構を取りあげテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の住民の「生業」と「定住性」についてどのような位置付が可能なのか検討を試みたい。

### 住居址のプランとその配置

上述したテル・ガーネム・アル・アリ遺跡では、地表面の観察で住居址の一部を確認することができるこれらの遺構群は、断片的な壁が多く、なかには小規模で方形な部屋が部分的に確認できるものもある<sup>4)</sup>。遺跡の北西部から北東部にかけて顕著にみられる住居址のプランおよびそれぞれの配置を把握するために、測量調査を行った結果、複数の小規模な部屋からなる住居址プランを確認することができた (図3)。第1発掘区の南側に位置する住居址は、5つの長方形の部屋が

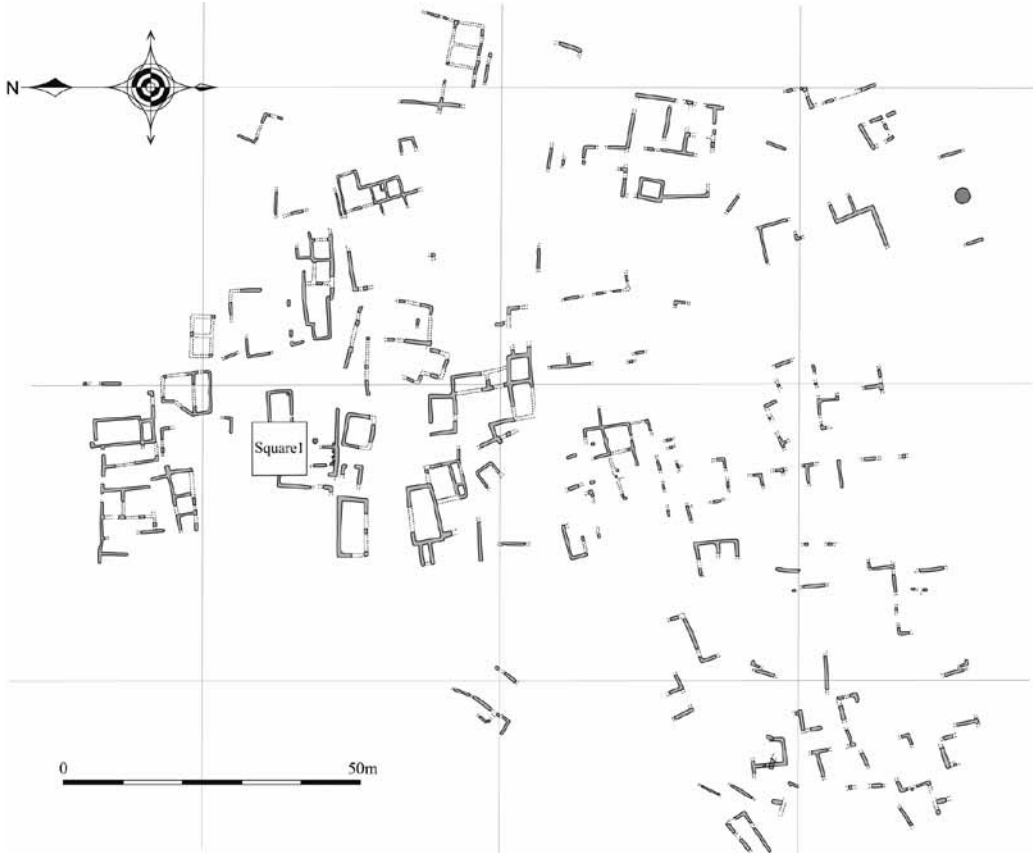


図3 地表面に露出している遺構測量図

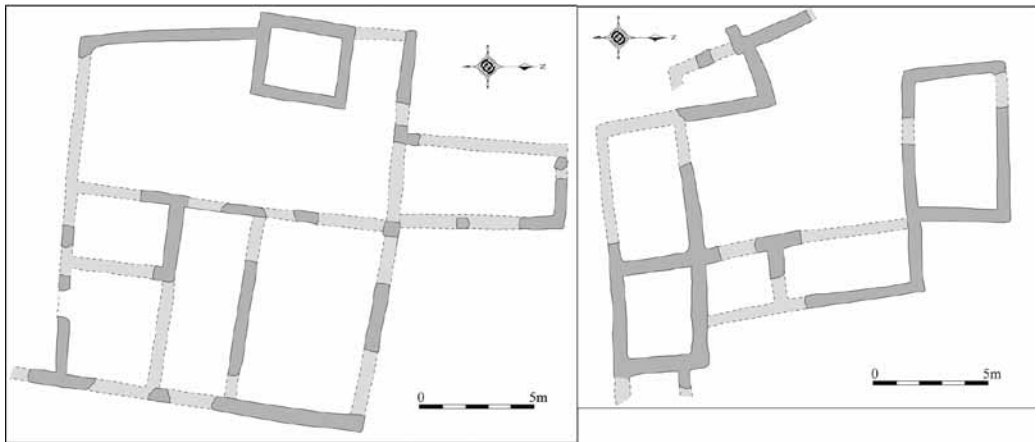


図4 住居址プラン

隣接し、中央には中庭がある（図4右<sup>5)</sup>。遺跡北東部には、中庭があり、5～6の小規模で長方形の部屋からなる住居址が確認されており最も大規模なものひとつである（図4左）。これらは、テル・ゲーナム・アル・アリ遺跡の典型的な住居址プランであると思われる。その特徴は、基本

的に方形を呈し、複数の矩形の部屋とそれらに囲まれた中庭から構成される複室構造有する点が特徴として上げられる。また、住居址は相互に隣接しておらず、それぞれが独立している。少なくとも測量をおこなった遺跡北西部から北東部にかけては、街区を形成するような密集した住居址の配置は確認できなかった (Tsuneki et al. 2010)。

### 円形焼成遺構

遺跡北西部に設けた第7発掘区からは、合計で5基の円形焼成遺構が検出された。第7発掘区では表土直下の発掘区南端部分で北西方向に長軸をもつ長方形の建築遺構を検出した。遺存状況は良くないが、複室構造であることは明らかである。

第7発掘区で検出された5基の円形焼成遺構のうち4基は一つの壁に沿うように密集して築かれており、残りの1基は少し離れ、発掘区の東端に位置している。いずれも直径約70cmの円形を呈しており、粘土による厚さ6cm程の壁を有する。その全てが基礎部分のみ遺存しており、壁の残存高は最大でも20cm程度である。炭化物と灰からなる覆土の下からは、明確な床面は検出できなかったが、こぶし大の礫が敷き詰めてある。その一部には石臼が転用されている (図5)。凡そ30cm程の鞍状の手臼であり、一部破損しているものもあるが、ほぼ完形である。集中して検出された4基の焼成遺構のうち、3基は住居の内側に隣接して配置されているのに対し、残りの1基は住居北壁の北側に内側に入り込むように構築されている (図6) (Hasegawa 2010)。

同様な特徴を有する円形焼成遺構は、第2発掘区でも検出されている (図7)。遺構の規模はほぼ同じであるが、遺存状態がよく壁が40cm程残存している。また、第7発掘区の事例と同じく、住居の壁に沿って連続する複数の円形焼成遺構は、地表面の観察において複数箇所を確認されている。

現在のシリアでは、タノールと呼ばれる人の腰ほどの高さの円筒形した窯がパン焼き用に使われている。薄く円形にのばしたパン生地を窯の内壁に貼り付けて焼く (図8)。当該遺跡で検出された円形をした焼成遺構の特徴は、タノールと類似しており、パン焼き窯として利用されていた可能性が考えられる。一方で、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の植物遺存体の分析から、当該遺跡では小麦ではなく大麦が主に利用されていたようである (本書赤司氏の論考参照)。大麦の粉食としてパンを想定するのであれば、小麦のパンに比してグルテン成分が少ないため粘性が低く、窯の内壁にパ



図5 円形焼成遺構



図6 円形焼成遺構



図7 円形焼成遺構（第2発掘区）

ンを貼り付けることは困難ではないかとの指摘もある<sup>6)</sup>。

### 石膏プラスターによる槽状遺構および集石遺構

第7発掘区の南側に設けられた第8発掘区では、前述した第7発掘区で検出された建築遺構に連続する部分が検出されている。この住居の外壁は幅約80cmの石壁により構成されている。住居の規模は5m×9mで、日干しレンガの壁によって部屋が南北に分割されている。北側の部屋では北西付近、南側の部屋では南西付近に幅約1mの入口が確認された（Hasegawa 2010）。

北側の部屋には炭化物を多く含む灰が円形に堆積しており、底部には40cm大の比較的上面が平坦な礫が敷き詰められている。この灰は第7発掘区で検出された円形焼成遺構群付近まで広がっており、それら焼成遺構から廃棄された灰の可能性もある。また日干しレンガの壁に接して、石膏槽を3つ検出した（図9）。いずれも80cm大の矩形をしており、深さは約10cmである。一種の水場遺構と考えられる。

簡単ではあるが上述してきたテル・ガーネム・アル・アリ遺跡における遺構群の特徴から、居住民について少なくとも推測することができることは以下の点である。中庭を有する複室構造である住居址は、遺跡の広い範囲で分布しているが、密集しておらず独立して存在している。これは、公共施設を含め、街区ではほぼ遺跡の空間が埋め尽くされるいわゆる「都市」とは集落構造が大きく異なり、集落内に家畜囲いを設ける空間が十分に存在していることを示している。一方で、



図8 現代のパン焼き窯（タノール）

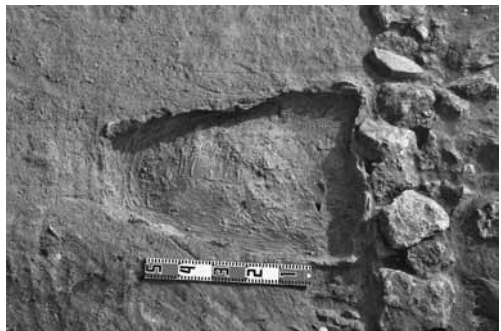


図9 石膏槽

複数のパン焼き窯と思われる円形焼成遺構からなる一連の遺構群が、遺跡の各地で確認されている点や、製粉具である手臼が多数出土している点からは、恐らく穀物の利用が小さくない規模で行われていたと推察させる。また石膏槽などが同一の部屋に複数備え付けられていることは、その部屋が何らかの工房であった可能性を示している。テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の住民は穀物利用も牧畜活動も両方ともに行っていたことは十分に考えられる。

#### テル・テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の住民をどのようにとらえるべきか

紀元前3千年紀後半以降のメソポタミアの楔形文字文書資料には、ビシュリ山付近のシリア砂漠外縁を故地とする遊牧民集団の一般名称としてアムル人が頻繁に言及されている。アムル人諸集団は、ウル第3王朝滅亡の一因となったことが端的に示しているように、メソポタミアに幾度となく訪れる暴力的侵入者として記述されている（中田2006、山田2006）。このように王碑文などの政治的な文章には、定住都市民に対して、流動的で侵略的な性格を有する「遊牧民」がしばしば記述される。

一方で、西アジアを中心とした民族事例の研究成果によると、「遊牧民」の移動性は極めて柔軟であることが指摘されている。さまざまな要因で定住化した遊牧民は、その後も、いつでも遊牧的な生活に戻ることができるようである（Salzman 1980）。定住的な生活か、移動性の高い生活を選択するののかについては、極めて柔軟な対応をとっている<sup>7)</sup>。つまり、移動性において「遊牧民」は「定住民」と二項対立な存在としてとらえるべきではなく、「定住」と「遊牧」を流動的に選択する存在としてとらえていくべきである。

西アジアにおける牧畜活動は、季節的に長距離を移動するいわゆる遊牧から、1日で集落近辺を放牧してくるものなど多様性がある。さらに、遊牧活動に加えて小規模な穀物栽培を行い<sup>8)</sup>、一部の構成員は農耕を行う場合もある<sup>9)</sup>。また、定住村落で労働者として仕事に従事する遊牧民も存在する<sup>10)</sup>。生業に関しては、西アジアでは、家畜の飼育にのみ経済基盤をもつ純粋な遊牧民よりもむしろ、多様な経済活動を生活基盤にしている遊牧民が多いと指摘されている（Salzman 1972）。一方で、カシュカイ族のように、定住化し居住や生活スタイルが大きく変化しても帰属意識が変わらない遊牧民もいる（Beck 1991）。このことは、生業や生活形態がカシュカイ族としてのアイデンティティを必ずしも規定するものではないことを示している。

また、楔形文字資料であるヌジ文書には、家畜管理を行う家族の生活の記録が記されており、そこには、遊牧民が羊飼いと定住民に雇われている姿が伺える（Morrison 1981）。また、古代バビロニアのマリ文書には、アムル人の生活形態がユーフラテス中流域での定住を基盤とした半農・半牧畜であり、牧羊者としては短距離移動型であったことが示唆されている。

つまり、「遊牧民」とは、移動性の高さ（定住性）と農耕もしくは牧畜（生業形態）の二つの軸をもつ、二重概念である（Cribb 1991）（図10）。よって、生業の専門度として、「農耕民」と「牧畜民」、定住性（移動性）の度合いとして「定住民」と「遊牧民」とを想定することはできる。しかし、「遊牧民」の実態は、その時々々の自然環境や政治的状况に応じて最も適した生存戦略を柔

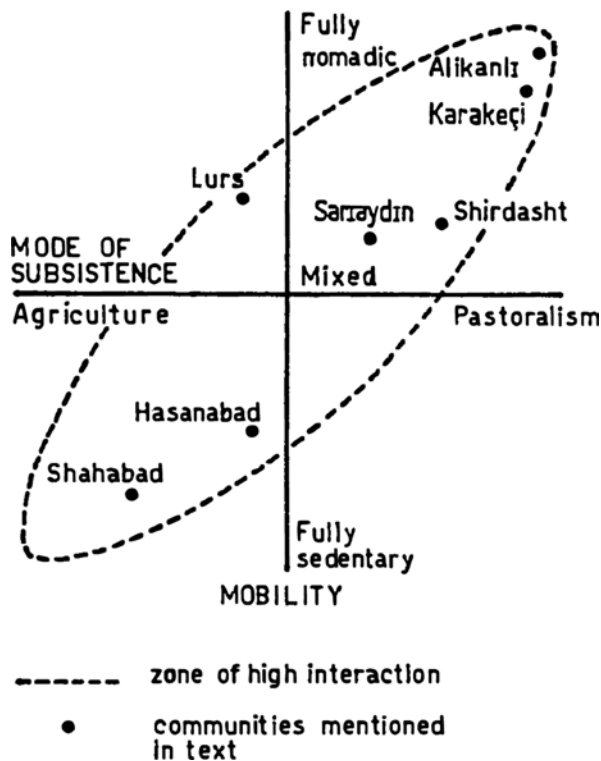


図 10 「遊牧民」の概念 (Cribb 1991 p.30 より転載)

軟に選択している人々といえる。

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の住民を検討する際も、「農耕民」なのか「遊牧民」なのかと、とらえていくのではなく、生業の專業度と定住性の度合いの間に位置付けていくことを念頭に置かなくてはならない。当該遺跡で典型的な石列からなる居住遺構は一見恒常的な居住区と判断しがちであるが、現在の民族例では、「遊牧民」が使用している石列を有する堅牢な住居が確認されている (Cribb 1991)。つまり、住居址からのみでは、一概に定住民であるか否かは断言することができない。一方で、複数の連続して構築されている焼成遺構群や比較的大規模な集石遺構や石膏槽の存在は、定住性の高を示していると解釈できるのではないだろうか。住居址の配置からは、集落内に家畜囲いが存在していたことを積極的に否定する根拠はない。このことから、少なくとも日帰り放牧を含めた、短期的な放牧活動を行っていたと考えてもあながち無理ではないと思われる。中期青銅器時代に入り、当該遺跡ではっきりとした住居址をはじめとした人々の生活の痕跡が見られなくなったことは、より移動性の高い生活スタイルを選択したという可能性も考えられる。

今後の課題としては、テル型遺跡の季節的な利用を含めた、移動性の度合いについても視野に入れて住民について考察していかなくてはならない。また、農耕もしくは遊牧の專業度が高くなり、定住化、非定住化する背景には、どのような環境、政治、社会的な背景が存在していたの

かについても今後考察をしていく必要がある<sup>11)</sup>。

#### 註

- 1) 1960年代作成の地形図からは、地形改変以前の形状を推察できる。その場合の遺跡の平面規模は、最大長が南北約450m、東西約380mとなり、南に大きく張り出した逆三角形であったと考えられる。
- 2) 遺跡北東部の第1発掘区、北西部の第7、8発掘区は10×10mの規模で設定し、第3～6発掘区では小規模な試掘を行った。
- 3) 第1～4建築層を第3期、第5、6建築層を第2期、第7、8建築層を第1期とした。
- 4) 直線、コの字形、L字形に礫が並ぶことから、石壁の一部やその基礎である可能性が考えられる。また後者である土色の違いによるラインも同様なプランを有する。すなわち地下に埋没した遺構が存在するため、地表面の含水率が他と異なることにより土色が変化していると思われる。つまり、両者とも建築遺構の痕跡であると推察される。
- 5) 6.5×4.5mと5×4mの二種類の規模の部屋から構成されている。
- 6) 例えば、パンを礫が敷きつめられた床面に直に置いて焼いた可能性なども考えられる。この焼成遺構については別稿にて論じたい。
- 7) 遊牧民は、社会的な外的、内的な契機、制約、圧力の変化に適応して移動性の度合いを変化させる (Salzman 1980)
- 8) バルチスタンの Yarahmadzai 族は、遊牧に加えて、ナツメヤシの栽培、狩猟採集、小規模な穀物栽培、略奪行為を行う。(Salzman 1980)
- 9) 南西イラン Basseri 族の事例。(Barth 1961)
- 10) Qashqa'i 族の事例。(Beck 1986, 1991)
- 11) 前2千年紀後半のアラム人の定住化については、アッシリアの支配形態の影響について考察されている。(Szuchman 2008)

#### 参考文献

- Alizadeh, A. 2003 Some Observations Based on the Nomadic Character of Fars Prehistoric Cultural Development, In Miller, N. F. and Abdi, K. (eds.), *Yeki Bud Yeki Nabud: Essays on the Archaeology of Iran in Honor of William M. Sumner*. Miller, N.F. and K. & Abdi, K. Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology, UCLA. pp.83-97.
- Al-Khalaf, M. and J.-W., Meyer 1993/1994 Abu Hamad, *Archiv Für Orientforschung* 40/41, pp.196-200.
- Barth, F. 1961 *Nomads of South Persia*. Bosen, Little, Brown
- Beck, L. 1986 *The Qashqa'i of Iran*. Haven, Yale University Press.
- Beck, L. 1991 *Nomad: A Year in the Life of a Qashqa'i Tribesman in Iran*. Berkeley, University of California Press.
- Beck, L. 2003 Qashqa'i Nomadic Pastoralists and Their Use of Land. In Miller, N. F. and Abdi, K. (eds.), *Yeki Bud Yeki Nabud: Essays on the Archaeology of Iran in Honor of William M. Sumner*. Miller, N.F. and K. & Abdi, K. Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology, UCLA. pp.289-304.
- Cribb, R. 1991. *Nomads in Archaeology*. Cambridge. Cambridge University Press.
- Cooper, L. 2006 *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*. Routledge, New York and London.

- Falb, C., Krasnik, K., Meyer, J.-W., and E. Vila 2005 *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im syrischen Euphrattal: 4. Der Friedhof von Abu Hamed*. Saarländische Druckerei & Verlag, Saarwellingen.
- Hasegawa, A. 2010 Sondage at the Site of Tell Ghanem al-Ali. In Ohnuma et al. (eds.) *al-Rāfidān Special Issue*, pp.25-35.
- Hasegawa, A. 2011 Archaeological Research in the Bishri Region-Report of the fifteenth Working Season: II. Sondage at Tell Ghanem al-Ali, Square 7 and 8, *al-Rāfidān* 32, pp.158-163.
- Hole, F. 1980 The Prehistory of Herding: Some Suggestions from Ethnography. In M.T. Barrelet (ed.), *L'Archéologie de l'Iraq du début de l'époque Néolithique à 333 avant notre ère*, Éditions de la Centre National de la Recherche Scientifique, Paris, pp. 119-130.
- Kohlmeyer, K. 1984 Euphrat-Survey: Die mit Mitteln der Gerda Henkel Stiftung durchgeführte archäologische Geländebegehung im syrischen Euphrattal. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 116, pp. 95-118.
- Meyer, J.-W. 2010 The cemetery of Abu Hamad: a burial place of pastoral group? In Ohnuma et al. (eds.) *al-Rāfidān Special Issue*, pp.155-163.
- Nishiaki, Y. 2010 Archaeological evidence of the Early Bronze Age communities in the Middle Euphrates steppe, North Syria. In Ohnuma et al. (eds.) *al-Rāfidān Special Issue*, pp.37-48.
- Numoto, H. and S. Kume 2010 Survey and Sondage at the cemeteries near the site of Tell Ghanem al-Ali. In Ohnuma et al. (eds.) *al-Rāfidān Special Issue*, pp.49-60.
- Ohnuma, K. S. Fujii, Y. Nishiaki, S. Miyashita, A. Tsuneki, and H. Sato (eds.) 2010 *al-Rāfidān Special Issue: Formation of Tribal Communities -Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria*. Tokyo: Kokushikan University.
- Porter, A. 2007 The Ceramic Assemblages of the Third Millennium in the Euphrates Region. In Al-Maqdissi, M., Matoian, V. and C. Christophe (eds.) *Céramique de l'âge du bronze en Syrie II, l'Euphrate et la région de Jézireh*. Beyrouth, pp.3-21.
- Porter, A. 2011 *Mobile Pastoralism and the Formation of Near Eastern Civilizations: Weaving Together Society*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Salzman, P. C. 1972 Multi-Resource Nomadism in Iranian Baluchistan. In W. Irons and N. Dyson-Hudson, (eds.), *Perspectives on Nomadism*, pp. 60-68. Leiden: E.J. Brill.
- Salzman, P. C. 1980. *When Nomads Settle: Processes of Sedentarization as Adaptation and Response*. New York, Praeger.
- Strommenger, E. and K. Kohlmeyer 2000 *Tall Bi'a-Tuttul-III: Die Schichten des 3. Jahrtausends v. chr. im Zentralhügel E*. Saarbrücken.
- Szuchman, J. J. 2008 Mobility and Sedentarization in Late Bronze Age Syria. In (ed.) Barnard, H. and W. Wendrich, *The Archaeology of Mobility: Old World and New World Nomadism*, pp. 397-412. Cotsen Advanced Seminars 4. Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology, UCLA.
- Tsuneki, A., Hasegawa, A. and A. Sultan 2011 Archaeological Research in the Bishri Region-Report of the Eighth Working Season: 5. Sondage and Surface Research at Tell Ghanem al-Ali, *al-Rāfidān* 32, pp.181-189.
- Wilkinson, T., J. 2003 Archaeological Survey and Long-term Population Trends in Upper Mesopotamia



- and Iran. In Miller, N. F. and Abdi, K. (eds.), *Yeki Bud Yeki Nabud: Essays on the Archaeology of Iran in Honor of William M. Sumner*. Miller, N.F. and K. & Abdi, K. Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology, UCLA. pp.39-51.
- Wilkinson, T. J. 2004 *On the Margin of the Euphrates, Settlement and Land Use at Tell es-Sweyhat and in the Upper Lake Assad Area, Syria*. Chicago and Illinois.
- 中田一郎 2006 「アムル（アモリ）人のバビロニア移住」『ORIENTE』33. 4-13 頁.
- 長谷川敦章 2008 「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の測量調査」大沼克彦編『特定領域研究「セム系部族社会の形成」ニューズレター』5-9 頁.
- 長谷川敦章 2009 「紀元前3千年紀におけるユーフラテス河中流域の集落と墓域の関連性－テル・ガーネム・アリ出土人物形土製品の検討から－」西秋良宏・木内智康編『農耕と都市の発生－西アジア考古学最前線』143-157 頁 同成社.
- 山田重雄 2006 「文書史料におけるセムの系譜. アムル人, ピシュリ山系」『セム系部族社会の形成』Newsletter 12. 8-13 頁.

# シリア前期青銅器時代墓地遺跡の被葬者像解明に向けて

## —ユーフラテス河中流域における定住民と遊牧民の関係

久米 正吾

### 1. はじめに

シリア、ユーフラテス河中流域に位置するテル・ガーネム・アル＝アリ (Tell Ghanem al-Ali) 遺跡近郊において、前期青銅器時代墓地遺跡の調査が2008年から2010年にかけて日本－シリアの共同調査で実施された(久米ほか2011及びその引用文献を参照)(図1)。数千基規模と想定されるその大規模な墓地遺跡は、1990年代にドイツ－シリア共同調査隊によってアブ・ハマド (Abu Hamed) 墓地遺跡として一部調査され (Falb et al. 1995)、その大規模さゆえにユーフラテス河畔のテル型集落に居住する集落民ではなく、ビシュリ台地上を利用した遊牧民の墓地との見解が示されてきた (Meyer 2010)。また、前期青銅器時代シリア領ユーフラテス河流域では同様の集落外墓域が多数確認されているため、被葬者を遊牧民とみる議論はこれまでも度々なされている (Akkermans and Schwarz 2003; Roobaert and Bunnens 1999)。一方、日本－シリアの共同調査の成果は、ユーフラテス河畔のテル型遺跡と台地上の墓地遺跡とが互いに緊密な相関関係にあることを示している。すなわち、この結果は墓地の被葬者がテル型集落民であった可能性を示唆する (Nishiaki 2010; Numoto and Kume 2010)。

墓地の被葬者が台地の遊牧民か、それとも河畔の集落民か、という一見シンプルな疑問は実は、前・中期青銅器時代のユーフラテス河中流域の政

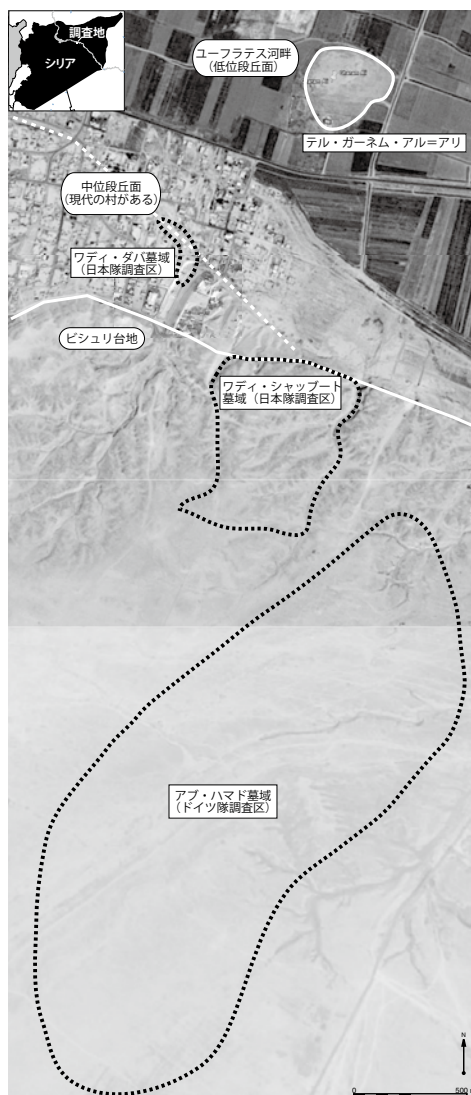


図1 テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡と直近墓地の位置

治構造と生業経済の多様性を探る上で本質的な議論である。なぜなら、中心的政治機構の管理下にはなかったと思われる各集落の自律性や部族社会的傾向など (Cooper 2006) 当時のユーフラテス河中流域の社会組織復元に迫るためには、まず明確にしておかねばならない根幹の議論と密接に関連しているからである。

そこで本稿ではまず、青銅器時代ユーフラテス河中流域における定住民と遊牧民の関係についての学説史を紹介する。続いて、ガーネム・アル＝アリ遺跡での死者数復元の試みを通じて、ガーネム・アル＝アリ遺跡近郊墓地が果たして集落と比較して大規模すぎるかという観点から、墓地の被葬者像について明らかにする。さらに、シリア領ユーフラテス河中流域のセトルメント動向の分析を通じて、前・中期青銅器時代移行時における集団構造の通時的变化について予察的に示し、ユーフラテス河中流域における定住民と遊牧民の関係の特徴について論じる。

## 2. ユーフラテス河中流域における定住民と遊牧民の関係に関する学説史—二つの Dimorphic Society 説—

ユーフラテス河中流域における定住民と遊牧民の関係に関する議論については、1960年代末から1970年代初めにかけて出版された M. ロートン (Rowton) による一連の論文で示されたいわゆる「共生社会」(“Dimorphic Society”) 説が大きな影響力を持ってきた (Rowton 1973, 1974 など)。紀元前2千年紀前半のシリア領ユーフラテス河下流域に位置するマリ (Mari) 社会を基軸として構築されたこのモデルの意義は、青銅器時代から近代に至る西アジア社会を「定住民」と「遊牧民」あるいは「都市」／「国家」と「部族」という2つの異なる生業経済や政治構造を有する集団の相互交流の歴史として再構成したことにある。ロートンの論考には、中国辺境社会の研究で知られる O. ラティモア (Lattimore) の研究 (Lattimore 1962) が引用されていることからわかるように、中国史上における定住社会と遊牧社会の関係がその念頭には置かれていた (Porter 2012)。このため、中国史と対照させつつロートンの議論に触れると東アジアに生まれ育った私たちには比較的理解しやすい。ロートンが提出した「共生社会」説はその後、紀元前2千年紀における遊牧民と定住民の関係、あるいは部族社会と都市社会ないし国家社会の関係を議論する際のキーワードとして広く普及することになる (Liverani 1997; 川崎 2000)。

ロートンによる「共生社会」の議論は、基本的に「定住民」と「遊牧民」あるいは「都市／国家社会」と「部族社会」が異なる要素として存在していることを前提としている。それゆえに、ロートンの“Dimorphic Society”概念に与えられた「定住民」と「遊牧民」という二つの異なる形態の集団が「共生」する「社会」という邦訳 (川崎 2000) はまさにふさわしい。しかし、M. リヴェラーニ (Liverani) が鋭く指摘しているように (Liverani 1997)、ロートンが用いた“Dimorphic Society”という概念にはその前史があり、本来は異なる定義を持った概念であった。以下、リヴェラーニ論考を要約し、もう一つの“Dimorphic Society”説についてその概略を述べる。

もう一つの“Dimorphic Society”とは、1930年代にシリア領ユーフラテス河下流域のマリ遺跡近郊で、アケダート (‘Aqedat) 牧畜民の民族調査を実施した H. シャルル (Charles) が論じた同

一コミュニティの季節的分離統合現象のことである (Charles 1939)。人類学者 M. モース (Mauss) の弟子であったシャルルは、モースが論じたエスキモー社会における同一コミュニティ内での居住形態の季節的変異に関する研究 (モース 1981) に影響を受けていた。これを背景として、アケダート牧畜民の同一コミュニティが夏季にはユーフラテス河畔に集中して居住するのに対し、冬季にはヤギ・ヒツジ放牧のためコミュニティ成員の一部はステップ台地上に拡散し、他の成員は河畔に居住することを示し、このコミュニティの居住形態の季節的変異を “dimorphisme” あるいは “société dimorphe” と呼んだ。

このように、シャルルが提示した “Dimorphic Society” は、ロートンが示したように生業活動や統治形態が異なる二つのコミュニティが交流して「共生」しているのではなく、同一コミュニティが生業活動の季節的変異に応じてその居住形態を分離統合させる柔軟性を有していたことを示している。その意味において、シャルルの “Dimorphic Society” はむしろ字義通りに「二形社会」と翻訳したほうがより適切に見える。なお、シャルルが記載したアケダート牧畜民の季節移動に関する民族誌と同様の事例は、近年でもシリア領ユーフラテス河上流域での報告がある (Aurenche 1998)。また、同中流域で調査を実施した今回の日本-シリアの共同調査においても同じく確認されている (高尾 2010)。

これら異なる二つの “Dimorphic Society” 説は、冒頭で述べた「墓地の被葬者が台地の遊牧民か、それとも河畔の集落民か」という議論とも密接な関わりがある。すなわち、被葬者がステップ台地の遊牧民であったという立場の場合、台地上に分散する遊牧民と河畔のテル型集落に居住する定住民という二種類の集団が存在していたことを必然的に前提にしていることとなる。まさに、ロートンによる「共生社会」的なモデルを反映した見解である。一方、被葬者が河畔の集落民であったという立場の場合、半農半牧民として季節的に台地上をヤギ・ヒツジ放牧のために利用した河畔の集落民が、同じく台地上を墓域としても利用したという見方であり、必ずしも遊牧民と定住民という二種類の集団を想定してはいない。むしろ、シャルルによる「二形社会」的な様相を想定した見解である。このように、ユーフラテス河中流域における定住民と遊牧民の関係に関する学説史を整理すると、ガーネム・アル=アリ直近墓地の被葬者が「遊牧民」か「集落民」か、という議論は、意識的・無意識的に関わらず、それぞれ異なる定住民-遊牧民関係モデルが反映された議論であったように見える。この意味において、被葬者に関する疑問は、実は前・中期青銅器時代のユーフラテス河中流域の集団構造を解明する上で極めて重要な研究課題たりうることとなる。

### 3. テル・ガーネム・アル=アリ遺跡での死者数復元の試み

上で明らかとなったように、ガーネム・アル=アリ直近墓地の被葬者が「遊牧民」か「集落民」か、という疑問の追求は、当時の集団構造の解明と密接に結びついている。それゆえに、動植物遺存体分析に基づく生業活動の復元、出土遺構や遺跡分布調査に基づく居住形態の解明、あるいは

は文献史学の成果に基づく政治構造の解明など、より複合的な視座から議論する必要のある研究課題でもある。そのような総合的な視点からのアプローチは今後の課題とすることとして、筆者はより簡便な方法でこの課題に以前取り組んだことがある(久米 2011a)。すなわち、数千基規模と想定されるガーネム・アル＝アリ直近墓地が、果たして被葬者として外部の遊牧民を想定しなければならないほどガーネム・アル＝アリ集落の規模に比して大規模すぎるか、という観点からのアプローチである。この目的のために、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡での死者数復元の試みを行った。

まず、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡での最大扶養可能人口数を T. J. ウィルキンソン (Wilkinson) による 1ha あたり 100 人から 200 人という概算値 (Wilkinson et al. 2004) に従って算出した。ここで懸案となったのは、テル・ガーネム・アル＝アリの遺跡範囲の問題である。テル型遺跡の範囲確認は、元来、現代の土地改変等により必ずしも容易ではない。テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡の場合、今回の日本－シリア共同調査団が作成した測量図と 1960 年代に測量された縮尺 1/5000 地形図とを比較すると、それぞれ約 7ha と約 12ha となり 5ha 程の差がある。テルの裾部分の西側と南側が畑の拡張や工場建設により人為的に改変されたためである(長谷川 2008)。このため、今回は比較的高解像度の衛星画像をウェブ上で提供している Google Earth の距離測定機能を利用して算出した 9.5ha という集落面積を用いた。この値は測量図から算出された 7ha から 12ha という集落面積のおよそ中間値にあたる。この値を基に、上述のウィルキンソンによる 1ha あたり 100 人から 200 人という概算値により、950 人から 1900 人の最大扶養可能人口がテル・ガーネム・アル＝アリでは想定できる。すなわち、この人口レンジが同遺跡集落人口のある時点での最大値と見積もられる。

考古学及び年代学的証拠から、ガーネム・アル＝アリ遺跡の居住時期は、紀元前 3100 年頃から紀元前 2350 年頃までの約 750 年間と見積もられているが、この期間の人口動態を正確に推定するためには様々な条件を加味しなければならず、実際にはより多角的な分析を要する (Chamberlain 2006)。ここでは、ウェブとフランケルの論考 (Webb and Frankel 2009) を参照しながら、より簡便な死者数推定を行う。

突発的な災害などが発生しない状況では、人口は一般的に増加する傾向にあることが知られる。F. ハサン (Hassan) によれば、等質的社会では年間 0.52% の人口増加率があり、これは 133 年あるいは 7 世代で人口が 2 倍になる計算である (Hassan 1981 [Webb and Frankel 2009: 62 による引用])。考古学及び年代学的証拠から、ガーネム・アル＝アリ遺跡の居住時期は、紀元前 3100 年頃から紀元前 2350 年頃までの約 750 年間と見積もられている。人口数のピークすなわち 950 人ないし 1900 人に達したのが、遺跡が放棄される直前の紀元前 2450 年頃と仮定して、モデル的に紀元前 3100 年頃から紀元前 2350 年頃を 133 年ごとに 6 時期に区分して人口増加を示すと表 1 のようになる。一方、同じく F. ハサンの研究により、伝統的社会的通文化的証拠に基づけば成人に達する割合は約 1/3 である (Hassan 1981 [Webb and Frankel 2009: 62 による引用])。これに従い、計算を簡便にするために 1 時期分 (133 年すなわち 7 世代) の人口増加率は一定で時期ごとに段階的に

表1 テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡における人口増加モデル

	3100-2967 BC	2966-2833 BC	2832-2699 BC	2698-2565 BC	2564-2431 BC	2430-2297 BC
100/ha (950)	59	119	238	475	950	475
200/ha(1900)	119	238	475	950	1900	950

表2 人口増加モデルに基づくテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡における成人成長者数の概算

	3100-2967 BC	2966-2833 BC	2832-2699 BC	2698-2565 BC	2564-2431 BC	2430-2297 BC
100/ha (950)	20	40	79	158	317	158
200/ha(1900)	40	79	158	317	633	317

表3 人口増加モデルに基づくテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡における成人死亡者数の概算

	3100-2967 BC	2966-2833 BC	2832-2699 BC	2698-2565 BC	2564-2431 BC	2430-2297 BC
100/ha (950)	139	277	554	1108	2217	1108
200/ha(1900)	277	554	1108	2217	4433	2217

倍増していくと仮定して、成人成長者数と成人死亡者数の概算を示したものが、表2と表3である。成人成長者数は、表1で示した各時期の人口数の1/3、成人死亡者数は133年=7世代と仮定して、成人成長者数×7の値を示す。

ガーネム・アル＝アリ直近墓域が集中的に造営された時期は、これまでのところ、長く見積もって紀元前2600年頃から紀元前2350年頃までの約250年間、短く見積もって紀元前2500年頃から紀元前2350年頃までの150年間である。この期間の死亡者数を上で示した概略的な成人死亡者数に基づけば、集中的に造営された時期を約250年間とした場合3000人(100人/ha)から6000人(200人/ha)、約150年間とした場合、2000人(100人/ha)から4000人(200人/ha)の死者がテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡では発生したことになる。

上に示した結果は、あくまで仮定に基づいた概算であり導きだされた死者数の評価に当たっては慎重になるべきである。しかし、この2000人から6000人というテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡での死者概算値は、ガーネム・アル＝アリ集落民が直近の墓域に埋葬され、数千基規模の墓が造営されたという解釈が十分に可能な数値である。少なくともこの結果は、「集落規模に比して墓が多すぎるため周辺の遊牧民が埋葬された」という説明が果たして適切なのか、その問題提起をする上で一つの材料となろう。

#### 4. 前期青銅器時代から中期青銅器時代にかけてのユーフラテス河中流域におけるセトルメント動向 —都市化と遊牧化—

テル・ガーネム・アル＝アリ直近墓地のような集落外大規模墓域の造営は、前期青銅器時代シリア領ユーフラテス河流域の顕著な特徴である(Akkermans and Schwartz 2003; Cooper 2006など)。それでは、なぜそのような大規模墓域が前期青銅器時代に造営されたのか。この疑問の答えはセ

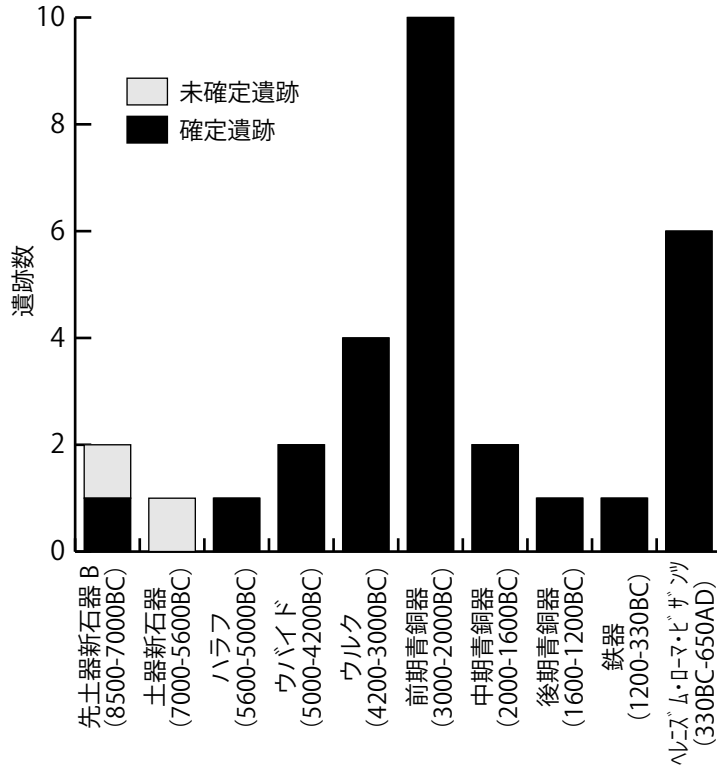


図2 シリア領ユーフラテス河中流域における遺跡数の通時的変化

トルメント数の変化を探ると明瞭になる。図2にシリア領ユーフラテス河中流域のセトルメント数の変化を先土器新石器時代からヘレニズム・ローマ・ビザンツ時代の10時期にわけて示した。データは1980年代に同流域の分布調査を実施したK. コールマイヤー (Kohlmeyer) の調査結果に基づく (Kohlmeyer 1984)。図に明らかなように、遺跡数は前期青銅器時代とヘレニズム～ビザンツ時代のおよそ2つの時期に顕著なピークがある。一方、他の時代は数遺跡にとどまり、これらの時代にはユーフラテス河流域にほとんど定住的居住がなされていなかったことを示唆する。このため、前期青銅器時代に大規模な墓域が造営されるという事実は、セトルメント数の変遷から見ても極めて整合的である。

セトルメント動向の観点からもう1点重要なこととして指摘できる点は、前期青銅器時代から中期青銅器時代にかけての移行時にセトルメント数が前期の10遺跡から中期の2遺跡へと激減するにもかかわらず、遺跡の専有面積に大きな変化が存在しないことである (図3)。遺跡専有面積の計測方法は拙稿 (久米 2011a) で以前詳述したためここでは省略するが、前期から中期にかけて専有面積に変化がほぼ存在しない理由は、テル・ガーネム・アル＝アリを含む前期の中小規模遺跡が全て廃絶され、テル・サディエン (Tell Thadayain) とテル・ビーア (Tell Bi'a) という35haを超える2つの大規模遺跡のみになるためである (図4)。前期から中期にかけてのこのセトルメント動向は典型的な都市化的様相ないし外部への人口移動と考えて良い (Adams 1981 など)。

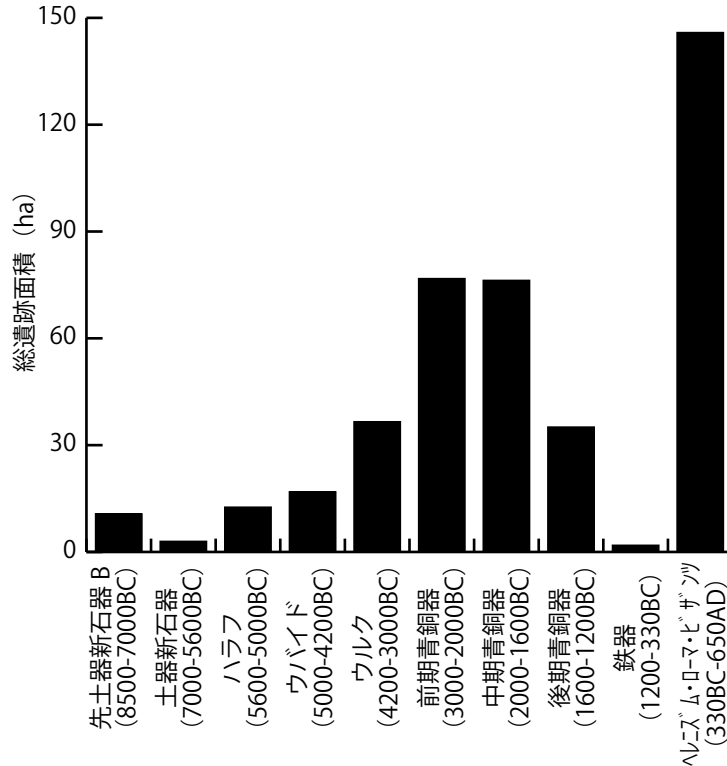


図3 シリア領ユーフラテス河中流域における総遺跡面積 (ha) の通時的変化

一方、テル・サディエンとテル・ビーアへの人口集中による都市化現象と同時に、遊牧化現象とも解釈しうる外部への人口移動の証拠も今回の日本-シリアの共同調査では発見されている。一つは遺跡分布調査班によってビシュリ台地上の縁辺部で確認された 23H 遺跡である (Nishiaki 2010)。23H 遺跡は中期青銅器時代の小規模集落と墓域で構成され、さらに磨石などの食料加工用具も採集されており、必ずしも遊牧民による短期的なキャンプサイトとは見えない。しかし、少なくともユーフラテス河畔の前期青銅器時代の中小規模遺跡が全て廃絶されたことを考慮すると、前期には河畔にあったシリア領ユーフラテス河中流域での居住域の中心が、中期には台地上へとシフトしたことを十分に示唆する。もう一つ、河畔から約 60km 南に離れたビシュリ山中では、中期青銅器時代に帰属する大規模な積石墓群 (ケルン墓群) が同じく日本-シリアの共同調査によって発見された (Fujii and Adachi 2010)。墓制や埋葬地も前期と中期では大きく変化しただろう。これら二つの考古学的証拠は、ユーフラテス河中流域における居住域の主体がユーフラテス河畔の可耕地から遊牧的適応を必要とするステップ台地上へと大きく変化したことを示している (図 4)。

シリア領ユーフラテス河中流域の前期青銅器時代から中期青銅器時代にかけての移行時に想定される都市化と遊牧化の同時進行は一見相対する現象のようにみえるが、むしろ都市民と遊牧民は不可分な関係にあったのかも知れない。多くの文化人類学者が示唆しているように、農耕活動



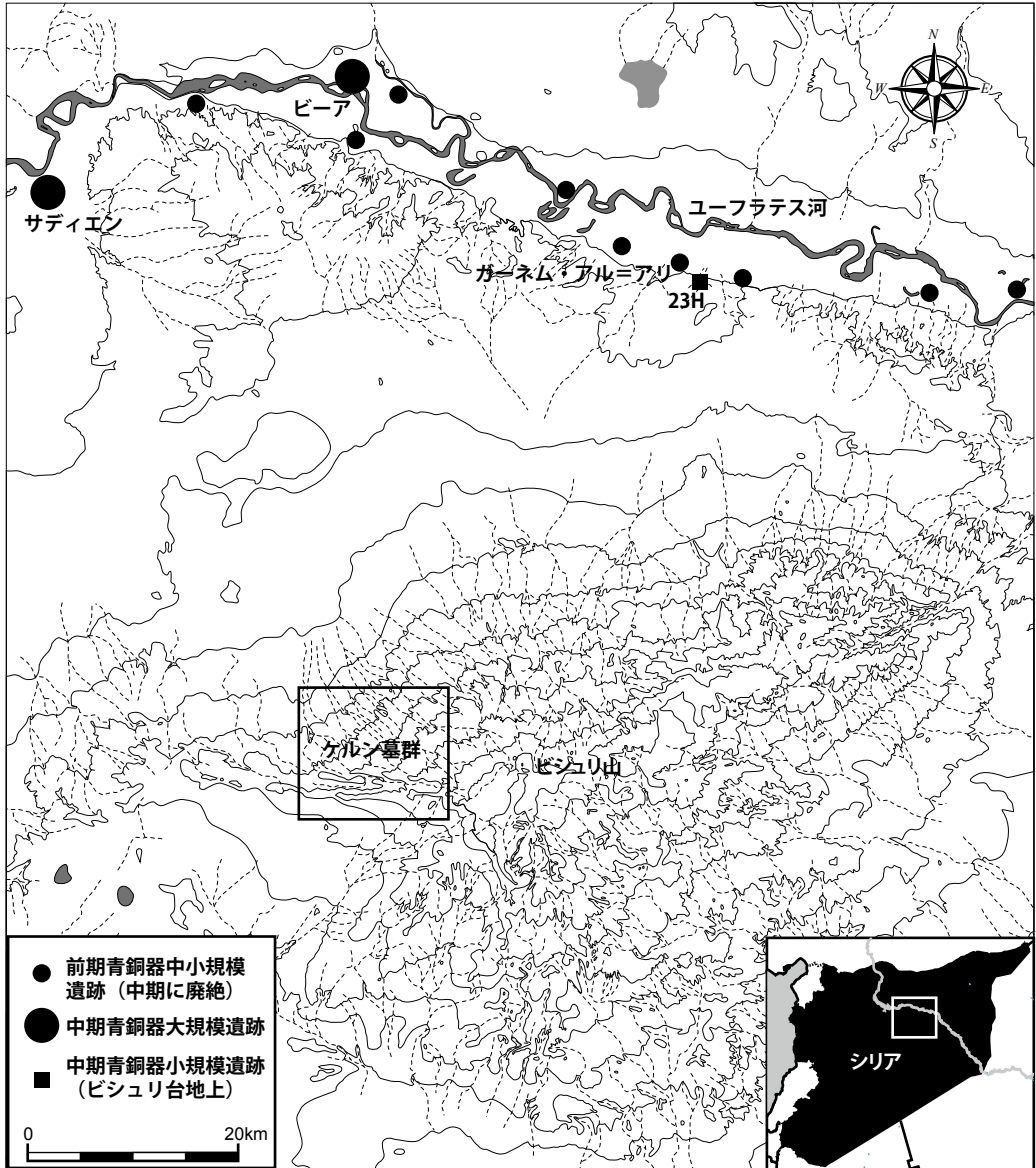


図4 シリア領ユーフラテス河中流域における前・中期青銅器時代の遺跡分布（原図の地形図は東京大学総合研究博物館・西秋良宏研究室が作成）

をほぼ実施しない遊牧民にとって農産物を含む資源交換が可能な市場としての都市は不可欠なものであった (Marx 1967). それでは、前期から中期にかけてこのような都市化・遊牧化の同時進行現象がなぜ発生したのか、その要因については、しばしば指摘されるように4.2ka イベントと呼ばれる前期青銅器時代末のグローバルな環境悪化現象に対する適応がその一つとして考えられる (Weiss in press). しかしなぜシリア北部域のように一時的な遊牧的適応で対処するのではなく、気候回復後の中期に入ってもシリア領ユーフラテス河中流域では遊牧化を継続したのかについて

は今後の課題である。1点指摘したいのは、天水農耕が不可能ではないが安定してそれを営めない年平均降水量 200mm 前後の境界環境に同中流域が位置していることである。この農耕を安定的に実施することができない環境要因のため、気候回復後の中期においても前期の集落遺跡に再居住することなく遊牧的適応を継続して行っていたことも考えられるかも知れない（久米 2011b）。

いずれにせよ、シリア領ユーフラテス河中流域の住民が、前期青銅器時代において半農半牧民として居住拠点と農地である河畔と短期逗留地あるいは放牧地としてのステップ台地上のいずれをも利用していたことは、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡での動植物考古学の成果からも十分に予想ができる（赤司 2012; Hongo et al. 2010）。一方、上に見た前・中期移行時のセトルメント動向の変化は、中期青銅器時代に入ると、同中流域の半農半牧民の一部は都市へ流入し、一部はステップ台地へ進出したことを示唆している。このことから、前・中期青銅器時代の移行時におけるシリア領ユーフラテス河中流域の集団構造変化の根幹は、半農半牧民コミュニティから都市民／遊牧民コミュニティへの二元化現象であったと見られる。

## 5. おわりに ー再び二つの Dimorphic Society 説についてー

前期青銅器時代テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡直近墓域の墓の被葬者をめぐる本論の試みは、死者数復元による被葬者ガーネム・アル＝アリ居住民説の補強作業を経て、半農半牧民コミュニティから都市民／遊牧民コミュニティへ、というシリア領ユーフラテス河中流域における前・中期青銅器時代の集団構造の変化についての予察へと展開した。ここで、先に示した二つの Dimorphic Society 説について再度話を戻したい。生業活動の季節的変異に応じてその居住形態を分離統合させるコミュニティを論じたシャルルと生業活動や統治形態が異なる二つのコミュニティの交流について論じたロートンの二つの Dimorphic Society 説は、まさにこの前・中期移行時の集団構造の変化を示すのに格好の定住民－遊牧民関係モデルである。すなわち、シャルルのモデルは前期の半農半牧民コミュニティに、ロートンのモデルは中期の都市民／遊牧民コミュニティに見事に対応するように見える。したがって、リヴェラーニ（1997）が鋭く指摘した二つの Dimorphic Society 説は、実は前・中期青銅器時代におけるシリア領ユーフラテス河中流域の集団構造の通時的変化を再構成して示すために極めて有効なツールであることがわかる。なお、ロートンのモデルには1点だけ修正すべき点があるように思われる。ロートンは、都市民ないし定住民と遊牧民の統治形態を国家と部族という図式で描いているように読み取れるが、今回示した前・中期青銅器時代の集団構造変化は、都市民すら部族社会の成員であることを示唆している。最近、同様の視点からの議論がいくつか出版されている（Marx 2007; Porter 2012; Szuchman ed. 2009 内の諸論考など）。

### 引用文献

赤司千恵 2012 「シリア前期青銅器時代のテル・ガーネム・アル・アリ遺跡におけるステップ利用の拡大」

- 『早稲田大学大学院文学研究科紀要（第4分冊）』57, 83-95頁.
- 川崎康司 2000「第III章 前二千年紀前半：群雄割拠から再統一へ」前田徹・川崎康司・山田雅道・小野哲・山田重郎・鶴木元尋『歴史学の現在：古代オリエント』, 39-70頁, 山川出版社.
- 久米正吾 2011a「青銅器時代ユーフラテス河流域の人口動向」『日本西アジア考古学会総会・大会要旨集』, 44-49頁.
- 久米正吾 2011b「前・中期青銅器時代ユーフラテス河中流域の都市化と遊牧化」『オリエント』54/2, 140頁.
- 久米正吾・小野勇・赤司千恵・大沼克彦 2011「ユーフラテス川流域の古代墓を探る：シリア, ビシュリ山系ガーネム・アル＝アリ遺跡近郊墓域の第5次調査（2010年）」『平成22年度考古学が語る古代オリエント：第18回西アジア発掘調査報告会報告集』, 68-74頁.
- 高尾賢一郎 2010「シリア・ユーフラテス川中流域の事例に見る『部族』ガバナンスの様態と『遊牧民』概念の変容」佐藤宏之編『若手研究者成果論集』, 特定領域研究総括班, 14-35頁.
- 長谷川敦章 2008「テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡の測量調査」『セム系部族社会の形成 Newsletter』10, 5-9頁.
- モース, マルセル（宮本卓也訳）1981『エスキモー社会：その季節的変異に関する社会形態学的研究』未来社.
- Adams, R. M. 1981 *Heartland of cities: surveys of ancient settlement and land use on the central floodplain of the Euphrates*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Akkermans, P. M. M. G. and G. M. Schwartz 2003 *The archaeology of Syria: from complex hunter-gatherers to early urban societies (ca. 16,000-300 BC)*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Aurenche, O. 1998 Villages d'été, villages d'hiver: un modèle peu connu d'occupation de l'espace dans la vallée de l'Euphrate (20ème siècle après J.-C.) *Espace naturel, espace habité en Syrie du Nord (10e-2e millénaires av. J.-C.) Actes du colloque tenu à l'Université Laval (Québec) du 5 au 7 mai 1997 Année*. Canadian Society for Mesopotamian Studies, Québec/La Maison de l'Orient et de la Méditerranée, Lyon, 35-42.
- Chamberlain, A. T. 2006 *Demography in archaeology*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Charles, H. 1939 *Tribus moutonnières du Moyen-Euphrate*. Insitut français du Damas, Beirut.
- Cooper, L. 2006 *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*. Routledge, New York and London.
- Falb, C., K., Krasnik, J.-W. Meyer, and E. Vila 2005 *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im syrischen Euphrattal: 4. Der Friedhof von Abu Hamed*. Saarländische Druckerei & Verlag, Saarwellingen.
- Fujii, S. and T. Adachi 2010 Archaeological investigations of Bronze Age cairn fields in the northwestern flank of Mt. Bishri. In: K. Ohnuma et al. eds., 61-77.
- Hassan, F. A. 1981 *Demographic archaeology*. Academic Press, New York.
- Hongo, H., C. Akashi, L. Omar, K. Tanno and H. Nasu 2010 Zooarchaeology and ethnoarchaeobotany at Tell Ghanem al-Ali. In: K. Ohnuma et al. eds., 97-104.
- Kohlmeyer, K. (1984) Euphrat-Survey: Die mit Mitteln der Gerda Henkel Stiftung durchgeführte archäologische Geländebegehung im syrischen Euphrattal. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 116, 95-118.
- Lattimore, O. 1962 *Inner Asian frontiers of China*. Beacon Press, Boston.

- Liverani, M. 1997 "Half-nomads" on the Middle Euphrates and the concept of dimorphic society. *Altorientalische Forschungen* 24/1, 44-48.
- Marx, E. 1967 *Bedouin of the Negev*. Manchester University Press, Manchester.
- Marx, E. 2007 Nomads and cities: changing conceptions. In: B. A. Saidel and E. J. van der Steen eds. *On the fringe of society: archaeological and ethnoarchaeological perspectives on pastoral and agricultural societies*. BAR International Series 1657. Archaeopres, Oxford, 75-78.
- Meyer, J.-W. 2010 The cemetery of Abu Hamad: a burial place of pastoral groups? In: K. Ohnuma et al. eds., 155-163.
- Nishiaki, Y. 2010 Archaeological evidence of the Early Bronze Age communities in the middle Euphrates steppe, north Syria. In: K. Ohnuma et al. eds., 37-48.
- Numoto, H. and S. Kume 2010 Survey and sondage at the cemeteries near the site of Tell Ghanem al'Ali. In: K. Ohnuma et al. eds., 49-60.
- Ohnuma, K., S. Fujii, Y. Nishiaki, A. Tsuneki, S. Miyashita, and H. Sato eds. 2010 *Formation of tribal communities: integrated research in the Middle Euphrates, Syria*. Al-Rafidan special issue. The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University, Tokyo.
- Porter, A. 2012 *Mobile pastoralism and the formation of Near Eastern civilizations: weaving together society*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Roobaert, A. and G. Bunnens 1999 Excavations at Tell Ahmar - Til Barsib. In: G. del Olmo Lete, and J.-L. Montero Fenollós (eds.) *Archaeology of the Upper Syrian Euphrates, the Tishrin Dam area: proceedings of the international symposium held at Barcelona, January 28th-30th, 1998*. Editorial AUSA, Barcelona, 163-178.
- Rowton, M. B. 1973 Urban autonomy in a nomadic environment. *Journal of Near Eastern Studies* 32/1-2, 201-215.
- Rowton, M. B. 1974 Enclosed nomadism. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 17, 1-30.
- Szuchman, J. ed. 2009 *Nomads, tribes, and the state in the Ancient Near East: cross-disciplinary perspectives*. The Oriental Institute of the University of Chicago, Chicago.
- Webb, J. M. and D. Frankel 2009 Exploiting a damaged and diminishing resource: survey, sampling, and society at a Bronze Age cemetery complex in Cyprus. *Antiquity* 83(319), 54-68.
- Wilkinson, T., N. Miller, C. Reichel, and D. Whitcomb 2004 *On the margin of the Euphrates settlement and land use at Tell es-Sweyhat and in the upper Lake Assad area*. The Oriental Insitute of the University Chicago, Chicago.
- Weiss, H. in press Altered trajectories: the Intermediate Bronze Age in Syria and Lebanon 2200-1900 BCE. In: A. Killebrew and M. Steiner, eds., *The Oxford handbook of the archaeology of the Levant: 8000-332BCE*. Oxford University Press, Oxford.

# 植物遺存体からみた土地利用

## —テル・ガーネム・アル＝アリの場合

赤司 千恵

### 序論

西アジア地域はたしかに日本と比べれば乾燥しており、雨も少ない。しかし地中海性気候のため、冬は雨や雪が降るし、地中海岸の平野は緑豊かで夏は日本並みに蒸し暑くなる。一方、高いレバノン・アンチレバノン山脈を越えて内陸に入ると植生は急激に乏しくなり、降水量は概して東に向かうほど減少する。また、トルコ南東部を東西に走るタウルス山脈では雨が多いが、南に行くほど乾燥し、シリア砂漠では年降水量 100mm を下回る場所もある。ユーフラテス川流域には河川林が発達するが、そこを離れると広大なステップ地帯が広がっている。このように、多様な植生が比較的近距离のなかに帯状に分布するのが、西アジアの自然環境の特徴といえる。

エジプトのような極度の乾燥地域をのぞけば、ほとんどの有機物は炭化しなければ地中で遺存しない。西アジアも例外ではなく、遺跡からはさまざまな作物や野生植物が、炭化した状態で出土する。葉や茎のようなもろい部位は燃え尽きて残らないため、多くはタネや実の部分である。本稿では、人々がこの多様な植生環境をどのように利用してきたのか、シリアの青銅器時代を例に出土植物遺存体から考察することを目的とする。

### 1 遺跡

テル・ガーネム・アル＝アリ (Tell Ghanem al-'Ali) 遺跡は、シリアの都市ラッカ (al-Raqqa) から東 50km ほどのユーフラテス川南岸に位置する (図 1)。紀元前 3 千年紀 (前期青銅器時代) に相当し、2007 年から 2010 年にかけてシリアと日本の合同発掘調査が行われてきた (Hasegawa 2008, 2009, 2010, 2011)。

面積は約 12ha であるが、遺跡の一部は削平されて本来のサイズより縮小されている。ラッカ以東のユーフラテス河岸では、このような中規模の前期青銅器のテル型集落が一定間隔で分布しており、テル・ガーネム・アル＝アリもその一つであると想定される (Nishiaki 2010)。当時のこの地域のセンター的な都市とされているのは、ラッカ市郊外のテル・ビア (Tell Bi'a) 遺跡で、古代都市トゥトゥルに比定されている (Strommenger 1983)。

遺跡は低位河岸段丘上に立地しており、丘状を呈する (図 1)。後背地は比高差 50m ほどの崖になっており、その上 (高位河岸段丘) にはビシュリ山地に連なる広大なステップ地帯が広がっ

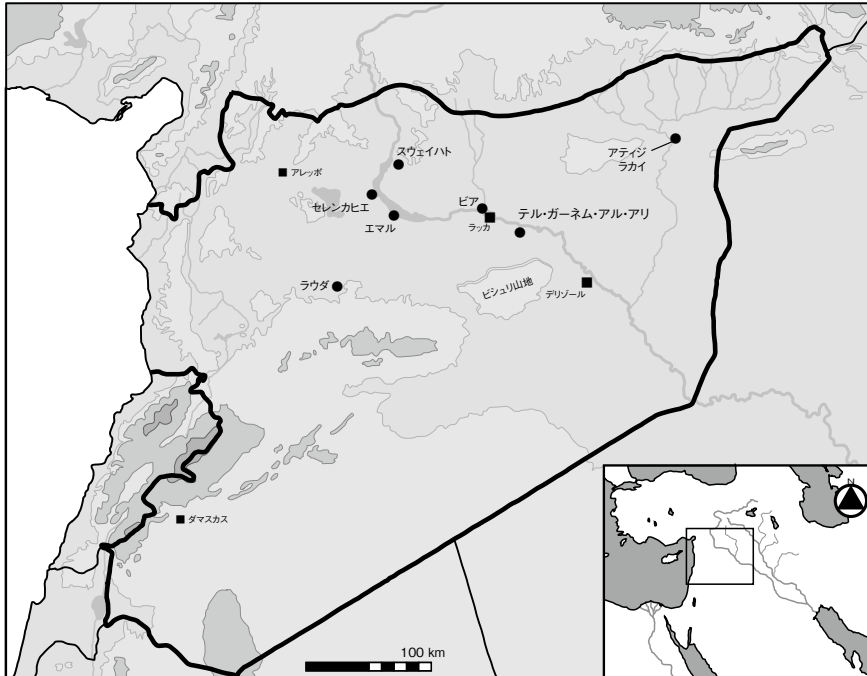


図1 テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡と本稿で言及する青銅器時代遺跡の分布

ている。崖線を境に、河川低地には一面の畑、台地上には乾いたステップという明確に異なる景観が隣接しているのが、ユーフラテス中流域の地形の特色である。

長谷川によると、8か所の発掘区のうち第2発掘区（ステップトレンチ）の8つの建築層から得られた資料の分析に基づき、居住時期は3つのフェイズに分けられている（Hasegawa 2010）。もっとも古い第1フェイズは放射性炭素年代から前4000年前後とされ、一時的空白ののち第2フェイズ・第3フェイズは連続的に居住されるが、前期青銅器時代IVA期に廃絶されたあとは、定住集落として利用されることはなかった。一方、テルの北東部に設けられた第1発掘区では、第2発掘区の第3フェイズに相当する層が検出されている。いずれの発掘区でも、石や日干しレンガの建物基礎が見つかり、部屋のサイズが似通っていること、オープンや灰層などの生活残滓、居住址のコンテキストから見つかることの多い土偶が見つまっていることなどから、一般の住居址と考えるとよいと思われる。城壁とも取れる厚い石壁も、第2発掘区で検出されている。

本稿では、これらの第1・第2発掘区で採取した植物遺存体サンプルを用いて、前期青銅器時代における土地利用と、その変遷について検討する。

## 2 分析

第1発掘区からのサンプルのうち、本稿で用いるのは分析が完了している11点である。第2発掘区から採取したサンプルは、第1フェイズの6点、第2フェイズの19点、第3フェイズの

11 点を用いる。第 1 フェイズは小規模な範囲しか発掘されていないため、サンプル数は 6 点に留まった。各サンプルのコンテキストは、住居内覆土、灰層、オープン、土器内などで、第 1 発掘区のサンプル 1 点（後述）を除いて二次的堆積と思われるため、すべて一括して扱う。

採取した土壌サンプルは、フローテーション（水洗選別）によって処理し、炭化物を土中から回収した。炭化物は乾燥させて日本に持ち帰り、実体顕微鏡下で炭化物の中から同定可能な種実を取り出す作業を行った。取り出した種実は現生標本と比較しながら可能な範囲まで同定するが、標本の不足と筆者の能力不足から、多くの野生植物の種実は科・属レベルの同定に留まっている（赤司 2012; Akashi 2011）。

### 分析結果

図 2 はテル・ガーネム・アル＝アリ出土の植物のうち、各フェイズの作物の内訳を示したグラフである<sup>1)</sup>。栽培植物で最も多かったのは皮性オオムギで、第 1～第 3 フェイズを通して種子や穂軸が多数検出された。皮性コムギの種子や穂軸も見つかったが、その数はオオムギに比べるとごく僅かで、独立した作物ではなかった可能性もある。第 3 フェイズになると、ブドウの種子が急に増える。前期青銅器時代にはブドウが栽培化されていたのは確かで、同時期の他の遺跡でもブドウの種子は頻繁に出土する。例えばシリア西部のテル・ラウダ (Tell ar-Rawda) 遺跡では、灌漑によってブドウを含めた果樹類を栽培していたことが指摘されている (Herveux 2004; Braemer et al. 2010)。テル・ガーネム・アル＝アリでは第 3 フェイズでブドウ栽培が活発になったのか、あるいは単にサンプル数や発掘範囲の偏りに起因するもので、実際にはもっと早くから一般的な果物だったのかは定かではない。そのほかにレンズマメやグラスマメなどの豆類があったが、散発的にしか出土しなかった。テル・ガーネム・アル＝アリの農耕

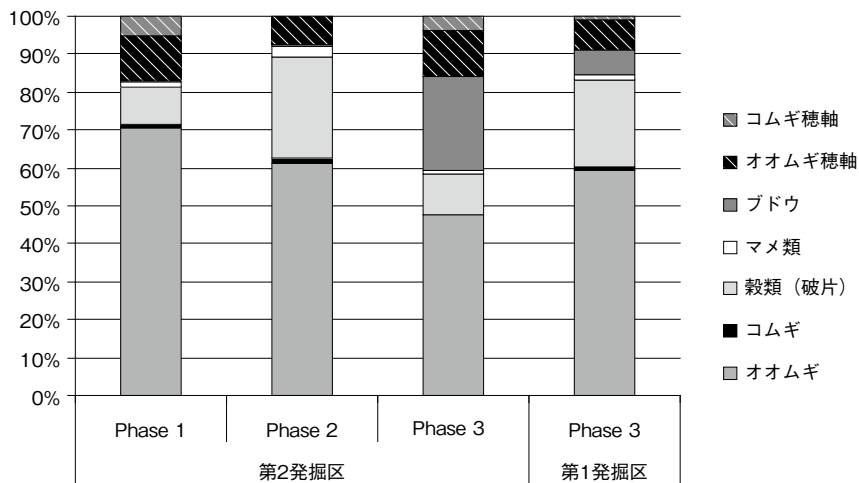


図 2 テル・ガーネム・アル＝アリ出土の栽培植物の内訳

は、オオムギ中心であったことが伺える。

作物のほか、多種多様な野生植物の種子も出土した(図3)。アカザ科の *Atriplex* (ハマアカザ属), *Suaeda* (マツナ属), イネ科の *Bromus* (スズメノチャヒキ属), *Lolium* (ネズミコムギ属), *Phalaris* (クサヨシ属), マメ科の *Prosopis* (プロゾピス属), *Trigonella/Astragalus* (クローバーなど三小葉マメ類の仲間), ナデシコ科の *Silene* (マンテマ属), ムラサキ科の石化種子, タデ科種子などが多く見られた。

中でもアカザ科の多さは、テル・ガーネム・アル＝アリの出土植物を特徴付けている。*Atriplex* はハブール川流域のテル・アティジ (Tell 'Atij) 遺跡で集中的に出土した例があり (McCorrison 1995), *Suaeda* はテル・ガーネム・アル＝アリ上流のテル・セレンカヒエ (Tell Selenkahiye) 遺跡で大量に見つかっている (van Zeist and Bakker-Heeres 1985/86)。一方、テル・エツ＝スウェイハト (Tell es-Swayhat) 遺跡, エマル (Emar) 遺跡では、テル・ガーネム・アル＝アリと似通った気候・植生に位置するにも関わらず、アカザ科の種子は散発的にしか出土していない (Miller 1997; van Zeist and Bakker-Heeres 1985/86; Riehl 2010)。ハブール流域の他の遺跡も同様で、上記の3遺跡では、*Atriplex* や *Suaeda* を集中的に利用していた可能性がある (赤司 2012)。

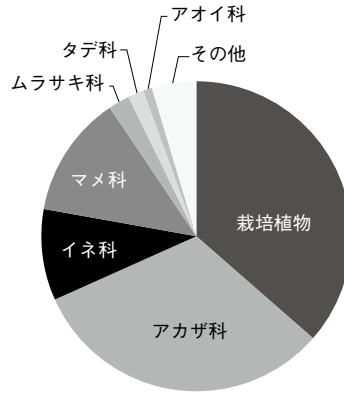


図3 テル・ガーネム・アル＝アリ出土の植物遺存体 (第1・第2発掘区, 第1～第3フェイズ合計)

### 3 現代の土地利用

現代のラッカ県は、ユーフラテス川の豊富な水を灌漑に利用できるため、シリアでも有数の穀倉地帯となっている。そのため本来の植生は、ほとんど残っていない。河川低地には裸性コムギ、皮性オオムギ、ソラマメ、綿花、トウモロコシ、トマト、ジャガイモなどの作物が植えられ、衛星写真で見ると川に沿って緑の帯が連なっているのが分かる(図4)。この地域のコムギは、トウモロコシ収穫後の11月後半に耕起・播種し、4度の灌水を経て翌年6月に収穫するという。オオムギの収穫はコムギより1か月ほど早く、5月後半である。



図4 テル・ガーネム・アル＝アリ周辺の衛星写真 (Google Earth より)

一方で崖の上のステップ台地は、一面の褐色土に灌木が点在するのみだが、各所に走るワディ



では比較的豊かな植物がみられる。このステップは、ベドウィンや村民らがヒツジ、ヤギ、ラクダなどの家畜の放牧に利用している。どこまでが本来の植生であるのか判断するのは難しいが、現在台地の上にはアカザ科の *Noaea*, *Anabasis*, *Salsola*, マメ科の *Astragalus* などの低木が点在し、ワディ沿いには *Achillea* (キク科), *Malva* (アオイ科), *Scrophullaria* (ゴマノハグサ科), *Adonis* (キンボウゲ科), *Aizoon* (ツルナ科) などの草本が見られる。台地縁辺部では *Peganum* (ハマビシ科) が群生しているのも観察された。

村落は緑の線の外側に、崖にはりつくように作られる場合が多い。ラッカとデリゾール (Deir ez-Zor) を結ぶ幹線道路も、河川低地上を崖に沿って敷設されている。ガーネム・アル＝アリ村では、墓域は村のはずれや村近郊に、部族ごとに設けられている (Tsuneki 2008)。

#### 4 前期青銅器時代当時の土地利用

次に、前期青銅器時代の土地利用について考えてみたい。集落と墓の立地については、西秋らのサーヴェイ (Nishiaki and Kadowaki 2009; Nishiaki 2010; Nishiaki et al. 2011) と沼本、久米らによる台地縁辺部の墓の発掘調査 (Numoto and Kume 2009, 2010; Kume et al. 2011) から明白である。しかし当時の耕作地がどのくらい広がっていたのか、またどこで家畜を飼育していたのかについては、遺構として残ることは稀なので、植物遺存体がヒントとなり得る。

##### a) 集落

定住集落は、河川低地上につくられている (図5)。テル・ガーネム・アル＝アリの東にはテル・ムグラ・アッ＝サギール (Tell Mughra as-Saghir), 西にはテル・ハマディー (Tell Hamadin) というほぼ同時期、同サイズの遺跡が位置している (Kohlmeyer 1984)。ラッカより東のユーフラテス南岸には、前述のように中規模の定住集落が5~6kmの間隔で分布していると考えられ、一部の空白地帯にも本来遺跡があったものの、川の浸食作用で消失したと思われる。またテル・ガーネム・アル＝アリとテル・ムグラ・アッ＝サギールの間あたりに位置する台地上には、小型のマウンド (ワディ・ジャズラ西, Wadi Jazla West) があり、青銅器時代の遺物が表採されていることから、当時の短期逗留地の可能性がある (Nishiaki et al. 2011)。

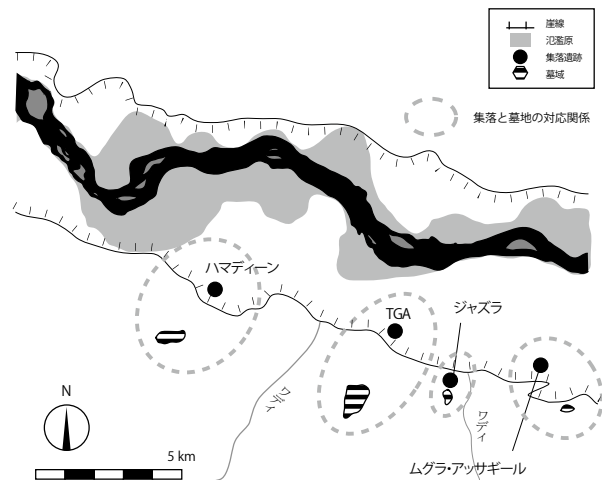


図5 周辺地形および集落と墓地の位置関係  
(Nishiaki 2010 をもとに作成)

## b) 墓

一方の台地上にも、人間活動の痕跡は多く残っている。縁辺部には青銅器時代の短期逗留地も見つかっているが、台地上の遺跡の多くは墓地である。台地の縁辺部から奥地にかけて、夥しい数の前期青銅器時代に属する墓が築かれ、集落に対応するようにいくつかの墓域を形成している (Nishiaki 2010)。これらの墓がすべて集落民を葬った墓であるのか、遊牧民が残した墓なのかはまだ議論の途中であるが、集落内からは前期青銅器時代の墓は見つかっていないことから、集落民の墓も台地上に造営された蓋然性は高いと思われる。

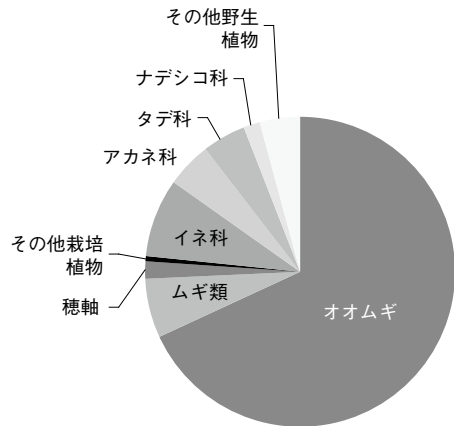


図6 「貯蔵」オオムギのサンプルの植物遺存体

## c) 耕作地

畑がどこにつくられていたのか、という点も、どれだけの人口を支えることができたのかを推定する上で重要である。川の氾濫原は洪水で冠水する危険があるし、台地上では天水農耕は難しい。灌漑の確かな証拠も得られていないことから、現在と同じように集落が立地する河川低地上に、畑もつくられていたと考えるのが妥当であろう。ただし、耕作地が河川低地だけだったとは限らない。台地の上でも、ワディなど水分条件の良いところでは、オオムギを育てることができた可能性がある。

畑の環境を復元するには、貯蔵された種子の分析が有効である。選別の前の段階で貯蔵された作物には、収穫時に作物と一緒に刈り取られた雑草の種子が混入しており、これらの雑草のアSEMBリッジには畑の環境が反映されていると考えられるからである。しかし実際には、このような貯蔵作物が消費されることなく、しかも偶然炭化して出土することは稀である。

テル・ガーネム・アル＝アリの場合、明確な貯蔵コンテキストは見つからなかった。ただし植物遺存体のアSEMBリッジから、貯蔵または一時保管されていたと推定できるオオムギのサンプルは1点得られている (図6)。第1発掘区の小部屋から採取したサンプルで、種実のうち約45%がオオムギの種子であった。残りの15%はムギの穂軸と、数種類のイネ科植物、*Galium* (アカネ科ヤエムグラ属)、タデ科を中心とした野生種子であった。これらの野生種子がすべて雑草由来とは限らず、貯蔵時や埋没時に混ざった可能性もあるが、ひとまず雑草の候補として挙げられる。イネ科はどれも典型的な雑草種で、特に多かった *Phalaris* は、灌漑雑草の指標となる可能性が指摘されたことがある (van Zeist 1999)。 *Galium* は畑や草地、路傍、疎林など、幅広い環境に適応する植物である。タデ科については、比較標本の不足から属までの同定に至っていない。そのほかナデシコ科の *Silene* と *Gypsophilla* も比較的多く含まれていた

が、やはり広範囲の環境に適応する。残念ながら以上の雑草候補からは、テル・ガーネム・アル＝アリにおける具体的な畑環境の復元までは不可能である。ただ隣接する同時期の集落との距離から、大体集落の周囲2～3kmの範囲が耕作地として利用できたと考えられる。

ただ興味深いのは、この「貯蔵」サンプルにマメ科のクローバーの仲間 (*Trigonella*, *Astragalus*, *Melilotus*, *Trifolium* など) がほとんど含まれなかった点である。テル・セレンカヒエの貯蔵種子では *Melilotus* の種子が検出されているし (van Zeist and Bakker-Heeres 1985/86)、ハブール流域のテル・アル＝ラカイ (Tell ar-Raqai) 遺跡のサイロとされる円形施設 (round building) でも *Trigonella astroites* タイプの種子が多数出土している (van Zeist 1999)。テル・ガーネム・アル＝アリでも上記以外のサンプルからは、*Trigonella* / *Astragalus* 種子が特に第3フェイズで多数出土している。テル・ガーネム・アル＝アリでは、この植物は収穫物の混入以外のルートで持ちこまれた可能性が示唆される。

#### d) 放牧地

家畜をどこで放牧していたのかについては、糞燃料に含まれる種子が情報源となり得る。野生植物が集落に持ち込まれる背景には、さまざまなルートが考えられるが、中でも主要な野生種子の供給源と思われるのが糞燃料である (Miller 1984)。シリアのような乾燥地域では、しばしば家畜の糞を燃料として使用する。糞は薪に比べてゆっくりと燃えること、冷めにくく一定温度を維持できることなどから、民族誌では長時間の煮込み料理やお湯を沸かすのに使われることが多い (Anderson and Ertug-Yaras 1998; Sweet 1960 など)。テル・ガーネム・アル＝アリでも、家畜の糞を燃料として頻繁に利用していた可能性が高い。燃料なら当然火を受けて炭化する機会にも恵まれることから、テル・ガーネム・アル＝アリ出土の野生植物も、糞燃料由来の種子が相当含まれていることが想定できる。

テル・ガーネム・アル＝アリにおける糞燃料使用の証拠の一つと言えるのは、多数出土した *Prosopis* の実の存在である。棘のある低木で、シリアではよく畑の周りに茂みをつくっており、直径1cmほどの大型の実をつける。その結実時期がオオムギの熟期とは重ならず、雑草として偶然集落に持ち込まれたとは考えられないこと、家畜がこの実を好んで食べることから、*Prosopis* の存在は糞燃料使用を示すと解釈できる。従って *Prosopis* に共伴する植物も、糞燃料由来の可能性が高いと言える。

注意すべきは、植物遺存体の出土コンテキストが原位置でない点である。多くのサンプルは灰層などの二次的体積から採取されており、燃料は使用され、廃棄された後の状況を示しているため、さまざまな活動の残滓が混在している。また単一の調理活動においても、複数の異なる燃料が使われることは大いにあり得る。加えて、糞燃料は数カ月から数年の単位で保存される場合もある。さらに、動物が食べたものすべてが糞燃料に含まれるわけではなく、中には消化されやすく残らない植物も存在する (Anderson and Ertug-Yaras 1998)。このような留意点を踏まえたうえで、テル・ガーネム・アル＝アリ出土の野生植物の中から糞燃料由来と思われる

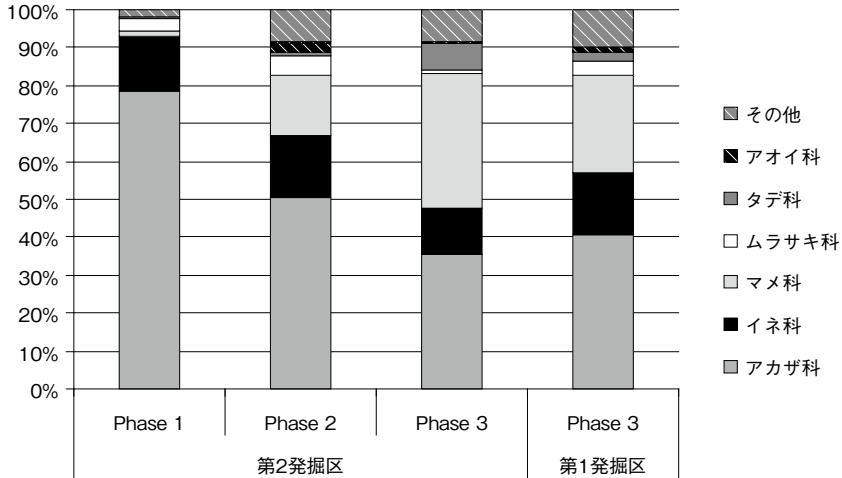


図7 テル・ガーネム・アル＝アリ出土の野生植物の変遷

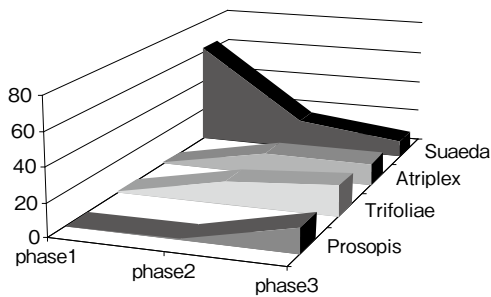


図8 野生植物4種の全野生植物に占める割合の変遷

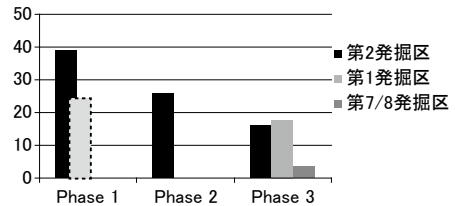


図9 テル・ガーネム・アル＝アリのS:C比

種を挙げ、当時の放牧地について考えてみたい。

現代のベドウィンたちは時に数日かけて放牧地を移動することもあるが、現代のガーネム・アル＝アリの村人の放牧は基本的に日帰り、台地上だけでなく収穫済みの畑などでも放牧している。しかし結論から言うと、テル・ガーネム・アル＝アリの出土植物からだけでは、具体的な放牧地や範囲を特定するまでには至らなかった。理由は特定の場所にしか生えないような種が見られず、多くは同定が属レベルに留まっていることと、ステップ上の植生調査が不十分であること、開墾と過放牧で当時とは植生が大きく変わっている可能性が高いことなどである。しかし、第1～第3フェイズにかけての野生植物の変遷から、家畜の飼育に何らかの変化が生じたことは見てとることができた。

図7のグラフは、各フェイズ別の野生植物アセンブリッジを科レベルで表している。雑草由来と思われるイネ科植物の割合は、全フェイズを通して大きな変化はない。顕著な変化は、アカザ科の減少とマメ科の増加である。アカザ科の中でも *Atriplex* の出土はあまり変わらず、*Suaeda* の減少がアカザ科の減少の要因である(図8)。一方マメ科では、*Prosopis* と

*Trigonella*/*Astragalus* が顕著な増加を示す。*Prosopis* は前述のように糞燃料由来と考えられ、もう一方の *Trigonella*/*Astragalus* も *Prosopis* としばしば共伴すること、前項で触れた貯蔵オオムギと思われるサンプルにあまり含まれていないことから、やはり糞燃料由来と考えている。

それでは時期が下るにつれて糞燃料の使用が増えたのかというと、必ずしもそうではない。図9は各時期の種子(数)と材(体積)の比(S:C比, seed to charcoal ratio)の変化である。大雑把な指標ではあるが、この値が高いほど糞燃料への依存度が高いことを意味する。第2発掘区の第1~第3フェイズでは、むしろS:C比は次第に低下する、つまり糞燃料の使用が減少することを示す結果となった。ただし第1フェイズのS:C比の値は、*Suaeda* 種子を大量に含むサンプル1点に引き上げられているため、このサンプルを除外して計算した場合のS:C比(図9の破線部)は、第2、第3フェイズとさして変わらない値を示した。従って糞燃料の使用は、少なくとも増大するわけではないということが、このグラフからは見てとれる。ちなみに、本稿では詳しく触れないが、薪を主な燃料に使っていたと推定される第7・第8発掘区のS:C比は3.6で、その他の発掘区よりはるかに低い値を示している(赤司2012)。

アカザ科減少とマメ科の増加が、そのまま家畜のエサとなる植物に生じた変化であるとした場合、そこには土地利用に何らかの変化があらわれていると考えられる。現在 *Atriplex* や *Suaeda* は川辺や村はずれの湿った場所に繁茂しており、畑の雑草としても生えることがある。いくつかのサンプルに集中して出土するため、飼料として人為的に採集していた可能性も考えられる。*Prosopis* は前述したように畑の周りや路傍によく見られる。当時どんな環境に生えていたのか定かではないが、今と同じように畑の周りなどに生え、貴重な冬季の飼料となっていた可能性が高い。イネ科雑草類はどのフェイズからもコンスタントに出土しており、やはり現在と同じように収穫の終わった畑でも放牧が行われていたか、あるいは収穫物から選り分けた雑草を飼料として与えていたと考えられる。*Trigonella*/*Astragalus* (種子の形態が良く似ているため、どちらか決定できていない)には多数の種があり、雑草として生える種もあるが、典型的なステップ性植物でもある。現在と同様に前期青銅器時代においても、台地上のステップが牧草地として利用されていたことは、想像に難くない。そしてマメ科の増加は、前期青銅器時代を通じてステップの重要性が次第に高まっていった可能性を示唆している。

当初第1フェイズでは集落に近い河川低地で家畜のエサを調達できていたのが、耕作地の拡大や牧草の不足などの理由で、次第に台地上のステップが放牧地として重要性を増していったのかもしれない。

また、台地上における墓の分布から、台地上のステップには使用範囲に制限があった可能性を西秋らが指摘している(Nishiaki 2010)。低地にある集落の間には大型のワディがあり、それが境界線の役割を果たしているというのである(図5)。この解釈が正しければ、この境界線が放牧地の境界の役割も果たし、湧水や牧草を巡っての集落間の対立を防いでいた可能性がある。

## 結論

前期青銅器時代のテル・ガーネム・アル＝アリの人々は、河川低地の集落を拠点としながらも、台地上のステップでの活動も広く行っていたことは、墓や遺物散布地の分布からも指摘されている。植物遺存体、特に野生植物の分析結果もそれを支持するもので、ステップ台地が現在と同じく重要な牧草地であったと解釈できる。時には数日かけて、遠方まで放牧に出かけることもあったかもしれない。

また、野生植物アセンブリッジに見られる時期的変化は、前3千年紀後半になってステップでの活動が活発化した可能性を示唆している。彼らは「集落民」とは言っても、日常的にステップの資源を利用し、ステップ台地との強いつながりを保っていたと考えられる。

## 謝辞

発掘隊長であり、シンポジウムでの発表の機会を与えてくださった大沼克彦先生（国士舘大学）ほか、現地調査や整理作業でお世話になった方々、植物遺存体分析をご指導いただいた丹野研一氏（山口大学）、指導教員の寺崎秀一郎先生（早稲田大学）、ガーネム・アル＝アリ村の友人らに心から感謝をささげたい。なお本研究は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費、特別領域研究）、国士舘大学、日本私立学校振興共済事業補助金の補助を受けて実施した。

## 註

- 1) 第1発掘区の12サンプルのうち1点は貯蔵という特殊なコンテキストのため、本稿中のグラフ（図6を除く）ではこの「貯蔵」サンプルは除外した。

## 引用文献

- Akashi,C. 2011 The Subsistence and the Plant Use in Tell Ghanem al-Ali: Early Bronze Age Syria. *Al-Rāfidān* 32, 105-110.
- Anderson,S. and F.Ertug-Yaras 1998 Fuel Fodder and Faeces: an Ethnographic and Botanical Study of Dung Fuel Use in Central Anatolia. *Environmental Archaeology* 1, 99-109.
- Braemer,F., B.Geyer, C.Castel and M. Abdulkarim 2010 Conquest of New Lands and Water Systems in the Western Fertile Crescent (Central and Southern Syria). *Water History* 2, 91-114.
- Hasegawa,A. 2008 Trench Excavation in Square 1 of Tell Ghanem al-Ali. *Al-Rāfidān* 29, 176-178.
- Hasegawa,A. 2009 Trench Excavation in Square 2 of Tell Ghanem al-Ali. *Al-Rāfidān* 30, 210-214.
- Hasegawa,A. 2010 Sondage at the Site of Tell Ghanem al-Ali. *Formation of Tribal Communities Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria (Al-Rāfidān special issue)*, 25-35.
- Hasegawa,A. 2011 Sondage at Tell Ghanem al-Ali, Squares 7 and 8. *Al-Rāfidān* 32, 158-162.
- Herveux, L. 2004 Etude Archéobotanique Préliminaire de la Tell al Rawda, Site de la Fin du Bronze Ancien en Syrie Intérieure. *Akkadica* 125, 79-91.

- Kohlmeyer, K. 1984 Euphrat-Survey : Die mit Mittelnder Gerda Henkel Stiftung Durchgeführte Archäologische Geländebegehung in Syrischen Ehphrattal. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 116, 95-118.
- Kume, S., A.Sultan, I.Ono, and C.Akashi. 2011 Sondage at Early Bronze Age Cemetary near Tell Ghanem al-Ali. *Al-Rāfidān* 32, 163-171.
- McCorriston, J. 1995 Preliminary Archaeobotanical Analysis in the Middle Habur Valley, Syria and Studies of Socioeconomic Change in the Early Third Milleinium BC. *Bulletin of Canadian Society* 29, 33-46.
- Miller, N.F. 1984 The Use of Dung as Fuel: An Ethnographic Example and an Archaeological Application. *Paléorient* 10(2), 71-79.
- Miller, N.F. 1997 Sweyhat and Hajji Ibrahim: Some Archaeobotanical Samples from the 1991 and 1993 Seasons. In *Subsistence and Settlement in a Marginal Environment: Tell es-Sweyhat, 1989-1995 Preliminary Report*, edited by R. L. Zettler. Philadelphia. 95-122.
- Nishiaki, Y. 2010 Archaeological Evidence of the Early Bronze Age Communities in the Middle Euphrates Steppe, North Syria. In *Formation of Tribal Communities Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria (Al-Rāfidān special issue)*, 37-48.
- Nishiaki, Y. and S.Kadowaki 2009 Archaeological Survey around Tell Ghanem al-Ali. *Al-Rāfidān* 30, 145-153.
- Nishiaki, Y., S.Kadowaki, H.Nakata, K.Shimogama, and U.Hayakawa 2011 Archaeological Survey around Tell Ghanem al 'Ali (IV). *Al-Rāfidān* 32, 125-133.
- Numoto, H., and S.Kume 2009 Cleaning and Survey of the Early Bronze Age Hilltop Tombs in the Wadi Shabbout Area near Tell Ghanem Al-Ali. *Al-Rāfidān* 30, 172-180.
- Numoto, H., and S.Kume 2010 Surveys and Sondage at the Cemeteries Near the Site of Tell Ghanem al-'Ali. In *Formation of Tribal Communities Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria (Al-Rāfidān special issue)*, 49-60
- Riehl, S. 2010 Maintenance of Agricultural Stability in a Changing Environment : the Archaeobotanical Evidence at Emar. In *Emar After the Closure of the Tabqa Dam, The Syrian-German Excavations 1996-2002: Late Roman and Medieval Cemeteries and Environmental Studies* edited by U. Finkbeiner and F. Sakal: Brepols Pub, 177-224
- Strommenger, E. 1983 Tall Bi'a bei Raqqa 1980-1982. *Annales Archéologiques Arabes Syriennes* 33, 27-34.
- Sweet, L.E. 1960 *Tell Toqaan : A Syrian Village*: Ann Arbor, Universty of Michigan.
- Tsuneki, A. 2008 A Short History of Ghanem al-Ali Village. *Al-Rāfidān* 29, 184-190.
- van Zeist, W. 1999. Evidence for Agricultural Change in the Balikh Basin, Northern Syria. In *The Prehistory of Food: Appetites for Change*, edited by C. Gosden and J. Hather. London and New York: Routledge, 350-373.
- van Zeist, W., and J. A. H. Bakker-Heeres. 1985/86. Archaeobotanical Studies in the Levant, 4. Bronze Age Sites on the North Syrian Euphrates. *Palaeohistoria* 27, 247-316.
- 赤司千恵 2012 「シリア前期青銅器時代のテル・ガーネム・アル・アリ遺跡におけるステップ利用の拡大」『早稲田大学文学研究科紀要』第57輯, 83-95頁.
- 赤司千恵 2012 「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の調理施設と燃料-炭化植物遺存体分析からの視点-」『西アジア考古学』13号, 49-62頁.

# シリア中部・ビシュリ山麓ケルン墓群の 出土遺物からみた牧畜民と遊牧民

足立 拓朗

## 1. はじめに

平成 17 年度発足特定領域研究「セム系部族社会の形成－ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究－」（研究代表者：大沼克彦，国士舘大学教授）の一環として，ビシュリ山系北西麓に分布する青銅器時代ケルン墓群の調査が行われた（図 1, 2）. その結果，1) この地域のケルン墓群は，中期青銅器時代前半の数百年間に短期的かつ集中的に造営されたこと，2) それらは 4 時期に区分できること，3) 大型の遊牧集団が関わっていたこと，などの所見を得ることができた.

中期青銅器時代前半という年代観は，ヘダージェ 1 = ケルン墓群 9 号墓出土の青銅製トグル・ピン（足立 2008），トール・ラフーム 1 = ケルン墓群 131 号墓出土の青銅製短剣（足立・藤井 2010c）の比較型式学的な研究から得られた. また，ヘダージェ = ケルン墓群とトール・ラフーム = ケルン墓群から出土した貝製品（足立・藤井 2009），石製・ファイアンス製ビーズ（足立・藤井 2010a），ファイアンス製鳥形ビーズ（足立・藤井 2010b）の型式学的分析でも，同様な年代的な裏付けを得ている.

これまで，ビシュリ山系のケルン墓群を遺した集団については，漠然とマルトゥ（Martu）／アムル（Amurru）を念頭に置いてきた. しかし，本稿では，ケルン墓群出土の土器の型式学的研究から年代観の調整を行い，また文献資料の研究成果も援用しながら，より精密な考察を試みる.

## 2. 青銅製品と放射性炭素年代測定からみたビシュリ山系北西麓ケルン墓群の年代観について

出土土器の分析を行う前に，青銅製トグル・ピンと青銅製短剣によるケルン墓群の年代観について再確認しておく. まず，トグル・ピンはヘダージェ 1 = ケルン墓群 9 号墓のシスト（主体部）内壁と外壁の間にある詰め石部分の下層から出土した. そのため，副葬品ではなく，シスト構築時に何らかの原因で遺棄されたものと考えられた. この 9 号墓出土のトグル・ピンは頭部が円盤形を示す珍しいタイプである. J. カーティス（Curtis）によって，このタイプは前 2000 年～前 1750 年頃に位置づけられた（Curtis 1983: 77）. 筆者はミシュリフェ（Misrife, 古代名カトナ（Qatna））遺跡出土資料（Novak and Pfälzner 2002: abb.21）などの類例を追加して，このタイプを検討した（図 3）. そして，カーティス説を踏まえて，本例を青銅器時代中期 I 期（前 2000 年～前



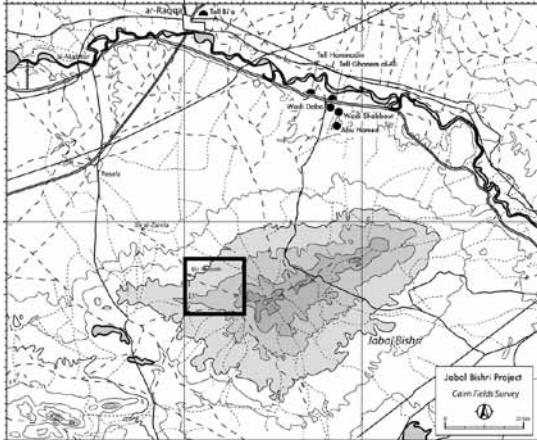


図1 シリア中央部、ビシュリ山系における調査範囲。

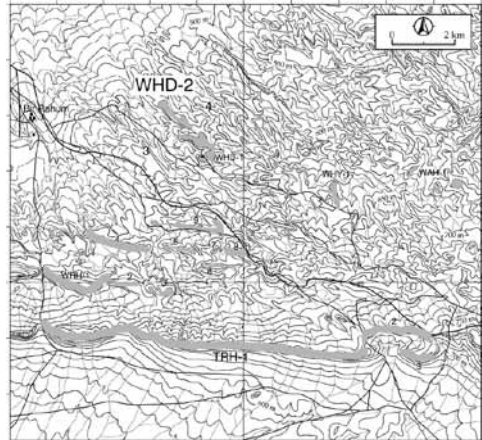


図2 調査範囲内におけるヘダージェ2=ケルン墓群の位置(WHD-2)。

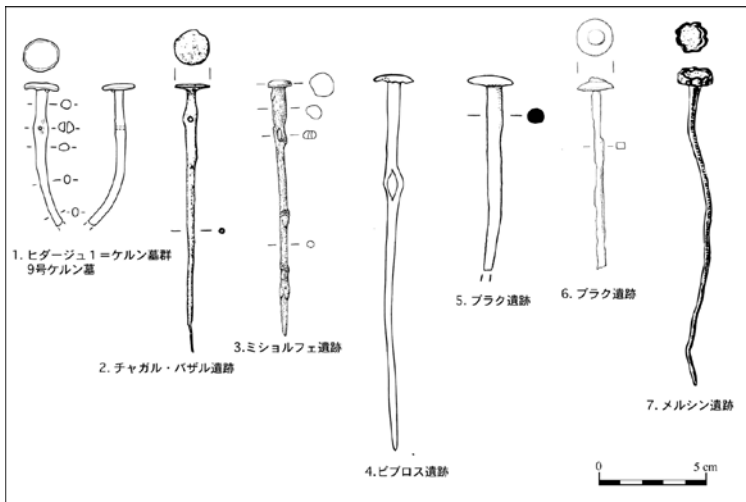


図3 頭部円盤状トグル・ピン (1. Fujii and Adachi 2010: Fig. 7-11; 2. Curtis 1983: Fig. 1; 3. Novák et al. 2002: Abb. 21; 4. Tufneli and Ward 1966: 10-42; 5. Oates et al. 1997: p.267-24; 7. Garstang 1953: Fig. 149-12).

1800年)に位置づけていた(足立2008:9)。  
頭部円盤状トグル・ピンの集成を行った結果、管見ではあるが最も形態が類似するのは、ハブル川上流に位置するチャガル・バザル(Chagar Bazar)遺跡出土例であることが指摘できる(図3:2)。

このほかに型式学的に年代を考察できる青銅製資料として、トール・ラフーム1=ケル

ン墓群131号墓出土の青銅製短剣がある。筆者はシリア・パレスティナ地域の前期青銅器時代後半から中期青銅器時代の青銅製短剣を集成し、131号墓出土例の編年の位置づけを行った。三角形の茎部、鎬と条線を持つ身部、茎部と身部のバランスから考慮して、本例を中期青銅器時代I期(前2000~前1800年)頃に位置づけた(足立・藤井2010c)。以上のようなトグル・ピンと短剣の考察から、ヘダージェ遺跡群ケルン墓編年<sup>1)</sup>の1期と2期を中期青銅器時代I期頃(前2000~前1800年頃)と考えてきた。

貝製品・石製品・ファイアンス製のビーズについての研究では、明確な年代決定にはいたらないものの、おおよそ前期青銅器時代末から中期青銅器時代に収まる年代観を得ていた(足立・藤

井 2009, 2010a, 2010b).

このような出土遺物研究の成果と併行して、放射性炭素年代の測定も行われた (Nakamura 2010: Table 2). 試料は、トール・ラフーム 1 = ケルン墓群の 117, 130, 131 号墓から得られた (Fujii and Adachi 2010: Fig. 8). 三基のケルン墓ともヘダージェ遺跡群ケルン墓編年では 1 期に位置づけられる.

117 号墓 :  $3443 \pm 33$  uncal. b.p. (1881-1683cal.BC: 95.4%)

$3408 \pm 32$  uncal. b.p. (1869-1847cal.BC: 3.3%, 1775-1620cal. BC: 92.1%)

$3424 \pm 32$  uncal. b.p. (1876-1842cal.BC: 9.0%, 1821-1797cal. BC: 3.8%,  
1781-1631cal. BC: 82.6%)

130 号墓 :  $3520 \pm 37$  uncal. b.p. (1943-1746cal. BC: 95.4%)

131 号墓 :  $3453 \pm 32$  uncal. b.p. (1972-1767cal.BC: 95.4%)

$3144 \pm 32$  uncal. b.p. (1496-1377cal.BC: 91.1%, 1338-1321cal. BC: 4.3%)

$3407 \pm 31$  uncal. b.p. (1866-1848cal.BC: 2.5%, 1774-1621cal. BC: 92.9%)

$3418 \pm 32$  uncal. b.p. (1873-1844cal.BC: 6.5%, 1814-1801cal. BC: 1.9%,  
1778-1628cal. BC: 87.0%)

放射性炭素年代測定の数値は、おおむね前 1975～前 1625 年頃を示している。131 号墓は青銅製短剣が出土しており、その年代観は中期青銅器時代 I 期 (前 2000～前 1800 年) と考えていることを述べた。放射性炭素年代測定の年代と青銅製品の年代は重複しているものの、測定値の方がやや新しい年代が得られている。

### 3. ヘダージェ 2 = ケルン墓群 9 号墓出土の小型壺の年代について

これまでの出土遺物研究による年代観と放射性炭素年代の成果に若干の相違がみられた。その結果をふまえて、出土土器による研究を行なう。本調査で出土した土器資料は非常に少ないものの、ヘダージェ 1 = ケルン墓群 14 号墓とヘダージェ 2 = ケルン墓群 9 号墓からほぼ完形の土器が発見された。特にヘダージェ 2 = ケルン墓群 9 号墓出土の小型壺は緻密な胎土や器壁の薄さから搬入品であることが予想され、他の地域の出土例との比較により年代を考察することを目指した。出土位置はシストの下層であり、本ケルン墓の副葬品であることが確実である (図 4, 5)。

本資料の色調は内外面とも明褐色を呈し、胎土のきめは細かく、径 0.5mm 以下の白色・褐色砂粒を微量含有する。器高 6.6cm, 口径 7.9cm, 胴径 9.6cm と小ぶりの壺である。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は外反する。肩部はやや張っており、胴部下半にかけてすぼまり、底部は円盤高台状に厚く作られている (図 6: 1)。本例のような小型壺はシリアの中期青銅器時代遺跡で類例が複数存在する。以下に各類型について解説する。

#### (1) テル・ピア (Tell Bi'a, 古代名トウトウル) 遺跡出土資料 (図 6: 2,4-8)

本遺跡はユーフラテス川とバリフ川が合流する地点に位置する。前期～中期青銅器時代の王墓

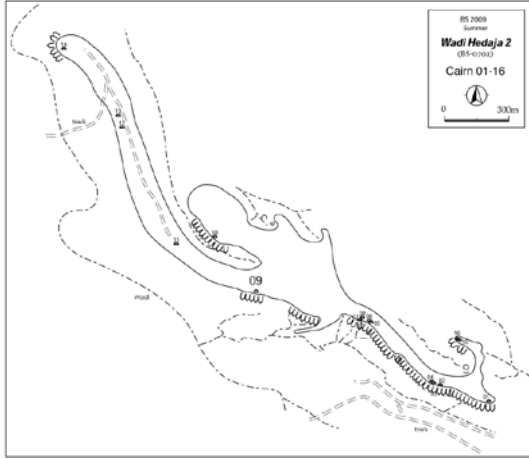


図4 ヘダージェ2＝ケルン墓群平面図.

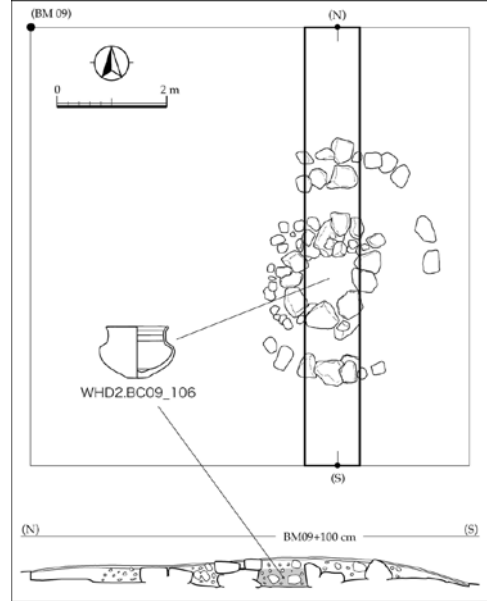


図5 ヘダージェ2＝ケルン墓群9号墓、  
小型壺出土状況図.

や宮殿が検出されている。この遺跡の土器資料の分類で、Gräber Gruppe 8-11 に属する土器群に類例が存在する。しかし、この Gräber Gruppe 8-11 の年代は明確でなく (Strommenger und Kohlmeyer 1998: 121-122), 前 2 千年紀前半という枠組みでしか論じられない。しかし、B. アインバーク (Einwag) による出土土器の分析によると、本類例は Ceramic-complex 7 (KK7) の土器群に含まれる (Einwag 1988: Abb.56-2, Einwag 2002: Fig.11-2)。彼は Ceramic-complex 7 をマリのヤフドゥン・リムとジムリ・リムの間に位置づけている (Einwag 2002: 146)。したがって、Ceramic-complex 7 は前 1800 年頃となり、類例資料も前 1800 年頃に位置づけることが可能になる。青銅製品から示したケルン墓群年代 (前 2000～前 1800 年頃) の終わり頃と対応することになる。

(2) ハマム・エツ・トゥルクマン (Hammam et-Turkman) 遺跡出土資料 (図 6 : 3)

バリフ川上流に位置する遺跡である。本遺跡の VIIC 層 (VII : 5) から類例が出土している。この層の年代は、前 1700～前 1600 年頃とされており、中期青銅器時代 IIB 期前半となる。本例の器形はヘダージェ2＝ケルン墓群9号墓出土とほぼ一致している (van Loon 1988: Pl. 127-59)。この年代は青銅製品で示したケルン墓群の年代 (前 2000～前 1800 年頃) より後に位置づけられる。

(3) テル・デール・キャビヤ遺跡 (Tell Deir Khabiyah) 出土資料 (図 6 : 9)

本遺跡はダマスカスの南西約 20km に位置する。本遺跡出土資料は、ヘダージェ2＝ケルン墓群9号墓出土例より、やや大きく、底部は明確な円盤高台となる (Bremer and al-Maqdissi 2002: Pl. XV-58)。中期青銅器時代 II 期の層から出土している。

(4) スウエイダ県博物館資料 (図 6 : 10)

本県はシリアの首都ダマスカスの南に位置する。シリアで最南端に位置する県でもある。この館の収蔵資料は胴部が丸みを帯びており、9号墓出土資料と器形が完全に一致するわけではない。

中期青銅器時代の土器として集成されている資料である (Bremer and al-Maqdissi 2002: Pl. XV-59).

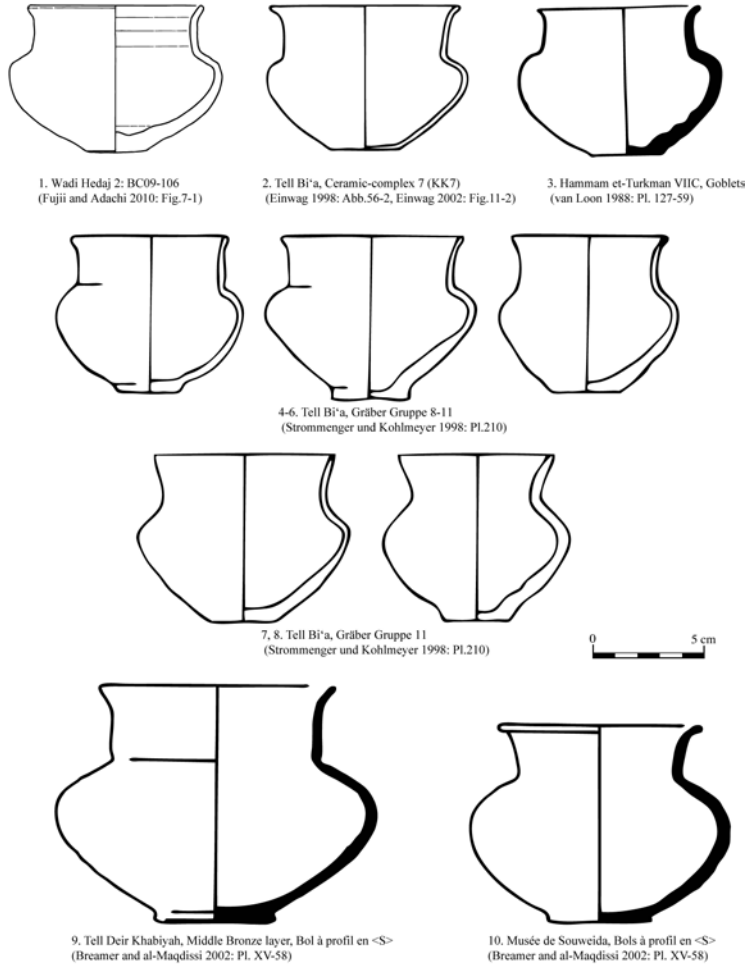


図6 ヘダージェ2 =ケルン墓群9号墓出土小型壺とその類例資料。

ヘダージェ2 =ケルン墓群9号墓出土の小型壺の類例をしらべたところ、テル・ビアとハマム・エツ・トゥルクマンで器形が一致する資料が存在した。両遺跡の年代は、前1800年頃と前1700～前1600年頃であり、その年代観に差がある。さらに類例を増やさなければならぬが、この資料が前1800年以降に属する可能性を指摘しておかなければならない。

これまでの青銅製品を中心とした考察では、ヘダージェ遺跡群ケルン墓編年の1期と2期を前2000～前1800年頃と考えてきた。しかしながら、2期に位置づけられるヘダージェ2 =ケルン墓群9号墓出土土器が、上記のように前1800年以降の年代が考えられるようになり、年代観を若干変更する必要が出てきた。

#### 4. 年代観のまとめ

ヘダージェ2 =ケルン墓群9号墓出土土器の考察により、ヘダージェ遺跡群ケルン墓編年2期の年代が前1800～前1600年頃に下がる可能性が出てきた。青銅製品の研究結果によって得られた年代観(前2000～前1800年頃)の末期に一致しているものの、全体を調整する必要がある。また、放射性炭素年代測定の数値は、おおむね前1875～前1625年頃を示しており、この年代観も青銅製品の研究で得られた年代(前2000～前1800年頃)の後半と重複している。これらのことから、

		シリア							メソポタミア			
		西シリア	エブラ	ハマ	カトナ	ユーフラテス中流域	ビシュリ	テル・ピア	マリ	ハムム・エフ・トルタマン	ジャジーラ	メソポタミア
前2500年	EB IIIb				Phase 4			Schicht 15-21 KK1	Tombes 360 Ishtar Palace c Ishtar Palace b		Early Jazirah IIIb	初期王朝 IIIb
				K		アブ・ハマド		Gräber Gruppe 1 Schicht 11-14 Gräber Gruppe 2	Ishtar Palace a			
	EB IVa	III 1			G11-13	Phase 5		Gräber Gruppe 3 Schicht 5-10 KK2			Early Jazirah IVa	アッカド
								Gräber Gruppe 4 Gräber Gruppe 5 Gräber Gruppe 6	Tombe 1682	VI	Early Jazirah IVb	
前2000年	EB IVb (EB-MB)	III 2		J 6-8				Gräber Gruppe 7	KK3	Shakkaniatu level, Place P-O	Early Jazirah V	ウルIII
				J 1-5	Phase 6							
	MB IA	III A1	H 5		G10			Younger Palace early	KK4-7	Shakkaniatu period (Plais Royal)	Old Jazirah I	イシン・ラルサ
	MB IB	III A2	H 4 H 3			Phase 1 Phase 2		(Gräber Gruppe 8-11) Younger Palace late	KK7	Yahdun-ilim Zimrilim	VII A	Old Jazirah II
前1500年	MB IIA	III B1	H 2 H 1		G9b	Phase 3 Phase 4					VII B	古バビロニア
	MB IIB	III B2			G9a G8c G8b G8a					Hama period (Grand Plais Royal amerrite)	VII C	Old Jazirah III
	LB I				G7c							カッシート

図7 ビシュリ山系北西麓ケルン墓群の編年 (西シリア・エブラ：Akkermans and Schwartz 2003；ハマ：Nigro 2002: 99, Riis and Buhl 2007；カトナ：Pfälzner 2007：37；ユーフラテス中流域：Cooper 2006；テル・ピア：Einwag 1988, Hempelmann 2000, Pons 2001；ジャジーラ：Lebeau 2000, Faivre and Nicolle 2007；アブ・ハマド：Falb et al 2005；マリ：Nicolini 2010 を基に加筆・統合した.)

新たにヘダージェ遺跡群ケルン墓編年の1期と2期の年代幅を前1900～前1750年頃と考えることとしたい。その後、3,4期が前1700年頃まで続くと考えておく(図7)。

これまでは青銅製トグル・ピンと短剣の研究成果から、ケルン墓群の年代を前2000～前1800年頃と位置づけており、前3千年紀に遡る可能性を全く否定する見解を筆者は取っていない。しかし、本稿の土器資料分析や放射性炭素年代により、ビシュリ山系北西麓のケルン墓群が、前3千年紀には遡らないことを提示したい。また、現在のところケルン墓群の時期は前1900～前1700年頃を中心とする年代が最も可能性が高いことから、南メソポタミアではラルサに代わってイシんでアムル系王朝が誕生した時期から、古アッシリアのシャムシ・アダド1世、バビロニアのハンムラビ、マリのジムリ・リムの治世に至る時期に相当することを念頭において物質文化研究を行わなくてはならない。

## 5. 前2千年紀前半のシリア中部の遊牧民集団

この地域の牧畜民や遊牧民の名称については、マリ文書などの研究から特定の名称を考慮している研究があり、それらの成果と連携しながら、基礎的な考察を試みたい。

当初、ビシュリ山系北西麓地域のケルン墓調査を始めるにあたって、その対象時期を前3千年紀後半と考えていたため、ケルン墓を構築した集団に対して、マルトゥ／アムッという集団を想定してきた。しかし、対象時期が前2千年紀前半頃となると、本調査地域を中心とした地域に居住していたとされる遊牧民集団は、もはやアムル（アムッ）というだけで集団を表現することは困難である。この時期には多数のアムル系遊牧民が北メソポタミア、ユーフラテス川中流域に存在していたことが知られているからである。

特にこの地域で多数を占めていたのは「ハナ人（Hanaeans）」である可能性が高い。ハナ人についての解釈については、様々な説が存在することは承知しているが（中田2010：396など）、本稿ではメソポタミア北部あるいはユーフラテス川中流域の遊牧民の総称としての用語という説（Charpin and Durand 1986；大西2007：12, 2009：58）を前提としたい。このハナ人はアムル系遊牧民の一派であるが、ハナ人も多くの集団を有していた。ハナ系の遊牧民集団が創立した国家に、マリ、ヤムハド（Yamhad）、カトナなど北シリアの有力国家が存在している。またハナ系の遊牧民にはシマル人とヤミン人がいたことも知られている。このシマル人やヤミン人もさらに細分されるのであるが（大西2007：5；中田2010：395）、本稿では、ビシュリ山系に分布していた遊牧民が、シマル人とヤミン人のどちらの可能性が高いかを整理する。

トゥトル、テルカ（Terqa）の周辺にはマリに反乱を起こしたヤミン人部族が存在していたことが記録されていることから（中田2009：79）、ビシュリ山系に近いユーフラテス川流域にヤミン人を確認できる。さらに下流に位置するマリはシマル系国家であるが（Charpin and Durand 1986: 61）、マリの支配領域にヤミン人が居住していたこともわかっている（中田2009：78）。また、ヤミン人がバリフ川上流域で放牧していたことも知られている（中田2010：395）。これらのことから、シマル人、ヤミン人の位置について正確な境界線を引くことは難しいが、おおよそ図8<sup>2)</sup>のような配置が考えられる。シマル系としては南方に位置するマリのような例外はあるものの、文献学的な成果から考えると、ビシュリ山系北西麓で前2千年紀前半頃にケルン墓を構築した集団はヤミン人の一派である可能性が高いと言える。また、同じアムル系であるが、ヤミン人とシマル人とは別系統のストゥ人（Suteans）である可能性もある（Roaf 1990: 116）。

ここで、ケルン墓出土資料をもう一度振り返ってみる。青銅製トグル・ピンの中で最も形態が近いのはチャガル・バザル遺跡出土例であった。また小型壺の最も形態に近い出土例は、テル・ビア遺跡とハمام・エッ・トゥルクマン遺跡から得られた。チャガル・バザル遺跡はハブール川中流域に位置しており、文献学の成果から考えるとシマル人の分布範囲となる。これに対し、テル・ビア遺跡ハمام・エッ・トゥルクマン遺跡はどちらもヤミン人の分布範囲と想定される（図8）。

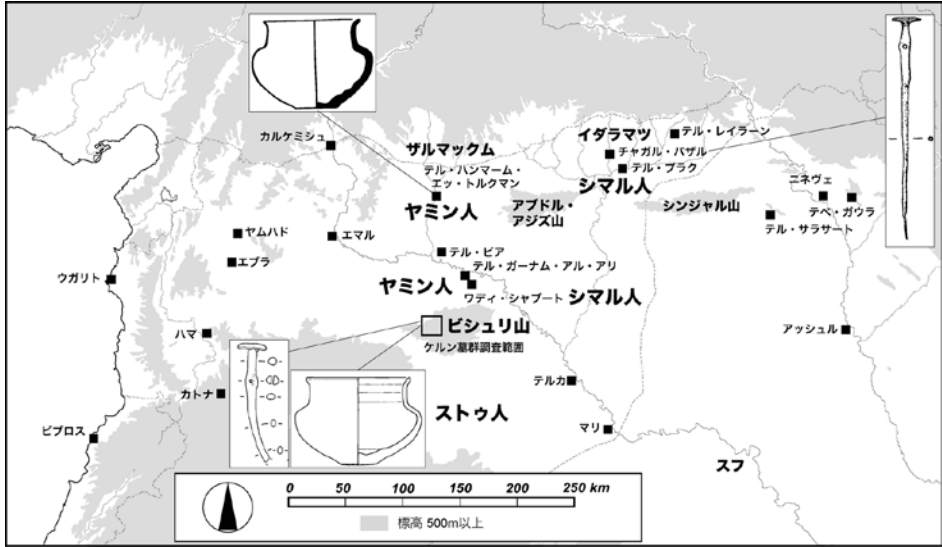


図8 前2千年紀前半のビシュリ山系をめぐる状況（元図：下釜和也氏作成；Roaf 1990：116，中田 2009：82，中田 2010：395，ダリー-2010：図3を参考にして作成）。

青銅製トル・ピンと小型壺だけの分析であるが、両者とも特徴的な物質文化である。ヤミン人・シマル人の区別はさておき、ハナ系遊牧民の分布地域にビシュリ山系ケルン墓出土資料の類例が存在することは重要である。

## 6. まとめ

ビシュリ山系のケルン墓の本格的な調査研究は始まったばかりであり、出土遺物も少ないことから、今後さらに研究を続けていかなければならない。しかし、その時期が前2千年紀前半に収まること（より正確には前1900～前1700年頃の可能性が高い）、またおそらくハナ系の遊牧民集団がこれらのケルン墓の関係している可能性が高いことを指摘しておきたい。

ハナ系の遊牧民である場合、ビシュリ地域にはハナ系ヤミン人やストゥ人が分布していたと想定されるが、ビシュリ山系北西麓のケルン墓群から出土する資料は、ハナ系遊牧民（ヤミン人・シマル人）の分布地域の出土資料と形態的に一致することも付け加えておきたい。

### 註

- 1) ヘダージェ遺跡群ケルン墓編年は以下の特徴で示される（藤井・足立 2010b：図8）。1期：十字型・楕円形プランの地上式墓室と二重の周壁を持つケルン墓。2期：楕円形プランの半地下式墓室で周壁の消失したケルン墓。3期：墓室外壁の消失したケルン墓。4期：墓室自体の消失（板石で代用したケルン墓）。
- 2) 図8を作成するにあたり、中田一郎先生からご指導をいただいた。

## 引用・参考文献

- Akkermans, P.M.M.G., and G. M. Schwartz 2003 *The Archaeology of Syria: From Complex Hunter-Gatherers to Early Urban Societies (ca. 16,000-300 BC)*. Cambridge, Cambridge University Press.
- al-Maqdissi, M., V. Matoian and C. Nicolle (eds.) 2002 *Céramique de l'âge du Bronze en Syrie, I: La Syrie du Sud et la vallée de l'Oronte*. Beyrouth, Institut Français d'archéologie du Proche-Orient.
- Bonacossi, D. M. (ed.) 2007 *Urban and Natural Landscapes of an Ancient Syrian Capital Settlement and Environment at Tell Mishrifeh/Qatna and in Central-western Syria*. Studi Archeologici su Qatna 01, Udine, Forum.
- Braemer, F. and M. al-Maqdissi 2002 La céramique du Bronze moyen dans la Syrie du Sud. In al-Maqdissi et al. (eds.), 23-50.
- Charpin, D. and Durand, J. M. 1986 'Fils de Sim'al : les origines tribales des rois de Mari. *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale* 80, 51-61.
- Cooper, L. 2006 *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*. New York, Routledge.
- Curtis, J. 1983 Some Axe-head from Chagar Bazar and Nimrud. *Iraq* XLV(1), 73-81.
- Einwag, B. 1988 *Die Keramik aus dem Bereich des Palastes A in Tall Bi'a/Tuttul und das Problem der frühen Mittleren Bronzezeit*. Munich, Profil.
- Einwag, B. 2002 The Early Middle Bronze Age in the Euphrates Valley: The Evidence from Tuttul/Tell Bia. In Bietak, M. (ed.) *The Middle Bronze Age in the Levant*. 143-161, Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Falb, C., K. Krasnik, J.-W. Meyer, and E. Vila 2005 *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im Syrischen Euphrattal. 4. Der Friedhof von Abu Hamed*. Saarbrücken, Saarbrucker Druckerei & Verlag.
- Faivre, X. and C. Nicolle 2007 La Jézireh au Bronze moyen et la céramique du Khabur. In al-Maqdissi, M., V. Matoian and C. Nicolle (eds.) *Céramique de l'âge du Bronze en Syrie II: L'Euphrate et la région de Jézireh*. 179-229, Beyrouth, Institut Français d'archéologie du Proche-Orient.
- Fujii, S. and T. Adachi 2010 Archaeological Investigations of Bronze Age Cairn Fields on the Northwestern Flank of Mt. Bishri. *Al-Rafidan* Special Issue, 61-77.
- Garstang, J. 1953 *Prehistoric Mersin*. Oxford.
- Hempelman, R. 2000 Frühbronzezeitliche Keramik aus Kharab Sayyar und Tell Chuera. *Mitteilungen der deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 134, 285-309.
- Lebeau, M. in collaboration with A. Pruss, M. Roaf and E. Rova 2000 Stratified Archaeological Evidence and Compared Periodizations in the Syrian Jezirah during the Third Millennium B.C. In Marro, C and H. Hauptmann (eds.), *Chronologies des pays du caucase et de l'Euphrate aux IVe-IIIe Millénaires*, Actes du Colloque d'Istanbul, 16-19 Décembre 1998, 167-192, Paris, De Boccard.
- Nakamura, T. 2010 The Early Bronze Age Chronology Based on 14C Ages of Charcoal Remains from Tell Ghanem al-Ali. *Al-Rafidan* Special Issue, 119-129.
- Nicolini, C. 2010 *Les ors de Mari*. Beyrouth, Institut Français d'archéologie du Proche-Orient.
- Nigro, L. 2002 The Middle Bronze Age Pottery Horizon of Northern Inner Syria on the Basis of the Stratified Assemblages of Tell Mardikh and Hama. In al-Maqdissi et al. (eds.), 97-128.
- Novak, M. and P. Pfälzner 2002 Ausgrabungen in Tall Misrihe-Qatna 2001: Vorbericht der deutschen



- Komponente des internationalen Kooperationsprojektes. *Mitteilungen der deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 134, 207-246.
- Oates, D., Oates, J. and McDonald, H. 1997 *Excavations at Tell Brak, vol. 1: The Mitanni and Old Babylonian Periods*. Oxford, British School of Archaeology in Iraq, Oxbow Books.
- Pfälzner, P. 2007 Archaeological Investigations in the Royal Place of Qatna. In D. M. Bonacossi (ed.), 29-64.
- Pons, N. 2001 La poterie de tell Amarna (Syrie) au BA IV et BM I: Première approche et corrélation avec quelques sites clés. *Akkadica* 121, 23-75.
- Riis, P.J. and M-L. Buhl 2007 *Hama: Fouilles et recherches de la fondation carlsberg 1931-1938, I 2, Bronze Age Graves in Hama and Neighbourhood*. Copenhagen, Nationalmuseet.
- Roaf, M. 1990 *Cultural Atlas of Mesopotamia and the Ancient Near East*. New York, Fact on File, Inc.
- Strommenger, E. und K. Kohlmeyer 1998 *Tall Bi'a/ Tuttul - I: Die Altorientalischen Bestattungen*. Saarbrücken, Saarbrücker Druckerei und Verlag.
- Tufneli, O. and Ward, W. A. 1966 Relationship between Bybros, Egypt and Mesopotamia at the End of the Third Millennium B.C.: A Study of the Montet Jar. *Syria* 43, 165-241.
- van Loon, M. N. 1988 *Hamman et-Turkman I: Report on the University of Amsterdam's 1981-84 Excavations in Syria II*. Istanbul, Nederlands Historisch-archeologisch Instituut.
- Weiss, H. 1990 "Civilizing" the Habur Plains: Mid-Third Millennium State Formation at Tell Leilan. In Matthiae, P., M. van Loon and H. Weiss (eds.), *Resurrecting the Past: A Joint Tribute to Adnan Bounni*. 387-407, Istanbul, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut.
- 足立拓朗 2008 「ヘダージェ1 = ケルン墓群出土の青銅製品」『Newsletter セム系部族社会の形成』No. 11, 7-13 頁.
- 足立拓朗・藤井純夫 2009 「ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群出土の貝製品の年代について」『Newsletter セム系部族社会の形成』No. 15, 1-6 頁.
- 足立拓朗・藤井純夫 2010a 「東シリア, ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群出土の石製・ファイアンス製ビーズの年代について」『オリエント』52 巻 2 号, 93-107 頁.
- 足立拓朗・藤井純夫 2010b 「シリア中部, ビシュリ山系北麓ワディ・ヘダージェ1 = ケルン墓群出土のファイアンス製鳥形護符の年代について」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』24 巻, 109-119 頁.
- 足立拓朗・藤井純夫 2010c 「シリア中部, ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群出土の青銅製短剣の年代について」『西アジア考古学』11 号, 119-127 頁.
- 大西庸之 2007 「マリ文書における hana の解釈をめぐって」『オリエント』50 巻 1 号, 1-19 頁.
- 大西庸之 2009 「hana と mar.tu—メソポタミアにおける遊牧と定住の対比構造—」『シリア・メソポタミア世界の文化接触: 民族・文化・言語』科学研究費補助金「セム系部族社会の形成」平成 20 年度研究集会報告 文部科学省科学研究費補助金平成 17 年度発足「特定領域研究」, 58-67 頁.
- ダリー, S. (著), 大津忠彦・下釜和也 (訳) 2010 『バビロニア都市民の生活』同成社.
- 中田一郎 2009 「マリ出土のヤミン人捕虜解放記録—シリア・メソポタミア世界における文化接触の観点から—」『シリア・メソポタミア世界の文化接触: 民族・文化・言語』科学研究費補助金「セム系部族社会の形成」平成 20 年度研究集会報告 文部科学省科学研究費補助金平成 17 年度発足「特定領域研究」, 68-85 頁.

- 中田一郎 2010 「ジムリ・リム治下のマリ王国の遊牧民支配—放牧地の長メルフム役人の役割を中心に—」『人文研紀要』68号, 387-412頁.
- 藤井純夫・足立拓朗 2010a 「ケルン墓群の分布と部族・氏族の相関」大沼克彦・西秋良宏編『紀元前3千年紀の西アジア—ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る—』147-157頁, 六一書房.
- 藤井純夫・足立拓朗 2010b 「セム系部族社会の研究—シリア, ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群の第5~7次調査(2009)」『平成21年度考古学が語る古代オリエント 第17回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会, 76-81頁.
- 前田 徹 2009 「Martu—族長制度の確立—」『シリア・メソポタミア世界の文化接触: 民族・文化・言語』科学研究費補助金「セム系部族社会の形成」平成20年度研究集会報告 文部科学省科学研究費補助金平成17年度発足「特定領域研究」, 51-67頁.

# シリア中部ビシュリ山系の遊牧化過程

## —ヨルダン南部ジャフル盆地との照合

藤井 純夫

### 1. はじめに

特定領域研究「セム系部族社会の形成—ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合的研究」(領域代表者:大沼克彦, 国士舘大学教授)は, 2005年度から2009年度までの5カ年間にわたって実施された。その中で筆者らは, 計画研究班の一つ「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」を担当した。主力を注いだのは, ビシュリ山系北西山麓における青銅器時代ケルン墓群の発掘調査である。調査は, 2007年の春から2009年の夏まで, 計7回にわたって実施された。その結果, これらのケルン墓群が中期青銅器時代の前半(すなわち紀元前2千年紀の前半)に位置付けられること, 従ってそれはマリ王国の周辺を回遊していた初期遊牧集団の共同墓域と考えられること, などの重要な示唆が得られた(藤井・足立2010; Fujii and Adachi 2010)。この調査は, 都市文明側の文献史料を通してのみその存在を予測されてきたビシュリ山系青銅器時代遊牧部族の(墓制面での)実態を初めて明らかにした点に, 意義がある。

こうした成果を得たことによって, 上記のケルン墓群調査は一端終了した。2010年の春からはフィールドをやや西に移し, 上記ケルン墓群の成立前史, すなわちビシュリ山系北西山麓における遊牧化過程の解明を目的に, 新たな調査を立ち上げた。これまでに, 計5件の遺跡を調査している(図1)。初年度には, キアム期・先土器新石器文化B期の石器製作址であるワディ・アル・ハッジャーナ1号遺跡(Wadi al-Hajana 1)を発掘し, 完新世におけるこの地域の(フリント開発を主目的とした)単発的な土地利用が新石器時代の初頭にまで遡ることを確認した(藤井・足立2011; Fujii et al. 2011; Fujii and Adachi n.d.)。翌2011年の春には, ファカット・ビデウイ遺跡群(Fakat Bidewy Sites)を調査し, 後期新石器時代~銅石器時代の遊牧民に特徴的な「擬住居ケルン墓(pseudo-house burial cairns)」, 「擬壁ケルン墓(pseudo-wall burial cairns)」の存在を確認した(藤井他2012; Fujii et al. 2011)。同時に実施したジャバル・ガラ遺跡(Jabal Gara)の踏査では, 銅石器時代末ないしは前期青銅器時代初頭に位置づけられる遊牧民の特異な埋葬遺構(K-ライン)を記録した。これら一連の調査によって, ビシュリ山系北西山麓の遊牧化過程を墓制面から追跡する見通しが得られた。本稿では, ヨルダン南部ジャフル盆地の墓制編年とこの調査データとを比較・照合し, 大シリア沙漠(Badiat ash-Sham)の南北両端における遊牧化の動向を展望する。

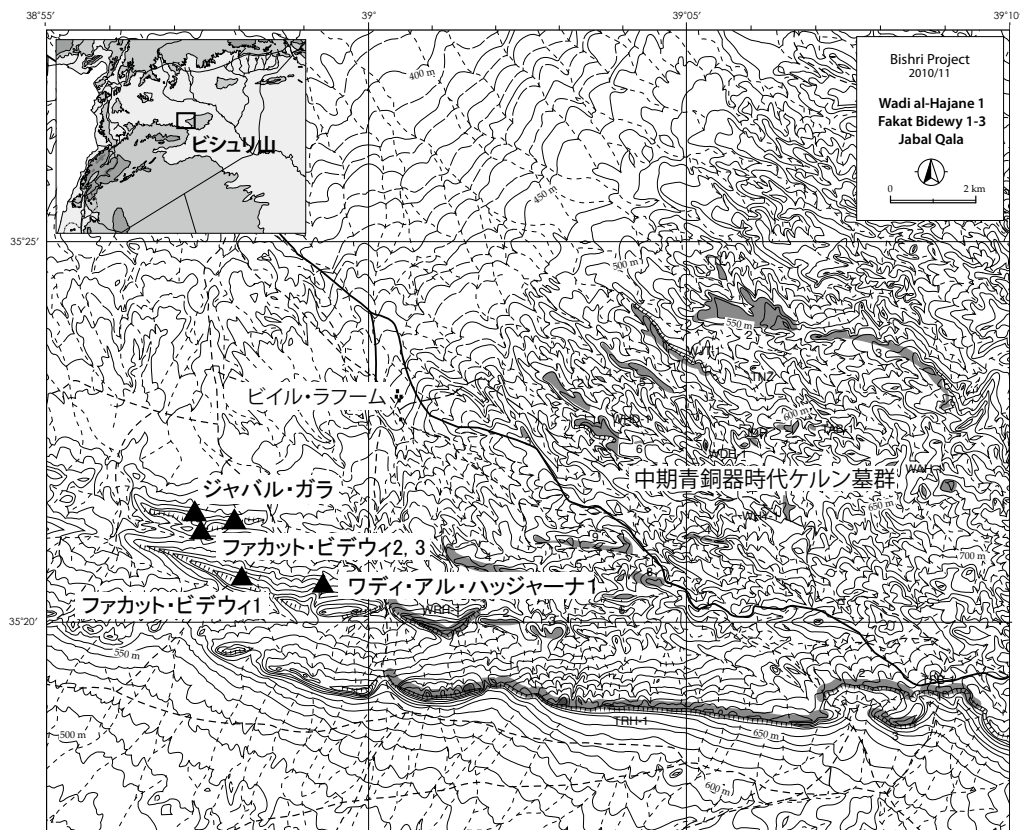


図1 調査区と調査遺跡

## 2. ワディ・アル・ハッジャーナ 1号遺跡

ワディ・アル・ハッジャーナ 1号遺跡は、ビシュリ山系北西山麓に連なる大型前山 (foothill) の中腹北斜面 (標高約 530~540m) に位置している (図2:1)。近隣のビル・ラフーム村 (Bir Rahum) からは、南に約 5km の地点である。2008年5月の第3次調査の際に発見され、2年後の2010年3月に発掘された。遺跡は、上記前山の稜線部分から北流する二本の小型ワディに挟まれた緩斜面上に位置し、上下二段のテラスを中心に広がっていた (図3)。地表面における遺物分布から、遺跡面積は約 0.5~1ha (南北約 100m × 東西約 50-100m) と推定される。この遺跡では、キアム期と先土器新石器文化 B の石器製作址が、一部重層的に確認された。ただし、遺構は前者にのみ伴っており、後者には伴っていなかった。

### キアム期の遺構・遺物

遺跡全体に計 15本のトレンチ (各 2.5m × 5.0m) を設けて調査した結果、遺構は下段テラスの東側ワディ沿いで 1件のみ確認された。直径約 4-4.5m × 床深約 0.3-0.5m の小型円形堅穴住居



1. ワディ・アル・ハッジャーナ1号遺跡：全景（北から）



2. ワディ・アル・ハッジャーナ1号遺跡：遺構 A（南から）



3. ファカット・ビデウィ1号遺跡：遠景（西から）



4. ファカット・ビデウィ1号遺跡：全景（南東から）



5. ファカット・ビデウィ1号遺跡：北半部分（南東から）



6. ファカット・ビデウィ1号遺跡：南半部分（南東から）



7. ファカット・ビデウィ2号遺跡：1号ケルン墓（南東から）



8. ガラ遺跡：K-ライン（西から）

図2 調査遺跡各景

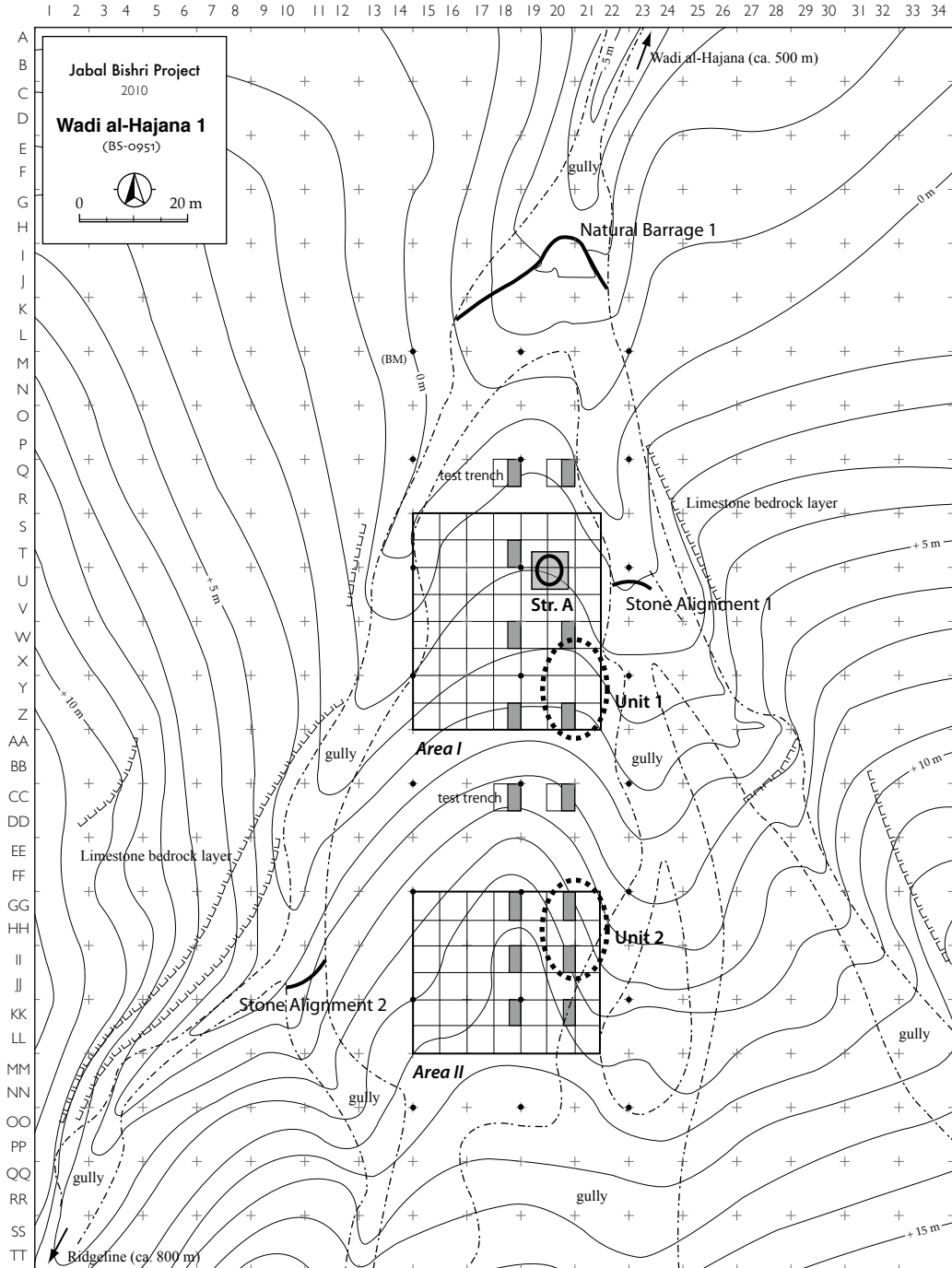


図3 ワディ・アル・ハッジャーナ1号遺跡：遺跡平面図

(Structure A) が、それである (図2:2:図4)。層位的には、第2層の上面 (現地表面下約10-15cm) から掘り下げられていた。

壁面の建材には、高さ最大約65cmの石灰岩板石が用いられていた。これらの建材は、平坦面を上、先端部を下にして立てられ、堅穴側面の崩落を防ぐための擁壁を形成していた。床面としては第3層の堅く締まった土壌面がそのまま利用されていたが、その北東隅には石灰岩屑の集中地点が認められた。入り口の位置は判然としないが、壁面東端にのみ小型の立石が用いられていることから、本来はこの部分にあったものと予想される。周囲の地形も東に向かって緩やかに傾斜しており、排水の点からもこの位置が最も妥当と考えられる。なお、北西からの卓越風に対しても、この位置が風下に当たる。室内中央を仕切り壁状の石列が横断し、床面北西隅には直径約1m×深さ約0.5-0.7mの大型の炉が1基組み込まれていた。炉には黒色の灰

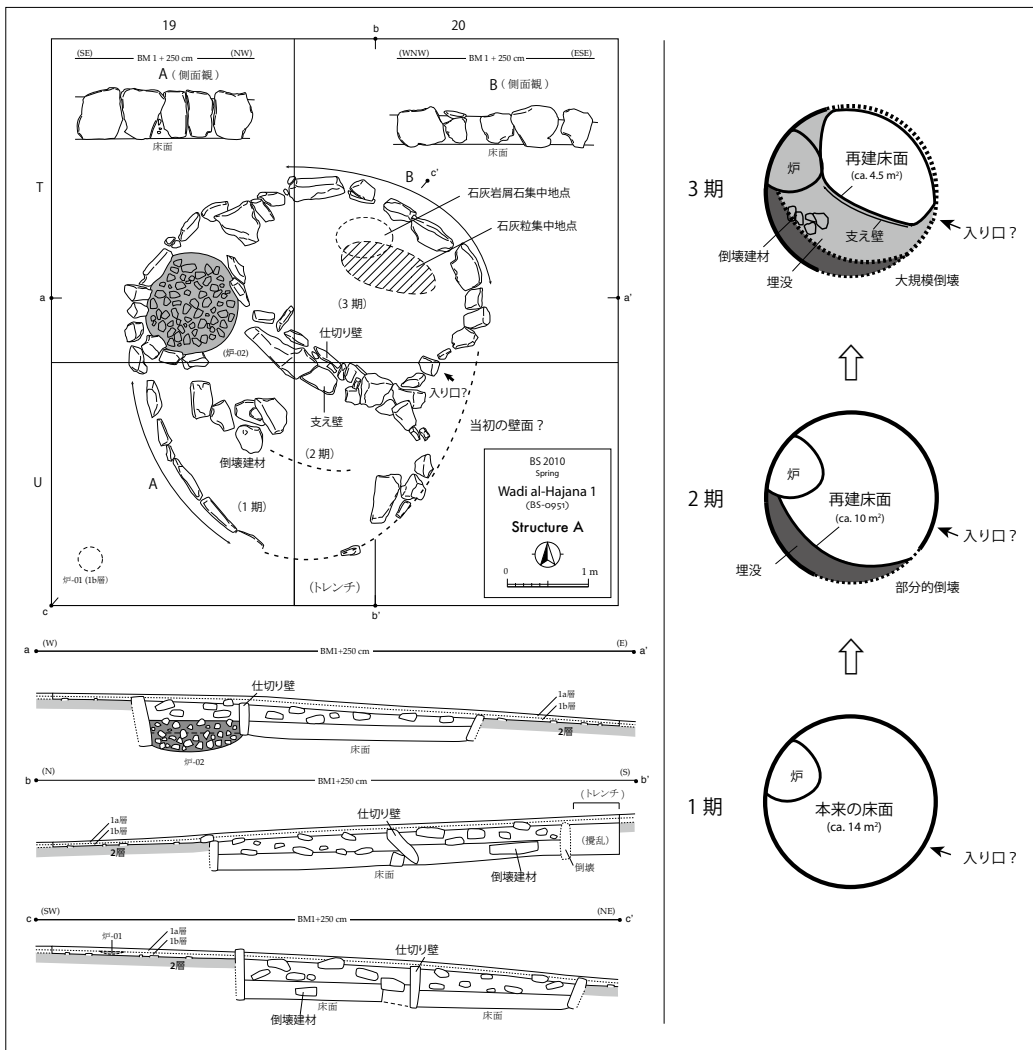


図4 ワディ・アル・ハッジャーナ1号遺跡：遺構平面図・断面図 (左) と再建過程復元図 (右)

に混じって、約 10cm 大の焼けた石灰岩角礫が多数詰まっていた。ただし、遺物は無論のこと、動物骨や炭化種子もまったく含まれていなかった。

本遺構は、一見したところ、南北二室の複室構造を呈する。しかし、精査の結果、中央の仕切り壁が北側壁面に連結して、楕円形の小部屋を形成していることが判明した。これに対して西半部分の壁面は、上記の壁面とは不連続であり、石材もその配列も異質であることが確認された。なお、この二つの中間地点では、倒壊した別の壁面の痕跡と思われる数点の板石群が発見された。これらの観察結果を基に、本遺構の倒壊・再建過程を検討した結果、少なくとも 3つの時期に分類できることが分かった(図4)。再建箇所が遺構の南または東側に集中していることから、斜面上部からの土圧や隣接ワディの季節的氾濫が、二度にわたる倒壊の原因と考えられる。

この遺構からは、約 3300 点の打製石器が出土した。石器以外の遺物は乏しく、貝殻製の有孔装身具 1 点のみであった。また、篩掛けやフローテーションを実施したにも関わらず、動物骨や炭化種子は回収できなかった。出土した石器の中では単設打面の円錐形石刃石核(図5:1)や各種のデビタージュ類(図5:2)が優勢で、道具類は約 0.3 パーセントに過ぎなかった。その内の約半数を占めていたのが、エル・キアム型尖頭器(図5:8-12)である。これ以外では、マイクロドリル(図5:13-15)、調整石刃・剥片(図5:3)、搔器(図5:4)、削器(図5:5)、彫器(図5:6)、手斧(図5:7)などが、少数含まれていた。なお、南レヴァントにおけるキアム文化期の指標遺物の一つであるハグドゥド・トランケーション(Hagdud truncation)は、まったく含まれていなかった。これは、本遺跡出土のエル・キアム型尖頭器の側面抉入部が比較的高い位置にあることの裏返しであろう。抉入部位置の高いエル・キアム型尖頭器の卓越とハグドゥド・トランケーションの欠如は、ユーフラテス・キアム文化の特徴と言える。

本遺構は、キアム文化期の石器製作址と考えられる。ただし、フリントの原材や皮質付き剥片などが希なことから、石核調整後の二次的な製作址と定義できるであろう。(ちなみに、石核の初期調整は、ジャフル山系の南縁懸崖下に点在するフリント露頭周辺で行われたたものと思われる。) 時期的には、幾何学形細石器の要素が欠如していることから、テル・ムレイビット(Tell Mureybet)の IIB 期、すなわちキアム文化の末期に位置づけることができる。石灰岩角礫を多量に含む大型炉の存在も、この時期比定を支持する。注目すべきは、生活痕跡の希薄さである。このことは、この石器製作址での滞在がごく短期間であったことを示唆している。地理的な位置関係や尖頭器型式の類似性などから見て、本遺跡は、「ユーフラテス中流域に点在する同時代集落からの、石器製作を主目的とした、まだ家畜を伴わない段階の、短期出先キャンプ」と定義できるであろう。遺構の漸次的縮小は、キアム文化末期の様相を代弁している。

### 先土器新石器文化 B の表採遺物

上記発掘とは別に、南北二つのテラスを中心とした表採によって、石器約 7500 点が収集された。その大半(約 4500 点)は東側斜面に集中し、二つのユニットを形成していた(図3)。分析の結果、その大多数(99%)が先土器新石器文化 B に特徴的なナヴィフォーム型石核とこれに関わるデビ



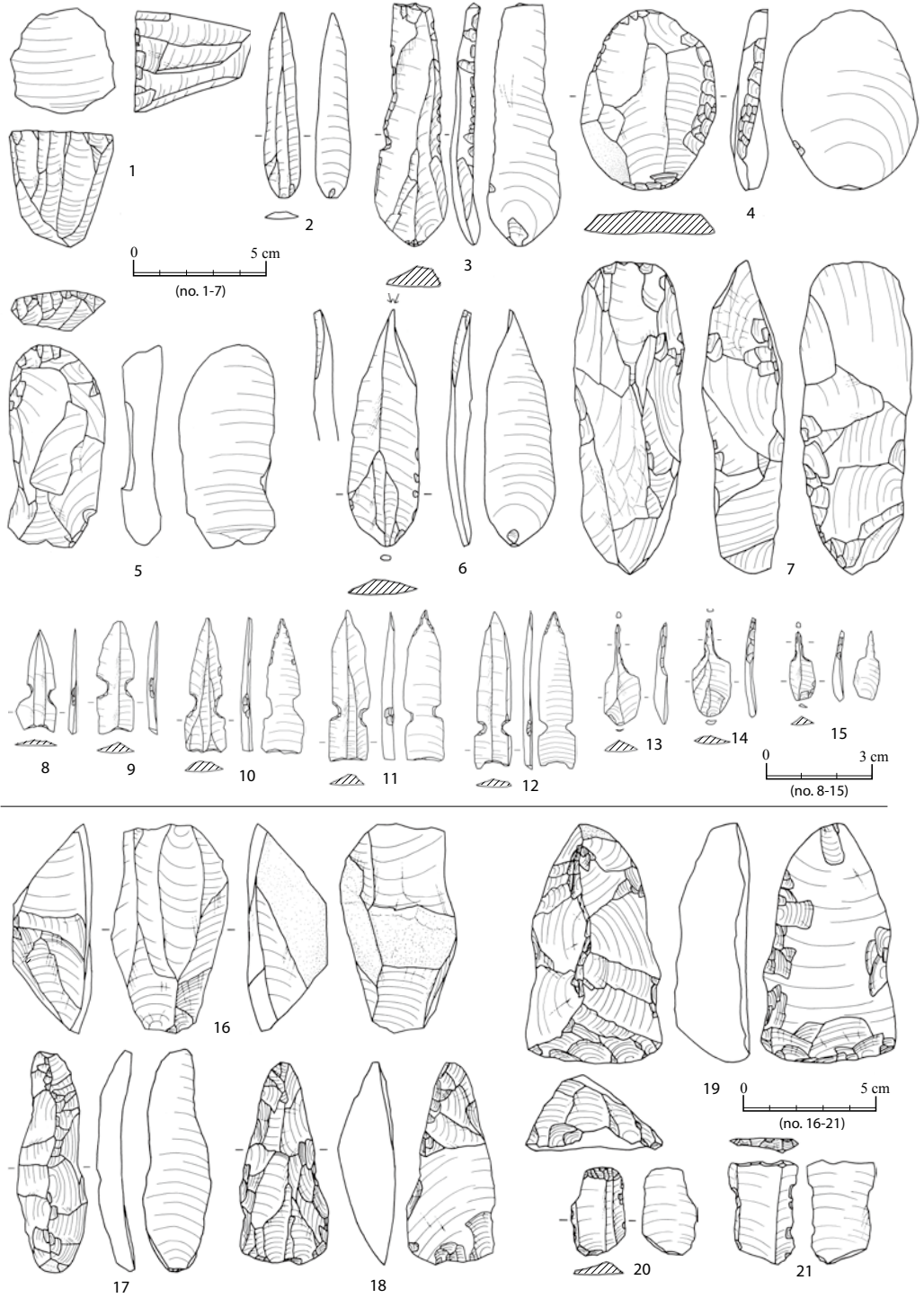


図5 ワディ・アル・ハッジャーナ1号遺跡：遺構 A 出土遺物（上）と表探遺物（下）

タージュ類(図5:16, 17)で占められており、調整加工を伴う道具類は1%以下の頻度であることが分かった。道具類には、大型の手斧(図5:18-19)、小型の調整石刃・剥片類(図5:20-21)、楔型石器などが含まれていたが、先土器新石器文化Bを代表する各種の尖頭器は認められなかった。なお、手斧以外の石器は小型かつ非定型的であり、むしろ後述のファカット・ビデウィ1号遺跡出土資料と類似している。従って、本アセンブリッジには、やや新しい要素が一部混在しているものと考えられる。

本表採石器群は、先土器新石器文化Bの野外石器製作址の存在を示唆している。(ただし、ここでも原材となるフリント塊や皮質付きの剥片類はほとんど含まれていなかった。)問題は先土器新石器文化Bのどの時期に相当するのかわかるが、C-14年代や指標遺物が欠如しているため、まだ確定できていない。しかし、パルミュラ盆地やエル・コウム盆地など隣接乾燥域の動向から見て、本アセンブリッジは「先土器新石器時代B末期(沖積地の土器新石器文化初頭と併行)の初期遊牧民による、放牧先での付随的な石器製作活動の一部」と見なし得るであろう。だとすれば、本アセンブリッジはビシュリ山系最古の遊牧民の痕跡ということになるが、確証はまだ無い。最終的な結論は、今後の調査を待たねばならない。

### 3. ファカット・ビデウィ1号遺跡

ファカット・ビデウィ遺跡群は、ビシュリ山系北西山麓の前山地帯に位置し、少なくとも3件の遺跡から成る(図1)。1号遺跡は上記大型前山の鞍部に位置し、ワディ・アル・ハジジャーナ1号遺跡からは西に約2kmの地点に相当する(図2:3)。同2号および3号遺跡は、その北西約1kmにある小規模丘陵の尾根筋または南側斜面を占めている。三者はいずれも見晴らしのよい高台にあって、ケルン墓建材供給源としての石灰岩露頭を伴っていた。調査を実施したのは、2011年の春である(藤井他2012; Fujii et al. 2012)。1号遺跡は、ほぼ完掘。2号遺跡では、数基あるケルン墓のうちの1基のみをトレンチ発掘した。3号遺跡は、踏査のみである。

1号遺跡では、間口約35m×奥行き約9-12mの典型的な「擬集落(pseudo-settlement)<sup>1)</sup>」が確認された(図2:4-6; 図6:1)。本遺跡の擬集落は、計6件のユニットから成る。それらはいずれも、縦長矩形プランの地上式2列立石遺構(幅約5.5-6m×奥行き約9-13m)で、露出岩盤のために建設を途中放棄したと思われるユニット3を除いて、横3列×縦5列、計15の小部屋で構成されていた。隣接ユニット間の接合関係を精査した結果、この建築複合体は北東から南西方向に向かって、すなわちユニット1からユニット6方向に、徐々に展開したことが確認された。

ジャフル盆地の擬集落と同様に、6基のケルン墓は各ユニットの正面壁際に位置していた。ただし、各ユニットとの相関関係は必ずしも明確ではなく、付属ユニットからやや離れた事例や、2件のケルン墓が密集する事例も認められた。そのうちの2例を半裁発掘したところ、直径約2-3m×高さ約0.3-0.5mの地上式ケルン墓であること、内部構造を伴わないシンプルな石積みであること、人骨や遺物を含まないこと、などの事実が判明した。注目すべきは、擬住居の方が先に

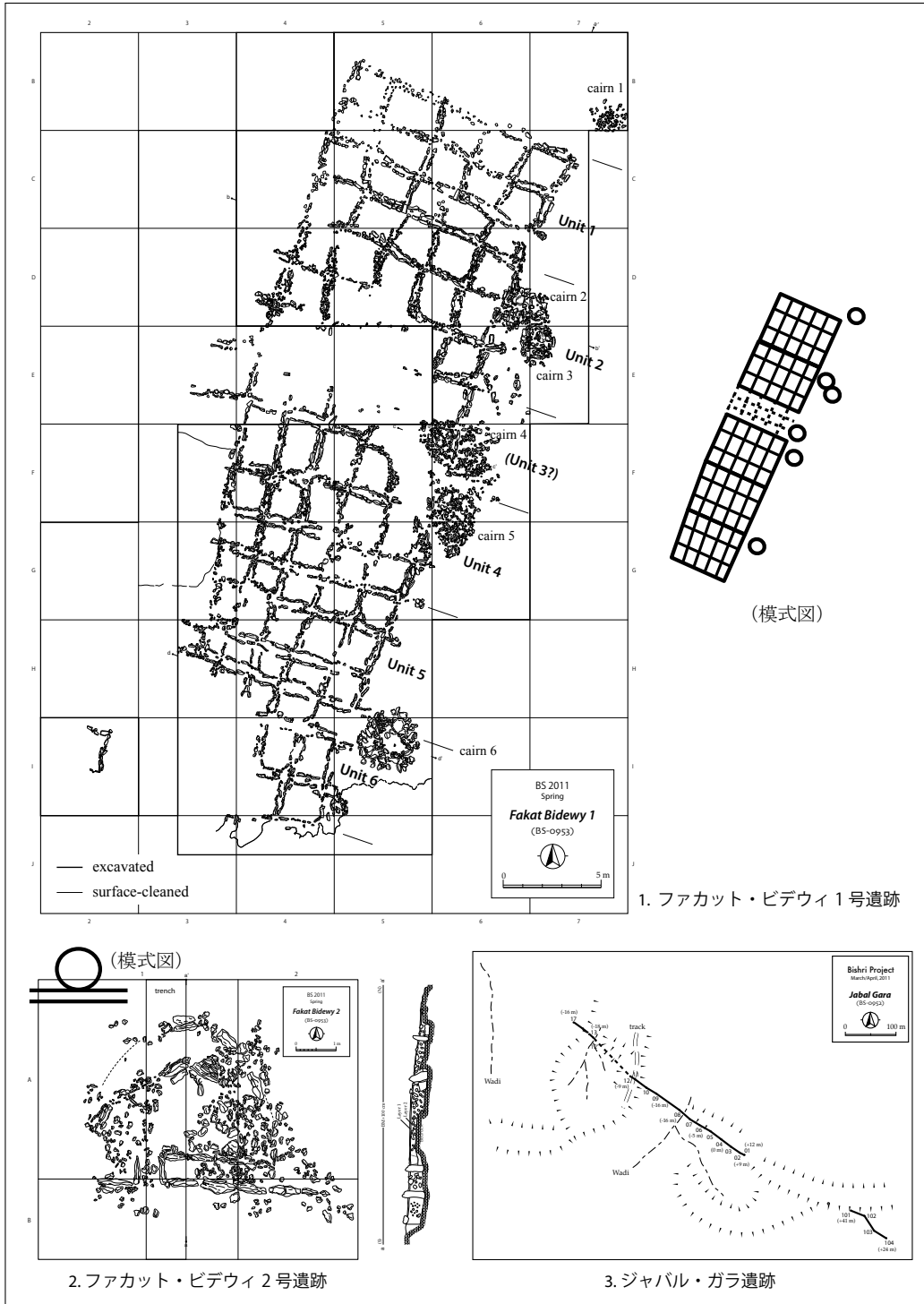


図6 遺構平面図：ファカット・ビデウィ遺跡群

築造され、その後、正面壁を一旦壊してケルン墓を付け足し、直ちにその壁面を修復する、という一連の作業工程である。ジャフル盆地でも、同様のことが確認されている (Fujii 2000)。この作業工程が意味しているのは、1) 初期遊牧民集団の長たる被葬者がその生前に (墓の付帯建造物としての) 擬住居を予め用意しておき、2) 没後、その後継者が (部族長の地位継承儀礼としての) 葬儀を執行し、先代部族長のケルン墓を擬住居の正面壁際に構築すると同時に、3) 自身の擬住居をその隣に予め構築しておく、という特異な墓制の存在である。その繰り返しが、細長い擬集落を形成したのであろう (藤井 2010; Fujii 2002, 2003)。

表採品を含めて遺物は、石器約 1500 点、土器片 12 点 (主にイスラーム青釉陶器)、青銅・鉄製品 6 点 (馬蹄・釘など)、ガラス片 1 点、動物骨 2 片であった。石器以外の遺物が遺構と無関係であることは、数量的にも、また内容的にも明らかであろう。ただし、石器にも問題がある。第一に、生活遺物を本来的に伴わない擬集落からの出土であるから、そのコンテキストに疑問が残る。事実、遺構床面からの出土品は決して多くなかった。また、堆積層が薄いので、分層自体にも不安が残る。従って、これらの石器は擬集落に直接伴うものではなく、擬集落構築前後の地表面散布遺物と見なすべきであろう。その意味で、石器群が遺構の年代を正確に表すとは限らないが、両者の分布範囲はほぼ重なっており、一定の相関は想定し得る。

石器の内訳は、石核約 0.5%、デビタージュ類約 80%、道具類約 20%、であった。道具類の比率の高さは、前述したキアム期・先土器新石器文化 B の石器製作址とは対照的である。このことは、本アセンブリッジが遠隔地からの (道具素材獲得に特化した) フリント開発活動にではなく、むしろ生活圏内における日常的な石器製作活動に由来するということを示唆している。石核の中では単設または多設打面の小型石刃石核 (図 7: 1-2) が中心で、剥片石核は 1 点のみであった。デビタージュ類では碎片類が大半を占め、石刃および剥片がこれに続き、石核調整剥片・石刃や細石刃がごく僅かに含まれていた。一方、道具類では小型・不定形の調整剥片・石刃 (図 7: 4-6, 10) が中心で、挟入石器 (図 7: 7-8) や楔型石器 (図 7: 9) などが、小数含まれていた。なお、ナヴィフォーム型の石核・石刃や、それらを基に作成された尖頭器などは、まったく出土しなかった。他方、カナン式石刃やシャブーティアン石核 (Nishiaki 2010a) も希であった。そのため、先土器新石器文化 B 以後で青銅器時代以前、おそらくは後期新石器時代との予測を得たが、これは擬集落自体の型式年代とも一致している。

本遺跡で確認された擬集落 (擬住居ケルン墓の横列連結体) は、ヨルダン南部ジャフル盆地の後期新石器時代遊牧民の墓制とも類似しており、遊牧化が大シリア沙漠の南北両端で同時進行していたことを示唆している。ただし、擬集落それ自体の型式は、ヨルダン南部とはまったく異なっている。ジャフル盆地の擬集落が室内左奥に小区画を伴う単室矩形遺構を基本ユニットとしているのに対して、本事例は、3 列構成のシリア型ユニットで構成された、まさしくシリア型の擬集落と言える。前者の原型が同時代の定住集落ベイダ (Beidha: Kirkbride 1966; Bryd 2005) などに見られるのに対して、後者の原型は、テル・ブクラス (Tell Bouqra: Akkermans et al. 1983) やエル・コウム 2 (el-kowm 2: Stordeur 2000) などに求めることができるであろう。このことは、大シリア

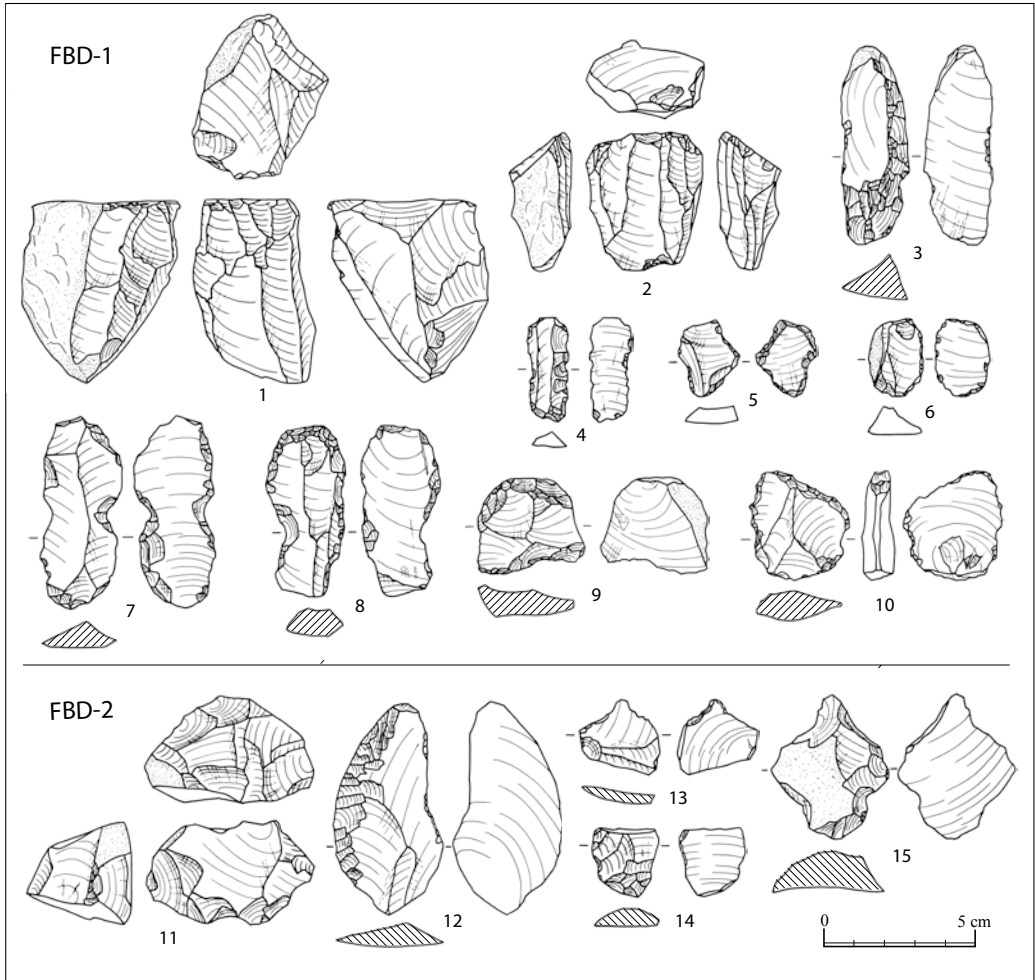


図7 ファカット・ビデウィ1号, 2号遺跡: 出土遺物

沙漠南北両端の遊牧化が、全体としては同一歩調で進みながらも、具体的な擬集落型式においてはそれぞれの地域の伝統を踏襲している、ということの意味しており、きわめて興味深い。

#### 4. ファカット・ビデウィ2号遺跡

この遺跡では、「擬壁ケルン墓 (pseudo-wall burial cairn)<sup>2)</sup>」数基を確認した (Fujii et al. 2012)。このうち保存状態の比較的良好な1号墓をトレンチ発掘した結果、平坦な円形集石 (外径約3m) に2列立石構造の擬壁 (全長約6m) が付帯する、地上式の構造物であることが判明した (図2:7; 図6:2)。ただし、その場で石灰岩板石を剥がして建材を調達しているため、遺構底部には50cm程度の凹凸が生じていた。形式的にはジャフル墓制編年のBC-500/600s段階、すなわち銅石器時代の後半に位置付けられる (Fujii 2003)。


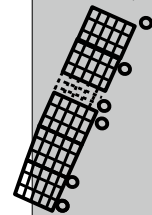
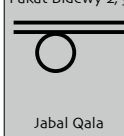
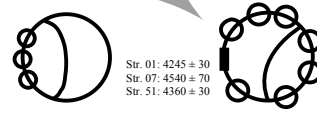
定住域	ジャフル	遺構	
MPPNB uncal. BC. 6,500	1a	移牧段階 	3部構成遺構群 Wadi Abu Tulayha: Complex 00 Complex 00/Unit 48: 8649 ± 50 Complex 00/Unit 47: 8590 ± 36 Complex 00/Unit 39: 8548 ± 33
LPPNB 6,000	1b	「壁際廃屋葬」 Wadi Abu Tulayha: Complex I-IX; Wadi Quweir: 17 Complex IX: 8409 ± 41 Complex IX: 8464 ± 51 Complex IX: 8443 ± 51	PPNB ダム・システム Wadi Abu Tulayha; Wadi Ruweishid; Wadi Quweir 106; Wadi Nadiya 1 & 2
PPNC 5,500	2a	初期遊牧 ケルン墓 前期型擬集落 (Juhayra type) Harrat al-Juhayra; 'Awja 2	ビシュリ Wadi al-Hajana 1 Surface collection
LN 4,500	2b	後期型擬集落 (Tulayha type) Qa' Abu Tulayha: Northeastern Complex; 'Awja 1 CC/Unit E: 7060 ± 50 擬住居・擬壁ケルン墓の伝統	Fakat Bidewy 1 
Chal. 3,500	3	移行期 擬壁ケルン墓 Qa' Abu Tulayha: Southwestern Complex BC-100s BC-200s BC-201: 5590 ± 40 BC-300s BC-400s BC-405: 5560 ± 40 BC-405: 5640 ± 40 BC-500s BC-600s 5893 ± 37 BC-700s (Harra al-Burma) K-ライン Harra al-Burma Harra as-Sayiyiyeh	Fakat Bidewy 2, 3  Jabal Qala
I EB	4a	遊牧社会の成立 フリント開発 (板状スクレイパー・ジャフル石刃) Talat 'Obeida; Qa' Abu Tulayha West: W-06	
II	4b	シスト型ケルン墓 (前庭型・回廊型) Wadi Burma South/North; Tal' at Obeida CE1: 5323 ± 36 CE109: 5323 ± 37 CE1: 5319 ± 37 CE113: 5226 ± 37 CE1: 5276 ± 31 CE113: 5265 ± 37	?
III	4c	環状連結型擬壁ケルン墓 Harra al-Sayiyiyeh; Qa' Abu Tulayha: Layer 3	
IV 2,000	4d	 Str. 01: 4245 ± 30 Str. 07: 4540 ± 70 Str. 51: 4360 ± 30	
MB		?	Wadi Hedaja 1-4 Tor Rahum 1-3

図8 ジャフル編年とビシュリ遺跡群との対応関係

表採品を含めて出土遺物は、石器 64 点、青釉陶器片 1 点だけであった。後者は明らかに後世の遺物である。前者も、副葬品というよりもむしろケルン墓構築前後の地表散布遺物と考えるべきであろう。石器は、多設打面剥片石核、剥片、不定形調整剥片などが中心で、1 号遺跡の出土石器群よりもさらに非定型的であった (図 8: 15-20)。ケルン墓型式の点でも、また遺物内容の点でも、この遺跡は 1 号遺跡よりも一時期遅く、銅石器時代後半の遊牧民墓域と定義できる。なお、ファカット・ビデウイ 3 号遺跡の踏査でも、同型式ケルン墓の存在が確認されている。

## 5. ジャバル・ガラ遺跡

この遺跡では、途中中断部分を含めて全長約 800m × 幅約 0.3-0.5m の、細長い 2 列立石遺構が確認された (図 2: 8; 図 6: 3)。ジャフル編年で言う K-ライン (擬壁ケルン墓の横列連結体) と同じ性質の遺構と考えられる (Fujii 2004a, 2004b)。従って、銅石器時代の末または前期青銅器時代の初頭に位置づけられるであろう。ジャフル盆地の事例と同様に、この石列は地形とは無関係にほぼ一直線に延びており、その一部にケルン墓らしき小型円形遺構を伴っていた。ただし発掘はまだ実施しておらず、詳細は不明である。数点の不定形剥片石器を除いて、表採遺物はなかった。

## 6. ビシュリ編年との照合

一連の調査によって、ビシュリ山系北西山麓における中期青銅器時代以前の墓制ないしは土地利用について、一定の所見が得られた。では、これらの調査データを遊牧化という視点から見ると、どのようなことが言えるであろうか。ジャフル編年 (藤井 2012; Fujii n.d.a) と対比しながら、時代順に検討してみよう (図 8)。

### 先土器新石器文化 A

家畜以前の段階である。ジャフル盆地ではナトゥーフ文化後期の小型集落 (Fujii 2005a) が 1 件のみ試掘されているが、先土器新石器文化 A の遺跡は、石器散布地を含めてまだ確認されていない。レヴァント地方全般の傾向として、この時期の集落はいずれも低湿地に集中しており、周辺乾燥域での立地は希である (藤井 2001: 94-102)。この時代の遺跡がジャフル盆地でまだ確認されていないことも、この文脈の中で理解することができるであろう。

シリア中部の乾燥域においても、事情は同じである。ビシュリ山系に隣接するエル・コウム盆地やパルミュラ盆地でも、この時期の遺跡はまだ確認されていない。それだけに、ワディ・アル・ハッジャーナ 1 号遺跡の発見は意外であった。同遺跡の存在は、フリント開発を主目的とする小集団が、ユーフラテス中流域の低湿地にあったと思われる本集落から季節的に派遣されていたことを実証するものである。家畜以前の段階ではあるが、こうした単発的な土地利用が遊牧化に先だって実施されていたことは重要である。

## 先土器新石器文化 B

地中海性気候下の定住集落でヤギ・ヒツジが家畜化されたのは、先土器新石器時代 B の中頃、すなわち紀元前 7000 年頃（非較正年代）と言われている（藤井 2001；本郷 2002, 2010）。ジャフル盆地は周辺乾燥域に位置するので、この時期の定住集落は無い。従って、家畜化の動向にも直接関与しない。しかし、定住域から季節的に家畜群を連れ出したと思われる小型の移牧拠点、2 件確認されている。それが、ワディ・アブ・トレイハ遺跡（Wadi Abu Tulayha: Fujii 2009）と、ワディ・グワイール 17 号遺跡（Wadi Ghuwayr 17: Fujii et al. 2011）である。重要なのは、これらの移牧拠点がダムや貯水槽などの水利施設によって支えられていた、という事実である（Fujii 2010）。定牧と遊牧の中間段階に短距離移牧が介在し、かつ、その出先拠点が各種の水利施設で維持されていたとすれば、先土器新石器文化 B 末からの乾燥化と遊牧化との相関を以下のように解釈し直すことが可能であろう。すなわち、この時期の乾燥化は、移牧拠点に備わっていた各種の水利施設にこそ直接的なダメージを与え、このことが、固定的移牧拠点の維持・運営を断念した移牧民、すなわち最古の遊牧民の出現へとつながった、という仮説的展望である（Fujii n.d.a）。ワディ・アブ・トレイハ遺跡の貯水槽が埋没直後に短期野営地として再利用されていたという事実は、この展望の妥当性を裏付けている（Fujii n.d.b）。

この時期の移牧民の墓制が、ワディ・アブ・トレイハ遺跡で確認された「廃屋壁際ケルン墓（façade-side burial cairn）」である（Fujii 2006）。その特徴は、住居正面壁の端に小型のケルン墓を構築すると同時にその住居を廃絶し、その横に新しい住居を付け足す、という一連の工程にある。その住居でもやがて同じことが繰り返されるので、最終的には、一定の間隔で小型のケルン墓を伴う線状の集落が形成されることになる。「廃屋壁際ケルン墓」は、家長の交代に伴う家屋更新儀礼の存在を示唆している。

ビシュリ山系では、この時期の出先遺跡はまだ確認されていない。従って、定住域の本村と周辺乾燥域の固定的出先集落との間を往復する短距離移牧は、この地域ではまだ成立していなかったものと考えられるが、結論は今後の調査を待たねばならない。なお、ワディ・アル・ハッジャーナ 1 号遺跡の表採石器群は、おそらくは先土器新石器文化 B 末期（北レヴァント定住域の土器新石器文化、南レヴァントの先土器新石器文化 C と併行）に位置づけられるので、ここで言う先土器新石器文化 B には該当しない。

## 先土器新石器文化 C ～後期新石器時代

この時代のジャフル盆地では、移牧拠点となる小型の出先集落が姿を消し、墓域だけが造営されるようになった。この事実は、先土器新石器時代 B の移牧システムが崩壊し、遊牧（pastoral nomadism）へとシフトしたことを示唆している。この時代を特徴づける墓制が、「擬住居ケルン墓」ないしはその集合体としての「擬集落」である。実例は、先土器新石器文化 C のハラート・アル・ジュハイラ遺跡（Harrat al-Juhayra: Fujii 2005b）、後期新石器時代のカア・アブ・トレイハ西遺跡（Qa'Abu Tulayha West: Fujii 2003）、両時代にまたがるアウジャ 1, 2 号遺跡（'Awja 1-2: 藤井他 2012）



Fujii et al. n.d.) で、確認されている。いずれも、固定的移牧拠点の運営を放棄した初期遊牧民の象徴的墓域と定義される。この墓制は、矩形遺構の正面壁端部に小型のケルン墓を構築すること、家屋更新儀礼を伴うことなどから、先土器新石器文化Bの出先集落で行われた「廃屋壁際ケルン墓葬」の後継版と見なし得る。ただし、この場合の住居は実際の住居ではなく、ケルン墓に付帯する擬いの住居に過ぎない。従って、遺物はまったく出土せず、炉などの小遺構も伴わない。壁際廃屋葬と同様に、擬住居ケルン墓も横方向に連結し、細長い擬集落を形成した。

ビシュリ山系でも、遊牧化の足跡をたどることができる。第一の手がかりは、先土器新石器文化B末（ジャフル編年では先土器新石器文化C）に位置づけられるワディ・アル・ハッジャーナ1号遺跡の表採石器群である。近隣のエル・コウム、パルミュラ盆地を含めて周辺乾燥域への遺跡分布拡大は、遊牧の可能性を示唆している。これに後続するのが、ファカット・ビデウイ1号遺跡の擬集落である。すでに連結形となっていることから、ジャフル編年の先土器新石器文化C後半または後期新石器時代（シリア編年では、共に土器新石器時代）に位置づけられるであろう。遺構内に散在する石器群も、この年代観を支持している。先述したように、ビシュリ山系の擬集落はユーフラテス中流域の同時代定住集落の遺構型式を踏襲しており、遊牧化が隣接定住域の新石器文化をベースに進展したことを裏付けている。

### 銅石器時代

銅石器時代ジャフル盆地の墓制は、「擬壁ケルン墓」の出現によって特徴づけられる。カア・アブ・トレイハ西遺跡の水平層位は、擬壁ケルン墓に少なくとも6つの型式（BC-100s～BC-600s）があったことを示唆している（Fujii 2003）。前半の型式が銅石器時代の前半期に、後半の型式が後半期に、それぞれ対応しているものと考えられる。擬壁ケルン墓はジャフル盆地に広く分布しており、銅石器時代が本格的遊牧社会成立への過渡期にあったことを裏付けている。

ファカット・ビデウイ2号遺跡で発掘された1号ケルン墓は、形式的に見て、ジャフル編年のBC-500sまたはBC-600sの段階に比定できる。従って、銅石器時代後半の遊牧民の墓域と定義できるであろう。一方、ジャバル・ガラ遺跡で確認されたK-ライン（擬壁ケルン墓の横列連結体）は独立型の擬壁ケルン墓に後続する墓制であり、ジャフル編年では銅石器時代末または前期青銅器時代初頭に位置づけられている（Fujii 2004a）。ビシュリ山系における擬壁ケルン墓の頻度の高さは、シリア沙漠の北半でも遊牧社会成立にむけての動きが本格化していたことを示唆している。

### 前期青銅器時代

前期青銅器時代は、都市化の時代である。周辺乾燥域では部族制を基盤とした本格的な遊牧社会が成立したと考えられている。その根拠となるのが、大規模ケルン墓群の出現である。ジャフル盆地でも、ワディ・ブルマ遺跡（Wadi Burma: Fujii 2004b, 2005a）やタラアト・オバイダ遺跡（Tal'at 'Ubayda: Fujii 2005a）などのような、従来にない大型の墓域が形成されている。また、これに伴い、ジャフル伝統の擬壁的要素を持たない「シスト型ケルン墓」という新たな墳墓型式が加わってい

る。これには前庭型 (forecourt type) と回廊型 (corridor type) の二種があり、前者から後者への変遷が予測されている。シスト型ケルン墓は、その祖型となる遺構の分布から見て、シナイ・ネゲブ・ヨルダン渓谷方面から波及したものと思われる (Fujii n.d.a)。とは言え、前期青銅器時代のジャフル盆地がシスト型ケルン墓一色に塗りつぶされたわけではない。盆地内奥部では「擬壁ケルン墓」の伝統も残存し、「環状連結型の擬壁ケルン墓」という新たな墓制を派生している。

一方、ビシュリ山系北西山麓では、この時代の墓域はまだ確認されていない。南東山麓ではいくつもの事例があるように報告されているが、時期比定の根拠は希薄である (Lönnqvist et al. 2011)。これまでほぼ同一歩調をとってきた大シリア沙漠南北での遊牧化が、青銅器時代以降、大きな地域差をもって進み始めたと考えることができよう。ただし、ユーフラテス流域ではこの時代の墓域が確認されている (Nishisaki 2010b)。未発掘であるからその内容までは分からないが、これが仮にシスト型のケルン墓であるとすれば、上述の展望も修正が必要になるかも知れない。

### 中期青銅器時代

中期青銅器時代は、西アジア各地で領域国家が勃興した時代である。遊牧社会の側も大きな変質を遂げたと考えられるが、この時代の墓制はジャフル盆地ではまだ確認されていない。墓域の消失は、中期青銅器時代ジャフル盆地の無人化を意味している。ただし、墳墓の小型化・低層化によって考古学的可視性が低下したため、分布調査でその存在を捉え切れていない可能性も残されている。この点は今後の大きな課題である。

一方、ビシュリ山系では、この時期になって初めて大型の墓域が出現している。大シリア沙漠の南北両端における大型墓域形成の時期差は、本格的遊牧社会成立の時期差を意味しているものと思われる。ちなみに、我々の調査区で現在登録しているのは、約 30 件の墓域 (ケルン墓数では約 400 基) である。型的には、周壁を伴うシスト型ケルン墓 (第 1 期) から、周壁無しのシスト型ケルン墓 (第 2, 3 期)、あるいはシストすら消失した単純なマウンド墓 (第 4 期) への変遷が跡づけられている (藤井 2009b; 藤井・足立 2010; Fujii and Adachi 2010)。問題はこのケルン墓文化の起源であるが、調査データから言えるのは、ビシュリ山系における中期青銅器時代ケルン墓群の出現がいかにも唐突であり、1 期が規模・内容の点で最盛期、以後急速に衰え短期間で終息した、ということだけである (Fujii and Adachi 2010)。従って、外部からの完成した文化の流入が予測されるが、その波及元がどこなのかはまだ分かっていない。ジャフル盆地周辺の前期青銅器時代回廊型シスト＝ケルン墓が遅れて波及した可能性もあるが、パルミュラの一部 (al-Maqdissi et al. 2008) を除いて中間地帯のデータが乏しく、確証はまだない。他方、ユーフラテス流域における前期青銅器時代のケルン墓文化がその分布を南に拡大したとも考えられるが、それならばこのケルン墓とビシュリ 1 期ケルン墓との間に型的な連続性がなければならない。この点もまだ具体的には検証されていない。この他、ユーフラテス下流域あるいはアラビア半島南東部からの伝播もあり得るが (du Buisson 1948; Kepinski 2010; Weeks 2000)、これもやはり推測の域を出ない。この問題の検討は、これからである。

## 7. おわりに

ビシュリ山系の墓制データは、ジャフル編年と対比・照合することができ、併せてバーディア編年を形成する。大シリア沙漠の南北両端における遊牧化過程は、このバーディア編年を通して追跡することができるであろう。点在する類似資料 (Rosen et al. 2007; Zarins 1998; Fujii n.d.a) からすると、アラビア半島の北部やシナイ・ネゲブ地方の遊牧化過程も、これとほぼ同じ枠組みの中で理解できそうである。内陸乾燥域に散在する調査データを一つの編年の下に集約・統合できれば、遊牧西アジアの成立史が見えてくる。その結節点の一つとなるビシュリ山系での調査再開を、切に願っている。

### 註

- 1) 擬集落とは、居住痕跡のない、従って遺物や炉などの小遺構を全く出土しない擬似の住居に伴うケルン墓 (すなわち「擬住居ケルン墓 (pseudo-house burial cairn)」) の横列連結体のことを言う。沙漠の中に忽然と現れた集落のように見えることから、この名がある。擬集落は、遊動性の高い遊牧民の「象徴的二次葬 (symbolic secondary burial)」の場と考えられる (藤井 2010)。従って、擬住居のみならず、擬住居ケルン墓からも人骨・副葬品は全く出土しない。そのため、擬集落全体が原位置遺物をまったく出土しない不思議な遺跡を構成している。
- 2) 擬壁ケルン墓は、擬住居ケルン墓の簡略形ないしは後続形態である。擬住居の正面壁だけがケルン墓に伴うことから、この名がある。

### 参考文献

- 藤井純夫 2001 『ムギとヒツジの考古学』全 344 頁, 同成社。
- 藤井純夫 2010 「沙漠のドメスティケーション - ヨルダン南部ジャフル盆地における遊牧化過程の考古学的研究」山本紀夫編 (国立民族学博物館調査報告 84) 『ドメスティケーション - その民族生物学的研究』519-553 頁。
- 藤井純夫 2012 「ヒツジ遊牧の起源: ヨルダン南部ジャフル盆地の調査から」東京文化財研究所文化遺産国際協力センター編 『西アジアの文化遺産 - その保護の現状と課題』(アジア文化遺産国際会議報告書) 31-35。
- 藤井純夫・足立拓朗 2010 「ケルン墓の分布と部族・氏族の相関」大沼克彦・西秋良宏編 『紀元前 3 千年紀の西アジア』147-157. 六一書房
- 藤井純夫・足立拓朗 2011 「シリア, ビシュリ山系の遊牧化過程 - ワディ・アル・ハッジャーネ 1 号遺跡の発掘調査 (2010 年春)」日本西アジア考古学会編 『第 18 回西アジア発掘調査報告会報告集』81-86。
- 藤井純夫・足立拓朗・山藤正敏 2012 「シリア, ビシュリ山系の遊牧化過程 - ファカット・ビデウイ 1, 2 号遺跡の発掘調査 (2011 年春)」日本西アジア考古学会編 『第 19 回西アジア発掘調査報告会報告集』28-33。
- 藤井純夫・足立拓朗・遠藤仁・山藤正敏・有松唯・長屋憲慶 2012 「ヨルダン南部ジャフル盆地の遊牧化過程 - ワディ・ナーディア 1 号遺跡, アウジャ 1 - 3 号遺跡の発掘調査 (2011 年夏)」日本西アジア考古

- 学会編『第19回西アジア発掘調査報告会報告集』22-27.
- 本郷一美 2002「狩猟採集から食料生産への緩やかな移行」『国立民族学博物館調査報告』33: 109-158. (佐々木史郎編『先史狩猟採集文化研究の新しい視野』)
- 本郷一美 2010「偶蹄類の家畜化と牧畜技術の発達」後藤明他編『朝倉世界地理講座6 西アジア』82-95. 朝倉書店.
- Al-Maqdissi, M., Kanhouch, Y., Cremaschi, M. and Bonacossi, D. M. 2008 Présentation sommaire des travaux archaéologiques de la mission syro-italienne: Les fouilles archéologique à Mishrifeh - Qatna et la prospection de la Palmyrène occidentale. *Studia Orontica* 1: 5-20.
- Byrd, B. F. 2005 *Early Village Life at Beidha, Jordan: Neolithic Spatial Organization and Vernacular Architecture*. Oxford: Oxford University Press.
- du Buisson, M. 1948 *Baghouz, l'Ancienne Corsôté: Le Tell Archaique et la Nécropole de l'Âge du Bronze*. Leiden: E. J. Brill.
- Fujii, S. 2000 Qa' Abu Tulayha West: An interim report of the 1999 season. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 46: 149-171.
- Fujii, S. 2002 Pseudo-settlement hypothesis: Evidence from Qa' Abu Tulayha West, southern Jordan. *Archaeozoology of the Near East* V: 181-194.
- Fujii, S. 2003 Qa' Abu Tulayha West, 2002: An interim report of the sixth and final season. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 47: 195-223.
- Fujii, S. 2004a Harra al-Burma K-lines and Wadi Burma kite site: A preliminary report of the first operation of the al-Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 48: 25-50.
- Fujii, S. 2004b Harra al-Burma cairn line, Wadi Burma cist enclosures, and Harrat al-Sayyiyeh K-line: A preliminary report of the second operation of the al-Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 48: 285-304.
- Fujii, S., 2005a Wadi Burma North, Tal'at Abyda, and Wadi Qsair: A preliminary report of the third operation of the al-Jafr Basin Prehistoric Project, 2004. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 49: 17-55.
- Fujii, S. 2005b Harrat al-Juhayra pseudo-settlement: A preliminary report of the al-Jafr Basin Prehistoric Project, 2004. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 49: 57-70.
- Fujii, S. 2006 A PPNB agro-pastoral outpost at Wadi Abu Tulayha, southern Jordan. *Neo-Lithics* 2/06: 4-17.
- Fujii, S. 2009 Wadi Abu Tulayha: A preliminary report of the 2008 summer final field season of the Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 53: 173-209.
- Fujii, S. 2010 Domestication of runoff water: Current evidence and new perspectives from the Jafr pastoral Neolithic. *Neo-Lithics* 2/10: 14-32.
- Fujii, S. n.d.a Chronology of the Jafr pastoral prehistory and protohistory: A key to the Process of pastoral nomadization in the southern Levant. In: Abu-Azizeh, W. and Tarawneh, M. (eds.), *Current Research on Protohistoric Settlement in Desert Areas of Jordan*. Bibliothèque Archéologique et Historique. Beirut: Institut Français d'Archéologie du Proche-Orient.
- Fujii, S. n.d.b A half-buried cistern at Wadi Abu Tulayha: A key to tracing the process of pastoral

- nomadization in the Jafr Basin, southern Jordan. In: Finlayson, B. and Rollefson, G. (eds.), *Jordan's Prehistory: Past and Future Research*. Amman: Department of Antiquities of Jordan.
- Fujii, S. and Adachi, T. 2010 Archaeological investigations of bronze age cairn fields on the northwestern flank of Mt. Bishri. Ohnuma, K. Fujii, S., Tsuneki, A., Nishiaki, Y., Sato, H. and Miyashita, S. (eds.) *Al-Rafidan*, special volume (Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria): 61-77.
- Fujii, S. and Adachi, T. n. d. A Khiamian Flint Assemblage from Wadi al-Hajana 1 in the Northwestern Piedmont of Mt. Bishri, Central Syria. In: F. Borrell, J. J. Ibáñez, and M. Molist (eds.), *The 7th Conference on PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Fertile Crescent*. Barcelona: Universitat Autònoma de Barcelona Press.
- Fujii, S., Adachi, T., Akashi, C. and Suzuki, K. 2011 Wadi al-Hajana 1: A preliminary report of the 2010 excavation season. *Al-Rafidan* 32: 134-145.
- Fujii, S., Adachi, T. and Yamafuji, M. 2013 Fakat Bidewy 1 and 2: Archaeological Investigations around Bir Rahum, 2011 (Spring). *Al-Rafidan* 34: 3-12.
- Fujii, S., Quintero, L.A., and Wilke, P.J. 2011 Wadi Ghuweir 17: A Neolithic outpost in the northeastern al-Jafr Basin. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 55: 159-188.
- Fujii, S., Yamafuji, M. and Nagaya, K., n.d.: Awja 1-3: Neolithic and Chalcolithic open sanctuaries in southernmost Jordan. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 56 (forthcoming).
- Kepinski, C., 2010 The burial mounds of the Middle Euphrates (2100-1800 B.C.) and their links with Arabia: the subtle dialectic between tribal and state practices. In: Weeks, L. (ed.), *Death and Burial in Arabia and Beyond*. Oxford: Archaeopress, 165-171.
- Kirkbride, D. 1966 Five seasons at the pre-pottery Neolithic village of Beidha in Jordan. *Palestine Exploration Quarterly* 98: 8-72.
- Lönnqvist, M., Lönnqvist, K., and Törmä, M., with contributions by Whiting, M. S. and Nunez, M. 2011 Vistas on ancient pastoral nomadism in the central areas of the mountain. In: Lönnqvist, M. et al. (eds.), *Jebel Bishri in Focus*. Oxford: BAR, 135-166.
- Nishiaki, Y. 2010a Early Bronze Age flint technology and flake scatters in the north Syrian steppe along the Middle Euphrates. *Levant* 42/2: 170-184.
- Nishiaki, Y. 2010b Archaeological evidence of the Early Bronze Age communities in the Middle Euphrates steppe, North Syria. *Al-Rafidan*, special issue (Formation of Semitic Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria): 37-48.
- Rosen, S. A., Bocquentin, F., Avni, Y. and Porat, N. 2007 Investigations at Ramat Saharonim: A desert Neolithic sacred precinct in the central Negev. *Bulletin of American Schools of Oriental Research* 346: 1-27.
- Stordeur, D. 2000 *El Kowm 2: Une Île dans le Désert*. Paris: CNRS Éditions.
- Weeks, L. (ed.) 2010 *Death and Burial in Arabia and Beyond*. Oxford: BAR.
- Zarins, J. 1998 Pastoralism in southwest Asia: the second millennium B. C. In: Clutton-Brock, J. (ed.), *The Walking Larder*. London: Unwin Hyman, 127-155.

## おわりに

大沼 克彦

2005年度から2009年度にかけて推進した特定領域研究「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」は、異なる研究機関・分野の複数研究班の融合的連携にもとづく総合的研究をとおして、セム系アモリ部族社会が形成された経緯を通時的に解明しました。

この研究は、14度にわたるシリア現地調査によって、ユーフラテス河流域の村落遺跡・ガーネム・アル・アリ遺跡と直近墓遺構群（ともに前期青銅器時代）がビシュリ砂漠台地のビシュリ山北縁ケレン墓群（中期青銅器時代）と異なる年代であることを明らかにしました。

アモリ人集団の遺跡群にみられるこのような年代差をふまえて、研究開始時点では仮説であったものの具体的根拠には裏づけられていなかった「アモリ人集団内部の通時的構造変化」に関する以下のような新たな仮説を得ました。

「新石器時代にユーフラテス河中流域で農業と家畜飼育を同時に生業としていた半農半牧のアモリ人集団は、気候変動（急激な乾燥化）、政治的混乱などの要因から集落の規模を縮小・分散させ、その多くをビシュリ砂漠に移動させ、ユーフラテス河流域の農業集団とビシュリ砂漠の家畜飼育（遊牧）集団の2つに分化した。そして、前期青銅器時代になるとこの2つの集団は再度ユーフラテス河中流域で統合し、さらに、中期青銅器時代には再び農業集団と家畜飼育（遊牧）集団に二分化した」という、集団内部における農業生業と遊牧生業の分離と再統合を繰り返したとする仮説です。

このように、伝統的考古学手法から脱却した広域にまたがる複数遺跡での同時発掘をとおして、ユーフラテス河中流域の前期青銅器時代と中期青銅器時代の社会構成のありかたに大きな差違を見出し、アモリ人集団の内部構造の通時的変化を見出しました。そして現在、「いったん成立すると継続した東アジアの社会形成とは異なる西アジアの社会形成」という新たな視点を提供しつつあります。

西アジア地方では、現在に至ってもなお、部族性を強力な絆とする諸集団が存在していますが、それらは近年に突如と出現したのではなく、長い歴史のなかで、争い、宗教など、生存まっとう手段として選択された順応行為の結果として形成されたものであると考えられます。

中東情勢は、シリアやアフガニスタンに代表されるように今なお混迷を極めています。この背景については、イスラム教の宗派間の対立や抗争というような宗教的枠組みがしばしば取り上げられ、議論されますが、混迷の根底にはイスラム以前の遊牧社会に由来する部族社会原理が存在していると考えられます。

遊牧社会の出現と歴史的特質をその起源にまで遡り通時的に探る研究こそが現代的問題の要因に迫り、問題解決の糸口を提供するものであると確信します。本書がこのような現代的問題の解決に少しでも役立つことを願っています。

## 編者略歴

大沼克彦（おおぬま かつひこ）

1944年中国長春市生まれ。1973年以来、国士舘大学によるイラク、シリアの考古学発掘調査に参加し、現在、国士舘大学イラク古代文化研究所教授。ロンドン大学考古学研究所先史考古学専攻でPh. D.取得。主な著作に『Ksar Akil, Lebanon: A Technological Study of the Earlier Upper Palaeolithic Levels of Ksar Akil』（BAR International Series: 426, Oxford, 1988）、『石器研究入門』（共訳、クバプロ、1998）、『文化としての石器づくり』（学生社、2002）、『石器づくりの実験考古学』（共著、学生社、2004）など。

## 執筆者一覧（執筆順）

大沼克彦（おおぬま かつひこ）	編者略歴参照
思 沁夫（ス チンフ）	大阪大学グローバル・コラボレーション・センター准教授
三宅 裕（みやけ ゆたか）	筑波大学大学院人文社会系准教授
平田昌弘（ひらた まさひろ）	帯広畜産大学地域環境学研究部門准教授
宮脇淳子（みやわき じゅんこ）	東京外国語大学非常勤講師 東洋史家・学術博士
堀岡晴美（ほりおか はるみ）	国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員
西秋良宏（にしあき よしひろ）	東京大学総合研究博物館教授
門脇誠二（かどわき せいじ）	名古屋大学博物館助教
長谷川敦章（はせがわ あつのり）	日本学術振興会特別研究員 PD
久米正吾（くめ しょうご）	東京文化財研究所文化遺産国際協力センター特別研究員／国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員
赤司千恵（あかし ちえ）	早稲田大学文学学術院助手
足立拓朗（あだち たくろう）	金沢大学歴史言語文化学系准教授
藤井純夫（ふじい すみお）	金沢大学歴史言語文化学系教授





## ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民

---

2013年3月1日 初版発行

編者 大沼 克彦

発行者 八木 環一

発行所 株式会社 六一書房

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-2-22

TEL 03-5213-6161

FAX 03-5213-6160

<http://www.book61.co.jp>

E-mail [info@book61.co.jp](mailto:info@book61.co.jp)

振替 00160-7-35346

印刷 藤原印刷 株式会社





六一書房